
1 8 0 回目の朝明けに・・・

赤鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

180回目の朝明けに・・・

【Nコード】

N0172T

【作者名】

赤鴉

【あらすじ】

4人組関西バンド『CARNELIAN・eyes』のボーカル坂井未佳は、自らが所属しているビルの屋上で、その命を絶とうとしていた。「これで楽になれる・・・」そう思って飛び降りたはずなのに、気が付けば未佳は、飛び降りたはずの屋上の上に倒れていた。死んでいないどころか、屋上から飛び降りてもいない自分に驚く未佳。そんな未佳の前に、蒼い目をした謎の少年、リオが現れる。そしてリオは、未佳に対しこう告げた。「お姉さんはある事情により『予約死亡』になりました。本当に死ねるのは6ヶ月後です」

『死』を望む女性と、その女性を傍観する少年。何故未佳は死を選んだのか。リオは一体何者なのか。その真実はやがて、悲しい結末へと向かっていく……。実在している4人組バンドのメンバーから、キャラクター構成を行いました。興味のある方は是非読んでみてください。またほぼ同時連載投稿されている『CARNELIAN・eyes 歌集』には、小説内に一部登場している楽曲の全歌詞なるもの(?)が載っていますので、そちらの方も是非チェックしてみてください。

登場人物一覧（前書き）

話しが続くに連れ、増えていきます。

登場人物一覧

主な登場人物

・坂井未佳（さかい みか）

B i r t h d a y 7月7日

Y e a r s 32

N i c k n a m e みかつぺ・未佳さん・坂井さん e t o . . .

バンド『CARNELIAN・eyes』の作曲&ヴォーカルを務める女性。ある事情により、自身の所属事務所『SAND』の屋上で命を絶ったが、何故か『予約死亡』にされてしまい、約6ヶ月間（180日間）をリオと共に過ごすことになった。会話などはいったって普通なのだが、女性にしてはやや低めの歌声の為、よく男性と間違われることがある。メンバーの中では一番の年下で、同じ女性メンバーの小歩路厘と仲がいい。

・長谷川智志（はせがわ さとし）

B i r t h d a y 6月20日

Y e a r s 33

N i c k n a m e さとつち・長谷川君・はせつち e t o . . .

バンド『CARNELIAN・eyes』のギター&コーラスを務める他、ソロ活動や作詞、他のバンドのライブギターなども行っている男性メンバー。坂井未佳よりも一つ年上で、メンバーの中では優しい半面、かなりのいじられキャラでもある。ただし、頭の回転

に関しては誰よりも上らしく、メンバーの未佳曰く『何でもやりこなす人』らしい。虫が大の苦手。

・小歩路厘（さほろ りん）

B i r t h d a y 9月22日

Y e a r s 36

N i c k n a m e 厘さん・小歩路様・厘さまeto・・・

バンド『CARNELIAN・eyes』の作詞&キーボードを務める女性メンバー。生まれも育ちも京都なのだが、大阪出身の父親の影響により、会話はほとんど関西弁。かなり破滅や死、破局や儂さと言った、少々暗い内容の歌詞を書くことが多い。また、流行りものや当たり前的なものに流されるのが苦手で、いつも自由きままな性格。その為メンバーから『厘猫』や『自由人』などの呼び名で呼ばれることも多々ある。ヴォーカルの坂井未佳と仲がいい。

手神広人（てがみ ひろと）

B i r t h d a y 10月10日

Y e a r s 40

N i c k n a m e 手神さん

バンド『CARNELIAN・eyes』の編曲&キーボードを務める男性リーダー。メンバーの小歩路厘と楽器は被るが、こちらはアレンジや派手な演奏を担当することが多く、やや仕事が異なる。一応バンドのリーダーなのだが、少々気の小さいところがあり、いつもメンバーの坂井未佳や厘に引っ張られている事が多い。またイ

メージ作りの為か、何故かライブや撮影の時のみ、茶色いサンングラスを掛けている。

・リオ

B i r t h d a y 不明

Y e a r s (顔立ちからして8〜9歳くらい)

N i c k n a m e なし

『予約死亡』になった坂井未佳につく、謎の少年。両目が蒼く、19世紀頃のイギリス人を思わせる服装だが、言語は日本語のみで舌つたらず。またその姿は未佳にしか見えず、自分の意思のみで未佳に触れられるようになったり、触れられないように身体を透き通らせることが出来る。その他にも色々な技を使えるようだが、確かなことは不明。

・栗野奈緒美(くりの なおみ)

B i r t h d a y 1月3日

Y e a r s 34

N i c k n a m e 栗野さん・マネージャーeto・・・

坂井未佳の専属女性マネージャーなのだが、よくメンバー全員のマネージャーを担当することもある。未佳よりも二つ年上で、マネージャーとしてはそこそこ厳しく、いつも仕事の予定時刻などを気にしていることが多い。だが性格はかなり明るい方で、時折おつちよこちよいな失敗をすることもある。また女性同士というのもあってか、よく未佳や小歩路厘の相談話等に乗ったりすることがある。

・西本カナエ（にしもと　かなえ）

B i r t h d a y 5月20日

Y e a r s 74

N i c k n a m e カナエおばあちゃん

未佳の自宅の隣りに住んでいる住人。未佳のことをまるで孫娘のよう
に接している。未佳とは仲も良く、よく二人で立ち話をしている
こともある。つい最近まで病院で入院していた。

・高野義也（たかの　よしや）

B i r t h d a y 4月9日

Y e a r s 45

N i c k n a m e 高野さん・先生（病院関係者）　e t o . . .

北堀江救急医療センターで働く『S A N D』のアーティスト達の治
療担当の医者。腕がいいのもあってか、事務所の人間からの評判は
かなり高いのだが、その診察する際の接し方や、説明等で同じ言葉
を何度も繰り返すなど、少々色んな理由から坂井未佳に嫌われてい
る。

・小屋木結衣（こやき　ゆい）

B i r t h d a y 10月18日

Y e a r s 27

Nickname 優衣さん・小屋木さんeto・・・

『SAND』に所属する女性アーティストで『CARNELIAN・eyes』が生まれるきっかけを作った人間でもある。アーティスト活動を始めた坂井未佳とはほぼ同期で、年は5つも離れているが、CDやDVDなどの売り上げが未佳達よりも上なのもあってか、未佳とは先輩・後輩関係なしに接していることが多い。『CARNELIAN・eyes』メンバーが、楽曲や歌詞提供などを行っている相手は、基本的に彼女。

・藁草泰史（わらくさ やすし）

Birthday 9月14日

Years 45

Nickname 藁草さん・藁草eto・・・

バンド『Z'b』の作詞&ヴォーカルを務める男性アーティスト。今一番『SAND』で売れているロックミュージシャンで、未佳や小屋木の大先輩。かなり派手なライブスタイルを行うバンドで、よく爆竹や花火などをステージで使用する。ヴォーカルはかなり声が高い。

・杉本知弘（すぎもと ともひろ）

Birthday 3月22日

Years 48

Nickname 杉本さん・杉っちゃんeto・・・

バンド『Z' b』の作曲&ギターを務める男性ギターリスト。その腕前は一流で、海外でもかなりの人気がある。よく同じバンドメンバーの藁草泰史と一緒にいることが多い。

・湯盛雅人（ゆもり まさと）

B i r t h d a y 10月3日

Y e a r s 45

N i c k n a m e まっちゃん・まいちゃん・湯好きの湯盛eto・
・

アーティスト達のライブ等で、ベースを担当するギターリスト。温泉や銭湯などが大好きで、よく事務所の人達などに温泉地を教えたり、勧めたりしている。ギター同士の長谷川や小河と仲が良い。また大の猫好き。

・小河雅修（おがわ まさのぶ）

B i r t h d a y 8月4日

Y e a r s 38

N i c k n a m e 小河さん

『SAND』のライブなどで、サポートギターを担当するギターリスト。よく湯盛達と一緒に、アーティスト達のライブを盛り上げている。また色々なバンドの作曲や編曲等を行うこともある。

0・終わりと始まり

今日は実に微妙な空だ。

晴れてはいないものの、快晴ではない。

曇っているわけではないが、妙に空全体が白っぽい。

実際の今の天気は一応、表記的には『晴れ』でいいと思う。

いや。

私の感覚では、まだ『晴れ』だ。

今日の空は、青空全体に薄い雲が広がっているらしく、青いはずの空はまるで、水色とグレーを混ぜたかのような色をしていた。

これを『晴れ』と周りが呼ぶかどうかは微妙なところだが、少なからず私は『晴れ』と呼ぶ。

そしてそんな私の中には『どうせなら「曇り」か「雨」の方がよかったのに・・・』と思う感情もあった。

だつて・・・。

なんだか後味が悪いと言うか、気持ち的と言うか・・・。
どうもスッキリしない。

自分が今、命を落とすという上で・・・。

そう胸中で呟いた坂井未佳は、我ながら最後にいいジョークだなと思った。

確かに私は今、ここで自分の命を落とそうとしているところだ。堕ちることによって・・・。

今日のように『自らが自らを殺す《自殺》』ということ考えた時、私は最初『どうやって死のうか』ということで、半分馬鹿なくらい考えた。

一般的な自殺方法はいくつもある。

首吊り、リストカット、有毒ガス、薬、川や海に身投げ・・・。
それらの中で私が選んだのは、飛び降りだった。

理由は、この場所を巻き込みたかったから・・・。

私の今立っている場所は、とあるビルの屋上。

もつと正確に言ってしまうえば、私がヴォーカルとして勤めていたバンドの所属事務所『SAND^{サンド}』の屋上だ。

私はここの事務所で、バンド『CARNELIAN・eyes』を、私を含めたメンバー4人で結成。

そして今年は、あと6カ月後。

つまり8月で、私達のバンドは結成10周年を迎えることになっている。

そんな記念日を真近に控えていた時期ではあったが、それでも私は命を絶ちたかった。

あんな環境の中で生きていくなんて、もう懲り懲り……。
沢山だ……。

でも、ただ関係のないところでなんか死にたくはない。

死ぬ場所は、死にたくなつた根源の場所で。
ありとあらゆる動機を秘めたこの場所で。

皆が何故ここで死んだのか。
何故こうなつてしまったのか。

それを考え続け、最終的には悩み苦しんでほしい。

そんな黒々とした思いもあり、ここにしたのだ。

だからこの時点で、川や海への身投げはボツ。

そもそもこの辺りには川や海もないので、元々無理なことだった。

有毒ガスは中々死ねないし、誰かに見られたら即アウト……。
おまけに最初の方は、死ぬまでかなり苦しまなくてはならない。
論外だ。

薬も毒ガスと同じ理由。

毒薬は入手し難いし、その辺で手にすることの出来るものは、中々死ねない。

リストカットは、動脈を切つてしまえば痛みはそんなないと聞いたことはある。

が、それで死ぬ為に必要な水を溜めておいたり、出しっ放しに出来る環境が無い。

お風呂場もないのだから、どうしようもない。

そうなる到最后に残ったのは、一番多いとされる『飛び降り』と『首吊り』だけだったのだが、私はこの時はすんなり『飛び降り』に決めることができた。

おそらく、自分ならどちらがいいだろうと考えた時に、好み的なもので『飛び降り』に決まったんだと思う。

勿論『飛び降り』も、すぐに死ぬとは限らない。

場合によっては打ちどころが悪く、しばらくは意識があるままだったり、最悪死なないことだってある。

一応この高さを考えれば『死なない』ということはないだろうが、飛び降りて即死になるか、頭蓋骨折や内出血などでしばらく意識があるかは五分五分だろう。

それでも私は『飛び降り』がよかった。

まるで本当に、背中に赤い翼が生えて、一瞬空を飛んでいるかのような錯覚に襲われる。

なんとロマンチックなことだろう。

そんな空想にとりあえず浸ってみる。

『病んでるな』と思った。

一体何処の世界に、死ぬ直前の今が幸福しあわせだと感じる人間がいるだろう。

確かに今まで自殺し死んでいった人達の中には、そんな人間も少なからずいたかもしれない。

だがここまで、飛び降りる瞬間を喜ぶ者はそういないだろう。

少なくとも、自分が飛び降りる姿を想像してみて『ロマンチック』だとは思わないはずだ。

いや、その前に・・・。

飛び降りる姿を想像する人の方が、まずいないだろう。

そんな姿を思い浮かべたら、軽い気持ちで死のうとしていた者は、きっと躊躇してしまうに違いない。

私はそんな心配など更々ないから、今は平気でそんな姿を思い浮かべている。

が、流石に想像しているだけの環境にも飽きた。

と言うより、そんなにのんびりしている程の時間はない。

グズグズしていたら、きっとマネージャーが探しにやってくるはずだ。

ここで見つかるわけにはいかない。

未佳は意を決して、前へと足を進ませる。

あと一歩足を進ませるだけで、この場所この世界ともお別れだ。

未佳は最後に空を見上げながら目を瞑ると、小さく前の方へと飛んだ・・・。

ふっと、頬に温かくもなく、冷たくもない風が吹く。
何となくその風の中に、春に咲く花の香りが混じっているように感じた。

さらに空からは、先程までぼんやり程度しか見えなかったはずの太陽の日差しが、瞼を閉じた状態でもはっきりと感じられる。

これは一体……。

そう思っただけで、未佳は目を開けてみる。

そこに広がっていたのは、どこまでも晴れ渡る青空だった。

雲が無いわけではないが、これはまさに『快晴』と呼ぶに相応しい空だろう。

そんな空をぼんやりと見つめたまま、未佳は『あれ?』と思った。

確か私はさっき、屋上から飛び降りたはず……。

嘘なんかじゃない。

ちゃんと飛び降りた。

あの顔や体に吹く向かい風の威力。
まるで直下型ジェットコースターに乗って、高いところから滑り落ちるような感覚。

間違いなく私は、屋上から飛び降りたのだ。
なのに何故、私は死んでいないのだろう。

一応横に倒れてはいるが、痛みはない。

まさか落ちて無傷で助かったとは考え難い。

それに何故か、私の視界に飛び降りたはずの『SAND』のビルですら、見えてこない。

その前に、建物自体がないのだ。

未佳は恐る恐る起き上がってみた。

すると自分の手の下にあるコンクリートのタイルに、妙に見覚えがある。

ついさっきまで、これを見ていたような……。

『まさか!』と思いそのタイルの上に立ち上がった未佳は、思わず

目を見開いた。

未佳が立っていたその場所は、たった今未佳が飛び降りたはずの『SAND』の屋上だったのだ。

そこから見える景色を見れば、すぐに分かる。

間違いなく『SAND』のビルの上だ。

「どうして・・・？」

確かに飛び降りたはずなのに・・・。

まさか、飛び降りたつもりになっていて、実は後ろに倒れていただけだったのだろうか。

だがもしそうだったとしても、こんなコンクリートしかない場所で、無傷で助かっているのはおかし過ぎる。

絶対に掠り傷くらいは負っているはずなのに・・・。

「なんで？・・・なんで死んでないの・・・！？　どうしてっ！」

「お姉さん。・・・坂井未佳さんだよね？」

突然聞こえてきたその声に、未佳は弾かれたようにハッと後ろを振り返った。

そこには、小学生くらいの少年が一人、未佳の後ろにぽつんと立っている。

身長や顔立ち、まだ幼さを残す声などから考えると、小学3年生から4年生というところだろうか。

髪は毛は耳半分を隠すまでの長さがあったが、まあこれくらいの男の子にはよくある髪型のようにも思えた。

服装は、上は紺色のブレザーのようなものを着込んでいて、襟元にはワイン・レッドのリボンを締めている。

下はこんな季節にも関わらず、藍色の短パンを履いていた。

もともと、膝の上くらいはあるグレーの靴下を履き、その上にややひざ下まであるヒールの短い黒のブーツを履いているのだから、そんなに寒さを感じないのだろう。

まるで何百年か前のイギリス人を思わせるかのような格好ではあったが、一番に未佳を驚かせたのは、その少年の瞳だった。顔立ちは日本人であるはずなのに、その少年の目は信じられないくらい蒼く光っていた。

黒眼は黒いままなのだが、本来の日本人なら茶色かこげ茶色のはずの部分が、その少年はまるで海のようなアクア・ブルーなのである。見ているだけでも吸い込まれそうなその目に、しばし意識を持っていかれそうになっていた未佳だったが、ここでようやく今の現状を思い出した。

「……………あなたは誰？ それにどうやってここに……………ここは立ち入り禁止の場所なのよ？」

「僕の名前はリオ」

「……………リオ？」

「うん、リオ。僕は人間の世界より、遠い遠いところからやって来たんだ」

まだ舌つたらずに等しい喋り方で、リオは自分の名前を名乗った。

名前からすると、日本人ではなさそうである。
ハーフなのだろうか。
確かに目は蒼いが……。

しかしそれにしても、今日は変な事が立て続けに起こる。
死のうと思ひ飛び降りたら死んでおらず、ただただ無傷のまま後ろ
に倒れているし、挙句の果てには変な子供まで出てくる。

『人間の世界よりも遠い遠いところ』とは、一体どんな物語から取
り出してきた言葉なのだろう。
教育上宜しくないと思うのと同時に、何故子供から目を離すのだろ
うかと、少しムツとした。

ここにいるということは、おそらくこのアーティースとかマネー
ジャー、スタッフ関係者の子供なのだろうが、それなら連れてこな
いでほしいと思う。
結局周りに迷惑を掛けることになるのだから、全く最近の親という
ものは……。

そんなことを思いながらブツブツと胸中で呟く未佳の耳に、今度は
もつと信じられない言葉が、リオの口から飛んできた。

「お姉さんはある事情で《予約死亡》になりました。……本当に
死ねるのは6ヵ月後です」

これが、未佳の最初の1日目だった。

1・死ねない 見えない

「予約・・・、死亡・・・？」

「そう。予約死亡。未佳さんは、今日それになったんだよ」

単刀直入にそう言われても、意味が分からなかった。

いや、そればかりか。

何処から何処までが分からないのか、それすらが分からない。

『予約死亡』とは、一体何のことなのだろう。

その前に、どうして『予約死亡』になってしまったのだろう。

私は本当に死んだのだろうか。

この少年は、一体何者なのだろう。

その全てが分からなかった。

「あなた・・・。一体何を言ってるの・・・？ それって、どういうこと・・・」

「僕はこれ以上は言えない・・・。でもお姉さんは今、本当に死んだんだよ」

「・・・うつ・・・、嘘よ！ 本当に死んだのなら、私はとっくにこの場所にはいない。うつん・・・、その前に・・・。あなたもこの街並みも私の目には見えてるってことは、私はまだ“死んでない”ってことじゃない！！」

「『予約死亡』は、その死んでしまった人がある一定の期間、生かし続ける事なんだよ。だから、あなたは“本当は死んでる”けど“生きてる”んだ」

「じゃあ今すぐ死なせてよっ！！・・・そんなわけの分からない予約なんて要らないわ！！ 私は生きたくないの！ 今すぐ死なせ

て!!」

「『予約死亡』は取り消せないよ。だから、あなたを今すぐには逝かせられない・・・」

「意味が分からないっ!!」

未佳は頭を抱えたまま、その場にしゃがみ込んだ。

やや上の方で一つに止めていたポニーテールの長い髪が、未佳の頭上で小さく揺れる。

でもそんな小さなことに、こちらが反応している余裕などなかった。

自分は早く死にたいのに・・・。

わけの分らない“予約”のせいで、それが阻まれてしまうだなんて・・・。

ふつと未佳の脳裏に、ある小さな考えがよぎる。

「もういいわ!!」

未佳はそう言うと、一気に先程飛び降りた場所へと走り出した。

そのままの勢いで、再び飛び降りようと試みたのだが、それはリオの発言により、再び阻まれた。

「無理だよ。ここから飛び降りても、またここに戻ってくる・・・。

この期間中は、どんなことをしても死ねないよ」

「・・・そんなこと・・・!」

「嘘だと思っのなら飛び降りなよ。本当に死ねないから」

「・・・っ!・・・言われなくたって・・・!!」

未佳はそう強がると、再び飛び降りた。
今度は先程のようにふわりではなく、一気に……。

一瞬あの時と同じ風が吹き、未佳はふっと目を開けた。
地面に激突した時の衝撃はない。
身体の痛みも特に感じられない。

『もしや』と思ったのと同時に、未佳の後ろの方から再び、あの声が響いた。

「だから言っただじゃん。『死ねない』って……」

未佳の真後ろには、呆れたように立ち尽くすリオ。
そして未佳が倒れている場所は、やはり『SAND』の屋上だった。
体勢が違うのは、おそらく二回目に落ちた時の姿が、最初に落ちた時と違っていたからだろう。

間違いないリオの言った通り、未佳は6カ月後まで死ねないようだ。

「……本当みたいね……。まるで信じられないけど……」

「信じられなくても、これが現実だよ」

「あなた……。可愛い顔のくせに、結構残酷なことを平気で言うのね」

未佳は皮肉をたっぷりと含ませた言葉で、誰を見つめているとも言えないような目を、リオにだけ向けながら言った。

だがリオは、その未佳の発言に、ただただ首を傾けて聞き返す。

「残酷？」

「そう、残酷……。 “死にたい” と思ってる人間の邪魔をしないと思ってるの？ あなたは人間じゃないみたいだし、この際だからハッキリ言っわ……。それとも、見た目だけじゃなくて頭も子供だから『残酷』の意味も分からない？」

「分かるよ」

別に未佳の発言に怒りも見せず、リオは淡々と未佳の言葉に答える。その反応に、逆に自分の方が黒過ぎるように感じた未佳は、溜息を一つだけ吐いたあと、再びリオの方に視線を向けた。

「まあいいわ……。それで？ どうして私が死ぬのが、あと6カ月後なの？」

「それは……。言えない」

「じゃあ、質問を変えるわ……。私に言える内容はこれだけ！？」

半分苛立ちを含めた口調で未佳が尋ねると、リオはその問い掛けに対し、微妙な反応を返した。

まるで言ってもいい事といけない事を、頭の中で何度も確認しているようだ。

やがて、未佳に教えてもいい内容がある程度まとまったらしく、リオは静かに口を開いた。

「死ぬ時は、自然にその期限の時間が来たら死ぬから……。『飛び降り』の限定じゃないよ」

「……。それってつまり……。私が部屋に居たら部屋の中で。職場の中に居たら職場の中で死ぬ、っていうこと？」

「飛び降りに拘るのなら、別にタイミングを見計らって飛び降りてもいいけど？」

そう言われても、正直未佳はそう言ったものが苦手だ。
やや大雑把な性格の自分に、タイミングを見計らって飛び降りるなど、到底出来そうにない。

その前に、もう既に二回も飛び降りているのだ。
流石に三回もやろうとは思わない・・・。

それで死ねなかったら死ねなかったで、また残念なことになりそうな気さえする。

「・・・いいえ・・・、もういいわ。それで自然に死んだ時、私はどんな姿になってるの？」

「基本的には、本当に魂が抜けたみたいな感じになるから、遺体自体に外傷とかはないよ。勿論、最初に飛び降りた時の傷も、実際に死んだ時に出てくるわけじゃないし」

「でも、私がこうして生きてる時に出来てしまった傷とか、死ぬ直前にリストカットとかをした傷は、死んでも残るんでしょう？」

「それはね・・・」

つまり、6月の間に出来た傷や、死ぬ直前に付けた傷などは、自分が死んだ時には残っていて。

逆に最初や、今飛び降りた時に付いたであろう傷は、たとえ6月後に本当に死んだとしても、二度と身体に出てくることはない、ということだ。

ここまでの説明を受けた後、未佳はふつと苦笑いを浮かべた。

「なんか信じられないわね。私の口から、私自身の遺体の話が出てきて、それをあなたに聞くだなんて・・・。どうなってるのかしら・・・」

「そんなの、僕に訊かれても・・・」

「それで？ まだ私に伝えられることは？ あるの？」

「もうないよ・・・」

「そう・・・でも、本当に最悪！」

「そう言われても困るよ。それに本当は・・・、僕はこんな役じゃ・・・」

「・・・えっ？」

「未佳さん！ 未佳さん！ 居ますかー！？」

一瞬何かを言い掛けたりオに訊き返す間もなく、何やら目の前にある屋上の出入り口扉から声がする。

苗字で呼んでいる時点で、未佳を探しているのは明らかだった。

「坂井さん！ こんなところに・・・。もう探したんですよ！？」

休憩時間はとくに終わってるのに、何処にも姿がなかったから・・・」

その声の主は、未佳よりも少し年上の女性、栗野奈緒美だった。彼女と未佳の関係はと言うと、ただ単にバンドのヴォーカルと、そのヴォーカルに付く専属マネージャーであるだけのこと。

服装や髪形などが、自棄にこの人間の割にはしっかりしていて、尚且つ、いつも腕時計とメモ帳を持ち歩いているのがその証拠だ。栗野は少々疲れたような、半分怒っているような表情を浮かべつつ、自分の腕時計を何度も人差し指で指差す。

そんな栗野の態度に、流石の未佳もかなり相手が怒っているのを悟ったらしく、どうしようかと目を泳がせながら、とりあえず頭を下げた。

「す、すみません・・・。ちょっと外が見たくて・・・」

「それは分かりますけど……。ちゃんと時間は守ってください！もうっつ！トレードマークのシュシュに、まだ花も付けてないじゃないですか！！みかっぺ！今回は用意なんかで時間を取るわけにはいかないんですよ！？今はPV撮影中なんですから！」

「すみません……」

実はこの日、未佳は単なるレコーディングだけではなく、新曲PVの撮影も控えていたのだ。

撮影場所は、ここの2階下の6階にあるライブハウス。

そこでライブのように歌っている未佳や、他のメンバー達が演奏を行っている場面を撮った映像に、背景やCG映像などを合成させてつくる予定だ。

ちなみに先程一瞬出てきた『みかっぺ』とは、未佳の呼び名。

メンバーの一人がメールでそう書いたことが、他のメンバーやファンの間でも定着し、今やファンの中で知らない者は居ないくらいにまで広がっている。

ちなみに未佳自身はというと、別に気に入ってはいないが、気に入らないわけではない。

ようは『普通』と言ったところだ。

そんな半分イライラ気味の栗野に引つ張られながら、未佳はふつとリオの方に視線を向けた。

リオは何も言わず、ただただ静かに未佳の後をついてくるだけ……。

これが一番不思議に感じた。

何故ならリオが歩いている未佳の真後ろは、栗野がこちらに首を向ければ、必ず姿が見える位置だったからである。

リオが後ろをついてきていることに、栗野は気付いているのだろうか。

気になった未佳は恐る恐る、栗野に問い掛けた。

「あの……。栗野さん。あの男の子のこと、何にも私に訊かないんですか？」

「? ……どの子？」

「あの子です。私の後ろにいる……」

未佳は栗野の問い掛けに答えながら、今リオが立っている場所を、分かりやすく人差し指で指差した。

一方のリオは、相変わらず無表情を浮かべ、未佳と栗野をじーっと観察している。

そして、栗野の溜息が未佳の耳に聞こえてきた後、栗野は信じられない発言を口にした。

「未佳さん……。からかってます？」

「えっ……。？」

「誰もいないじゃない。そもそも！ここに子供がやってくるわけないでしょう？今日はライブだってやってないんですし……。

それに子供に限らず、ここは関係者以外立ち入り禁止なんですから」

（! ……まさか……。リオが見えないの？）

最初は何かの冗談かとも思ったのだが、確かに栗野の目は、全くリオの方に向こうとしない。

人間は自分の苦手な人や物などを、一切目に入らないようにしよう

とすることはある。

実際に多くの人間が、こう言ったことをやったことがあるはずだ。だが実際、人間は気持ち的に意識をしたくなくとも、本能的にそれを見つめてしまうものなのだ。

しかし今の栗野には、そう言った部分が全くもって見えない。

栗野は嘘を吐けば、すぐにそれがバレてしまう人間だ。

ここまでの演技は出来ない。

つまりリオは、決して未佳にしか見えない存在ということだ。

（そんなことって……。さっきは冗談で言ったけど、やっぱりあの子……。人間じゃないってことなの？）

「さあ。からかうのが済んだのなら、早く行きますよ！」

再び栗野に引つ張られ、未佳は少々納得がいかないまま、渋々6階へと向かう。

その途中、リオの幼げなあの声が、未佳の後ろから耳元に響いた。

「僕の姿と声は、未佳さんにしか見えないし、聞こえないよ。写真とか鏡にも写らないから、覚えておいて……」

「『もう言えることは何も無い』って言うてたくせに……。そう言うことは早めに言うてよ……」

「？ 何か言いました？」

「……。えっ？ いいえ、何にも……。！ こっちのことなんで……。気にしないでください」

未佳は慌てて首と右手を横に振りながら、栗野と共に階段を下りていった。

2・個性的なメンバー

未佳達が6階に下りてみると、6階の通路のあちらこちらで、かなり賑やかな声が響いてきた。そのほとんどは当然のことながら、ライヴハウスの方から聞こえてくる声である。どうやら彼らは、ここに未佳がやってこないことはどうとも思っていないようだ。

「ほら。皆さん待つてるから」

「はぁー・・・」

そう言われても、到底あの会話からは、そんな風な空気は感じられない。もっとも未佳自身も、メンバーの誰かが遅れたりした時は、こんな風に先に来ていたメンバー達と話していたりしていたので、どうこうは言えないのだが。

「失礼します！ 皆さん、お待たせしてすみません！！ 未佳さん、入ります！」

「ああ、やつと来た・・・」

「みかつぺ、遅いー！」

「随分と長いトイレでしたね」

「・・・違うの。外見ようと思って屋上に出てたら、こんなに時間が経ってただけよ」

未佳がそう答えると、メンバー達は『また？』と、ハモリながら聞き返した。外を見ようと思って屋上に出ていくのは、実は今に始まったことではない。ここの事務所にやってきて、尚且つ外が晴れていた時は、未佳は必ず屋上に足を運んでは、空は眺めているのだ。

だから今回も、屋上に出ること自体は簡単なことだった。

死ななかったことは別として……。

「でも今日は晴れてなかったんに……。それなのに屋上に出てたん？」

ふつと、肩までしかない黒髪を左右に揺らしながら、キーボードチェアに座っていた女性はそう尋ねた。

彼女は末佳よりも4つ年下のバンドメンバー、小歩路厘。生まれも育ちも京都なのだが、会話に関しては関西弁のみ。なんでも、大阪出身の父親の影響らしい。

担当は楽曲の作詞作りと、リーダーと同じキーボードなのだが、リーダーのように一気に何台も弾くことは出来ない。というより、本人がそれを『優雅じゃない』と言って、拒絶しているのだ。

作詞は楽曲全てを担当しているが、内容は重いもの、暗いもの、空虚、虚無などが大半を占めている。

『CARNELIAN・eyes』は元々こう言った曲が多いことでも有名なのである。

ちなみにメンバーの中では、彼女が一番の仲良しだ。

時々約束をして顔を合わせては、どちらかの自宅で遊んだり、二人だけで旅行に行ったりすることもある。

末佳にとって、大切なバンドメンバーの一人だ。

末佳は自分のマイクがセットされている場所に向かいながら、とりあえず厘の問い掛けに答えた。

「曇りは曇りで・・・、色々といい部分もあるの」

「ふん。じゃあ今度は雨の日に出てみたら？」

「えっ？ 雨？ でもそれじゃあ・・・、かなり濡れるし・・・」

「常識なんか気にしないで、一度やってみたらええやん。なんか新しい発見があるかもしれへんし・・・」

「本当に小歩路さんは『当たり前』系のものが嫌いよねえ・・・」
「だってえ！ それって限定されててつまないやん！」

そう言つて厘は顔を顰め、首を横に振つた。

厘はメンバーにしても、一般人にしても、かなり個性的な人間である。

普通の人間が言うところの『普通』『当たり前』『常識』『流行りもの』と言つた類のものが、ほぼ全般大っ嫌いなのだ。

そればかりではなく、ある意味では手段を選ばないような行動をとることだつてある。

たとえばライブ中に『今度の新曲の歌詞はどんな感じ？』と観客が尋ねると、厘は普通にポケットから携帯電話を取り出し、そこに打ち込まれている歌詞の内容を確認したりするのだ。

流石にそんな大胆な行動をとるアーティストメンバーはそうそういないので、あの時はメンバー全員であたふたしたのをよく覚えている。

さらに厘は、頭に『かなりの』が付くほどの自由人で、メンバーが携帯電話等で連絡を取ろうとすると、基本的に繋がらないことが多い。

いつも決まって留守電だったり、ようやく電話に出たと思ったら、向こう側だけの些細な事情で切ってしまったたり。

もっと凄い時には、電話に出た時には日本にはおらず、誰にも報告

しないまま海外旅行をしていたこともある。

そんな彼女のあだ名は『まるで野良猫のように自由気まま』という意味から付いた『厘猫』と、そのままの意味である『自由人』の二つ。

もつとも一番多い呼び名は、苗字にそのまま『さん』を付けた『小歩路さん』だが。

（・・・私・・・、本当に死んでるのよね？　みんなと話してみると、全然自覚が湧いてこない・・・）

「じゃあ、一番のサビから行きますよ？」

キーボードの前に立つサングラスの男性が、皆の方に視線を向けながらそう尋ねた。

サングラスがチャームポイントの彼は、我が『CARNELIAN・eyes』の頼れるリーダー、手神^{てがみ ひろし}広人。

メンバーの中では最年長で、未佳とは10歳も離れている。

バンドの担当はキーボードのみなのだが、手神は厘の説明でも書いたように『2台以上のキーボードを弾く』というカミワザを持つ男だ。

普通一人で2台は出来たとしても、それ以上の台数を操れる者はそうそういないだろう。

手神はその才能を生かし、バンドでは未佳の作った作曲の編集やアレンジ等を行っている。

ちなみに性格は、未佳や厘のような『少々行け行け』という感じではなく、どちらかと言えば気が小さいタイプだ。ついでに会話の時の声も小さい。

ここまで出来る上にバンドリーダーなのだから、もう少しメンバーに威張ってしまってもいいくらいだというのに、手神はいつも引込み気味なのだ。

その為よく、ライブの練習やレコーディングの時などには、リーダーの手神が指揮を執るのではなく、代わりに未佳や厘が仕切っていることさえある。

「はい」

「坂井さん、いいですか？」

「いつでも・・・」

未佳がそう返事を返すと、スタッフ達はややメンバーから離れ、まるで映画の撮影のように『用意スタート！』と合図を送る。

それから間髪を空けずに、未佳はマイクを口元に近付けた。

そうしているうちに、サビの少し前のメロディーがスピーカーから流れ出す。

今日PV撮影を行う曲は、シングルCDの新曲『明日』と『明日』

”と“昨日”』。

大切な人と別れてしまった女性の、明日と昨日の物語を切なげに歌った曲である。

『CARNELIAN・eyes』は基本、こう言った失恋や破局の歌が大半を占める。

元々厘が生み出す詞自体に多い傾向なのだが、彼女の過去が関係しているかどうかは、一切不明だ。

未佳はサビが近付くと、声を出しやすい姿勢に体の向きを変え、マイクにその歌声をぶつけた。

「あしゝたあはー どんな風が吹くのお・・・ あしゝたあはー
何が待っているというのぉー 流れえゝてしまった時間のテときープは
あ二度と・・・ 巻き戻せつない・・・ ならば あーすは何
を撮ろうー・・・ 心 惹かれる ストオーリィーにいゝ 今はー
・・・ ただー・・・ さー迷いたーい・・・」

こうしてサビを歌い終わっても、しばらくはこのまま・・・。
編集の際に短くならぬよう、余分に撮影するのである。

そしてそれから10秒後。

「はい！ OKです！ ワンテイク終了!!」

そのスタッフの声で解放されたかのように、それぞれのメンバーが
ホッとしたような表情を浮かべる。

「ふゝ・・・」

「終わったあゝ」

「それにしても手神さん・・・ いつも撮影はハラハラしますねえ
ゝ。楽しいですけど・・・」

「まあね」

そう手神に話しかけたこの男性が、最後のバンドメンバー。
ギターとコーラス担当の、長谷川智志だ。はせがわ さとし

未佳よりも一つ年上の彼は、本職バンドのギターやコーラスだけで
なく、他のバンドのライブサポートや作詞、ソロ活動などでも『S
AND』内では引つ張りダコな人物。

メンバーの中でも、キーボード、編曲役の手神や、作曲提供、サポ
ートコーラス役の未佳よりも、色々なところから声が掛かる。

学力にしたって、バンドの中では一番に等しい。

未佳も関西では名門とも言える学校卒だが、そこよりも長谷川が卒業した学校の方が、倍率がうんつと高いのだ。

そうした部分もあってか、厘からはよく『クレバー』などと呼ばれている。

ただ性格としては、手神と似てそんなに口を出すような人間ではない。

どちらかと言えば、遠慮がちでお人好し。

自分の立場をいつも意識してしまうせいか、メンバーの悪口は一切として言わず、おまけに頼まれたことは何でもやってしまう、所謂パシられキャラ。

ファンからは逆に『脱力系』や『いじりたくなるキャラ』などといい意味で言われている。

もつともその原因は、いつもライブなどで一緒にいる未佳自身にあった。

「ところでさとうち……。さっきから練習見ると、ギターがかなり速くなってるから、もうちょっとスローにして」

「・・・こんな感じですか？」

♪

「だから速いんだってば！！　　っというか、さっきよりも速くなってる！」

「あつ・・・！ す、スミマセン！！」

「いいから。さっきのところからもう一回・・・。」

♪

「今度は遅い！！」

このように毎回ライブ中にも、未佳が長谷川を叱りつけたり、時には無茶ブリをやったりするのだ。

その姿がファンの間でも定着し、こんな呼び名が出来てしまったのである。

ちなみに『さとつち』とは、未佳が考えた長谷川のあだ名。

『さとし』だから『さとつち』と、かなり単純な決め方だが、基本的に手神や栗野以外の人間はそう呼んでいる。

そして長谷川自身も、このあだ名に関しては満更でもないらしい。でなければ、ライブのような本名で名乗ってもいい自己紹介の場で『ギター担当のさとつちです！』などと、わざわざ自分で名乗ったりはしないだろう。

『CARNELIAN・eyes』は、こうした個性溢れるメンバー4人が集まって、バンドとして、楽曲を作り出しているのだ。

そして今年は、結成10周年を迎える大事な年。

もう既に、12月と1月の間にカウントダウンライブはやり終えているので、今のところライブの予定は立っていない。

だが『やらない』とも言いきれない。

だから今のうちに、あそこから飛び降りたかったのだ。

ライブの予定などが立ってしまったら、それこそミーティングや曲のセトリリスト、練習やグッズ製作など、忙しくて死ぬ暇すらない。その期間中のマネージャーは、予定や休憩時間、練習風景などの全てを、まるで金魚の糞のようについてきては監視。

長ければ夜中まで練習が続くこともあるので、最悪半日以上も、こうした環境下にさらされ続けることもある。

そうなってしまった場合、飛び降りるところか、屋上に行けなくなってしまうのがオチだ。

（はあ・・・）

「じゃあまた。今度は2番の頭からお願いします!」

「はい!」

「りょーかい」

「分かりましたー」

「坂井さん? よろしいですか?」

「えっ? ええ・・・、どうぞ」

その後もPV撮影は続き、ようやく撮影が終わった時には、既に午後5時を回っていた。

3・なかったはずの帰宅

午後5時36分頃、未佳達のPV撮影会は、完全にお開きになった。皆がそれぞれ、自宅や他に用のある場所へと向かっていく。

未佳達というと、この日は珍しく、撮影以外は何もない。なのでそれぞれ挨拶を交わした後、事務所を後にしていた。

男性軍は、もう既に二人ともご帰宅中。

最後まで残っていたのは、女性メンバーの未佳と厘、そしてマネージャーの栗野だけだった。

「もう！　なんで男って、ちょっとやっただけで疲れるん？！　手神さんなんか、リーダーやのに脱力しとったし……。あんなんらいヴと比べたら、めっちゃ余裕やん！」

「仕方ないわよ。みんな、かなり緊張するみたいだし……。プレッシャーを感じやすいのよ」

「というより、男共はリラックス自体があんまり出来ないのよ。女子はそういうの強いからねえ……。自分が物差しになりガチなのよ」

「せやけどー！」

「まあ……。納得出来ない気持ちも、分からなくはないけど」

栗野と厘はしばらくそう言い合いながら、未佳と一緒に事務所の正面玄関へと向かった。

正面玄関は、1階の長い渡り廊下を歩いた先にある。

正面玄関の外には6段の小さな階段があり、そこを下りた先は、車一台が何とか通れる車道があるのだ。

厘は毎回、車に乗って事務所にやってくる。

車はいつも、正面玄関の左側にある乗用車5台が収納できる程度の、比較的小さな駐車場に止めているのだ。

ちなみに厘の車は、小さくて丸い、藤色のワゴン車。

定員人数は4人だが、基本的にそこまで人を乗せたことはない。多くても3人くらいである。

厘は正面玄関を出てすぐに駐車場へ向かうと、鍵を差し込み、車のエンジンを掛けた。

それとほぼ同時に、未佳達の方に視線を向ける。

「二人とも、今日は……。乗る？」

「あつ、今日はいいわよ。この間乗せてもらったし、まだ時間も早いから……」

「厘さん、お先にどうぞ」

「そ、そう……。？ ほな……。みかつぺ、また今度ね。栗野さんも、お疲れさまでした」

「お疲れ」

「はい、じゃあね」

二人は厘の車に手を振りながら、その車が大通りに出るのを待った。そして無事大通りに出て走り出すと、未佳は手を振るのを止め『さて』と、辺りを見渡す。

確かいつもこの辺に、栗野の白い軽乗用車が止めてあったはずだ。そう思って辺りを見渡すと、案の定、厘の車が止めてあった場所の後ろに止まっていた。

「じゃあ、未佳さん。私達も帰りますか」

「そうね。またいつ仕事の連絡が入るか分からないし……」

それとは別に、未佳には色々調べたいこともあった。
『本当に死ねないのか』とか……。

栗野が車の鍵を開けると、未佳は最後部座席の一番左側の座席に座った。

家に着いた時に、こちら側のドアからすぐに出られるからである。いつも未佳が座る場所は、そこだった。

ちなみに送り迎えを栗野が行っているのは、自分達のファンに見つからないようにするため。

握手やサインを求めてこられるくらいならまだしも、調子にノって記念撮影や、連れ回し的なことに巻き込まれては危険だ。

仮にも未佳だつて一人の女性。

ライブの終わった後の出待ちなどを見ていると、とても『ない』とは言切れない。

厘の方もファンの多さを考えると、一人で帰らすのはかなり危険だとは思う。

だが彼女は車を持っている。

それで幾分か守られているのだ。

しかし未佳は、車どころか運転免許証すら持っていない。
だから毎回、栗野が車で送り迎えを行っているのである。

栗野がエンジンを掛けたと同時に、車はゆっくりと走り出した。
厘と同じように余裕で大通りに出て、まるで白いライトが流れるかのように走る車の列に入る。

茶色いライトが照らす車道の下を、車は突き進んだ。

「未佳さん、ところで新曲の案は？ 今の時点で出来てます？」
「やめてよ。今終わったばかりなのに、仕事の話なんて・・・」
「スミマセン。実は厘さんが『作詞作業はまだなの？』って、訊いてきてて・・・。アレンジとかレコーディングの作業が長かったから、そう言ってきたんでしょうけど」

『CARNELIAN・eyes』の作業工程は、まず最初に未佳が曲を作り、それに厘が歌詞を付ける。

その後で、メンバー全員が顔を合わせて話し合い、アレンジ等を行っていくのだ。

つまり厘は『未佳が作った曲がなければ、作詞の作業は出来ない』というワケなのである。

栗野のその話を聞いて、未佳は溜息を吐いた。

というのも『もうその作業をやることはない』と思っ、作曲のサンプルを全て消してしまったのだ。

一応メモディーやキーなどは、ある程度の把握は出来ている。

とりあえずそれ自体はどうにかなるだろうが、また一から撮り直さなくては・・・。

「一応・・・。サンプルみたいなのは出来てるから『使えそうになったら渡す』って、小歩路さんに伝えておいて」
「はいはい」

半分微妙な反応で、栗野は未佳に返事を返す。

一方の未佳は、一応その返事を聞いた後、窓側に頭をコツンと傾けた。

何処を見ているとも言えぬ目に、次から次へと流れるように変わる景色や街灯が映り込む。

色々な部分で疲れた。

今は何処から何処までが現実なのかは分からないが、とにかく早く明日を迎えたい。

明日にはきつと今よりも、今日の出来事がハッキリしていて、多少は落ち着けるようになっていくかもしれない。

ふつと厘が前に言っていた『人間は寝ている間に、物事を考え続ける』という言葉思い出した。

（私は明日・・・、どんな結論で納得するのかしら・・・）

そんなことを胸中で呟いていた未佳は、ふつとトンネル内の街灯からなる影が、やや奇妙な形をしていることに気が付いた。

ついさつきまでは、この影は車内に置いてある道具、所々の凹凸からなる突起、未佳のシュシュ、輪郭、髪の毛のみだったはず。

なのに何故か今は、その影と一緒に別の影が混ざり、余計に車内が暗くなっているのだ。

気になった未佳は、ふつと自分の隣りの座席に目を向け、そして目を見開いた。

「ッ！！」

「！ 未佳さん・・・っ！？ どうかしました!？」

いきなり小さな悲鳴を上げた未佳に、心配した栗野は慌てて声をかける。

しかし今は車の運転中。

しかも後ろには、バンドの命でもある大切なヴォーカルがいて、おまけに車は今トンネル内。

後ろを振り返るなどと言ったよそ見行為は、今は到底できなかった。栗野は未佳に声を掛けながら、頻りにバックミラーを覗き込む。

しかし、バックミラーから見た限りでは、何処にもおかしなものや、怪しいものは見当たらない。

勿論、この二人以外の人の姿もない。

「未佳さん！ どうされたんですか!？」

「……………！ あっ…………、大丈夫です。なんでもないの……………」

「えっ…………？ でも……………」

「窓に虫が付いてて、それに驚いただけですから……………」

「もう…………。脅かさないくださいよ。まあもつとも、長谷川さんがいたら、こんなもんじゃないですけどね……………」

「で…………、ですよね……………」

未佳は栗野の話に苦笑いを浮かべながら、再び隣りの座席に目を向ける。

いつからそこにいたのだろう。

そこには、蒼い目を光らせたリオがひっそりと、車の座席に座っていた。

未佳の自宅に着いた時、時刻は午後5時半過ぎから、午後6時40分くらいになっていた。

未佳の自宅は『SAND』の事務所がある場所と同じ、北堀江にある。

もつともその場所は、少々北堀江と南堀江の間辺りの、かなり微妙な地区だ。

未佳はそんな場所にある25階建ての、超高層マンションで暮らしている。

高級かどうかはさておき、未佳がそのマンションを住まいに選んだのにな、ある大きな理由があった。

それは、楽器の騒音やマイクを通した声などが、隣り近所の方に聞こえない構造だったからである。

楽器演奏や歌手など、音楽関係の人間が多い大阪では、そんな人達を意識した建物なども多い。

ましてや音楽事務所などが近くにあるこの地域では、その手の建物の数が尋常ではないのだ。

未佳を含む他のメンバー達も、皆その手の建物で暮らしている。生憎、皆バラバラの建物ではあるが。

車がマンションの出入り口で止まると、未佳は左のドアを開け、車の外に出た。

一方のリオは扉を開けず、そのまま車をすり抜けて降りる。今更ながら、リオの存在が『怖い』と感じた。

「じゃあ、未佳さん。また連絡が入りましたら、迎えに行きますので・・・」

「あっ・・・、はい。今日はどうもありがとうございました。それじゃあ・・・」

「はい、また」

そんな会話を最後に交わし、車は再び大通りの方へと引き返す。

しばし誰もいない空間となったマンションの真下で、未佳は横目でリオを見つめた。

「付いてきてたの？」

「僕は未佳さんの見張り役だから。姿は見えなくても、近くにいるよ」

「まるでストーキングね。されたことは一度もないけど・・・」

未佳がそう言い捨てると、リオは一人でスタスタと、マンションの中へと入っていった。

その後を付いていくかのように、未佳もマンション内へと歩き出す。

中は明るい感じの茶色いライトで照らされ、床は大理石をイメージした感じのタイルで覆われている。

見方によつては、ホテルの受け付け風景などに近いだろう。

上の階へ行く手段は、エレベーターと階段のみ。

そして1階の入り口には、鍵を入れなければ扉が開かない、まさに最新のシステムが導入されている。

はずなのだが、リオにそんなものは通用しない。

余裕ですり抜けて入ってしまう。

未佳はその姿を見てやや呆れながらも、自宅の鍵を扉の鍵穴に差し込んだ。

『ガチャッ』という音と共に、扉が数センチだけ手前に動く。

未佳はその扉のドアノブを掴み、奥へと進んだ。

ふっと視線を上に向けてみれば、リオがエレベーター前でピタッと止まっている。

何をしているのかといえば、エレベーターの扉の上に並べられた1から25までの数字を、ただただ首を上にあげて見つめていたのだ。

「・・・何見てるの？」

「部屋、何階？」

「えっ・・・。ああ、そういうこと・・・・・・・・・・」

未佳はようやくリオが何をしたいのかが分かり、エレベーターのボタンを押した。

「21階の一番端。なるほど・・・。部屋がどこか分からなくて、ここから全然動けなかったわけね・・・」

「探そうと思えば出来たよ。一つひとつ部屋の中を見ればいいんだから・・・」

「無理だと思うわよ・・・。私と似た仕事をしてる人、結構いるから・・・」

「・・・・・・・・・・」

チーン・・・

そんな二人の冷めた会話を止めさせるかのように、エレベーターのベルが静かに、二人の間で鳴った。

4・『予約死亡』の期限

エレベーターに乗り込んだ未佳とリオは、その後は一切として、会話を交わそうとはしなかった。

正確には、未佳がリオに話し掛けないから、リオが話さないのである。

リオは基本、未佳の問い掛けや言動などに答えているだけ。自分から率先して話そうとは決してしないのだ。

結局そんな状況が数秒ほど続いたところで、エレベーターは未佳の家がある21階へと到着した。

無言の中で鳴る『チーン』という音が、何とも空しく虚しい。

扉が開くと、未佳はリオには目もくれず、スタスタと自分の家の方へと歩く。

そして家の前に着いた時、いつの間にかリオが足音もなく、未佳の後ろに立っていた。

「いきなりいると怖いんだけど？」

「別に幽霊なんかじゃないから、未佳さんには何にもしないよ・・・
むしろ・・・今は未佳さんが幽霊だし」

「余計なお世話よ」

先程出入り口で使ったのと同じ鍵で、未佳はドアを『ガチャッ』と開ける。

そして奥へ進もうとした未佳は、ふっと玄関で足を『ピタッ』と止めた。

明かりが点いていないとはいえ、室内は異様に暗い。

半分どころではなく真っ暗な家の様子に、未佳は『何があったのだろうか』と宙を仰ぎ、そしてハッとあることを思い出した。

「そっか………。カーテン閉めたまま出て行っただけ……」

「夜はともかく、昼間は変だよ」

「開ける必要ないと思って、そのままにしてたのよ！ 開ける人もいないと思ってたし……」

「じゃあ……、遺書とかも書いたの？」

「書いてたらもうとくに奥に進んで破いてるわよ。誰にも見られたくないし……。それに、その日その日で文章の文字が変わるの。6カ月後なんて言ったら、文章や内容だって大分変わってるわよ。元凶的な内容は除いてね……」

『変わる』と言っても、文章の語尾や内容の順番などの話だ。内容自体は大きく変わらない。

そしてそんなことがあつて色々と面倒臭いから、遺書はだらし無いながらも書かなかった。

こういう場合、下手をすれば死亡内容が『自殺』ではなく『他殺』になってしまうこともあるが、正直今日の未佳から言わせてもらえば、そんなのはどうでもよかった。

巻き込まれたら巻き込まれたで、それは『まあ、頑張つて』程度しかこちらは言えない。

どうせこの部屋を調べれば『他殺』という線は薄くなる。

家を出て行ったのがかなり早かったわけでもないのに、窓のカーテンが全て閉まっついて、さらにサンプル用の曲を入れていたテープが全て消されていたら、それを不審がらない人はまずいないだろう。あのメンバーであれば、それこそ頭に『絶対』の2文字が付くほど

だ。

未佳は靴を脱ぐと、右側の壁にある電気のスイッチを押し、部屋の明かりを点ける。
室内の明かりも、下と同じ茶色掛かった電球なので、明るさ的にはやや暗い感じた。

玄関の先にある扉の向こうが、自称『楽曲の誕生場所』。
正確には家のリビングで、そこには楽曲の曲を作るための楽器などが大量に置かれている。

実際にリオがその部屋に言ってみると、普通の日常生活用品の他に、電子ピアノや電子オルガンなどが数台。
床には何も書かれていない楽譜の束が、纏まってはいるものの置きっ放し。

だがそれよりもリオが気になったのは、バンドの役割上、彼女には関係ないはずの楽器が置いてあったこと。

「あれ……。アコースティックギターだね？」

「……それがどうかしたの？」

「未佳さんは作曲とヴォーカル担当でしょ？ アコースティックギターなんて、バンドの活動なんかじゃ必要ないんじゃない？」

「趣味で好きな楽器くらい、持っても別にいいでしょ？」

「ギター、好きなの？」

「……全然弾けないけどね……。指が思うように押さえ付けられないの」

「ふーん……」

（あの子……。自分から話すことはないんじゃないかなかったの？）

内心自分の予想とは違うと思いつつ、未佳は鞆を赤茶色の縦縞が入っているソファーに放り投げると、そのまま自分の部屋へと入ってしまった。

やや部屋の奥から物音がする。

やがて戻ってきた未佳の手には、何故か太さ3センチほどの長い麻縄が握られていた。

何をしようとしているのかは、未佳が上ばかりを見つめている時点で、もう分かり切っている。

「・・・死ねないよ」

「試すだけよ」

「止めた方がいいと思うけど・・・」

「・・・うるさい」

「それにあそこで死ぬんじゃないの？」

「うるさいっ！！ 死ぬるならこの際何処でもいいわよ！！」

「じゃあやれば・・・」

「ッ・・・！！」

頭にきた未佳は思わず、リオの頬目掛けて平手を伸ばした。

だがいざ叩いてみても、未佳の右手の平には痛みも感じないし、平手打ち特有の『パンッ！』という音もしない。

未佳の右手は、リオの顔をすり抜けていた。

「っ・・・っ・・・これじゃあ時間の無駄ね・・・」

「そうだね」

「・・・あそこなら・・・渡せるかしら・・・」

未佳が目をつけたのは、リビングの天井の中心部。

実はそこには、天井の平らな面に一か所だけ、直径10センチほど

の凹みがあり、その凹んでいない両隣りからは、太さ5センチほどの長方形の長い板が渡されている。

まるで首吊り用の凹みに見えるだろうが、実はそれも強ち間違っていない。

あの凹みは元々、ぶら下げ式の飾りやシャンデリアなどを取り付けるためのもの。

その証拠に、板の裏にはコンセントも付いている。

ちなみにそれを知ったのは、住人でありながらごく最近だ。

前から変な凹みだと思ってはいたが、そこまで深く考えなかった。

そもそもこの家が音楽関係者だけでなく、インテリアなどもそれに考慮した創りだというのを知ったのも最近のこと。

ここで自殺の練習やらをやらなければ、おそらく一生気付かなかっただろう。

未佳は縄で小さな輪を作り、その円の中に縄の尾を通した。

これが首を入れる土台。

さらに椅子を使って、天井のその凹みのところにある柱に、しっかりと縄を結ぶ。

これで準備はOKだ。

ただ一つ心配なのは、柱が未佳の体重に耐えられるかどうか・・・。

『シャンデリア』と言っても、基本的にあんな巨大なものではなく、インテリア用の小さなモノだ。

重さで言ったら、大体重くても4キロほどだろうか。

買った試しがないので、そこまで詳しくは分からないが、おそらくそれくらいだと思う。

そして未佳の現在の体重は、痩せてはいるものの身長の関係もあるので、大体50キロぐらいだろう。持ち堪えられるかどうかとなると、可能性的に駄目なような気がする。

（折れたら折れたで、別のやり方にすればいい……。ここで考え込む必要なんてない・・・）

未佳はそう自分で復唱しながら、縄の輪の真下に椅子を置く。

その上に乗ってみると、少々縄の輪の位置が頭ではなく、首の下辺りになってしまった。

少し長めに設定してしまったようだ。

しかしこの長さでも、輪の中に首を入れてぶら下がったところで、足は床には届かない。

それも見越していたので、未佳は首を縄の輪に通し、椅子を右足で倒した。

「うつ・・・つ・・・くっ！」

『ギリッギリッ』と、縄が上の方で小刻みに鳴る。

柱のこともあったので、未佳は足をジタバタさせながら『まだか！』と何度も上を見上げた。

ふっと、その時。

「キャッ！！」

『ボタンッ！！』という大きな音と共に、未佳は床に叩き付けられた。

正確には、落ちたのだ。

さらにそんな未佳の頭の上に、今度は折れただけでなく、釘も抜け、内部に埋め込まれていたコンセントのコードも切れてしまった柱が落ちてきた。

運が良かったのは、その柱が角から落ちなかったことではあったが、今の未佳からしてみればツイてないことである。

「痛っ、たーい……。……。やっぱり柱がモタなかったか・
・・」

折れた柱を見ながら、未佳は縄の痕が少しだけ付いた首元を摩り、問題の縄を持ち上げる。

そしてその行動により、またしても未佳は驚いた。

なんと柱だけではなく、何故か麻縄まで、真ん中辺りでぎっくりと切れていたのである。

ただでさえ丈夫な麻縄が、こうも簡単に切れるはずがない。

よく漫画などの首吊りシーンで使われているのだって、モノはこれのはずだ。

そうそう簡単に切れるものとは考え難い。

「なんで縄まで……。切れ目なんて何処にも……。！」

しかも縄が切れている位置は、未佳が首を通した部分と、柱に結んでいた部分の真ん中。

つまりぶら下がっていた個所になる。

そこから切れているということは、首吊りのリベンジは不可能ということだ。

縄の長さが足りない。

「っ！・・・もう！！　じゃあ別のやり方のなら・・・！！」

続いて未佳が取り出したのは、こともあるうちにカッターナイフ。どうやらリストカットをするつもりらしい。

未佳は単純に、その場で息を深く吸い込み、カッターナイフを左手首に当てたまま、勢いよく引いた。

「っ・・・！！　・・・あ、れ？」

てつきり『切れた』と思ったのだが、手首には傷一つ付いていない。その代わり、何やら手首に赤茶色のカスが付着している。

においを嗅いでみると、微妙に血のようなにおいはしたが、血ではない。

サビだ。

「なんでサビてるのっ！？　取り出した時は普通だったのに・・・！！」

その後も何回も引いてみたが、結果は同じ。

そればかりか、拳銃の果てにはカッターナイフの刃がボロボロに折れかけていく始末。

まるで、ポテトチップスで手首を切ろうとしているようだった。

「フッ・・・。何がなんでも死なせないつもりね・・・。だったら、こっちだって・・・！！」

未佳はそう言つて、カッターナイフを床に投げ付けると、今度はキッチンにあつた、刃渡り20センチほどもある包丁を取り出した。その包丁で、右手首を切ることにしたらしい。

やや手首に冷たい感触を感じながら、未佳はカッターナイフの時とは違い、目を背けながら引いた。

「いつ・・・!!」

今度は『痛い』と感じたが、血が手首を伝う感触はない。その前に、血が出ている感触がない。

未佳は恐る恐る、自分の手首を見してみる。

一瞬派手な赤い色が見えて、未佳は再び目を背けたが、やはり流れている感じはしない。

もう一度見てみると、血は出ているものの、切り口からは流れていなかった。

内出血だ。

「えっ!?! なっ・・・、なんで中が切れてて、外側は一切切れてないのよっ!!」

カッターナイフ同様繰り返し切ってみたが、それ以上の変化は起こらなかった。

普段は硬い肉類もしっかり切れる包丁だというのに・・・。

「ああっ!! もうっ! こうなったら・・・!!」

未佳はそう叫びながら、両手で包丁の柄を持つと、それをなるべく上へ持ち上げ、息を整えた。
腹に刺す気だ。

未佳の手が微かに、その行動を取る上で震える。

恐怖はあるはずなのに、死ぬためなら何でもやりだす自分が、初めて『怖い』と感じた。

私の心はこんなにも、ズタボロなのか、と・・・。

「ア、ア、ア、アアアッ！！」

未佳は一気に腹部に包丁を突き刺し、その場に倒れた。

どれくらい経っただろう。

しばらくそうしていた未佳だったが、意外なことに意識自体はハッキリしていた。

あとどれくらい血が流れれば、私は死ねるだろう・・・。
そう思いながら、未佳は右手を見つめる。

血は付いていない。

最初は驚いたが、考えてみれば傷口を触っていなかった。
触るのは少し抵抗があったが、未佳はゆっくりと傷口付近に手を伸ばす。

何か硬いものに触れ、一瞬手を少し引つ込める。

どうやら包丁のようなのだが、どの部分なのか分からない。

ただ触れた個所が冷たかったので、刃先の方だとは思いつ。

だがその包丁の刃先が、何だか曲がっているような感じがしたのだ。

(気のせい・・・?)

そう思いもう一度手を伸ばしてみる。

やはり曲がっている。

しかも、刃先を触っているのに、指に血が付いていない。

流石にただならぬ予感を察した末佳は『バツ!』と、その場から起き上がった。

と同時に、腹部の上から『カランツ!』と、何かが転げ落ちる。

目を向けてみると、そこには刃がグニヤリと潰れて曲がった包丁が、床に転がっていた。

日常生活等では絶対にあり得ない現象である。

「うそ・・・。曲がるわけ・・・っ!」

腹部にも触れてみるが、当然刺さってなどいなかった。

死なせないようにする為なら何でもやるつもりなのだろうか。

末佳は思わず、その場に力尽きたように座り込んだ。

「気が済んだ?」

「・・・ええ・・・。もう十分よ・・・」

「予約が切れれば死ねるよ。『予約死亡』と同じで、死んだ事実は取り消されないから・・・」

リオのその言葉を、末佳は聞き流すように聞いていた。

体力を使い果たしたような錯覚にあっていた末佳にとって、今のリオの言葉は、正直な話どうでもいい。

ふっと末佳は、聞き流すようにして聞いていた『予約死亡』の単語

で、あることを思い出した。

そういえば一番気になっていたことを、未佳はまだ聞いていない。

「・・・ねえ？ 『予約死亡』の期限が切れるのは何時なの？ 『6ヶ月後』っていうのは把握してるけど・・・。細かな数字は聞いてないわよ」

「『6ヶ月』は単純に、1ヶ月30日が6個つてことだよ」

「・・・つまり、死ぬまであと180日・・・。今日が2月の25日だから・・・8月の・・・23日!? 10周年記念日の3日後じゃない！」

未佳の脳裏に『ライブ』という言葉が瞬時に浮かぶ。

なんだかキリが悪い。

悪すぎる。

「もういいわ……。6ヶ月間、生きてればいいんでしょう・・・」

ようやく諦めが付いた未佳の横で、テーブルの上に乗っていた目覚まし時計の針が『カチャリ』と、12時を差した。

予約死亡期限切れまで あと 179日

5・新しい明日

翌朝、未佳は壁側に寄るような形で、ベッドに寝ていた。

いつも寝相などによって位置が変わっていたのだが、今日は昨日と丸つきり同じままだ。

ふつと辺りに目を凝らす前に、カーテンの隙間から朝日が差し込んでいるのに気が付いた。

どうやら今日は晴れているらしい。

（昨日は曇ってたのに・・・）

そう思いながら起き上つてみると、リオが一人で何かをやっている。よく見てみれば、昨日の麻縄を交互にねじり、太い縄を作っていた。だがそうしたところで、所詮首を吊るための長さは足りないし、逆に太すぎて使えない。

縄だつて余計に短くなっている。

未佳がそんなリオを見つめていると、リオはいつから気が付いていたのか、未佳の方を一切見ずに口を開いた。

「起きてたんだ・・・」

「開口一番にそれ？」

「他にないし・・・。今の未佳さんに『おはよう』って言っても、全然嬉しくないでしょ？」

「よく分かつてるじゃない」

『朝からこんな会話でいいものか』と思いつつ、未佳はテーブルの上にあったバナナを取り、適当に皮を剥いて口に頬張る。

朝はそんなに食べられないので、これで十分だ。

「それで？ 個性的な死神さんは、今何をやってるわけ？」

「………死神？」

「私からしてみたら、かなり珍しい死神よ。魂をすぐに持っていないで、私を生かしておくんだから……」

「……僕が死神に見えるの？」

「見方によっては……。それで？ 何やってるの？」

「……遊び」

それを聞いた末佳は、コップで飲んでいたお茶を思わず吹き出しそうになった。

どうにか吹き出しはしなかったものの、それと引き換えにあらぬところにお茶が入ってしまったまい、荒々しく咳き込む。

ヴォーカルとして一番大事な喉が、まさかお茶によってこんな危機に遭おうとは……。

しかしそれも、3、4回ほど咳込んだところでどうにか治まり、末佳は気管に入ったお茶が全て胃の方に流れたのを確認すると、再びリオの方に視線を向けた。

「あつ……。『遊び』って、それが！？」

「悪い？」

「………随分変わった遊びね……」

「……これしかやったことがないんだよ……」

「『やった』の『や』の字にもならないと思うけど……」

だが考えてみれば、この家には子供が遊んで楽しめそうなものがない。

元々末佳自身が『遊ぶ』よりも『見る』方が好きなものもあるが、そ

れにしたって遊び道具になりそうなものが無さ過ぎる。
唯一あるので、ピアノやオルガンくらいだろうか。

ふつと軽めの朝食を食べ終え、歯を磨き終わった末佳は、キッチンの奥にあるスペースに置かれたビニール袋を見て、大きく溜息を吐いた。

袋の中には、昨日粉々になってしまったカッターナイフと、あらぬ形に折れ曲がってしまった包丁が入っている。

カッターナイフはともかく、包丁はこれからの生活上、なくてはならないものだ。

何せ末佳の家には今、あれよりもかなり小さい包丁と、パン用の包丁、そして手打ち麺などを切る時などに使う、刃がかなり大きい包丁しかない。

これではかなり不便だ。

「・・・余計な出費ね・・・。腹になんか刺すんじゃないか・・・。」

「きつと一生言えない台詞だね。それ・・・。」
「そうかもね・・・。」

どうやら今日は仕事がない代わりに、昨日でお払い箱になってしまった包丁の代わりを買わなければならないようだ。

今の時刻は、午前9時53分。

どんなに遅い開店の店でも、10時になれば開くはずだ。

末佳は部屋に戻ると服を着替え、出掛ける準備を整える。

今日は昨日のような全身真っ黒の服装などではなく、袖が焦げ茶色で、上の部分に花柄が入っているマキシマムワンピを着込んだ。

個人的に気に入っているものである。

ただし、この服は半袖。

今はまだ2月の下旬。

まだまだ寒い日が続く時期だ。

現に今日だって、外は晴れているが、気温自体は低い。

そこで未佳は、ワンピースの下にオレンジ色の長袖を一枚着込み、さらにワンピースの上からも、赤茶色のベストを羽織った。これで準備はOKだ。

「ちょっと出掛けてくる・・・」

「基本的に付いていくよ？」

「・・・あつ、そ・・・」

何となくそんな気はしていたので、特にそれ以上は何も言わぬまま、玄関の扉を開ける。

家から一歩外に出てみると、外は晴れているがやはり寒い。

これが暑くなるのには、まだ当分掛かりそうだ。

鍵を閉め、エレベーターで1階へ。

エレベーターの中は、相変わらず無言のままだった。

未佳はドア付近のボタンがある位置に。

リオはその後ろに立っている。

なのにお互い、やはり口は利かない。

だがよくよく見てみれば、リオの目線はあらぬ方向を見つめていた。どうもエレベーターの上の方らしい。

未佳もそれに釣られて上を見上げ、そして『あつ・・・』と呟いた。

そこにあつたのは、1台の防犯カメラ。

もしもの時の為に取り付けられているものである。

リオはこれを気にして話さなかったのだ。

防犯カメラには、リオは決して写らない。

昨日の車の影だって、実際には未佳にしか見えなかったものだ。

もしここでリオが未佳に話し掛け、未佳が返事を返してしまったら、防犯カメラには妙な独り言を呟いている未佳が写るだろう。

リオはそう言ったカメラなどに見える未佳のことを氣遣って、話し掛けないようにしていたのだ。

だがあのカメラ、よくよく思い出してみれば、盗聴機能等は付いていない。

高い金額を出して取り付けたわりには、映像しか撮れないポンコツ品なのである。

つまり未佳がカメラに背を向けてしまえば、リオと話すことは可能だ。

未佳は視線をドア付近のボタンの方に戻し、顔をやや下の方に向けながら、ボソツと口を開いた。

「話し掛けてもいいわよ」

「!・・・」

「あのカメラ、音録れないから・・・。私がカメラに口元を撮られないようにすれば、別に怪しまれないわよ。私普段、この場所のこの位置ににいるから・・・。今更怪しまれないだろうし・・・。」

「こんなに広いエレベーターなのに、立ち位置はそこなの？」

「不審者から逃げやすいし、ブザーのボタンも押しやすいから・・・。監視してる人にも、そんなに自分の姿、見られたくないし・・・。」

率直な感想だった。

未佳はライブやイベントなどで見られるのは大好きだ。
昨日はあんなにライブに対して色々と言っではいたが、実際のところ、ライブは好きなのである。
単に練習期間が苦手なだけなのだ。

だがこういうものは、どうにも好きになれない。
その前に好きな人の方が少ないだろうか。
とにかく嫌いなのだ。

この時の人々の目は、ライブの時とは違う。
どこか怪しいところはないか、おかしいところはないか、そう言った感情のみで人を監視^{見る}する。
嬉しさや感動、期待などとは真逆。
似ても似つかない感情だ。

そんなもので見られるのなんて、正直言って不愉快だ。
寒気がする。

だが家の段数を考えると、階段はまるで上り下りのエスカレーターを、その流れに逆らって歩いているに等しく、ある意味エレベーターはやむおえずなのだ。

未佳は1階へ下りると、昨日栗野の車が通ってきた通りとは逆方向の通りの道へと歩き出した。

「栗野さんは？」

「一々買物なんかで呼ばないわよ。家から近いんだし……。毎日こんなんじゃない」

「危険じゃないの？」

「この辺の人はみんな、私のことを知ってるから……。そんなに
見ても騒がれないのよ。おまけに通りに交番があるから、あんまり
悪さをしようとも思わないしね」

「ふん……」

それを聞いて頷きながら、リオは未佳の後ろをついていく。

右へ左へと何度も曲がり、時々車の出入りを確認しては、また歩き
進む。

そして交番の真隣りの通りへ出てみると、幾分かひらけた場所へと
辿り着いた。

周りにいろいろな店屋が並んでいるところを見ると、どうやら商店
街らしい。

そしてその商店街の一本道を進んでいくと、少し先の方にスーパー
の看板が見えてきた。

どうやら、未佳が向かっていたのはここらしく、未佳は道を曲がつ
て店内へと入る。

まだこんな時間だというのに、今日は土曜日のせいなのか、駐輪場
は満杯状態になっていた。

「すごい数の自転車だね」

「よくお年寄りが買いに来るから……。おまけに今日、第4土曜
日でしょ？　考えてみたらセールの日だったわ……」

確かに未佳の言った通り、入り口には『セール』の文字。

そして店内は、何やらセール品をせしめる気満々のおばちゃん達が、
あちらこちらに目を光らせながら歩いている。

未佳はそんな人達を横目で見つっ、エスカレーターで最上階へと向かう。

包丁が売られているのは、4階の生活雑貨売り場だ。

向かってみれば、やはりセール品を狙ったおばちゃん達が目につく。とはいえ、彼女達の狙いは洗剤や入浴剤であって、刃物類ではない。

（普通、包丁とかをセールにすることはないわよね・・・）

『なつてればいいのに』という呟きはさておき、未佳はそそくさと刃物売り場へと向かう。

売り場を見てみれば、鍵付きのガラスケースに入れられた包丁がズラリ。

それもありいいお値段だ。

（安くて4000円代・・・。残り半年の命なんだから、もう少し手頃なのが欲しいのに・・・）

しかし、世の中はそう甘くはない。

そもそも余命などの事情を知っていて、安く売り出す商品などあるはずがない。

未佳は無理を言っていると思いながら、近くを歩いていた女性店員を引っ張る。

「あの・・・、すみません」

「はい」

「あそこにある、上から2番目のあの包丁を頂きたいんですが・・・」

「上の棚の・・・、右側ですか？ それともひだ」

「右側の方です」

「かしこまりました。鍵を借りてきますので、少々お待ちください」
店員はそう言うと、半分小走りでレジへと向かい、レジの引き出しから鍵を取り出す。
『ガチャリ』と素早くケースを開け、未佳が言っていた包丁を手にとった。

「お買い物は・・・」
「えっ？ え、えっ」と・・・

まだ買い物続けるかどうかを尋ねられ、未佳は少し考える。
一応今日はセール日。
少しぶらぶらしていてもいいかと考えた。

「まだ、ちょっと」
「かしこまりました。カゴはどうされますか？」
「あ、じゃあ・・・、お願いします」
「はい。ごゆっくりどうぞ」

買い物カゴと包丁を店員から受け取った未佳は、ふっと洗剤売り場に目を向けた。

前に何かの本で読んだことがある。
塩素系の洗剤と酸素系の洗剤を混ぜると、かなり強力な塩素ガスが発生し、それを密室環境で吸い込み続ければ、人間はすぐに死亡すると・・・。

最初の階段で没にした毒ガスだが、考えてみれば、あれなら誰にでもできる。
ただ単に、その二つを混ぜ合わせればいいのだ。

未佳は洗剤売り場へと向かい、塩素系と酸性系の洗剤を探す。
ところが、塩素系のものは思いの他いくつも見つかったが、もう片
方の酸性系が中々見つからない。

何となく記憶にあったもので『キラリ』という洗濯用洗剤があった
はずだが、それがいつもあるはずの棚のところにないのだ。

いつもここには売られていたものだったので、未佳は『あれ?』と
首を傾げた。

その時。

「未佳ちゃん? 何探してるん?」
「えっ?」

ふつと後ろから聞こえてきた声に驚き、後ろを振り返ってみれば、
そこには一人の老婆が立ち尽くしていた。

彼女の名前は、西本カナエ。

未佳の家の隣りに住む住人で、時々家の前の通路などで会っては、
よく世間話などをしていた人である。

いつも未佳のことを孫のように接してくれていたのだが、つい最近
自宅で倒れ、ここしばらく病院で入院していたのだ。
だが退院したとは聞いていない。

いつの間に戻ってきていたのだろう。
あまりにも唐突かつ久しぶりだったが為に、未佳は驚いたまま声を
掛けた。

「か、カナエおばあちゃん・・・!」
「久しぶり。元気にしとったか?」

「え？・・・ええ・・・。それよりカナエおばあちゃん、もう大丈夫なんですか！？家で倒れたって・・・」

「アッハッハッハッ！そない簡単に死んだりせえへんわ。4日くらい前に、家あそこに戻ってきたんや」

「そうだったの・・・。私、中々戻ってこなくて心配してたから・・・」

「ハハ。ところで、何か探しとったんか？洗剤売り場ウロウロしよって・・・」

そう問い掛けられ、未佳は西本に探している洗剤名を言った。

カナエも時々あの洗剤を使っていたので、商品名だけでもモノは分かるはず。

尋ねてみると、何とも意外な返事が返ってきた。

「回収中やで？」

「かつ・・・、回収！？」

「んだ。なんでも、なんかイケンもんが入とったとかで・・・。その会社で作った洗剤、全部そうやと」

「そ、そうなの？！」

「ニユース、見てないんか？」

「・・・・・・」

これが自分絡みで起こっていることなのかどうかは分からないが、未佳からしてみればタイミングが悪い。

とにかく、しばらくは死のうとしてもこうなのだろう。

流石に諦めて踏ん切りを付けるべきか。

（・・・分かったわよ・・・。あと179日、生きてればいいんでしょ・・・）

「ん？ どないした？」

「えっ？ ううん・・・、なんでもない。そうなんだ・・・。ありがとう！ じゃあカナエおばあちゃん。また今度ね」

「ん。んじゃな」

西本と分かれた未佳は、結局包丁しか買わず、レジへと並ぶ。

すると何故か、店員はわずかな時間の間に何度も、未佳の左腕をチラチラと見つめているのだ。

気になった未佳がそちらに目を向けてみれば、そこには昨日リストカットに失敗し、内出血が起こっていた左手首が、きれいに袖口から露わになっていた。

どうやらレジ係りの店員は、未佳がリストカットを行ったことがあるのだと気がついたらしい。

しかも、そんな女性が買いにきた品が包丁というのは・・・。

「これ！・・・ファイルで切っただけですから・・・」

咄嗟に嘘を吐くと、店員はそれを信じたのか、はたまたその傷を見続けていたことに気が付いたのか、慌てて包丁を袋に入れ、レジトと一緒に手渡す。

それを受け取った未佳も、そそくさとその階を後にした。

恥ずかしくて居てもいられない。

その後は不自然ながらも、問題の傷のところを押さえながら、階段を駆け下りていった。

6・それぞれの嬉しさ

スーパ―を後にした未佳は、またいつの間にか後ろに立っているリオに視線を向けた。

リオはただ未佳を見つめているだけだったが、その顔は少し怒っているように見える。

何となくムツとしているのだ。

「・・・何？ その顔」

「置いていかないでよ」

「あなた付いて来られるんでしょ？ 『何処にいても分かる』って、自分で言ってたじゃない」

「ある程度ならの話だよ。本当は無駄な能力なんて使いたくないから、いつも未佳さんの後ろを付いてきてるんだ。だからいきなりいなくなると困るんだよ」

「何？ その『無駄な能力』って・・・。身体を透けさせたり、人に見えないようにすること以外に・・・、まだ何か持ってるの？」

「・・・」

その問い掛けに、リオは一切答えなかった。

どうやら未佳には教えられないことらしく、リオは口を固く閉じている。

「まあ、いいわ・・・。ところで・・・。あなた何処に行ってたの？ 私が包丁を見てる間・・・」

「・・・ビーズ売り場」

この問い掛けにはあっさりと答えたりオのことよりも、未佳はその問いの答えに笑った。

ビーズ売り場なんて、むしろ未佳の方がいる場所である。
ひよっとするとリオは、装飾品や裁縫、工作みたいなものが好きな
のだろうか。

随分死神にしては変わっていると思いつつ、未佳は差ほど離れては
いない自宅へと帰宅する。

自宅に帰ってみると、親機の方に誰かからの留守電が入っていた。

表示を見てみると、電話は1件のみ。

時間は午前10時23分。

丁度、未佳がスーパで表徴を見ていた頃の時間帯だ。

『もしや』と思い、未佳は出掛ける時に持って行かなかった職場用
の鞆の中から、半分入れっ放しになっていた携帯電話を取り出す。
案の定、携帯の方にも『着信アリ』という表示が映し出されていた。

（あっちゃ……でも誰から？）

そう思い携帯の着信を調べようとしたが、その前にタイミングよく、
自宅の親機が激しく鳴った。

未佳は親機の前に立っていたこともあり、素早く電話に出る。

「はい！ もしもし？」

『もしもし？ 未佳さん？』

電話の相手は、やはりマネージャーの栗野だった。

奥の方から聞こえてくるキーボードの音からすると、近くに手神が
いるらしい。

何の曲のアレンジを行っているのかは流石に分からないが、間違い
なくあの弾き方は手神だ。

『出掛けられてたんですか？ 1回電話を入れたんですけど、自宅も携帯も繋がらなくて・・・』

「あ、ええ……。ちよつと近くのスーパーに……。携帯を置いたまま・・・」

『置いたまま！？ 未佳さん！ 毎回言ってるじゃないですか！

「本の少しの外出でも、携帯は持ち歩くように」って！』

「す、すみません・・・」

またしても栗野に叱られ、未佳はまるで小さく縮こまるかのように謝った。

確かに『携帯を持ち歩くように』とは毎回言われていたので、今回の栗野の発言に反論する気はない。

そもそも持つて行かなかったのは、ただ単に1日置きで仕事が入ってくると思わなかったから。
少々甘く見過ぎていた。

『まあ、それは一先ず置いて……。実は明日なんですけど』
「明日？」

栗野からの電話は、大概が仕事関係。
現に今回もそうだった。

『はい。明日、手神さんが「厘さんが書き終わった曲をやるう」と言ってまして……。未佳さん、よろしいですか？』

「・・・『よろしいですか？』って……。仕事なんだから、断れないわよ。でも詞を書き終わってる曲なんて・・・」

未佳はあまり心当たりがない。

そもそも製作してから時間が経ってしまったものは、未佳は基本的にほとんど覚えていない。

いつも厘が書いてきた詞と、その詞を載せるメロディーを聴いて、そこでようやく思い出すのだ。

忘れてしまう理由は、作曲の作業を行う際に違う曲のメロディーが頭に残っていると、作り出す曲もそれとやや似通い、全く味のないコピー曲が出来てしまうからである。

しばらく考えてみた結果、まだ詞が出来たという報告を聞いていない曲が1曲、厘のところに残っているのを思い出した。しかもその曲を渡したのは、記憶が正しければ去年の12月上旬頃。忘れてしまつて当然だ。

「えっ、それって……。12月に渡したアレ?!」

『あ、はい。さっき厘さんの詞を拝見させて頂いたんですけど、なんか……。かなり「こわい」ですよ』

「『こわい』って、小歩路さんの詞に出てくる女性、みんなかなり強かで恐いじゃない」

『いえ、そっちの「恐い」じゃなくて、ホラー作品とかに出てくる方の「怖い」です』

「……。はい?」

確かに曲的には暗い曲を作ったかもしれないが、それをホラー的な歌詞にしたとは、一体どういうことだろう。

とりあえず電話の内容だけでは分からない。

未佳は明日、レコーディングとついでに確認することにした。

「はい。明日・・・10時20分ですね？　はい、分かりました。では」

事務所にやってくる時間は、今までと全く同じだったが、忘れると
なんなので、未佳はカレンダーに明日の予定を書き込んだ。

そういえば、一昨日消してしまったサンプル曲を、未佳はまだテープに取り直していない。

厘の要望のこともあるし、そろそろ入れておかねければならないだろう。

それに、明日それを渡してしまえば、わざわざ厘の家まで行って渡してくる必要もなくなる。
好都合だ。

未佳は電話を切ると、そのまま後ろにある電子ピアノの前に座り、ピアノを弾き始めた。

何度もピアノを弾いては音を確認め、サンプル用として入っていたものと全く同じメロディーを書き取る。

あの日消してしまった曲は、全部で4曲。

曲調は、暗いものから明るいものまで実に様々。

それらをまた一から入れ直すことになるうとは・・・。

（キーが頭の中にあるとはいえ、消さなきゃよかった・・・）

それにもし未佳が死んだとしても、誰かがこのサンプルテープを発見すれば、事務所の人間は『SAND』の後輩アーティスト達に詞を書かせるだろう。

再利用なんてよくやることだ。

ここだけに限った話ではない。

『悲しい』というよりかは、かなり『無情』な現実だが、アーティストというのはこう言った世界が付き物なのである。

未佳がピアノを弾いている間、リオは再びあのロープをねじり絡ませるようにして、一人遊んでいた。

未佳が時々視線を向けてみても、リオは未佳に見られていることに気付かない。

しかも遊び方もこれ一つしかない。

飽きないのだろうか。

「つまんなくないの？」

「別に・・・」

「そ・・・」

未佳の作曲はその後何時間も続き、全てを録音し終わった時には、午後7時を回っていた。

4曲を連続で弾き続けていたので、もう手はガチガチである。

明日は弾くかどうかは分からないが、基本的に歌うだけだろう。

ようやく一息吐いた未佳は、ふつと後ろの方に目を向ける。

リオはいつの間にかいなくなっていた。

と言っても、ここから出て行ったわけではない。

ただ単にこの場からいなくなったただけだ。

何故ならつい先ほど、未佳の後ろを誰かが横切る気配があったからである。

言うまでもなくリオの気配だ。

向かって行った場所からすると、未佳の部屋だろうか。

一応リオも男の子なのだから、女性の部屋へ入るのは少し遠慮してほしいものだ。

そんなことを思いながら、未佳が様子を見ようと、自分の部屋のドアをそつと開ける。

そこで未佳が見たものは、未佳のベッドの上で横になる、リオの姿初めて見るリオの眠っている姿に、未佳はその場で固まった。

元々リオが寝るだなんて知らなかったし、死神もとい神が睡眠や仮眠を取るだなんて、どんな調書を漁っても載っていないだろう。

本当に一生経つても見れないようなものを、未佳は目の前で見るような気分だった。

(うそ……。本当に寝てるの……?)

『まさか』と思いゆっくり近付いてみたが、リオは一向に起きる気配を見せない。

かなり爆睡しているのか、その横になっている体勢と言い、格好と言い、かなり無防備だ。

(……。触れられるかなあ……)

リオに触れようとした時はいつもすり抜けてしまっていたが、寝ている時は無防備なはず。

現にこの体勢が無防備なのだから、もしかしたら触れられるかもしれない。

未佳はゆっくりと慎重に、リオの肩の方に手を伸ばした。

リオはまだ起きない。

未佳は思い切って、指先でリオの肩に触れる。

(あつ・・・！ 触れる・・・)

未佳はリオの身体に触れた右手を胸元に引き寄せ、両手で摩る。確かに触れられた。

リオの身体に・・・。

リオの感触は、人間の子供を触っているのとなんら変わりなかった。肉の硬さも感じられたし、人間と同じように呼吸しているのも分かる。

そして何気に驚いたのは、リオのその体温。

感覚的に、人間とほぼ同じくらいの体温だったのだ。

未佳の予想では、リオの体温は人間より低いか、または体温自体がないのかと思っていたが、どうやらそういうわけではなかったらしい。

もう一度確かめようと、今度はリオの顔の方に手を伸ばした。その時。

「そんなに触れられたのが嬉しい？」

「ひゃッ！・・・ヤダ・・・、起きてたの・・・？」

「眠れるわけじゃないじゃん。触ってくるし、ジロジロ見られるんだから・・・」

「じゃあ・・・、さっきは寝てたの？」

「うん。未佳さんがピアノを弾いてる間はね」

それを聞いた未佳は、内心『私の曲は子守唄なの！？』と少々ムツとしたが、一旦そのことは置いておき、未佳はもう一度リオに手を伸ばす。

が、今度はあっさりと消えてしまった。

「また触らせてよ」

「もう充分でしょ？」

「ケチ！」

「何度でも言えば？」

「可愛くないわねえ……。リオはもう少し子供っぽくなりなさいよ。子供の死神なんだから」

そんなことを去り際に呟きながら、未佳は部屋を後にしようとドアノブに手を掛けた。
その時だ。

「……。初めて呼んだね」

「えっ……。？」

一体何のことだろうと視線を後ろに戻してみれば、そこには目をパツチリと開け、ベッドから起き上がったリオがいた。

リオは未佳の方に視線を向けながら、まるで驚いたかのような表情を浮かべ、再び口を開く。

「『リオ』って……。未佳さん、初めて呼んだ」

「あれ……。？　今まで呼んでなかったっけ？」

未佳がそう聞き返してみれば、リオはコクコクと2回ほどハッキリと頷く。

その返事を聞いてよくよく思い返してみれば、リオのことを『リオ』と呼んだのは、初めてリオの名前を聞いた時だけだった。

しかも、その時ののはかなり復唱に等しいもので、正確には一度も名前を呼んでいない。

「そつか・・・、私・・・。いつも・・・『あなた』とか言ってたもんね・・・。でも、そんなに驚くこと?」

未佳が半分笑みを含ませながら尋ねると、リオは何故か視線を下に向けてしまった。

でもその顔は、何処そとなく明るめに見える。

「もしかして・・・、嬉しいの?」

「! そ・・・、そんなワケないじゃん!! 勘違いしないでよ!」
「えっ・・・? えっ?」

未佳が驚く間もなく、リオはそのまま部屋から飛び出してしまった。一人室内に取り残された未佳は、ただただ今の出来事に驚くばかり。

(・・・あれ? 今、あの子・・・、もしかして照れてた?)

そう思い、ドアの僅かな隙間からリビングを確認してみると、そこには一人頂垂れるリオがいた。

やはり嬉しかったのは事実らしく、リオは顔を下に向けつつ笑っている。

そんなリオを見た未佳はふっと、リオは暗い性格なのだと思いますって聞いたことを知った。

いつも返事は素っ気ないし、言葉は容赦ない。

でも本当は、未佳の接し方によって暗く見られていただけなのだ。リオの素顔はきっと今の顔なのだと、未佳はそう確信した。

「よし!」

「えっ？」

「夕飯作るわよ。リオ、何か食べたいのある？　せつかく新しい包丁買ってきたんだから。どれくらい切れるのかちゃんと確認しないとね」

そう言つて冷蔵庫内を漁る未佳を見て、リオも自然に笑っていた。だが、リオは未佳の今の問い掛けには答えられない。

何故なら、リオは人間の食べ物なんて何一つ知らなかったからである。

「未佳さん。僕・・・、味覚はあるし、食べることもできるけど・・・。でも、人間の食べ物知らないんだ」

リオが舌つ足らずの口調でそう答えると、未佳は顎に手を当てて考え込んだ。

そしてしばらく考え込んだ後、未佳はポンツと手を叩く。

「じゃあ、鍋焼き！」

「・・・？」

「鍋焼きうどん！　私が唯一完璧に出来る料理。今日も寒いし、うどんが2パックもあるから、丁度いいわよ」

未佳はそう言いながら、片手に持っていた人参を水で洗い始めた。その様子を見て、リオは未佳の足元へと近付く。

「・・・手伝つてもいい？　何処まで出来るか分からないけど・・・」

「えっ？　あ、じゃあ・・・。あのお鍋に水、焦げ目が付いてるところまで入れてくれる？」

「うん」

早速未佳に言われた通り動くリオと、リオの為に夕食を作り始める未佳。

そんな対峙ばかりしていた二人の距離は、予約死亡期間2日目にして、いつの間にか縮まっていた。

着々と進む、予約死亡切れのカウントダウンと共に・・・。

予約死亡期限切れまで あと 178日

7・傷隠し

翌朝。

昨日約束していた10時よりも40分早めに、未佳は1階の入り口付近に下りていた。

今日はPV撮影やジャケット撮影の予定はないが、一応イメージ作りのため、未佳はポニーテールとシュシュでつくるお決まりの髪型で、静かに栗野の車を待つ。

未佳のポニーテールは、耳元以外の髪を後頭部のやや上の方で止め、そこにシュシュを付ける、というもの。

耳元にだけ伸びている髪がカワイイと、ファンからの評価も高い髪型だ。

しかしながら、そのコメントのほとんどは関東のファン達からくるもので、関西の方ではかなりメジャーな髪型だ。

辺りを見渡せば、女性人のほとんどがそうである。

ちなみにあの未佳がこの髪型にしているのは、ただ単に輪郭を誤魔化せるのと、髪の毛の量が多いため。

至って単純な理由である。

ふっと栗野を待っていた未佳は、昨日の電話のことを思い出した。

（それにしても、昨日の栗野さんからの電話……。なんか気になるなあ・・・）

今日の予定は、例の12月に渡した曲のアレンジとレコーディング。

昨日の栗野からの電話によれば、今回の曲はCARNELIAN
Eyes初のホラーソングだとのこと。
考えてみれば、今までになかったタイプの曲ということになる。

未佳がどんな曲に仕上がったのだろうかと考えていると、目の前に
白い乗用車が見えてきた。
栗野の車だ。

（きた・・・！）

「未佳さん、お待たせしました！ どうぞ」

「あつ、はい」

未佳はいつもの指定席に座り、シートベルトを締めた。

と同時に、車がやや早めに発進する。

少し時間が遅れ掛かっているのかもしれないが、未佳的には『そこ
まで急がなくても』と言いたい感じた。

こんなに急いで事故でも起こったら、と思う。

「道が渋滞して遅れたので、ちょっと急ぎますよ？」

「は、はあ・・・」

それを聞いて苦笑しながら、未佳はふつと耳元の髪の毛を耳の後ろ
の方に掛けた。

「アアアッ！！ ちょ・・・、ちょっと未佳さん！」

「えっ？ 何？」

「何って・・・、その手首！」

「えっ・・・あ、っ！ー！」

栗野のその言葉を聞いてハツとした未佳は、左手首の傷を見て『しまった!』と顔を顰めて溜息を吐く。

昨日の出来事もあり、今日は包帯を巻くなりして隠すつもりだったのだが、出掛ける直前になってすっかり忘れてしまっていた。初めてこの傷を見た栗野は大騒ぎだ。

「ど．．．！ どうしたんですか!？ その傷!」

「ちよつ、ちよつとクリアファイルの縁で『シュツ!』っと．．．」

昨日の嘘をさらに詳しくしたもので誤魔化そうとしたが、栗野には全く効果がなかった。

「何やってるんですか!！ 未佳さんは! いいですか!？ 未佳さんはバンドのヴォーカルですよ!？ しかもそんな目に付きそうな場所に．．．」

「すみません．．．」

「撮影がなかったからよかったですけど．．．。あつたらどうする気ですか!？」

「見られないように．．．、します．．．」

「もーう! そもそもなんでそんなもので．．．!」

「みんなが知りたいことだね」

（うるさい!）

その後もしばらく栗野の説教は続き、ようやくそれが収まったのは、車が自宅と事務所の丁度中間地点を走っているところだった。

「未佳さん。しばらくこれで隠してください!」

そう言って栗野が手渡してきたのは、黄色と白の柄が入ったスカーフ。

奇遇なことに、今日の未佳の格好に合った柄だった。

未佳の今日の服装も、黄色と白の柄が入ったものだったのである。

「『結べ』ってことですか？」

「他に隠せるならいいですけど、大胆に包帯とかは止めてくださいよ！ 目立ちますから！」

「あっ……、はい」

とりあえず言われた通り、未佳は渡されたスカーフを左手首に結ぶ。なんだか早い春を思わせるかのようなアクセントにはなったが、この下に傷があるなどとは口が裂けても言えない。

「ところでその傷……。カサブタになってるんですか？」

「あ、いや……。その……。見た感じ、まだ血が固まってないじゃ……。あの、内出血なんです」

「内出血？ っということは……。未佳さんの腕の体温で固まってないじゃ……。」

「あっ……。そうなのかも……」

『言われてみれば』と思った。

この血は内出血ではあるものの、所詮は未佳の腕の中に入っている。つまり体温的には体内にあるのと全く同じなので、出血した血は固まらないというワケだ。

（少し穴が開いたら、血は出るんだろうけど……）

「未佳さん。レコーディング終わったら、病院に行きますよ？」

「えっ！？」

「痕が残ったら大変ですから！ いつもの病院で血を抜きますよ？ いいですね？！」

「は、はい……」

もはや『嫌だ』とも言えないので、未佳はそのまま素直に頷いた。車が事務所に着くと、未佳は栗野が車を駐車場に停めている間に、受け付けを済ませる。

その際中に入っていった人の名簿を覗いてみれば、厘と長谷川の名前が書かれていない。まだやって来ていないのだ。

（まあ・・・、いつものことね・・・）

基本的に長谷川は時間きつかりに。

厘は2〜3分ほど遅れてやって来る。

現在の時刻は午前10時06分で、レコーディングまでは14分もある。

あの二人がまだやって来ていないのは、正直いつものことだった。

「じゃあ、未佳さん。傷が見えないようにお願いしますよ？」

「あつ、はい・・・」

流石にそれはもういいだろうと思いつつ、未佳は4階のレコーディング室へと向かう。

仕事前、一番メンバーがよくいる場所だ。

おそらく今は、リーダーの手神だけがこの部屋にいるはず。

そう思いながら扉を開けてみると、案の定、キーボードをいじくり回している手神を発見した。

「ああ、坂井さん。おはようございます」

「おはようございます。やっぱり二人は遅刻？」

「あ、いや。まだ時間はあるし、長谷川君はもうじき来るんじゃない」

・
」

「どーも！」

「うぁっ！！」

手神がそんなことを言っていると、突然『バンッ！』という扉を開ける音と一緒に、ギターを背負った長谷川がレコーディング室へと入ってきた。

『噂をすれば』とはまさにこのことである。

「ビックリした〜……。脅かさないでよ！」

「あ、す……、すみません……！」

「全くもう……」

そう言いながら、軽く後ろ髪を掻き耑る未佳。

実は先程の栗野の説教で、未佳は少タイライラしていたのである。

勿論、朝からご機嫌だった長谷川に『それを察しろ』というのは無理な話だ。

だがどうやら長谷川は、今ので未佳の機嫌を損ねさせてしまったと悟ったらしく、未佳に対してすまなそうに頭を下げた。

一応会話が終わったのを見計らって、手神が長谷川に声を掛ける。

「長谷川君、おはよう」

「おはようございます。で……、あれ？ 小歩路さんは？」

「まだ」

「いつもみたいに2〜3分遅れじゃない？ あの人、自由人だから」

そう言ってみれば、長谷川は『ああ……』と頷く。

ふっと辺りを見渡した長谷川は、未佳の腕のスカーフを見て、小首

を傾げた。

「坂井さん。なんですか？ そのスカーフ・・・」

「えっ？ ああ・・・、これ？ ちょっとね」

「でもそれ、栗野マネージャーのですね？ いつも鞆の中に入ってる・・・」

「何でそんなに詳しく知ってるのよ」

「あ、いや・・・。よく鞆開けた時に『チラッ』と見えてたんで・・・」

実はいつも、栗野は鞆をギターの近くに置いていた。

そこに置く理由、未佳のやや左後ろで待機している際、置いてしまっても邪魔にならず、尚且つ手を伸ばせば、鞆の中から物を取り出せる位置だから。

基本的にメンバーの立ち位置は、手神・厘・長谷川が三角形の位置で固まり、その真ん中で未佳が歌う。

そして、未佳のやや左背中位置に居るのは、いつも長谷川。

つまり、栗野が待機している場所自体が、長谷川の立ち位置の真後ろなのである。

その為毎回栗野が長谷川の後ろで鞆を開ける度に、中からこのスカーフが見えてしまうというわけだ。

「でもそれいいね。『春』って感じで・・・」

「そ、そう？」

手神にそう言われ、未佳がやや満更でもない表情を浮かべていると、またしても長谷川からこんな声が飛んできた。

「でもこれ・・・、付け方違いますよ？」

「「えっ？」」

「だって普通それって、利き手の方に結びません？ 女子って・・・

」

「そっ・・・、そんなことないわよ！」

「それと結び目って・・・。ふつう外側に向けるでしょ？ なんで真上にしてるんですか？」

妙なところで妙な洞察力が働く長谷川に、未佳は『よく見てるなあ』と思うよりも先に、イライラが爆発した。

「別にいいでしょ！ 人のアクセントくらい！！ 女の子じゃないんだから、容赦なくズバズバ言わないでよ！！」

「すっ、すみません・・・！！」

慌てて長谷川は謝ったが、時既に遅し。

未佳はプイツとそっぽを向き、そのまま長谷川から離れた位置まで歩き去ってしまった。

そんな未佳の後ろの方からは、半分呆れたかのような言葉を口にする手神と、その発言にしどろもどろのような返事を返す長谷川の声が聞こえてくる。

内心のことを言ってしまうば、未佳だって本当はそういう風にした
い。

これが不自然なやり方だというのは分かり切っている。

利き手の方には結べなくとも、せめて結び目は真上ではなく、外側の方に向きたいのは山々だ。

（でもそうしちゃうと・・・）

だが試しに結び目を外側の方に回してみれば、やはり結び目近くの細くなっている箇所から、少しだけ赤い線が出てきてしまう。傷が見えてしまつては、スカーフを巻いて隠している意味がない。

（やつぱり出来ないのよね・・・）

この悲しすぎる結果に、未佳は思わず溜息を吐いた。

と同時に、再び出入り口の扉が『バタンツ』と大きく開く。

誰かと思ひ視線を向けてみれば、そこには黒の長袖Ｔシャツを着込み、濃い色のブルージーンズを履いたあの厘が、車を仕舞い終えた栗野と共に立っていた。

「お待たせ」

「小歩路さん！」

「小歩路さん、遅い！ 一体いつまで……。あれ？ 今日はずっと来たの？」

ふつと壁に掛けられている時計を見ながら、未佳は厘に問い掛けた。

というのも、まだ時計の針は１０時２０分を差していない。いつも遅刻しがちの厘にしては、かなり珍しいことだ。

「実は……。渋滞で車が引つ掛かって、途中で捨ててきたんよ」「すつ……。捨てた！？」

「あ、いや……。近くの駐車場に止めてきたんやけど……。そこから歩いてきて」

「何時に家出たの？」

「出たのは９時半ちよつと過ぎたくらい……」

確か厘の家は、この事務所から車で20分くらい走ったところにある。

そこを徒歩で計算すると、色々と面倒な道もあるので、約50分。そして今ここに着いた時刻が、午前10時16分。

ということは、厘は車で自宅から半年も走っていない計算になる。

「かなり歩いたんじゃない？」

「うん。途中お気に入りのお茶屋さんとかにも寄ったけど」

「寄ったんですか？！」

「寄ったら悪い？」

説教をしたつもりが、逆に厘に睨まれ、長谷川は少々小さく縮こまりながら『いいえ』と返した。

毎度のことなのだが、長谷川はいつも女子軍に怒られてばかりだ。

（もう少し威張るようになりなさいよ・・・）

「もしかして厘さん・・・、素顔出したままこちらに！？」

「あつ、でも誰にも声掛けられへんかったし・・・」

「そういう問題じゃないでしょ！ 厘さん！！」

「そうよ！ 小歩路さん、私よりもファンの人多いんだから・・・。もう少し変装して、顔を隠すとかしないと・・・」

そう言ってみても、厘は軽く頷く程度。

しかもその表情は、かなり面倒臭そうと言いた気な表情だ。

確かに考えてみれば、普段『自由人』や『猫』というあだ名が付いている女性からしてみれば『変装』というものはありのままを拘束されているのと同じことなのかもしれない。

ふっとそんなことが、未佳の脳裏に浮かんだ。

「じゃ、じゃあ厘さん。今日これが終わったら、車のところまで送っていきますよ」

「えっ？」

そう言い出したのは、厘の後ろに立っていた栗野。

その栗野の発言に、厘は思わず聞き返したが、栗野は笑顔で言葉を続けた。

「私は末佳さんの専属マネージャーであるのと同時に、皆さんのマネージャーでもありますから……。それに、この間は車がパンクした時に送ってくれましたし……」

「えっ？ ええの？ やった！すごい助かる！」

（あれ？ でも……）

ふつとここで、末佳の脳裏にある疑問が浮かぶ。

確か今日の仕事が終わった後、栗野は末佳を病院へ連れていく予定だったはず。

厘の家は、普段末佳が行っている専門の病院とは逆方向だ。どう考えても、厘を乗せてしまつては、病院へは行けない。

二人の会話が終わったのを見計らい、末佳は栗野に尋ねた。

「栗野さん。でも今日……私病院じゃ……」

「厘さんを送ってから、車で向かいます。それにその方が、時間带的にも人が空いてますし」

「目敏い……」

「えっ？」

「いえ……、なんでもないです！」

雑談も程々に、メンバー達は新曲のレコーディングを始めた。

8・新曲製作

「後ろの人影は誰でしょー 似たけっはーい 感じてえ 名をな
ーのおーれー 当てずっぽうでも構わない・・・ 早く 言っ
てしまえ 鬼がー・・・こちらを見ぬうゝちにっ イヤッ!」

新曲の歌合せやアレンジを始めて、約1時間。

あらかた曲の歌詞や歌い方などは決まってきたものの、歌い手の未佳は、サビの部分で悪戦苦闘していた。

理由は肝心かつ、初歩的な部分の問題で・・・。

「これ・・・。自分で曲作って失敗ね。ブレスを何処で入れたらいいのか全然分らない・・・」

「やっぱり、息吸えへん？」

「吸えなくはないんだけど・・・。吸うと出だしの声が出ないのよ。かと言って、息継ぎせずにやっちゃうと、語尾は声が续かなくてボロボロになっちゃうし・・・」

歌う側としては必須でもあるブレス（息継ぎ）を行える個所を作らなかつた為に、未佳は一番の聴き場でもあるサビが歌えずにいたのである。

一応これまでの楽曲でも、今回と似たようなことはあった。だがここまでキツイのは初めてのこと。

これには作詞を行った厘も、作曲を行った未佳も困り果て、そしてハツと気が付けば、この部分だけで40分近くも使ってしまったのだ。

「サビ・・・、詞、書き直すよ」

「うっん。いくら書き直しても、どうせサビの部分は似通ったものになる……。ちよつとアレンジで曲を引き延ばして、プレスを入れる箇所を作ってみる。こんなんじゃ、ファンがカラオケで歌うこともできないし……」

「じゃあ、お二人さん。一先ず休憩します?」

「「さんせい」」

長谷川の発言により、メンバーはやや早めのお昼にすることにした。とは言つても、この建物内にはカフェやレストラン的なものは付いていないので、基本的にメンバー達は近場のコンビニやファミレスに寄るか、あるいは出前を頼んだりして、皆でランチを済ませている。

ちなみに今日のように、メンバー全員が揃っている場合のランチは、いつもワンパターンだった。

「じゃあ……、また『ザース』に行きます?」

長谷川の言う『ザース』とは、ランチバイキングが人気のファミリーストランのこと。

事務所のほぼ裏側にあり、よくこの後輩や先輩アーティスト達などもよく食へに行く場所でもある。

人気の理由は、バイキングが自然食と洋食の2種類があること。

自然食の方は肉類を一切使わず、野菜や魚類、果物だけを使った和食や洋食メニューが中心。

一方の洋食の方は、子供や男性が大好きな肉類を使った料理や、やや高カロリーな料理などが並べられている。

ちなみに何故、メンバー全員が揃った時はいつもここなのかと言う

と、厘が基本的に自然食しか手を付けないからである。

厘は普段、肉類は鶏肉のみで、必ず野菜と果物中心の食生活。

その為、メンバー達が肉類を食べたいと思っても、肝心の厘が『嫌い』と言うので、食べられないのである。

つまり毎度のことを言ってしまえば『メンバー全員が揃っている時はここ』ではなく、どちらかと言ってしまえば『厘がいる時はここ』と言った感じた。

「この間も行ったばかりだけどね」

「でも、ほら。この間はバイキングやってなかったし・・・」

実は3日前のあの日にも、未佳達は昼食を『ザース』で食べたのだが、その時は丁度バイキングが休みの日で、仕方なく元々店にあるメニュー料理だけを食べて帰ったのだ。

だが今日は日曜日。

かき入れ時なので人は多いだろうが、バイキング自体はやっている日だ。

「そうや！ ウチ今日こそ『水菜と三つ葉と大葉のホワイトドレッシングソースがけ』食べる！」

「何？ その舌を噛みそうな長い名前・・・」

「えっ？ 大葉とみつなとみず・・・、ん?!」

「で、なんでさつつちが噛んでるのよ」

名前からおそらくバイキングメニューなのだろうが、前に覗いた時にあったらうかと、未佳は小首を傾げた。

確かにサラダ系のものがかなり多いのは知っているが、厘が皿にそ

れらしきものを盛っている姿は見た覚えがない。

「そんなのあつたっけ？ 全然知らなかったけど・・・」

「新作メニユー。今年の6月まで」

「先週行つた時は？ 食べなかったの？」

「それが・・・目の前でおばさんが横から『ガバツ！』って取つてしても・・・次のが出来る前に帰つてもたんよ」

『今思い出しても腹が立つ』と言わんばかりに、厘はその場で奇声を上げながら、足元の床を踏みつけた。

そんな厘に、未佳はただただ苦笑いを浮かべる。

「ハハハ・・・確かにそれは・・・」

「おばさんねえ・・・」

「ちよつと！？ さとつち？」

「なんでそこで笑うん！？」

「あ、いや・・・もう僕らもそんな年なんだよなあゝって・・・」

長谷川はそうしみじみと口にしたが、未佳はその言葉に顔を顰めながら、首を横に振った。

「馬鹿なこと言わないでよ。私もさとつちも、まだ30前半じゃない」

「何言つてんの、みかっぺ・・・。30過ぎたら、みんな同い年やん」

「えええっ！！ 余計に嫌なこと言わないでよ！」

そんなことを言い合いながら、未佳達は『ザース』へと向かった。時間帯的に少々人の込み具合が気になったが、とりあえず店の前まで向かつてみる。

『SAND』の後ろの歩道を真っ直ぐに進み、3つ目の曲がり角を曲がってすぐ。

『ザース』が見えたのと同時に、その窓の奥で動く人影に、長谷川は顔を顰めた。

「なんか……。人が多いかも……」

「やっぱり時間帯がマズかったかなあ……」

「時間帯もありますけど……。今日が日曜日っていうのも」

「やっぱり曜日が分かっているのなら、時間を確認するべきだったねえ……。」

「とりあえず、中入ろ。予約くらいはしといた方がええもん」

「そ、そうですね……。」

一応中へと入ってみれば、やはり休日と言うのもあってなのか、子連れの人達が異様に目立った。

あつちらこちらから小さな子供達の騒ぎ声が聞こえてくる。

二つ目の扉を開けたところで、すぐさま女性のウェイターがこちらに駆け寄る。

「いらっしやいませ。お客様は何名様でいらっしやいますか？」

こうした問い掛けに答えるのは、基本マナージャーである栗野の仕事だ。

「5名です」

「5名様。席のご希望等は……？」

「なるべく……。目立たない席の方に」

「かしこまりました。少々お待ちください」

ウェ이터はそれだけ言うと、そのまま厨房の方へと走っていった。そんなウェ이터の後ろ姿を見つめながら、リオは未佳に問い掛ける。

「なんであのウェ이터……。煙草とか訊かないの？ 普通訊くでしょ？」

「ん？ ああ……。もう何回も行ってるから、顔馴染みのよ。誰も煙草なんか吸わないし……。席を訊いたのも、状況とかで毎回席が変わるから」

「ふーん……。 」

「？ 坂井さん……。誰と話してるんですか？」

「えっ？！ ううん……。！ 『子供が多いなあ』って、呟いただけよ？」

「……。？ ホントに？」

「何？ その言い方……。疑ってるの！？」

「あ、いえ……。！ なんでもありません！！」

別にそこまでキレイな感じに言わなくてもよかったのだが、自分の性格上どうしてもキレイかった口調で言ってしまう。未佳自身、一番大っ嫌いな性格だった。

（もう！ キレた感じに言わなくても別にいいのに……。ハァ……。 、どこまでも度S女ね……。 ）

「ほら、未佳さん！ 席空いたって」

「あ、はい」

食事が終わったのは、それから約2時間半後。事務所に再び戻ったメンバー達は、早速それぞれの楽器やマイクの

立ち位置などに立ち、新曲製作を続行する。

「じゃあ。レストランで話し合っ出てきた案。片っ端からやっていきますよ?」

「はい」

実は『ザース』の中で食べながら、メンバー達は上手くサビを歌える方法を考えていたのである。

その結果、全部で4つの案が浮かんだ。

皆が提案した案は『重ね歌い』『スロー』『ハイスピード』『コーラス』。

その全てを、まずは手当たり次第に試してみる。

「じゃあ最初に……。サビで2つに歌を分け、編集で重ねるようにする。要は『重ね歌い』。この場合のデメリットは、ライブで歌えない。ファンはカラオケで、歌う人間が二人必要。以上!」

「それじゃあ、坂井さん。サビの『名をなのれ』の『れ』を引き延ばして、そこを歌い終わったら、無言でお願いします。録音しますから」

「はい」

頷きはしたものの、これは結構面倒なやり方だ。

何せ、サビを2つに分けて歌い、それを合成させて重ねるのだから。つまりは、一つのサビを2回も歌わなくてはならない。

そうこう思っている間もなく、3人の楽器はサビのメロディーを奏で、タイミングを見計らいながら、未佳はマイクに口元を近付けた。

「後ろの人影は誰でしょうー 似たけっはーい 感じてえ 名をな

「のぉーれえー………いい？」
「OK！　じゃあ今度、その後行きますよ？」
「はい」

尋ねられて答えてみれば、またしても間髪を空けずに曲が流れる。
中々口元からマイクを外せない。

「当てずっぽうでも構わない……早く　言ってしまえ　鬼がー・
……こちらを見ぬうーちにっ　イヤッ！！」
「………OK！　じゃあ、繋がりますよ」
「これで失敗したら最悪ね」
「ハハハ……」

半分ジト目でそう呟く末佳に苦笑しながら、手神は録音した二つの
音声を重ねるように編集する。
その作業は5分と掛からなかった。

「じゃあ、再生してみます」

パソコンのマウスを動かして『再生』と書かれたボタンをクリックし
てみる。

するとすぐに、先程の末佳の声がスピーカーから流れ出した。

《後ろの人影は誰でしょう　似たけっはーい　感じてえ　名をな
ーのぉーれー……（当てずっぽうでも構わない）　早く　言っ
てしまえ　鬼がー……こちらを見ぬうーちにっ　イヤッ！！》

「こんな感じですけど……、どう？」

「坂井さん、どう？」

「うーん……。この『れ』の延びるところ……。もう少し低い声でやった方がよかったかも」

「そうじゃなくて、みかっぺ。歌自体」

「ああ。歌自体はよかったと思うけど……。他試そうよ」

曲の良し悪しは後でいくらでも言える。

今はそれよりも全てのパターンを出してみて、その中で一番シックリきそうなのを選ぶのが先だ。

「じゃあ、次はスロー。これの場合の欠点は、楽曲のテンポが速くてノリ易い分、サビでその熱が冷めやすくなる。……。誰や？ これ書いたの」

「ハハハッ！」

「これ……。小歩路さんか手神さんでしょ？」

半分笑いながら長谷川が尋ねてみれば、厘は手神の方を指差した。

「手神さんでしょ？」

「えっ？ 僕だっけ？」

「いいじゃん。いいじゃん。やっちゃん。やっちゃん」

ところがそのスローで試そうとした際、今度はヴォーカル側ではなく、楽器演奏側に問題が起こった。

「ちょっと待って……。これスローって……。二人共出る？」

「」

「あっ、早くなってる」

「ちよっと……。あれ？ これ元のスピード？」

「坂井さん、ちょっと……。5分くらい時間ください」

それぞれ個人で楽器を練習すること、約5分。

ようやくメンバーが演奏出来るようになり、スローでの歌い試しが行われた。

「後ろの人影は誰でしょうー 似た気配 感じてえー 名をなーのーれー……。当てずっぽう でも構わなーい 早く言って しまえ 鬼がこちらをー 見ぬうちにー……。イヤッ！……。・『イヤッ！』 いらないわ。スローだと……。・」

「中途半端」

何となくスローは没になりそうな兆しが立ちつつ、次の案を試す。

続いての案はハイスピード。

逆に速くなったらどうなるのか気になるところだが、欠点欄には『余計にプレスが出来なくなる可能性がある』と、当初の問題点が悪化するかもしれないことなどが書かれていた。

「プレス……。出来るよね？」

「多分……」

「じゃあ、行きますよ？ 1・2・3！」

「後ろの人影は誰でしょうー 似た気配 感じてえー 名をなのれえー 当てずっぽうでも構わないっ 早く言って しつまっえっ 鬼がこちらを 見ぬうちにー！！ イヤッ！……。これ……。ラップだっけ？」

「ハハハッ！！」

「どう考えてもラップよね？！ これ！」

プレス自体は、一気に歌いきる箇所が増えたり、長く延ばす箇所が

減ったりした為に、そこまで気にはならない。

ただその代わり、全く曲のイメージが変わってしまった。
最初はホラー路線だった楽曲が、ハイスピードにした途端、ラップ
ソングになってしまったのだ。

「・・・ちよつと保留」

何となくこれも落選しそうな気がするが『アレンジの仕方によって』
ということもある。

未佳は一先ず置いておくことにした。

「じゃあ最後。コーラス！ 欠点は、みかっぺが歌う箇所がやや少
なくなる。・・・まあ・・・、そうでしょうね。コーラスが代わり
を少しやつちゃうんですからねえ・・・」

「コーラスは・・・、さとつち、お願い」

「えっ！？ 僕！？」

「しょうがないでしょ。他にいないんだから・・・。手神さんはキ
ーボード2台で忙しいし、小歩路さんは口が裂けても歌わないでし
よ？」

「その前に口開けへん」

未佳の言う通り、厘はマイクを通して歌うのが苦手だ。

理由は元々声が少し曇り気味だったり、自分から目立とうとしない
など、少々色々ある。

だが『全く歌わないのか』と言えば、別にそういう訳でもない。
例えばライブの時などは、自分の口元にマイクは当てないものの、
微妙に口を動かして歌ったりしている。

要は、歌うことは好きだが、周りに自分の歌声を聴かれるのは嫌なのだ。

「だから、さとうち。あなた歌って」

「まさかの……。でもギターは？」

「大丈夫。こつちがギターコードの分も弾くから」

「手神さん。そういう問題じゃ……」

「ほら、始めて！ やるよ」

末佳は未だにゴニョゴニョと何かを呟く長谷川の腕を、グイッと強引にマイクの方に引き寄せる。

それから1から3までのカウントダウンが始まり、最後の歌い試しが行われた。

「後ろの人影は誰でしょー」

「似た」

「けっはーい」

「感じてえ」

「「名をなーのおーれー」」

「（当てずっぽう）でも構わない 早く 言ってしまえ 鬼がー・・・
・こちらを見ぬうーちにっ イヤッ！ ・・・・・うーん・・・」

しばらく歌い終わって考え込んだ末佳と長谷川は、お互いに顔を合わせながら、口を開いた。

「「微妙……」」

「あんまりシツクリこないね……」

「の前に、コーラス邪魔……」

「曲によって良いのと悪いのがあるよね」

その後、この4つの案についてしばらく話し合い、その結果新曲『かごめ歌』は、一番最初に行った『重ね歌い』のやり方に決まった。

9・病院なう

午後5時過ぎ。

ようやく新曲のアレンジ等が決まった今日は、製作時間が長引いたということもあり、レコーディング等は明後日に持ち越しということとで、本日の仕事は終了となった。

末佳達は軽くメンバー達と会話をした後で、鞆の中に楽譜やらメモやらの荷物をまとめる。

ふつとここで、厘にサンプルの曲を渡していないことに気が付いた。昨日せつかく頑張って入れたのだから、今ここで渡さなくては意味がない。

「小歩路さん。そう言えばコレ」

と言ってカセットテープを4つも手渡してみれば、厘は『えっ？』と言いながら、ただただ驚いていた。

「この間栗野さんが『小歩路さんが早く詞を書きたいって言うって聞いていたから。この間まで家に溜まっていたの持ってきたの』」

「こんなに沢山……。ありがとう！　ちよつと最近書いてへんかったから、作詞に飢えてて……」

「もう……。まあ、最近昔の曲の詰め合わせアルバムばかりだったしね」

「末佳さん。厘さん」

ふつとその声に気が付き振り返ってみれば、そこには車のキーを握っている栗野が、部屋の入り口に立っていた。

「厘さんの車。置きっ放しなんでしょう？ もうこんなに時間が経っていますし、下手をすれば回収されている可能性もありますから・・・。それに、未佳さんは未佳さんで用事があるでしょ？」

「あ、そうだった・・・」

「すみません」

会話もそこそこに、3人は栗野の車に乗り込んだ。

厘の話によれば、厘の車は事務所から10キロほど離れたところにあるとのこと。

前から趣味でハイキングやウォーキングを行っていたことがあるとは言っていたが、よく事務所まで歩けたものである。

「じゃあ、車探しに行きますか」

「あるかなあ・・・」

「大丈夫よ。変なところに止めてなければ、回収なんてされないから」

「でも用のないところに車を止めてたら、何かやられてるんじゃないかい？」

「それはまあ・・・」

確かに『無い』とは言い切れない。

最近の厳しい場所では、店屋の前に止めておいた自転車であれ、目を離れた3時間後くらいには回収されているこのご時世だ。

厘の車だって、置き去りにされてからかれこれ8時間以上も経っている。

何にもされていない可能性としては、やや低めだ。

「せめてあつても・・・。車止めくらいかなあー・・・」

「えっ？ 何？」

「うっん！ なんでもない！」

そうこうしている内に、車は『ガコンツ！』という音と共に動き出し、やがて交通量の多い車道の中へと入っていく。

今日はやや雲があった空だったが、結局のところ、雨が降ることはなかった。

その代わり、明日は雨が降る予報である。

（きれい・・・）

窓の外を見つめながら、未佳はふっとそう呟いた。

今日は夕日が沈んだ後の藍色がかった光りが、空に浮かぶ沢山の雲に当たり、何とも言えない美しさを見せている。

空は藍色で、雲は水色で、雲の下はかなり色の濃い紺色で・・・。

未佳は咄嗟に鞆の中から白い携帯を取り出し、パシャリッと写真を撮った。

最新の機種ではないので、写真写りはやや微妙な感じだが、それでもある程度は鮮明に撮れる。

生き物や動くものを撮っているのと違い、空は動かない。

だから基本的に、未佳が不安定な場所にいたりしなければ、写真はしっかりと撮れるのだ。

数枚撮り終わった写真を、未佳は1枚、1枚確認する。

3枚ほどボケていたので、それは即消した。

こうでもしなければ、次にまた写真を撮った時に、すぐにカメラの写真が満杯になってしまうのである。

「ねえ、見せて」

「えっ？ いいけど・・・、はい」

未佳が携帯を手渡すと、厘はカメラ画像フォルダの中に入っている写真を1枚じつ見つめた。

カメラの中の空は様々だ。

朝・昼・夜。

雨・雪・風の強い日の空。

よくもこんなに沢山のものを撮れたものである。

さらに中には、雲の形が何かに似ていて、それらを撮った写真もあった。

「これ。この雲がまるで鳥みたいでしょ？ 前から飛んできたみたいで……。それからこっちは、空を泳ぐ龍。薄い雲がぴいーって二つ伸びてるの、ヒゲみたいに見えるでしょ？」

「・・・ホンマや。じゃあ、次のはカメラ？」

「でもね。その写真の左側にウサギみたいな形の雲があるの。まるで『ウサギとカメラ』みたいじゃない？」

「しかも丁度、ウサギがカメラに負けかけてる場面やん」

「でしょ！？ 写真撮る時に、思わず笑っちゃって」

「そやけどみかっぺ。ホンマに空好きやなあ。アーティストならへんかったら、写真撮る人になってたんちゃう？」

「そ、そお・・・？」

そう言いながら、未佳は微妙に笑いつつ、前髪を軽く掻いた。

実際の話、厘のその予想も外れてはいない。

未佳は小さい時から、将来の夢がコロコロ変わってきた。

理由は、その当時ハマっていたものの職業に就きたかったから。

だから、最初は花の魅力に魅せられ、花屋になりたがった。しかしその後、大人の食べ物や飲み物にハマり始め、喫茶店をやっ

てみたいと夢見た時期もある。
そしてそれからすぐに、好きな風景や場面を紙の中に収める写真に惚れた。

だがこの夢も、未佳の中ですぐに消え去ってしまったものである。
消え去った理由は、一眼レフなどのカメラの扱いが面倒で、途中で挫折したのだ。

ただ携帯の方は、簡単且つキレイに撮れるので、よく仕事に行く途中や、少しだけ外に出掛けた時などに使っている。

おかげで携帯のカメラフォルダは、未佳の撮った空の写真で一杯だ。

「そう言えばみかっぺ……。その手首どうしたん？」

「えっ……。！？」

「なんかアクセントにしては変やなあって思ってた……」

「あ、いや……。その……」

「クリアファイルで切ったんですって。未佳さん」

「ちよっ……。ちよっと！ 栗野さん！」

あれほどさつきまで『気付かれないように』と言っていた栗野の裏切りに、未佳は慌てた。

せっかくあそこまで必死に隠したのは、一体何だったのだろう。

「すみません。厘さんなら、話しても大丈夫なんじゃないかなあって思ってたんで……」

「もーっ……」

「『切った』ってどういうこと!？」

「こっ言っことよ……」

未佳はそう言いながら、厘に手首の傷を見せる。

内出血で血が固まっていなかったため、本当に見た目は悪い。

傍から見れば、まるで血が流れているようにも見える。

「えっ！？　こんなに・・・！？」

「ねっ？　凄いでしょ？　私も最初かなり驚いて・・・」

「・・・何でやった言うてたっけ？」

「く・・・、クリアファイル・・・」

「どうやったらか切るん？」

「さ、さあ・・・？」

『実は包丁でリストカットを』なんて言った日には、おそらく周りは大騒ぎだ。

勿論、言つつもりは毛頭ないが、なんだかこのクリアファイルの嘘が、最近妙に考えなければならなくなつたような気がする。

実際、クリアファイルなんかで腕を切る人などいるのだろうか。

もし『いる』とすれば、少々ファイルの何処の部分でどう切つたのかを聞いてみたいところである。

ふつとそんなことを思いながら苦笑いを浮かべていると、厘はその直後信じられない言葉を発した。

「リストカットしたんちゃうよねっ！？」

「えっ！？」

「えっ！？」

「あっ！　危ないっ！！」

「キヤアッ！！」

「「キヤアアッ！！」」

ふつとその発言に驚いた栗野が目を離れた途端、目の前に電柱が見え、栗野は慌ててブレーキを踏みつけた。

幸いにも気が付いたのが早かった為、車は電柱にぶつかりはしなかったものの、未佳と厘は勢いよく前の方に引き寄せられるかのように、一気に身体が座席から離れた。

こちらも助かりはしたが、あと一歩のところで大惨事になっていたかもしれない状況に、3人はその場で硬直する。

「皆さん……、大丈夫ですか？……」

「何とか……」

「栗野さん……。死ぬかと思ったわよ……」

「すみません……。厘さんの発言に驚いたもので……」

「も……。それに小歩路さんも、私がリストカットなんてやるわけないでしょ！」

「嘘つき……」

「だってえ。手首の丁度ええ箇所やったから……」

「厘さん、鋭い」

「それにしても危なかった……」

未佳と栗野はしばらくそう呟きながら、その後はかなりの安全運転で、厘の車が止めてある場所へと向かった。

幸いにも、車は何もされてはおらず、ひっそりと小さな駐車場に止まっている。

「あつた〜っ！」

「何もされてないみたいね」

「よかった……。ちよつと心配やったんよ」

「じゃあ、気を付けて帰ってくださいね」

「うん、ありがとう。みかっぺも病院、頑張つてな」

「あ、うん……」

厘はそれだけ言うと、早速車にエンジンを入れ、走り出してしまっ

た。

無事車が車道に出たところで、栗野も再び車に乗り込む。

「ほら、未佳さん。私達も病院に行きますよ？」

「あつ・・・、はい！」

個人的にいい気はしなかったが、とりあえず二人はそのまま元来た道を走り、北堀江救急医療センターへと向かった。

たかがこんな怪我で行くにしてはレベルが違い過ぎる病院だが、アーティスト達が行きつけにしているのは皆ここ。

病院上、そう言った人達がやってきていることを隠してくれる場所としては、ここが一番なのだ。

ちなみに未佳は数回、この病院でお世話になったことがある。

特にデビュー仕立ての頃、事務所の階段から足を踏み外して骨折した時は、ここに散々迷惑を掛けた。

人生初の骨折でややパニックになり、しばらくの間ギャーギャー騒いでいたような気がする。

少しながら恥ずかしい思い出だ。

病院に着いてみると、意外に空いていた。

いつかの風邪の時は、丁度インフルエンザの予防接種の時期と被ってしまい、かなり病院全体が込み合っていたが、今日は大丈夫そうなので少し安心する。

受け付け等も素早く終わり、待合室の椅子に座ってから名前を呼ばれるまでは、10分も掛からなかった。

《大変お待たせしました。番号札26番 サカイ ミカ様。番号札26番 サカイ ミカ様。3番の個室へお願いします》

「・・・毎回思っけど、ここで名前出たら意味ないんじゃない・・・」

「そ、そうですね・・・。今度から偽名にでもします?」

「えっ?」

「とりあえず移動したら?」

「とっ・・・、とりあえず移動しません?」

「そうですね。未佳さん、こちらです」

『こちらです』と言われても、案内される部屋はいつも3番だ。

流石に何処なのかはよく分かっている。

今更どうこういうことではない。

部屋の中へ入ってみると、いつものやや手神よりも老けている男性医師、高野義也たかの よしやが、回る椅子に腰掛けていた。

どうやら前の患者のカルテに、診察結果等を書き込んでいるらしい。ようやくカルテに書き込みを終えると、高野は未佳の方に体を向け、診察するかのような体勢になった。

実は未佳、医者がどうこうという訳ではないのだが、この高野医師がどうにも苦手なのである。

理由としては、患者に対しての対応がイマイチ。

出てくる言葉が中年用語で、おまけに分かり難い。

何回も同じ言葉を繰り返す。

身体検査の時、少しばかり手付きが気になる。

半分嫌う内容が『女子高校生か!』と突っ込まれそうなものではあったが、こう言ったものがいくつも積み上がり続け、気が付けば苦手になってしまったという訳である。

個人的には『医者は恐くてもいいから女性の方がよかった』というのが、未佳の本音だ。

（この人、苦手なのよねえ．．．）

「今日はどないしました？」

「実は、未佳さん．．．。クリアファイルで手首をかなり切って．．．」

「クリアファイル？」

「あ、はい！ 内出血だったんですけど．．．。ちょっと見てください！」

そう言うや否や、栗野は未佳の手首に結んであったスカーフを、少しだけ上の方にズラす。

そこから露わになった傷を見て、高野は顔を顰めた。
それは当たり前である。

「こらあゝ、凄いなあ．．．。よく内出血だけで済んだもんや」

（死ねない細工のせいでーす）

「未佳さん！」

「．．．どうにか．．．、なりますか？」

栗野が恐る恐る尋ねてみれば、高野は後ろに立っていた助手の看護師に何かを頼んだ。

それからあまり間も空かぬ内に、その看護師は何やら銀色のトレーを両手で運んできた。

中に何か入っているらしいトレーを、看護師は高野の机の上に置く。
中から見えたのは、少々大きめの注射と注射針。

（ああ．．．。やっぱりこうなるのね．．．）

「注射で血を抜きましようや。見たところやと．．．、もう内出血の血は出てへんみたいやし．．．。そうすれば、傷口は水膨れの時みたいに、皮膚に張り付いて、よう分からんようになりまますかい」
「じゃあ．．．、やっぱり血を抜くしか．．．」

「・・・うん・・・。自然に直すうちゅう手もありますけど・・・。それやとエライ度デカいカサブタになってしもて、それが剥がれると、少し・・・。手首が凹んでるみたいになりますよ?」
「イヤッ!」

それは流石に嫌だ。

こう見えても未佳は、自分の身体を大事にしたいと思っている人間である。

確かにあの日は、自分の頭から血が流れようが、頭蓋骨が折れようが、脳が出てしまおうが、その辺のことは一切どうでもよかった。

だが、生きている自分の身体がキズモノになるのは御免だ。

傷を負った時が死ぬ時ならまだしも、傷を負っても死なないのであれば、それは遠慮したい。

傷がある身体をファンの前で晒すのは、どうにも忍びなかったのだ。

未佳が自然治療を嫌がったことにより、早速注射器と注射針による『血抜き作業』が行われた。

最初は痛みがあるかと思っていたのだが、針を射してみるとそうでもない。

意外にも血が薄い皮膚を持ち上げてるせいか、ほとんど痛みは感じられなかった。

あっという間に血が吸い取られ、注射器の中には、容器の底を満たす量の血が溜まる。

全ての内出血の血を取ってみれば、傷のところは皮膚が少し赤み掛かり、注射器の容器の中には、やや少量の未佳の血が溜まっていた。

（うわっ・・・。あんなに溜まってたの・・・）

驚く未佳の傷口近くに、看護師はアルコールの染み込んだガーゼを

3 回ほど塗る。

微妙ながら、こちらは少々ヒリツとした痛みを感じた。

「はい。これでええやろ……。あとは火傷の時みたいに皮膚がくっついて、余分なところは取れますさかい。なんかみた起こったりした時は、ここに来とくれや」

（2 回目よ……。その火傷例の話……）

「はい、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

最後に二人は、治療を行ってくれた高野に礼を言い、診察室を後にした。

栗野が会計を済ませている少しの間に、未佳は勝手に外に出てみる。

空を見上げてみれば、もう夜だ。

しかも、星が一切見えない。

夜空はまるで靄が掛かっているかのように、やや白みがかった。

「明日は雨かなあ……。さとうち、今日機嫌が良かったし……」

「なんで機嫌が良いと雨なの？」

「あの人、雨男なの。いつもライブの時に、雨とか雪とか雹^{ひょう}とか降らせるから」

現にこの間のカウントダウンライブの時だって、練習中は晴れや曇りだったにも関わらず、本番当日はいきなり大雨が降り出したのだ。あの時には、流石にメンバー全員がかなり驚き、長谷川に『なんで降らせるん！？』と文句を言ったのだが、長谷川は断固として、自分が『雨男』であることを否定。

結局その日は最後まで、自分が『雨男』であることを認めようとはしなかった。

「長谷川さんだっという証拠は？」

「そりゃあ・・・、さとうちが来た時とかによく降るから」

「つまり『長谷川さんが来た途端に雨が降る』ところを、長谷川さん以外の誰かが見てるってことだね？」

「まあ・・・、そうね・・・。私がさとうちを見た時は基本、降ってきたけど・・・」

「・・・じゃあ必ずしも、長谷川さんっていうわけじゃないんじゃない？」

リオはそう言いながら、未佳の顔を見つめた。

その瞳は、少しばかり『疑い』のようなものが見える。

未佳はそんなリオの目を見るなり、首を横に振りながら否定した。

「ち・・・、違うわよ！ 『雨男』はさとうちであって、私じゃないから！ 私は雨女じゃないわよ！！」

「でも、基本的に二人が来る時に雨が降ってくるんでしょ？ 未佳さんが毎回長谷川さんを見る度に、雨が降るんなら」

「それじゃあ一昨日なんてどうなのよ！ 雨降んなかったでしょ！？」

「案外、朝一に長谷川さんを見ると、雨が降ってきたりして・・・」
「そんなわけないでしょ！ 失礼ねえ！・・・なんて言うてる内に、明日で2月も終わりか・・・。本っ当に2月は終わるのが早いわね」

予約死亡のことを考えたらなおのこと、2月が終わるのが早く感じられた。

まだあれから2日しか経っていないというのに、何となく期限切れが近く感じる。

その後二人と謎の一人は、栗野の車で自宅へと向かっていった。

予約死亡期限切れまで あと 177日

10・雨の日の過ごし方

未佳の人生で最後となる2月。

その月の終わりとなったこの日、未佳はセツトしていた目覚まし時計ではなく、窓の向こうから微かに聞こえてくる雨音で、目を覚ました。

昨日予測した通り、今日は雨。

それもかなりの大雨だ。

こんなに降ったのは、正直言っただけだろう。

「やっぱり降ったかあゝ……。しかもかなり強いし……。これじゃあ、洗濯物は無理ね」

「開口一番がそれ？」

その声に反応して振り返ってみれば、リオがポツンと突っ立っていた。

「この間のこと、未佳さん何も言えないじゃん……」

「私……、この間なんか言っただけ？」

「覚えてないんじゃないよ……」

「……………」

そう言われるとかなり微妙な気持ちになってしまっただが、考えてみたらそんな風なことを言ったような気がする。

確か一昨日の朝くらいに……。

「それで？ 洗濯物って？」

「えっ？ あ、うん……。このところあんまり洗ってなかったか

ら、やろうと思ってたのよ」

「なんで日曜日にやらなかったの？」

「まだそこまで溜まってなかったのよ。色々忙しかったし・・・」

「ふーん・・・。1日でそんなに溜まったんだ。ふーん」

「・・・・・・・・」

実のことを言ってしまうえば、前から洗濯物は溜まりつつあった。

ただ単に、未佳があまり意識していなかっただけである。

溜まっていると気が付いたのも、昨日風呂に入ろうと下着などを洗濯力ゴに入れていた時だ。

あまり意識していないでいると、未佳の周りはいつもこんなことになる。

「まあ、いいや・・・。起きよ」

とにもかくにも、起きなくては何も始まらない。

未佳はベッドから起き上がると、とりあえず紅茶の為のお湯を沸かし始めた。

ただでさえブルーな気分になりがちな天気なのだから、こう言ったもので気分を変えなければ、おそらく今日1日はずっと気持ちが悪くなってしまふ。

それをなくす為に、未佳はいつも雨の日には紅茶を入れて、少しながら気分転換を行うのだ。

お湯を沸かしている間に、未佳は上下の服を着替える。

今日は久しぶりにブルージーンズと、上は赤・オレンジ・白・黄色などの色が横に並んだような模様の長袖を着込んだ。

完全に自宅にいる時のみの格好である。

「今日は仕事はないの？」

「うん。明日はあるけど……。今日はさとうちだけじゃない？
別のバンドのライブが控えてて、そのライブのサポギタ任されてるから」

「へえー……。長谷川さん忙しいんだね」

「そうねー……。私や手神さんもちかなり忙しい方だけど、さとうちはその中でも断トツね」

バンドやライブのギターをやり、作詞・作曲を行い、挙句の果てにはソロ活動。

そのせいで、本家でもあるCARNELIAN・eyesの仕事がおごそかになることもしばしある。

熱心なのは別にいいのだが、もう少し本筋の仕事と別の仕事の両立なども考えてほしいものだ。

（つと言つても……。事務所側が勝手にそう言つてやらせてるんだから、さとうちは悪くないんだけどね……。）

「未佳さん、お湯」

「えっ？ ああ、沸いた？」

その後はいつも通り、軽めの朝食。

今日のメニューはストレートティーと、前に事務所の近くにある喫茶店で購入したスコーンだった。

一昨日のバナナとお茶だけのメニューよりかは、こちらの方がまだ真面な食事である。

「リオも食べる？」

「……。どうやって食べるの？」

「そのままでもいいんだけど、ジャムとかメイプルシロップとかをかけて食べたりとか……。まあ、人それぞれね」

「……。そのまま味見してもいい？」

「えっ、うん。それでなんか物足りなかったら、そこにイチゴジャムとメイプルシロップがあるから、適当にかけて」

と言いながら、未佳はイチゴジャムを乗せたスコーンを口に入れる。しばしその様子を観察していると、どうも未佳はスコーンを食べる際、少しずつスコーンを契って、その契ったスコーンにジャムなどを付けて食べる食べ方のようだ。

リオはそんな未佳の食べ方を見ながら、未佳と同じように、小さく契ったスコーンを口に入れた。

バター風味がかなり出ているにも関わらず、スコーン自体はあっさりしている。

しかも1回温め直されたことにより、かなり生地はしっとりとしていた。

とりあえず本来の味を確認したところで、リオはメイプルシロップを付けてみる。

名前は知っているものの、メイプルシロップ自体を見るのは初めてのこと。

リオは半分ワクワク、半分ドキドキしながら、スコーンを口の中に入れた。

「（甘い・・・）」

第一印象はまずこれ・・・。

人間の食べ物だのにはほとんど触れたことのないリオにとって、これはかなり言い表し難いものだったが、少し甘すぎるようにも感じた。

しかし向かいの席に座っている未佳は、普通にメイプル味にしたスコーンを口に頬張っている。

「（未佳さんには好きな味なんだ・・・）」

次にリオが試したのは、イチゴジャム味。

そのイチゴジャムは、何故かかなり大きめのビンの中に入れていた。

だが妙なことに、そのジャムビンには製造した場所の名前や賞味、消費期限などを記したラベルが貼られていない。

おまけに、大きめのビンの中に入っているというのに、ジャムは何故か少なめだ。

『使った』というのであればそうなのだろうが、元々そんなに沢山入れられていたわけでもないらしい。

とりあえずスコーンに塗って、一口頬張ってみる。

先程のメイプルシロップよりは優しい味がした。

『甘い』は『甘い』のだが、何とも自然な甘味だ。

イチゴの果肉がやや残っているのも嬉しいものである。

「美味しい・・・」

「でしょ？ 小歩路さんが作ったんだ。そのイチゴジャム」

「えっ？」

「この間イチゴ狩りで貰ったイチゴを、家でジャムにしてビンに詰めたんだって。それを皆で山分けにして、私が残ったのを貰ったのよ」

「ビンごと？」

「そうよ」

つまりは、最初はこのビンいっぱいに入っていたジャムが、皆と山分けにしたことによって、ここまで量が減ったのだ。

通りでこんな大きめのビンに入っていたわけである。

全ての味を確認したところで、リオはどの味のものがよかったのかを考えてみる。

どれも当たり前だが、それなりの違いはあった。

その中で一番じっくり来たものと言えば。

「僕・・・、そのままイチゴジャムがよかったかも」

「・・・確かにメイプルシロップって、もの選ぶよねえ」。スコーンもものによつては合うけど、こう言うサクサク系じゃないのには微妙かも・・・」

「でも未佳さんは好きなんだね」

「甘いものは、女性の好物よ。太り易くなるけど・・・」

「ダメじゃん・・・」

リオが冷たく突っ込むと、未佳はワザと鼻歌を歌いながら、食器類を流しに片付け始めた。

どうやら今日は外に出られない代わりに、家の家事を行った方がよさそうだ。

早速未佳は、下げたばかりの食器や、昨日の夕飯などで使った食器類を洗い始める。

それが終われば、今度は室内の掃除。

散々散らかっていた失敗作の楽譜やらを二つ折りにして、そのまま燃えるゴミの箱の中に突っ込む。

それだけでゴミ箱の中は満杯になってしまった。

さらにその後は掃除機かけやトイレ・風呂場掃除など、完全に大掃除のような状況になったところで、未佳はテーブルの椅子の上に座り込んだ。

こうした家事をやっていただけで、時刻はもうじき昼間近……。時計を見る限りでは、最高の1日の使い方だとは思う。だがヘトヘトの未佳を見ていると、少々微妙にもなってくる。

「はあ……。疲れた……。」

「なんで一気にやったりなんかしたの？ 少しずつの方がいいのに……。『身体に負担が掛からないくらいに』って、よく言うじゃん」
「ええ？ ……それだと、仕事が続いた時に、余計に大変でしょ？ だから、やれる時に全部やつちやっただ方が楽なの。そうすれば、近い内に休みが取れた時に、何にもやらずにのんびり出来るしね」

「未佳さんも充分目敏いね……。」

「あーら……。リオ、この間の私の呟き、聞いてたわね」

「……。地獄耳だからね」

どう考えても威張って言うことではないが、とりあえずリオはそう言い返してみる。

だが意外なことに、未佳はそれに対して何も言い返そうとはしなかった。

そればかりか、再びピアノの前に座り込み、鍵盤を指で弾き奏で始める。

「また曲作り？ この間やったばかりじゃない？」

「この間のは前から出来たのを入れ直しただけ……。それにあの様子じゃあ、小歩路さんが詞を書き終わるのも早いだろうし……」

。一から弾くのをそろそろやっておかないとね」

「ふーん……。」

確かに言われてみれば、一昨日の作曲録音の時よりも、こちらはキーが決まっていらない分、妙にぎこちない。

一度キーを決めると、その先を決める時もそのキーを弾いていくの

だが、作業工程はまるで『3歩進んで2歩下がる』である。

そんな未佳をしばらく見つめていたリオだったが、流石にただ見ているのも飽きる。

何か他に時間潰しはないものかと、リオは辺りを見渡した。

すると何やらテーブルの上に、黒いケーブルが繋がれたピンク色の小さな薄い機械が置いてある。

『ピンク色』と言っても、色的には紅色に近いピンクだ。

気になったリオが、よくよくその機械とケーブルを見つめてみれば、黒いケーブルだと思っていたものは、単なる黒いイヤホンだった。そしてそのイヤホンが繋がられているピンク色のものは、人間の手の平ほどの大きさしかない、薄い長方形の機械。

表側だと思われる方には、大きな丸いボタンと液晶画面。

その丸いボタンの両サイドには、小さな丸いボタンが付いていた。

「（なんだろう・・・？）」

興味本位でボタンを押してみるが、何の反応もない。

『ならば』と右側にある小さな丸いボタンを押してみれば、何かのメニュー画面が映し出された。

だが、いくらボタンを押してみても、何故か選択出来ない。そればかりか、再び液晶画面は暗い画面に戻ってしまう。

その後何度やってみても変わらない画面に、次第にリオはイライラし始めた。

「もう！ なんでだよ！！」

「『HOLD』になってるのよ。それ・・・」

「えっ？」

突然真上から聞こえてきた声に驚いて見上げてみれば、そこにはまるで覗き込むかのように、中腰になった未佳がいた。

未佳はリオが持っていた機械を取り上げ、その横のスイッチを指差す。

「これは『フォークマン』って言って、音楽を聴く為の道具なの。それで、この『HOLD』が入っていたら、音楽が再生されていないままの場合、いくら他のボタンを押しても、音楽は流れないから」

「再生されていた場合は？」

「いくら真ん中のボタンを押しても、音楽は止まらないですつと流れる。だからすぐに電池がなくなったりするから、音楽を止めてからスイッチを入れないと、ちょっとマズくなるわね。・・・音楽が聴きたかったの？」

「ううん。何なのか分からないから触ってただけ・・・。これ、未佳さんの歌とかも入ってる？」

「え、うん・・・。一応今までののはみんな入ってるけど・・・」

「聴いててもいい？」

「いいけど、程々にね。充電が色々と面倒臭いから・・・」

未佳はそれだけリオに伝えたと、再びピアノの前へと座り、ピアノを指で弾き始めた。

ここで聴いていては邪魔だろうと思ったリオは、一人気を利かせて、未佳の部屋の方へと歩き出す。

一昨日と同じように、ベッドと布団の上に倒れながら、器用に横に寝そべるような形で、イヤホンを耳に入れた。

アーティストでCARNELIAN・eyesを選び、そこから映し出された曲一覧の中から、適当に気になった曲名のものを選択して視聴する。

少し長めの前奏の後に響く声は、紛れもなく坂井未佳の声だった。曲のメロディーやアレンジなどによって七変化する未佳の声に、リオは思わず目を閉じて聴き入る。

ふっとリオは、それぞれの曲の中に、その曲の世界観が広がっていかのような錯覚に襲われた。

哀しみを歌った歌には、リンとした主人公の強さが。生命の神秘を歌った歌には、そのもの達の想いが。

ただ小さな幸せを歌った歌には、ほのぼのとした男女の姿が。

たった1曲5分程度しかない曲の中に、これだけの世界が一瞬にして広がるのだ。

彼らのバンドのファン達はきっと、こうした曲や歌詞などに込められている想いや感情、何処か哀し過ぎる曲にも見え隠れする人の強さなどに惹かれたのだろう。

気が付けばリオは、耳に意識はあるものの、そのままベッドの上で寝息を立ててしまっていた。

1曲5分なのだから、当然時間が過ぎるのも早い。

結局リオは、再び寝ている姿を未佳に見られることになってしまったのだ。

作曲作業を終えた未佳は、ふっと自分の部屋のベッドの上で眠っているリオを見て、思わず苦笑いを浮かべた。

「何よ……。結局聴いてる途中で寝てるじゃない……」

とは言っても、耳だけはまだ意識があるようで、リオは時折足や指をピクピク動かしていた。

よくもまあ、こんな器用なことが出来るものである。

ふっと壁に掛けられている時計を見つめた末佳は、再びそつと溜息を吐いた。

時刻は既に2時過ぎ。

作曲作業に没頭し過ぎて、すっかり昼食の存在を忘れてしまっていた。

「あつ……。またお昼食べ損なった……」

時計を見つめながら、思わず末佳は思っていたことをそのまま口にする。

実は一昨日も、末佳は昼食を食べ損なっていたのだ。
理由は、作曲の録音に没頭していたから。

もつともこうした出来事は、末佳の周りで何度もあったことで、別に今更とやかく騒ぐことではない。

ただ個人的に、今日は普通の生活リズムを送りたかったのだ。

人生最後の、2月だったのだから……。

「まつ、いつか……。……。あと5ヶ月ちよつとね……」

未だに雨脚の勢いが収まらぬ空を窓越しに見上げ、末佳は静かにそう呟いた。

予約死亡期限切れまで

あと 176日

11・大雨のあと

「未佳さん！ 起きてよ！ 仕事の時間！！」

「ふぁ・・・？」

3月を迎えたこの日、未佳は初めてリオに起こされた。リオと共に生活し始めて、早5日目。こんな風にリオに起こされるのは初めてだ。

しかし、肝心の未佳の意識は、まだ眠りの中。

『これでもか』とリオが体を左右に揺するが、全くベッドから起きる気配がない。

実はあの後、未佳はリオと同じベッドで仮眠を取ってしまい、そして起きた後にまた作曲作業を行っていたのだ。

それも、眠くならないのをいいことにかなり遅くまで・・・。

そのツケがこれだ。

リオは呆れつつ、目覚まし時計のベルを未佳の耳元で聞かせる。するとここでもうやく、未佳がもそりと起きた。

「もーう・・・。もう少し眠らせてよ・・・。今日は少し遅めなんだから・・・。」

昨日栗野から掛かってきた電話によれば、今日の仕事は2時40分からで、2時に栗野が迎えに来る予定になっている。

だからもう少し寝させてほしいというのが、今の未佳の希望だったのだが、リオは相変わらず未佳を起こすことを止めない。

それどころか、未だに鳴り続ける目覚まし時計を乱暴に掴み、未佳に見せつけた。

「今何時だと思ってるの？ 未佳さん・・・」

「えっ・・・？ まだ8時05分じゃない・・・」

「本当に8時05分？」

「ええ？ だってその時計が差してる数字・・・」

と言いかけた未佳は、ふっと視界に映った目覚まし時計の針を慌てて見直す。

寝ぼけ眼で見てしまえば、確かに時計の針は8時05分を差しているように見える。

しかしよくよく見直してみれば、時計の長針と単身が示している数字が逆だ。

「えっ？・・・！！ ヤバイッ！！」

ようやく今の時刻が1時40分だと気づき、未佳は慌ててベッドから飛び起きた。

そんな未佳を見つめ、リオは重い溜息を吐く。

「3回も鳴ってたのに・・・」

リオが半分呆れながら言っている間に、未佳は服を着替え、バナナを一本口に頬張り、冷蔵庫に入っていたミルクティーで一気に流し込む。

完全に今までの中で一番マズイ朝食メニューだ。

「一気食いに一気飲みって・・・。アーティストとは到底言えない

ね」

「うふふあい！（うるさい！）」

「飲み込んでから喋りなよ・・・」

「っ・・・！　なんでもつと早くに起こしてくれないのよ！」

「起こしたよ！！」

そうこう言い合っている暇もあまりなく、未佳は歯を磨き終わると、素早くメイクをし、髪をお決まりのポニーテールにまとめる。

髪をまとめ終わると、未佳は鞆をガシツと掴んで、そのまま玄関へと走り出した。

リオの存在なんて、すっかり忘れてしまっている。

「置いて行かないでよ！」

「ええっ！？　・・・もう！　リオ、早く！！」

「未佳さんが遅刻し掛かったんじゃない・・・」

そう呟きながら、リオが慌ててドアを擦り抜けて外に出てみると、まるで叩き付けるかのような雨音が耳に響いた。

昨日の夜中が一番激しかったようだが、今も全く軽い方とは言えない。

現に一足早く玄関から外の通路に出てきた未佳も、そのあまりにも高音な雨音に一瞬驚き、しばしその雨が降り注いでいる外を見つめた。

「しつこい雨ねえ・・・。昨日の夜中よりはマシだけど、でもまだしばらく降りそうね」

「そうだね・・・」

「リオ、昨日の夜中の雨音、気が付いた？」

「窓が閉まってるのにあんなに音が響くんだもん。普通気付くよ」

「・・・そうよね」

実際の話、この雨音も未佳が寝坊した原因の一つだ。

ただでさえ仮眠を取って眠れないというのに、この叩き付けるような雨音も聞こえてきていたおかげで、余計に眠れなかったのである。そればかりか、逆にベランダにあるバラの植木鉢が割れやしないかと、そっちの心配に意識が向いてしまい、到底眠れるような状況ではなかった。

「家が音漏れしない設計になってるのに、そんな家の中にいて雨音が響くなんて、かなりのものよね」

「きつと普通の家で暮らしてる人達は、昨日は余計に眠れなかったと思うよ」

「そうね・・・。あつ、傘！ 傘！」

未佳はそう言っただアを再び開けると、玄関に置いてあった傘立ての中から、ピンク色の細めの傘を取り出した。

傘には焦げ茶色の色で、まるでレースのような模様が描かれている。見るからに女性ものの傘だ。

「傘忘れてたの？」

「そうじゃなくて・・・。ほら。行き帰りは車だけど、降りて歩く時には使っかなあゝって思ったから」

「ああ・・・」

二人はそのままエレベーターに乗り込み、いつも車がやってきていた1階へと向かう。

未佳達が1階に下りたのと、栗野が車の下に到着したのは、ほぼ同時だった。

「未佳さん、おはようございます」

「もう時間的に『こんにちわ』だけだね・・・」

「乗ってください。それにしても・・・、嫌な雨ですね・・・。昨日の夜かなり五月蠅くて、少し寝不足気味なんですよ・・・。未佳さんは？」

「同じく」

そう言ってる間にも、雨はまた一段と激しさを増した。

一応天気予報では、明日は晴れることになっているのだが、ここまですで雨足が強いと逆に疑いたくなる。

大雨の中を走り出した車内で、再び栗野は雨音を聞きながら口を開いた。

「明日は晴れるといいですね・・・」

「ええ・・・。みんなも事務所でそう言ってるんじゃないですか？」

「実は私、まだ今日事務所に行ってなくて・・・」

その栗野の意外な答えに、未佳は『えっ？』と聞き返す。

他のメンバー達が事務所に集まっているのだから、てっきり未佳は、栗野がそこから自宅にやってきたのだと思っていたのだ。

「実は優衣さんを病院に連れて行って、そこからこっちに」

「優衣・・・。ああ！ 小屋木優衣こやき ゆいさんね」

小屋木優衣とは、CARNELIAN・eyesとほぼ同時期に入社した女性アーティストで、CARNELIANと同じくらいの人気があるシンガーアーティストだ。

また彼女のライブなどで、未佳はコーラスを。

長谷川はサポートギターを。

厘は作詞提供を。

手神はキーボードを担当したりしたこともある女性だ。

ここまで人間が揃っていると違和感を感じるだろうが、実は『C A R N E L I A N・eyes』が結成したきっかけは、皆が彼女のライブ演奏等に携わっていたから。

そこで初めて今のメンバー達と出会い、意気投合したのである。

「えっ・・・？ 病院って？ 彼女何かあったの？」

「実はライブの練習中のひな壇で、階段を踏み外したんです。それで、右足首を軽く捻挫」

「ええっ！！ じゃあライブは！？ 大丈夫なの？」

「はい。ライブ自体はまだ1ヶ月以上ありますし、それまでには確実に完治するそうなので・・・」

栗野の話によれば、小屋木は今年の4月に控えていたライブに備え、事前に会場内を確認しようと出向いた際、実際に本番で上り下りを行う予定だったひな壇でバランスを崩し、上から落ちた時に右足を捻挫したとのこと。

落ちた理由は、間隔の狭いひな壇の階段を、ヒールの高い靴で降りたことと、演出上の関係で、足元を見ないようにしていたため。

またその日の照明が暗かったことも、転倒した原因の一つだろうと予想された。

「でもひな壇降りる時は、絶対に前を見てないといけないし・・・。私なんか普通の階段から落ちてあれだったから、正直何とも言えないわね」

「ええ・・・。一応本番では、今回は段数の少ない小さなひな壇を使うことになったみたいですよ。まあ・・・、こんなことが起これば当然ですけど・・・」

「でもひな壇なんて、女性アーティストは特に上りたがるものでしょ？・・・他人事っていうものじゃないわよね・・・」

実は『SAND』に所属するアーティスト達は、女性ヴォーカルが大半を占めているのである。

その為当然、ライブなどでひな壇を使いたがる女性ヴォーカル達も多い。

現に未佳も一度、過去のライブでひな壇を使用したことがある。

あの時は、最初の方はワクワクドキドキ気分だったのだが、それに完全に慣れてしまうと、今度はひな壇の注意事項などをスタッフ達などに散々言われ、あまりライブでは気分良くひな壇を降りた記憶がない。

要は、いい思い出がないのだ。

「それにしても・・・。雨しつこいわねえ・・・」

「ええ。今頃長谷川さん、皆にいじられてるんじゃないですか？」

「そうかもね」

などと、未佳達が呑気に栗野と話していた。
その時だ。

ピリリリ・・・

ピリリリ・・・

「あれ？」

「携帯・・・？」

突然車内から、携帯の電子音が鳴り響いた。

普段栗野の携帯は、車のラジオ設定などの近くに取り付けられてい

る携帯入れの中に入っている。

未佳は後ろの座席からその携帯入れを確認したが、栗野の白い携帯はピクリとも動かない。

でも電子音は鳴り続けている。

「未佳さんの携帯なんじゃ・・・」

「私の？」

そう栗野に言われ、未佳が鞆の中に手をつ突っ込んでみると、案の定、未佳の白い携帯がピカピカと光っていた。

「あつ・・・私のだった。でも、誰？・・・手神さん・・・？」

二つ折りの携帯を開いてみれば、そこに映し出されていたのは手神広人の名前。

栗野を通してではなく、直接未佳に掛けてくるのは珍しかった。

「はい、もしもし？ 坂井です」

『あ、坂井さん？ 手神です』

電話に出てみると、やはり電話の相手は手神だった。

その後ろの方からは、微かに厘のキーボードの音が聞こえてくる。

「手神さん、どうかしたんですか？」

『実は・・・、長谷川君がまだ事務所に来てないんだけど・・・。坂井さん。長谷川君と一緒にいる？』

「えっ？ いいえ・・・。その前に『事務所に来てない』って、確か待ち合わせ時間・・・、いつもと同じ、朝の10時20分なんで

しょ？！　なんでこんな時間まで！」

あの何でもこなし、言われたことは全て素直にやり通す長谷川に
しては、これは到底考えられない遅刻時間だった。

勿論、長谷川がこんな時間になるまで遅刻したことは一度もない。
そればかりか、長谷川は遅刻すらめったにやらない人なのだ。

『だからこっちも「どうしたのかなあ」って思ってた……』

「電車は？　その……、何処かの駅で止まってるのか……」

長谷川の自宅は、事務所のある西長堀駅の隣り駅、西大橋駅の近く。
その為、普段長谷川は電車一本でやってくるか、あるいは車の2パ
ターンだ。

今日は昨日のような残業の予定はないので、おそらく交通ルートは
電車で一駅の方だと思う。

となると遅刻する原因として考えられるのは、長谷川が乗る予定の
電車が止まっていること以外に考えられなかった。

だが……。

『うっん。電車は普通に動いてるし、遅れも何も起こってないんだ
って。それに長谷川君なら、そうなった時は自分の車でやってくる
か、あるいは電話を掛けてきてくれるはずなんだけど……。さっ
きから何回掛けてみても、コールが鳴るだけで……』

手神が言うには、朝10時半あたりからかれこれ6回ほど電話を掛
けていたのだが、どれもコールが鳴ったまま繋がらないのだという。
先程厘も電話を掛けたいのだが、結局長谷川が出ることはなく、
未佳なら何か情報を知っているのではないかと思い、電話をかけた
とのことだった。

（どうしたんだろう・・・）

『坂井さん、何か知ってる？』

「うつん、何も聞いてないけど・・・。あつ、なんなら私、さとつちの家に寄ってみます。寝坊だったら、家で欠伸掻いて寝てるだろうし・・・。見てきます」

『えっ！？ 本当に？ すみません、わざわざ・・・。じゃあ・・・、坂井さん、お願いします』

「あつ・・・、はい。じゃあ、失礼します」

未佳は手神との会話を終了すると、最後部座席から右腕を伸ばし、勝手に栗野の車のカーナビを、事務所設定から長谷川の自宅住所に切り替えた。
いきなり設定を変えられた栗野は、運転しながらただただ驚くばかり。

「ちよつ・・・、ちよつと、未佳さん！」

「さとつちの家に寄って。まだ事務所に来てないんだって・・・。ちよつと心配だから・・・。」

「電話は？」

「出ないのよ。だからちよつと寄って」

「・・・分かりました」

栗野も、未佳の元に掛かってきた手神の電話の内容を悟つたらしく、すぐさまハンドルを左側へときり、長谷川の自宅の方へと向かった。長谷川の自宅ルートは、途中までは未佳と同じ方角。

つまり、未佳が自宅から向かった方が、事務所から長谷川の自宅へ向かうよりも近いのだ。

しばし車に揺られること10分弱。

辺りに5階までしかないアパートが立ち並び始めた場所で、車は止

まった。

未佳に続いてリオが車から降りてみると、目の前には白い5階建てのアパートが一つ、ひっそりと建っていた。

「もしかして・・・、ここ？」

「そう。それでも一応、外に楽器の騒音とかが漏れない造りにはなってるのよ」

「未佳さんの家とはまるで違うね・・・」

「それは余計・・・」

ふつと未佳は、アパートの真下にある駐車場の方に目を向けてみる。もし長谷川が自宅にいとすれば、ここに長谷川の黒いワンボックスカーが止めてあるはず。

だがいくら見渡してみても、長谷川のものらしき黒い車は何処にも見当たらなかった。

だが入れ違いになったようには思えないし、今更連絡もなしに事務所に向かったとも考え難い。

現に未佳の元に、手神や厘からの長谷川到着報告はきていなかった。

未佳は、車を止めて降りてきた栗野の元へと走り寄る。

「車がないのよ。何処にも・・・」

「でも、まだいないとは限りませんし・・・。確か4階でしたよね？ 長谷川さんの自宅」

「はい。その階の・・・、右から3番目の部屋だったはず・・・」

半分曖昧とも取れる記録を頼りに、未佳と栗野、そしてリオはアパートの階段を上っていった。

このアパートには、面倒なことにエレベーターがない。

その為、上り下りは全て階段なのだ。

4階に上り着くと、未佳達は通路を歩き進み、右から3番目のドアの前で立ち止まった。

上の方にある名札には、しっかりとマジックで『長谷川』と書かれている。

「ここ・・・、ですね・・・」

「明かりは・・・、点いてないみたいね・・・」

部屋の明かりなどを確かめながら、栗野はとりあえずインターホンを1回押してみる。

『ピンポン』というお決まりのコールが、3人の方にも大きめに鳴り響く。

「すみませーん！ 未佳さんのマネージャーの栗野です！ 長谷川さーん！ 居ますかー？」

「もしもーし？ さとつち？ みかつぺだけど・・・。いるのー？」

『・・・』

「もしもーし？！ 長谷川さーん！？」

『・・・』

いくら二人が呼び掛けてみても、部屋からの返事は一切返ってこない。

ただただ、静寂と沈黙だけが返ってくるだけだった。

「・・・これだけじゃ分からないから、部屋に入った方がいいかも・・・。栗野さん。さとつちの部屋の合鍵とかって・・・」

「あっ！ 車の中のポーチに・・・。すぐ取ってきます！」

「あ、はい」

未佳の返事を聞いたのかどうかは分からないが、栗野は合い鍵を取るべく、大急ぎで階段を下りていった。

そんな栗野の背中を見送り終えた未佳は、ドアの前で腕を組みながら、ただただ部屋自体を睨み付ける。

その気になれば、今にもドアを蹴り破りそうだ。

「さとつちー！！　いつまで家の中にいる気いー！？」

勿論、大声で問い掛けてみても返事はない。

今日は大事な仕事の時間を割いてまで、こんなところにやってきているのだ。

少しはこちらの苦労や迷惑も考えてほしい。

未佳はそう思いながら、またしてもイライラを募らせた。

「出てこないのなら・・・！　無理矢理このドアを開け」

未佳はそう言い掛けながら、徐にドアノブに手を掛ける。

すると微かに、ドアノブの方から『ガチャッ』という音が聞こえてきた。

何かの聴き間違いだと思った未佳が、下げたドアノブをゆつくりと手前の方に引いてみる。

するとドアは、未佳がドアノブを手前に引く早さに比例するかのように、ゆつくりと未佳の方へと動いた。

信じられないことに、長谷川の家の鍵が開いていたのである。

いつもならしっかりと閉まっているはずの、玄関のドアが・・・。

「るわ・・・、よ・・・。・・・・・・えっ・・・・？　なんで開いてるの・・・。」

少しだけ開いたドアを見つめ未佳は、ふっと疑い眼でリオの方へと首を向ける。

するとリオは、そんな未佳の顔を見返しながら、何度も首を横に振った。

「僕・・・、開けてないよ」

リオのその返事に、未佳は『ホントに？』と、口の動きだけで聞き返した。

だがリオの返事は変わらない。

やがてその回答が偽りでないと理解した未佳は、再びゆつくりとドアを引き開けた。

「さとうちいー！　入るよおー？」

中へ入ってみると、見覚えのある靴が目飛び込んできた。

焦げ茶色の柄のないヒモ靴。

長谷川が普段履いている靴だ。

心なしか、少し濡れているようにも見える。

『ならば』と傘立ての方に視線を向けてみれば、傘立ての中ではなく、ズブ濡れのまま玄関に転がる紺色の傘が一つ・・・。

（家の中にいる・・・）

未佳は僅かながら、そう確信した。

12・3月の病人

（家の中にいる・・・）

そう未佳が確信して奥へと進んでみれば、やや物の置き過ぎで狭くなっているリビングが見えてきた。

リビングのすぐ右側はキッチン。

そしてそのキッチンの前の方にはテーブル。

その周りにはギターが全部で4台ほど転がっていた。

さらにテーブルの上には、昨日の朝食と思われる食器が置きっ放しになっている。

その真下には、見たくはなかった着替えたままの服。

「なんか散らかってるね・・・」

「元々そういう人なんだけど・・・。これはちよつと・・・」

「そういえば・・・、さっき通り過ぎた通路のドアは？」

「左側の二つは、トイレとバスルーム。右側は・・・・・・寝室！」

言うが早いのか、未佳は大急ぎで通路の方へと走り出した。

そして通路の右側にある部屋の前に立つと、未佳は迷うことなく、その部屋のドアノブを引き開ける。

「さとつちー！」

そう叫びながら中へ入ってみれば、そこにはベッドの上で丸くなっている長谷川がいた。

どうやら熟睡しているらしく、未佳の叫び声で起きる気配は全くな

い。

「あ・・・呆れたあ・・・。さとつち!!」

「・・・ん?・・・あれ・・・、坂井さん・・・?」

ようやく起きた長谷川は、寝ぼけ眼で未佳を見つめた。

と同時に『何故彼女がここにいるのだろう』と言いたげな表情を浮かべている。

そんな長谷川の表情に、未佳は再び呆れ返ったかのような表情を浮かべ、口任せに怒鳴った。

「『坂井さん?』じゃないわよ! さとつちいつまで寝てるつもり!? もう事務所入りしてないとマズい時間・・・うん。もうマズいどころの問題じゃない! 本当なら私が事務所に行かないといけない時間なのよ!? 分かる?! さとつちは4時間近くも寝てたのよ?!」

「ああ・・・、もうそんなに・・・」

「はあゝっ?! 何その返事!! さとつち、事の重大さ分かっている?! 私だけじゃなくて、小歩路さんや手神さんにも迷惑掛けるのよ!? しかもギター担当者が寝坊しただけでもよ!? 少しは周りのことも」

と言い掛けて、未佳はふっとあることに気が付いた。

どうもさつきから長谷川の様子がおかしい。

先程から目がしつかりと開かず、なんだかとても虚ろげだ。

おまけにここまで未佳に注意されているにも関わらず、長谷川は布団から一切として身体を出そうとしない。

そればかりか、逆に布団を深く被り直している。

さらにその顔に至っては、両方の頬辺りがほんのりと赤く染まっ
ていて、おまけに息苦しいのか、口元からは『スー・・・スー・・・』
という少々荒い呼吸音が聞こえてくるほど。
明らかにいつもと様子がおかし過ぎる。

「さとつち・・・？ 大丈夫？ なんか顔赤いけど・・・」
「・・・ちよつと・・・、今日、身体怠くて・・・。。。。寒気が
するん・・・、です・・・」
「えっ？ ・・・ちよつといい？」

未佳はそう確認しながら、長谷川の額に右手を当ててみる。
そこから伝わってきた体温に、思わずゾツとした。

「っ！！・・・ヤダッ！ 凄い熱じゃない！！」
「未佳さーん！ あれ？ ドア開いたんですか？」

ようやく合鍵を持って戻ってきた栗野の声が、玄関の方から反響し
たように聞こえてくる。

未佳は即座に立ち上がると、栗野の元へと走り出した。

「栗野さん！」

「あつ、未佳さん。開いたんですか？ ドア・・・」

「最初から開いてたの・・・。！ それよりも大変！！ さとつ
ち熱が・・・！！」

「えっ！？ 熱があるんですか？！」

ここでもうやく、二人は長谷川が事務所にやってこなかったワケを
理解した。

ただ単に、高熱のせいで動けなかったのだ。

「体温測りました？」

「まだ……。でも頭に手を当ててみたら、かなり熱くて……！」

「じゃあ……。未佳さんは体温計を！ 私は氷枕を作っておきま
すから……。！」

「あつ、はい！」

二人はそう言つて分かれ、未佳は寝室に。

栗野は奥のキッチンにある冷蔵庫の方へと向かい、それぞれ割り振
った道具や材料を探し回った。

しかし、思いの外体温計が見つからない。

栗野の氷枕のように、何処にあるのかすぐに分かりやすいものと違
つて、体温計はどの部屋にあるのか分からない。

ただ風邪を引きやすい長谷川のことだから、きっと体温計は取り出
し難いところには仕舞っていないだろう、という予想くらいしかな
かった。

「何処？ 何処にあるの？！ 体温計！」

本当は長谷川に直接訊くのがいいのだろうが、流石に高熱で意識が
朦朧としている人間に尋ねるのには、少々抵抗がある。

さらに言いたくはないのだが、何となく先ほどの未佳の怒鳴り声で、
長谷川の容態が悪化した気もしなくはなく、直のこと尋ねるのには
抵抗があつた。

だがそんなことを思っていたら、いつまで経つても体温計は見つか
らない。

「何処にあるの？！ 部屋が散らかり過ぎてて分からない……！」

「（……………ハァ……………仕方ない。使うしかないか……………）」

」

「ああ！ もうつ・・・！」

「未佳さん。動かないで！」

「えっ？」

その声に驚いて振り返ってみれば、そこには丁度寝室の真ん中に立つ、リオの姿があった。

「リオ・・・？」

「シート・・・静かに・・・」

リオはそう言いながら『静かにするように』と、口元に人差し指を一本だけ立てる。

と、それとほぼ同時に、突然リオの身体が青白く光り出した。

正確には、リオの服に掘られているワッペンのようなマーク。

まるで二つの黒い丸に、二本の細い線が交互に伸びて繋がっているかのような、そんな形のマークなのだが、それが激しく光っているのだ。

と同時に、リオの両目も青白く光り、辺りを時計回りに見渡し始める。

そして、もうじき寝室全体を見渡すであろうところで、ふっと動きを止めた。

やがて身体の発光がおさまると、リオは視線を止めた場所をピシッと指差す。

「あそこ！ あの引き出しの２段目の奥！」

「・・・えっ？ えっ？ あの奥？」

そつりオに言われ、未佳はとりあえず寢室の隅にあつた引き出しの2段目を開けてみる。
するとそこには確かに、未佳が探し求めていた体温計が転がっていた。

「あつ、あつた!!」

未佳は体温計を取り出すや否や、早速それを長谷川の脇に適當に当て、体温を測つてみる。

電子音が鳴るのを待っている間、未佳は微かに衣服の間から見える電号掲示板を何度も見つめた。
見つめる度に、どんどん表示される数字が変わっていく。

そしてそれからしばらくすると、栗野が氷枕を持って戻ってきた。

「体温計は……あつたんですね。体温は？」

「まだ……。今、測つてて」

ピピピッ……

「あつ……」

「鳴つた」

「何度？」

未佳がゆっくりと長谷川の脇から取り出した体温計を、3人はそれぞれ身を乗り出しながら、表示された数字を目で追つた。

「38度……6分」

「マズいわねえ……。見た感じの症状から言つて、インフルエンザではなさそうだけど……」

「仕事どころか、立つのですら無理よ……。これ……」

「未佳さん。私、事務所の方に電話入れてきますから、未佳さんはここにいてください」

「あつ、はい」

栗野は未佳にそう言い残すと、長谷川の自宅の外へと出て行き、外の通路から電話を掛けた。

そんな出て行く途中の栗野の後ろ姿を見つめた未佳は、ふっと長谷川の方に視線を戻す。

「それで？ 何が原因でこうなったのか……。予測は付いてるの？ さとつち」

「ん……。？ ……多分……。風邪やないかと……」

「昨日から風邪気味だったわけ？」

「いえ……。昨日帰る時……。傘差して……。歩いてたんで……。それで……。濡れたから……」

途切れ途切れに返ってきたその意外な発言に、未佳は本日2度目の『はあゝ！？』を口にして、長谷川に聞き返す。

「『傘差して』って……。あなたいつも電車に乗ってるじゃない！ なんてそんな雨が凄いい中を徒歩なんかで……」

「……。終電の電車……。、人身事故で……。止まってしもて……。結局……。走らなかったんですよ……。電車……。」

「えっ……。人身……。事故？ ……じゃ、じやあ、車は？ いつも乗ってる、黒い大きめの車は？」

「……。実家にちょうど……。貸し……。てて……。だから、歩いて……。ここに……」

その後の長谷川の詳しい話によれば、長谷川の実家夫婦がつい最近、広島の方に住む親戚の家に用事でいかなければならなくなったのだという。

しかし、その実家夫婦の家にある車はかなり小さいため、その用事で運ぶための荷物を乗せた段階で、人間が乗る分のスペースが完全になくなってしまふ。

そこで一週間くらい前から、長谷川は少し大きめでもある自分の車を、実家夫婦の方に貸していたというわけだ。

そう言われてよくよく思い返してみれば、確かにそのくらいの時から、仕事場で長谷川の車を見掛けなくなったような気がする。

いつも事務所前の駐車場では、栗野と厘の車の隣り辺りに止まっていたが、ここ1週間くらいはその二人の車以外は誰の車も止まっていない。

(・・・私・・・、何も考えずに怒鳴っちゃった・・・)

今の話でようやく全てを理解した末佳は、黙って長谷川の体に布団を掛け直すと、少し申し訳なさそうに口を開いた。

「・・・・・・・・ゴメン・・・・・・・・。なんか・・・・・・・・、大変、だったんだね・・・・・・・・」

「えっ・・・・・・・・？・・・・・・・・。別にいいですよ、坂井さん。そんな・・・・・・・・。こっちの不注意です・・・・・・・・。それにこうなるのなら・・・・・・・・、終電前に帰ればよかった・・・・・・・・」

「あのねえ・・・・・・・・。予知能力持つてる人間じゃないんだから、予測なんて出来るわけないでしょ？ まっ、終電に乗るような時間帯まで居残るのも、いいとは思わないけど・・・・・・・・」

これどその半面、なんだか長谷川らしいとも思った。

いつも真面目に練習やら、曲製作やらを行っている長谷川は、基本的に事務所にいる間は無駄な時間を作らない。

そして仕事がほぼ無限大のように長引く場合には、とりあえず居残り出来る時間帯まで居残る。

そういう人間だからこそ、今回のような予期せぬ事態が起こったのだろうとは思う。

「まあ……。今度からはこついのを反省すればいいんじゃない？」

「……。車ある時は……。残つてもええとか……。？」

「……。それもちよつと……。あつ……。そう言えばスポーツドリンクとかは？ 冷蔵庫の中とかにある？」

「え？……。ええ……。扉開けるところの、左側の扉の裏に……。飲みかけの……。？」

「分かった。じゃあ……。取ってくるね」

未佳がそう言つて冷蔵庫の方へと向かうと、長谷川は少しだけ開けていた臉を再び下した。

本当は未佳だけでも、事務所の方には行かなければならない日ではあつたのだが、今は状況も状況だ。

（看病だけで1日が過ぎるのも……。別にいいかな……。）

長谷川に言われた方の冷蔵庫の扉を開けながら、未佳は少しばかり、そう思った。

13・疎遠ではないこと

未佳が長谷川の冷蔵庫からスポーツ飲料水を持って行くのと、栗野の事務所との電話が終わったのは、ほぼ同時だった。

長谷川の寝室に戻ったところで帰ってきた栗野に、未佳は恐る恐る問い掛ける。

「栗野さん……。事務所側はなんて？」

「ええ。今日はギターがないとどうにもならないから、未佳さんも事務所には来なくていいって。今日は一応大事を取って、長谷川さんを休ませた方がよさそうだから……」

「じゃあ、つまり……。今日は完全な『休み』ってことね」

「……。すみません……。こっちが風邪引いたせいで……。坂井さんまで……」

そう言っすまなそうな表情を浮かべる長谷川に、未佳は再び呆れ返った。

「何言ってんのよ。人間生きてれば、風邪で高熱は当たり前でしょ」
「そうですよ。それに今日は元々、小歩路さんも手神さんも、バンド活動以外に用事があったんで、事務所には出勤しないといけなかったんです。だからあの二人を気にする必要もないですよ。ついでに本音を言わせてしまえば、私はあなた達がデビューしたばかりの頃が、一番大変でしたし……」

それを聞いた未佳の脳裏に、デビューしたばかりの自分達が浮かぶあの頃は『「SAND」にNew Artist誕生』と騒がれ、しょっちゅうテレビやラジオ番組、音楽雑誌のインタビューや楽曲製作を、半場無理矢理にやらされた。

つまり今みたいに『自由な時に曲を作る』などのことが出来なかったのである。

そしてその忙しさのあまり起こった出来事が、メンバー達のパンデミック的な体調不良。

リーダーである手神は、吐血により一週間入院。

長谷川も少々疲れが胃に溜まってしまったらしく、それによって起こった腹痛などの体調不良で3日間入院。

そしてヴォーカルの未佳も、過労による眩暈などによって階段を踏み外し、右足を骨折。

一番何もなく製作に熱心だったのは厘だったが、やはり寝不足や過労が重なったせいで、歌詞が中々思いつかず、楽曲製作が大幅にスローダウン。

要は遠巻きの死活問題が起こってしまったのだ。

そしてその時に一番苦勞していたのは、確かにマネージャーの栗野である。

何せ手神と長谷川が過勞でダウンしたのは、未佳が右足を骨折してすぐ。

つまり、未佳が骨折により入院し始めた時期と、長谷川と手神がダウンした時期はほぼ一緒に起こったのだ。

その為栗野はほぼ毎日、同じ病院であるにも関わらず違う階、違う病室で入院している3人の見舞いを、たった一人で行う羽目になっていたのである。

「あの・・・、その時にほぼ毎日・・・、小歩路さんと飲んでたって・・・、本当・・・ですか?・・・」

「そうよ?　むしろ飲まないとやってられなかったわよー。だってあなた達、入院してる病院は一緒なのに、階と病室がみんな違うんだもの。未佳さんなんてただ一人、骨折のせいで整骨科がある最

上階の病室で入院してたから、あの時は何回エレベーターや階段を上り下りしたことやら・・・」

「すみません・・・」

「まあ・・・、当時はそんな感じだったし・・・。だから今日は軽い方ですよ。それに、ほら。最近手神さんも風邪を拗らせて休みましたし・・・」

「あれ？ でもアレって、確か・・・。インフルだったんじゃない？」

「あつ・・・、そう言えばそうでしたね・・・」

実は今年の初め頃に、リーダーでもある手神がインフルエンザによって倒れ、しばし新曲製作がストップしたことがあった。

それに比べれば、今回は単なる風邪。

多かれ少なかれ、インフルエンザほどの時間は取らないはずである。

「でも、熱自体は家に着いた時から出てたみたいだね」

「えっ・・・？」

「傘立ての中に傘は入ってなかったし、朝脱いだ服と朝食の食器は出し放し・・・。さとうち普段、朝起きて朝食を食べ終わったら、そのままギターを弾いてるんでしょ？ それで時間がマズくなつてから、服を着替えて慌てて家を出て行くから、片付けるのは家に帰ってから・・・。それがそのままになつて、傘立てに傘を仕舞う気力がなかったってことは、昨日帰った時から熱っぽくて、寝室にそのまま入ったから、リビングには一切行っていない。そうでしょ？」

「・・・」

まるで全てを見ていたかのようにピタリと言い当てた末佳に、長谷川はただただ目をパチクリさせた。

熱が出始めていたことを言い当てたのも凄いが、何より驚いたのは、長谷川のいつもの習慣を言い当てたこと。

未佳から言わせてもらえば、随分前に手神にそう話していたのを聞いていただけなのだが、それが長谷川には非常に驚いたことだったらしい。

「なんでそこまで・・・？」

「『なんで？』って・・・。前に手神さんとそんな話してたから・・・」

「でも未佳さん。あなたまるで探偵みたいよ？」

「えっ？・・・あゝ、ほら！ 私いつも『DETECTIVE ドイル』見てるから・・・、それのおかげで推理力が付いたの力モ？」

『DETECTIVE ドイル』とは、月曜の午後7時30分から放送されている探偵アニメで、かれこれテレビ放送が12周年目になる番組だ。

小学生探偵のドイル・エドガーが、自分の周りなどで起こった事件を次々と解決していくそのストーリーは、子供のみならず大人達の中にもコワなファンがいるほど。

もともと未佳がそのアニメを見ている理由は、単にややドイルオタクなのと、そのアニメが『SAND』と契約を交わしている番組だから。

その為よく『SAND』のアーティスト達が、このアニメの主題歌を担当したりしているのだ。

勿論未佳達のバンドも、過去に何度かエンディングやオープニングを担当したりしたことがある。

さらに今年は事務所側とアニメ関係者側の意向により、映画版の方も初めて担当する予定だ。

「ところで人身事故って・・・、昨日ありましたっけ？」

「えっ？」

「いや、その・・・。実は昨日、さとうちが終電で帰ろうと思ったら、電車が止まって帰れなかったって・・・」

「電車・・・・・・・・！　もしかして・・・・・・・・！！」

栗野はハッとしたようにそう叫ぶと、何を思ったのか、一目散に玄関の方へと走り出した。

そこから栗野が引つ張り出てきたのは、長谷川の家ポストに入っていた朝刊の新聞紙。

「ここに載ってるやつじゃないかしら・・・・。ほら、この記事！」

そう言つて栗野が指差す小さな記事に、未佳は視線を向けた。

そこには、見出しにハッキリと『人飛び込み終電走らず』と書かれている。

日付は昨日の午後１１時５７分で、場所は大阪の西大橋駅と西長駅の間。

つまり、普段長谷川が事務所から帰る時に乗ってる電車で、この人身事故が起こったのだ。

それも、長谷川の自宅と事務所の間で。

「ほら！　ここに『処理時間で手間取った為、止む無く終電の運行を諦めた』って、書いてあるでしょ？！　きつとこれよ！　時間も合ってるし・・・」

「『死亡したのは、大橋駅近くに住んでいた３０代の女性。この女性の知人の話によれば、女性はつい最近リストラによって無職になつており、家族にも勘当されていたなどの情報から、警察は先行き不安からの自殺とみて、捜査を行っている』か・・・」

「リストラで飛び込みなんて・・・・。まだ何かやれたはずなのに・・・」

」

（・・・もつとも私は・・・、人のことなんて何にも言えないんだけどね・・・。特にこの、自殺した女性のことは・・・）

記事を声に出して読んだ時、未佳には一瞬だけ、この女性が自分のように思えた。

勿論、完全に似た者同士だと思っただけではない。

自殺した理由に関しては、未佳のとはまるで異なる。だがその半面、何処か自分と似たものを感じたのだ。

先行きの不安からの飛び込み自殺。

それが一番、未佳には親近性を感じさせられた。

（きっとこの女性も・・・、私と同じくらい・・・。あるいはそれ以上に悩んだんだよね・・・）

「未佳さん？　どうかしました？」

「えっ？　いえ、なんでも・・・」

そう言い返して新聞を栗野に手渡すと、未佳は『そう言えば』と、再び長谷川の方に視線を向けた。

「あつ、そういえばさとつち。風邪薬が何か、家の中にある？」

「・・・一応・・・、救急箱の中に・・・。今までもらった薬の余り・・・、入ってますけど・・・」

「救急箱は？　どこ？」

「リビングの・・・、茶色い箆笥の・・・、上の引き出し・・・。

その中に、・・・入ってます」

「分かった。取ってくるね」

流石に薬くらいは飲ませなければ、風邪の回復は早まらないだろう。そう思った末佳はリビングへと向かい、長谷川に言われた通りに、茶色い箆笥を探し始めた。

『箆笥』と聞いて、てっきり漆塗りの大きな箆笥があるのだと思っていたのだが、リビングをいくから見渡してみても、そんな家具は何処にも見当たらない。

おかしいと思い首を傾げつつ、ふっと真下の方に目をやると、テレビの隣りにようやくそれらしいものを発見した。

しかしその大きさは、末佳の膝くらいの高さしかない。

『箆笥』というよりは『物入れ』だ。

「これが箆笥うゝ？ どう考えても黒い物入れ箱じゃない」

「『漆塗り』は当たってたけどね」

「しかもこんな小さな入れ物じゃあ、中に入ってる薬道具とかも・
」

そう思い引き出しのあちらこちらを開けてみると、なにやら色々詰まっていた。

引き出しは全部で4つ。

その内の上二つは、下の段の引き出しの半分くらいのサイズしかない。

そして順番に開けてみると、1段目は包帯や消毒液、ガーゼやアルコールなどが入っていた。

緊急時の時などに開ける引き出しなのだろう。

2段目の中には、ティッシュやクリーム系のもの、そして虫刺され用の薬などが入っていた。

「・・・夏用？」

「さあ？」

さらに上の半分になっている右側の中には、ピンセットやハサミ、綿棒や何故か待ち針が入っている。

どうやらこれは、手当て用の道具入れらしい。

「待ち針なんて何に使うのよ」

「棘が指とかに刺さった時じゃない？ 人間ってそういう時、針で取るんでしょ？」

「置すらないこの家で一体何が刺さるのよお」

そんなことを呟きつつ、最後の左側の引き出しを開けてみると、開けた瞬間大量の白い紙袋が出てきた。

その一氣にドサツと出てきた薬袋の数に、未佳は一瞬ドキリとする。

「なっ・・・、何よ?! これ・・・?」

「長谷川さん。風邪引く度に、病院で同じ薬もらってたんだね。みんな中身同じやつだし・・・」

リオの言う通り、薬袋の中に入っていたのは、みな同じ風邪薬だった。

その時々で残量は違っていたが、どうやら薬を残しておいたまま、また次の薬をもらいに行っていたらしい。

「これを渡せば？ 全部風邪薬だし・・・。早めに下がると思うよ。それに、また病院なんかでもらってきてても、結局余りの薬が溜まって困るだけだろうし・・・」

「もっうつ!! さとつち器用なくせに、ホーントにだらしがないんだから!!」

などとブツブツ呟きつつも、ちゃんと薬を持っていくところが、未佳のいいところだ。

早速未佳は、長谷川に持ってきた薬を飲ませようとしたのだが、ふっとあることが脳裏を過り、その手ピタリと止める。

確か長谷川はさっき『昨日は帰ってから、一切リビングには行っていない』と言っていた。

ということは、食事を朝から取っていない計算になる。

「さとつち。朝ごはんとか、何か食べた？」

「いいえ……。食欲ないんで……。さっきの、スポーツドリンクしか、今日は……」

「何か食べてからじゃないと、薬は……。飲ませられないんじゃない？」

確かに栗野の言う通りだ。

朝からドリンクしか口にしていない長谷川の身体に、いきなりこんな風邪薬を飲ませてしまったら、かえって風邪の病状を悪化させてしまうだろう。

飲ませる為には、とりあえずなのかを食べさせなければならないのだが、そう上手くいかないのが風邪のとき。

特に高熱で食欲が落ちている時は、かなり厄介だ。

何せ食欲がないだけでなく、胃の分解消化作用でさえも弱まってしまっているの、食べられそうなものはかなり限られてしまう。

『どうにか、食欲がなくても食べられそうな料理はないものか』と、未佳はひたすら頭を捻り続け、そして唐突に小さく『あっ』と声を漏らした。

「なんならさつつち。私がお昼ご飯作るよ。玉子がゆ。それなら食べられるでしょ?」

「えっ……? でも材料」

「大丈夫! 冷ご飯と卵と小ネギさえあれば、ちゃんと作れるから。ごめんね。さつきドリンク取りに行った時に、冷蔵庫とお釜の中見ちゃった」 すぐ作るから、ちよつと待ってて」

そう言うが早いか、未佳はすたこらさつさと、キッチンの方へと走り出す。

後ろでリオと長谷川が『抜け目ない』と呟いたことにも気付かずに……。

しばし未佳がキッチンで材料を取り出していると、先程まで長谷川の看病をしていた栗野もとやってきた。

「手伝います。私は一応、お二人のマナージャーでもありますから」

「あつ、ありがとうございます! じゃあ……、土鍋の方を。お粥の時よりも、水を少し多めに」

「多めに……、ですか?」

最初から水を多めにしなくてはいけないのは分かっていたのだが『お粥の時よりも多めに』とは、一体どういうことだろう。

そもそも『そんなに水を多めにして大丈夫なものか』と、栗野はやや不安になった。

少々その指示が心配になった栗野は、未佳に指示の内容を聞き返す。

「あの……、未佳さん。でもお粥って……、元々水が多いでしょう? それなのに、余計に水を多めにするんですか?」

栗野が不安げにそう尋ねると、未佳はこんな意外な答えを返してき

た。

「水を多めにとすると、玉子が少し硬めの塊じゃなくて、玉子スープみたいにフワツてなるんです」

「ああ〜っ！ よくなります！ 土鍋で普通に卵を入れると、それが硬くなって落し蓋みたいに・・・」

「そうそう。それが水を多めにとらないから、私よく家で雑炊とか作る時にやってて。今のさとうちには、そっちの方が食べやすいだろうし・・・」

「へえー・・・。私かれこれ20年以上自炊してるけど、玉子が落とし蓋にならない方法なんて、初めて聞いたわあー・・・」

「単にこっちも、偶然知ったんですけどね。偶々間違つて水を多めにしたら、そうなっちゃったんで・・・」

「へえー。今度家でやってみよ」

「はい。是非参考につて・・・。あゝっ！ それよりも作るのやらないと・・・!!」

「あつ・・・。そうでしたね・・・」

ハツと本来の目的を思い出した二人は、お互いにそれぞれアイデアを出しつつ、急いで玉子がゆ作りを再開させた。

そしてそれから約1時間後。

長谷川が風邪薬を服用したのを確認した後、二人と一人は、長谷川の自宅を後にした。

予約死亡期限切れまで

あと 175日

14・コーラスの仕事

長谷川が風邪でダウンした翌日。

この日も未佳は、栗野の車に揺られながら『SAND』へと向かっていた。

ちなみに今日の仕事は、この間の新曲製作の続きではない。そもそも長谷川がいなくては、その仕事は出来ないのだ。

今日の未佳の仕事は、未佳にとっては久々である、他バンドのライブコーラス練習。

誰のバンドのライブかと言うと、昨日栗野が病院へ連れていった、あの人気女性シンガー、小屋木結衣のライブだ。

実は今年の4月16日で、小屋木はアーティスト活動10周年目を突破する予定なのである。

そこで持ち上がった話が、10周年記念のライブツアーを行おうというもの。

ところが、ツアーの途中までコーラスをやっていた3人組のスケジュールが、偶然にも小屋木のライブ最終公演日と、同時進行で行われていた他バンドのライブ公演日に重なってしまったのである。

その際、優先順位が他バンドのライブの方になってしまった為、事務所内ではコーラス探して大騒ぎ。

その甲斐あって、何とか二人は見つかったのだが、コーラスは3人いなければどうにもならない。

そこで白羽の矢が立ったのが、CARNELIAN・eyesの未佳だった。

何故なら、未佳はバンドが結成する前、何度も小屋木のライブでコーラスを行った経験があったからである。

元々高い声を出すのは苦手だったが、マイクに響かせるように高音を発するのは得意だった未佳にとって、コーラスの仕事は造作もないこと。

ただ一つ不安なことと言ったら、コーラスの声が昔と変わっていないかどうか。

何せ、小屋木のライブでコーラスを担当したのは、今からざっと10年前のこと。

しかもその後は、誰のコーラスも担当していない。

（出るかなあー……。声……）

なんて心配している間に、車はいつもと同じように、事務所の前で止まった。

今日はいつもの4階ではなく、ライブハウスがある6階。

予約死亡になったあの日、未佳がPV撮影の為に入っていた部屋だ。

エレベーターで6階へ向かっていると、微かにギターとドラムの音が聞こえてくる。

やがて6階に着いて扉が開くと、その音はかなりハッキリとしたものに変わった。

「相変わらず……。ドラムとギターの音がよく響くはねえー……」

「確かに……。これでも一応騒音対策はされてるんですけど、基準よりもドラムとかの音の方が響くみたいで……」

「まあ……。ライブ練習用の部屋だしねえー……」

「（うるさい……）」

さらにその階の通路を奥へと進み、ライブハウスの扉を開けてみれば、その騒音はピークに達した。

未佳と栗野はライブで慣れているが、リオにとってはただの騒音。思わずリオは、両手で耳を塞いだ。

「っ！！」

「・・・ん？ あれ？ リオ、どうしたの？」

「うるさいよ！ これ！！」

耳を塞ぎながら必死にそう怒鳴ってみれば、逆に未佳はそんなリオを見てクスクスと笑っている。

『本当にいい性格をしているな』と、リオは怒り眼を未佳に向けながらそう思った。

「考えてみたら、リオ。ライブは初めてだったね」

「初めてじゃなくても慣れないよ！！」

「そう思うでしょ？ でも1日に何回も聴いてると、慣れちゃうんだよね。これが」

「慣れないっ！！」

「未佳さん！ 行きますよー？」

「あ、はい！ じゃあそこに居たら？ 私あっちに行ってるから」

未佳はリオにそう伝え、栗野のいる方へと走り出した。

今のここは、お互いに大声を出さなければ会話すら出来ない空間だ。少しでもお互いが離れてしまったら、いざ大声で相手の名を呼んでも、相手に届くころにはその声は小さくなってしまっている。

そして小さくなってしまった声は、たちまちドラムの音に消されてしまうのだ。

その為メンバーやスタッフ達は、練習中はリハーサル以外、お互いの距離を最低1メートル以上は離れないようにしている。
栗野の今の大声は完全に、未佳が栗野の後ろを付いてきていなかったのが原因だ。

「すみません……！」

「ところで……誰かと話してたんですか？ 出入り口の前で、中腰になってましたけど……」

「えっ?! あっ……いえ……。なんでも」

「そう? ……じゃあ、行きますよ?」

「あっ……。はい」

未佳と栗野が前の方へと進んでみれば、ようやくライブステージの全体図が見えてきた。

現在未佳達が行っている位置は、当日観客席になる予定の場所だ。そこから見て左側は、キーボード、ギター、サポートギターが並び、どうやら今回は、ストリングスがいないらしい。

ステージの真ん中は、当然のことながら小屋木の立ち位置。
そのやや左後ろの方には、先程からリオに不評だったドラムが置かれている。

そして右側の前の方にはベースギター。

その後ろの方には、設置された固定マイクが全3本……。

「あれがコーラスマイクね……。なんか右側、スペース空いてない?」

「そこにひな壇を置く予定なんで……。今は少し空いているんです」

「あ、なるほどね・・・」

理由が分かったところで、未佳達はステージの裏へと回った。ステージは段ボールや機材などが散乱し、かなり散らかっている。何処のライブステージのリハーサルでもそうなのだが、大半はこんな風になっていることがほとんどだ。

（こっちも相変わらずねえ・・・）

「みなさん！ コーラスの坂井未佳さん、入りましたー！」

「はい！！ じゃあ、一旦休憩！」

「全員休憩！！」

未佳が入ってきたのとほぼ同時に、スタッフやサポートメンバー達は、一先ずの休憩となった。

実は朝の10時から、かれこれ30分ほど、楽曲演奏メンバーはやりっ放しだったのである。

その証拠に『休憩』と聞くや否や、サポートメンバー達は楽器から手を離し、その場に座り込んだ。

そんなサポートメンバーのほとんどは、未佳とはライバルで顔馴染みの人達ばかり。

未佳を見るなり、皆は代わる代わるに頭を下げた。

「あ、坂井さん」

「みかっぺ、おはようございます」

「おはようございます。今回はコーラス役ですけど、どうぞよろしくお願いします」

未佳も礼儀よく、サポートメンバー一人ひとりに頭を下げる。彼女に声を掛けられたのは、その直後だった。

「あれ？ 坂井さん・・・？」
「えっ？・・・あつ」

声を掛けられた方に視線を向けてみれば、そこにはこのライブの花でもあるヴォーカル、小屋木結衣が立っていた。

そんな小屋木の姿を見て、未佳は半分驚きのあまりその場に固まる。

彼女が病院ではなく事務所に来ていることにも驚いたが、それよりも捻挫をしている足で普通にその場に突っ立っていることの方が、未佳にはかなり衝撃的だったのだろう。

未佳が彼女に最初に発した言葉は、かなり意味深なものになってしまっていた。

「小屋木さん・・・！！ 立てるの？！」
「えっ？・・・いやだ、未佳さん。立てないと思ってたんですか？」

「だって・・・！ 足捻挫して病院に行っただって聞いたから・・・。てつきり軽くても立てないんだと思って・・・！！」

「少しズキッとする程度ですから、松葉杖ですら病院でもらいませんでしたよ？」

とは言っても、やはり何もなくていい程度のものではないらしく、小屋木の右足首には微かに湿布らしきものが貼られていた。

さらにその上からは、何重にも包帯が巻かれている。少しその右足が床よりも浮いているのは、そのせいだろうか。

「そういえばひな壇、どうなったの？」

「ああ・・・。実は止めたんです」

「えっ！？ でも栗野さんが『小さめのでやる』って・・・」

「・・・実は・・・、ちょっと今回の恐怖心が・・・」

「でも・・・。これまでの公演全部、ひな壇を使ってたのに？ いくらなんでも『最終公演で使うの止める』って・・・」

「それだけじゃないんです。そのひな壇も、かなり考えもので・・・」

そう言うと、小屋木は『こっちに来てください』と、未佳を小道具置場へと案内した。

小道具置場には基本、ライブステージの装飾品などが置かれている。ミラーボールやシャンデリア、リボンや風船など、その数や種類は様々だ。

そしてその問題の代物は、小道具置場の一番奥の方にひっそりと、他の大きな飾りなどと一緒に置かれていた。

「これが捻挫したひな壇です」

「・・・高っ！」

未佳がそう言いたくなるのも無理はなかった。

そのひな壇は、高さ約5メートル。

横幅は大体2メートルくらいだろうか。

そして未佳をもっと驚かせたのは、そのひな壇の段数。

なんとほぼ直角に等しい形で、計17段もあったのだ。

その階段は確実に、このひな壇の高さに比例していない。

そればかりか、この階段に足を掛ければ、間違いなく身体は直角になるだろう。

そんな体勢で、この階段を上り下りできるかどうかも疑問なところ

だ。

少なくとも未佳自身は『私には出来ない』と確信した。

「これ・・・、清水の三年坂よりあるわよ」

「さすが元京都在住者・・・。たとえば違いますね」

「あなたも京都でしょ？　・・・ところで、過去に使った人いるの？　コレ・・・」

「えっ」と・・・。確かKatanaさんとか、DEELさんとかがライブやプロモーションで・・・」

（全員男性アーティストね・・・）

内心、過去に使った人がいたという事実には驚いたが、使った人間のほとんどが男性アーティストなのであれば『まあ派手な演出として使うだろうな』と、少々納得してしまった。

それに、実際にコレを使用したにしろ、階段を下りたのかどうかは不明だ。

単なるPV撮影なのであれば、この階段に腰を掛けたり、足元を見ながら、1〜2段下りるくらいだろう。

ライブにしたって、実際は飾るだけだったという可能性もある。

「まさか全部の公演、コレ使ったの？」

「いいえ！　最初は普通の3メートルで段数8段の、横に大きなひな壇を使ってたんです」

「ああ。一番みんなが使うやつ？」

「ええ。でも最終公演の時に調べてみたら、コレを別の方がライブで使うことになって・・・。日にちが最終公演と被ってたんですけど、私の方が予約が遅れていたからって、向こうが優先されて・・・！」

「なんか事務所側もしっかりしてほしいわねえ」。小道具の予約く

らい、細かくメモっておけばいいのに・・・」

ふっとそう呟いた末佳は、その話の中に出てきたひな壇が、昔自分が使ったものと微妙に違うことに気が付いた。

確か末佳が以前使ったものは、高さが約5メートル。

横幅は約7メートル。

段数は計5段の、かなり横に広く大きなものだ。

見た目的に『ひな壇』というよりは、段々畑のような形をしていたが、アレを使うのでは駄目なのだろうか。

それ以外にも、手頃な高さで段数のひな壇はいくらでもあったはず。

「ねえ。最初に使ってたのよりも、段数が少し多いのとか、少ないのとかはダメなの？　いつか使えそうなの・・・、まだあるでしょ？」

「それがないんです。・・・ある方がライブで全部使っているので・

・・・」

「はっ？　誰が？」

「・・・Z' bさん」

『Z' b』とは『S A N D』で今一番売れている男性二人組のロックバンドのことで、末佳達の大先輩だ。

メンバーは作詞&ヴォーカルの藁草泰史わらぐさやすしと、作曲&ギターの杉本知弘すぎもとともひろの二人しかいないが、そのヴォーカルの高い歌声や、ギターやドラムなどの激しい且つノリのある曲は、国内だけでなく海外でも、多くのファンがいるほどだ。

また、彼らのCDやDVDの売り上げ枚数なども計り知れないほどで、これまでに何度かランキングなどで10位内を記録したこともある。

だが彼らのライブスタイルと言えば、基本爆竹や花火などの火薬系
のものをステージで爆発させ、一気に観客を沸かせるやり方が主流
だったはず。

ライブステージでひな壇を大量に使用するやり方は、どう考えても
これまでの彼らのやり方ではない。

「いや、要らないでしょ?! あの人達ひな壇なんて・・・」

「それが・・・。なんか今回のライブで、ひな壇をピラミッドみた
いに積み上げて、その上で歌うんだそうで・・・。それで、ひな壇
を大量に使用するんだそうです」

（相変わらずというか・・・。派手だなあ・・・）

小屋木から聞かされたその内容に、未佳はただただ苦笑した。
というよりも、呆れた。

派手な演出などはデビュー当時から変わらないのだが、もう少しこ
ちら側のことも考えてほしいものだ。

そしてそれと同じくらいに、事務所側ももう少し小道具を増やして
ほしいものである。

基本スタジオ内で起こるいざごさは、大半が小道具によるもの。
それはとくに事務所側も知り尽くしていることだとは思いつし、知
り尽くしているのなら尚のこと、小道具を増やすべきだと思う。

「そういう風に使う人も多かれ少なかれているんだから、小道具の品
数増やせばいいのに・・・」

「無理ですよ。今は予算的に全体が厳しいんですから・・・。これ
が事務所は精一杯なんだろうし・・・」

「ねえ・・・。やつぱりZ、bさん達に、ひな壇返してもらうつよう
に頼んだら?」

「えっ? でも・・・」

「せつかくの10周年ライブなのに、最終公演だけがひな壇使えないなんて悲しいでしょ？・・・ファン達にとっても・・・」

この事務所にあるひな壇は、全部で8個。

その内の7個を使い占められて、しかも唯一残されているのが、一番扱いに困るひな壇なのはおかしい気がする。

ましてや今年は、未佳達や小屋木も含め、10周年目を迎えたバンドやアーティストが5組もいるのだ。

ただでさえ少ない小道具の争奪戦になることは目に見えているのに、それを使い占められるのは理不尽すぎる。

「・・・・・・・・ねえ」

「・・・・うん・・・・。そうですね・・・・。私、マネージャーと二人で、Z、bさんにひな壇を返してもらうように頼んでみます。私は自分で納得しちゃいましたけど・・・・、やっぱりファン達の気持ちだけは、絶対に裏切っちゃいけませんよね」

「そうそう。あつ、休憩終わってた？」

ふつと視線をステージの方へ戻した未佳は、ステージの方へ戻した未佳は、サポメン達が再び楽器を弾き始めているのに気が付いた。さらにいつの間にかやってきていたのか、未佳の隣りに立つ予定でもあるコーラス二人組までスタンバイしている。

そんなライブメンバーの姿を見て、未佳や小屋木は大急ぎでステージ上へと向かった。

そして二人がステージに上がると、すぐさまベースギターの湯盛雅人^{ゆもり ま}、通称『まっちゃん』が、未佳達にコーラスの合図を送った。

「ここで『h a - - - - -』をサビが終わるまで。サビの終わりとかは・・・・」

「あつ……、分かります」

「じゃあ……、コーラスから入りますか？」

そう湯盛がサポートギターのおがわまさのぶ小河雅修に尋ねると、小河はギターを弾きながら何度も頷いて見せた。

「どうやら『はい』という意味らしい。」

「じゃあ、みかっぺ！　ここからね！」

「あつ、はい」

「小屋木さんもスタンバイ、お願いします！」

「分かりました」

こうして行われたコーラスとヴォーカルの発声練習は、湯盛のイングリッシュカウントに合わせて、午後3時過ぎまで行われた。

15 アポなし訪問

「haa・・・ haa・・・！ haaaアアアアッ・・・
。 やっぱり前より声、低くなってるかも・・・」

「10年経てば、みんな大体そうですよ」

「そんなもん？」

かれこれ3時間以上練習を行っているが、未佳の声は一切として変
わらないし、途切れない。

アーティストの命とも言える喉の強さに関しては、未佳は誰にも負けない自信があつた。

それこそデビュー当時から……。

しかしその半面、自分の声が途轍もなく低くなりつつあるのにも、未佳は薄々感付いていた。

このことを言えば、周りの人達は判を押したように『みんなそうですよ』と答えるだろう。

だが正直未佳から言わせてもらえば『余計に女性の声ではないと思われのではないか』と、逆に不安を煽っているに等しいのだ。

未佳はデビューした時から、歌だけを聴いていた人達に『青年が歌っている』と勘違いされ続けてきた。

中には長谷川がヴォーカルだと思い込んでいた人もいたし、もつと度を越えたものでは、初めて『DETECTIVE ドイル』に曲が使われた際、そのアニメを見ていた人達から『ドイルの声をやっている人?』と、会ったこともない人と間違われたこともある。

一応ドイルの声優は女性が行っていたのだが、どうも声の低さ加減が未佳の歌声とかなり似通っていたらしく、終いにはアニメで曲が使われる度に、その内容のメッセージが事務所に届くようにまでな

っていた。

これには流石の未佳も、しばしショックを抱え込むような形になってしまったのは言うまでもないこと。

ましてや最初の頃は『少し低いけど、二十歳の女性の声』だと思い込んでいたのだから、尚更のことである。

そして今日、ここでコーラスを行ってみて、さらに自分の声が男性寄りになっていることに落胆した。

そういう部分が好きな人も、多かれ少なかれファンの中にはいるのだろうが、個人的には複雑な心境だ。

「私……。余計に男性の声になってるような気がするんだけど・

」

「ああ……。」

「ああ〜！ 大丈夫♪ 大丈夫♪ みかっぺ、ちゃんと性別が女性なんだから。出る場所も出てるし」

「えっ？！」

「まーちゃん！ 何処見てるんですかっ！！」

湯盛の半分マズイ発言に、即座にサポートギターの小河が注意した。実の話をすると、湯盛は温泉地や銭湯が大好きな人間として事務所でも有名なのだが、それとほぼ同類ぐらいに女性好きなのだ。

その為時折周りから『やらしいこと考えるな』と注意されることもある。

ちなみに未佳自身はどう思っているのかと言うと、そこまで湯盛のことは嫌っていない。

『やらしい発言』と言っても、周りに注意などをされて、大体はこの程度で終わるのだ。

「全く……。今回はメンツがコレだったからよかったですけど、もし小歩路さんとか長谷川さん達が居たら、今頃シバかれてますよ！？　ねえ？！」

「は、はあー……。」

「そういえば、さとつちはどうしたの？　今日本当は一緒に練習する予定だったと思うんだけど……。」

どうやら湯盛達は、長谷川が仕事を休んでいる理由を、事務所側から一切聞いていないようだった。

おそらく、栗野がまだ伝えていないのだろう。

そんなことを思いながら、未佳は長谷川が休んでいる理由を、サラッと口にした。

「さとつち、風邪」

「えっ？　風邪？」

「うん。昨日事務所にやってこなかったから、栗野さんと一緒に家に行ってみたの。そしたらすごい高熱で……。」

「えっ？　……。大丈夫なんですか？」

「あー、平気。平気。さとつち、いっつも風邪は引きやすいけど、治りは早いから。もう大分下がってるんじゃない？」

未佳が言った通り、長谷川は風邪を引きやすい身体ではあるが、それを治すのはかなり早い。

元々長谷川の回復力が強いのか、それとも風邪薬がかなり効くのか、その辺に関してはイマイチよく分からないが、とにかく治りが早いのだ。

前にもインフルエンザに掛かった時も、それをほぼ2日で治したこ

ともある。

もっともその時は、インフルエンザの感染力がなくなる期間まで強制休養させていたので、本当に2日間で直したのかどうかは定かではないが。

「じゃあ・・・。今日はこれでお開きということで・・・。」

「あ、はい」

「お疲れ様でしたー」

「お疲れー」

まだライブまで日がないわけでもないのに、この日はお開きとなった。

すぐさま末佳は、入り口付近で待っているであろうリオと栗野の元へと向かう。

まず最初に会ったのは、入り口の扉の前で蹲っていたリオだ。

「リオ、終わったよ。帰ろ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・リオ？」

寝ているのか、はたまたドラムの音で耳がやられたのか、リオはいくら末佳が呼び掛けても返事を返さない。

かと言ってこれ以上大きな声を出せば、周りに変な目で見られてしまう。

末佳が仕方なく、手が擦り抜けることを願って、リオの身体を揺すった。

「リオ！？ 聞いてる?!」

「・・・！ あれ？ 未佳さん・・・？」
「そうよ・・・。みかっぺよ。『もう終わった』って言ってるのに、
なんで起きないわけ！？ こんなところで騒いでいたら完全に不審
者に思われるから、呼んだら起きてよねえ！」

未佳がそう言うのと、両脇に手を当て、リオを睨む。

ふっとここで、未佳はリオが耳に何かを当てていることに気が付い
た。

ほとんど髪の毛の色が黒なので気付かなかったが、どうやらそれは
黒いイヤホンのようだ。

しかもそのイヤホンの先には、未佳のピンク色のウォークマンまで
ある。

「あなた・・・！！ いつの間に！！」

「でもこれのおかげで、ほとんどドラムの音が聞こえなかったよ」

「そういう問題じゃないでしょ！！ 勝手に人のを・・・！ って・
・・・、今日は使わなかったわね」

「今度から、断ってから使うよ・・・」

「・・・はいはい・・・」

内心それでいいのかと未佳は思ったが、考えてみれば、最近はおま
り仕事が多忙過ぎることが多いため、全くウォークマンを使える機
会がなかった。

それに、こちらは174日後に死亡することになっている。
今更そんなに使うことはないだろうと思った。

「別にいい・・・。それよりも、ほら。早くここ出よう。栗野さん
待ってるから」

「うん」

二人が出入り口に出てみると、栗野は通路に置かれたベンチに腰掛け、一人向かい側にある自動販売機の缶コーヒーを飲みながら涼んでいた。

いつも仕事やスケジュール第一の栗野にしては、かなり意外な一面を見たような気がする。

そんなことをリオが思っていると、ふっと人の気配に気が付いたのか、栗野が未佳達の方に視線を向けた。

「あつ、未佳さん。終わっただんですか？」

「たった今……。栗野さん！ 一口飲ませて♪」

「ダメ！ いくら私のものでも、喉に何か起こったら大変でしょう！？ コレはダメ」

「ちえっ！ 少しくらいいいじゃない……」

そう言つて未佳が頬を膨らませると、栗野は黒い財布から小銭を取り出し、それを未佳の右手の平に『はい』と渡した。

ちなみに金額は120円。

「そこに沢山ありますから、自分で好きなの買ってください」

「はいいゝ えっゝと……。どれにしようかなあゝ」

「ココアがいい」

「……。家に帰ってから入れるから、今は我慢して」

「チェツ！」

「えっ？ 未佳さん、どうしました？」

「いえ！ なんでも……！」

しばらく悩み考えた末、未佳はコーヒーにキャラメルを入れたキャラメル・マキアートの缶を買ひ、事務所を後にした。

その後はいつもと同じように、栗野の車に乗り込む二人と一人。だがこの日は、いつもと少しだけ違っていた。

「栗野さん」

「はい？」

「私、今日用事があるので、いつものスーパーのところで下してくれませんか？」

「えっ？ でも・・・大丈夫ですか・・・？」

「大丈夫です。マスクとサングラスさえあれば・・・。誰もそんなに見てないだろうし・・・」

「そう・・・ですか？ じゃあ・・・分かりました。大球おおだまのところでですね？」

「はい！ お願いします」

そんな末佳の希望により、この日は自宅から約20キロメートルのところを下りることになった。

ちなみに『大球』とは、大阪で一番多い激安スーパーのことで、毎回セールなどで1円商品を並べるなど、安さにおいて人気が高い。末佳もよく仕事帰りなどに、ここで栗野に下してもらうことがある。

スーパーのところに車が到着するのはあつという間だ。

今回は特に道も混んでいなかったのもあり、予想以上の早さで到着した。

「それでは末佳さん。また明日」

「あ、はい。それじゃあ・・・」

「では・・・」

会話もソコソコに、栗野は車を事務所の方にUターンさせると、そ

の場を後にした。

今日は他の人達の見送りや、事務所の人達世の打ち合わせなどもあったため、栗野は一度事務所に戻らなくてはならなかったのだ。

栗野の車が去った後、未佳は完全に車が見えなくなるまで、車から降りた場所に立ち尽くしていた。

そして完全に車が曲がり角を曲がり見えなくなると、何故か未佳はスーパーがある方とは逆方向に歩き出す。

「リオ。いくよ？」

「えっ・・・？ 何処に？ スーパーはあっちだよ？」

「スーパーには、用はないの」

「えっ！？ でも・・・」

「あれは単なる理由付け・・・。本当は用なんてないのよ」

その未佳の発言に、リオはただただ驚いた。

そもそも、どうして用がないのにも関わらず、ここに下してもらったように頼んだのだろう。

その理由自体が全く読めないまま考え込んでいると、いつの間にか未佳は、スーパーの前に立ったままのリオからうんつと離れたところに歩いて行ってしまっていた。

「あっ・・・！ ちょっと、リオ！！ 早く！」

「ねえ！ なんで栗野さんに嘘ついたの？」

「えっ？ ・・・別に嘘つきたくてついたんじゃないわよ。ただ・・・

・ちよつと止められるかなって思っただけ・・・」

「何を？」

「・・・何となく読めるでしょ？！」

未佳はそれだけ言うと、再びスタコラと先の方へ歩き出してしまった。

その後を追いながら、リオは『多分アレが理由だろう』と予測を付ける。

下りた場所と、未佳が向かっている方向。

それは長谷川の自宅がある方向だった。

おそらく未佳は、素直に栗野に『長谷川の家に寄って』と頼めば断られると分かり切っていたから、ワザと嘘を言っ下してもらったのだろう。

でなければ、未佳が栗野を騙す理由は、何もないのだから・・・。

「行つて大丈夫なの？」

「・・・心配だから寄るの。今日は栗野さん忙しいし、手神さんも小歩路さんも仕事があるから、私くらいしか行けないしね」

「そっ・・・」

「何よ、その返事。失礼しちゃうわねえ・・・」

そんな会話を交わしながら、二人は昨日も訪れた長谷川の自宅へと向かう。

事務所からスーパーまでとは違い、こちらはやや距離があるように感じられた。

「ちょっと遠かったね・・・」

長谷川の自宅を前にそう呟きながら、未佳は4階を目指す。

階段を一段一段上り終え、4階へと到着すると、そのまま長谷川の自宅ドア前に立った。

「明かり・・・、点いてるね」

「・・・昨日あのまま点けっ放しにしてたのか、それとも今日点けたか分かんないけど・・・。一応部屋の中にはいるみたいね」

「入る？」

「・・・相手が出られるのならね」

内心『昨日みたいに重症だったら・・・』と心配しつつ、未佳はインターホンのボタンを押そうとした。
その時だ。

「・・・ん？」

「？・・・未佳さん？ どうしたの？」

「シッ！・・・聞こえない？」

「・・・何が？」

「ギターの音。ドアの隙間から・・・」

そう言われて耳を近付けてみれば、確かにドアの隙間から、かなりノリのいいギターの音色が聞こえてくる。

しかも所々で音が止まったり、同じ箇所を何回もリピートしながら弾いている。

ということは、これはテープやテレビなどではなく、誰かがギターを部屋の中で弾いているということだ。

無論、その『誰か』は考えずとも分かり切っている。

（さとうち・・・？ もうギターを弾いてるの？）

「長谷川さんが弾いてるみたいだね」

「昨日はあんなんだったのに・・・」

そう言いながら耳をドアの方に近付けてみると、その音色がハッキリと聞こえてきた。

どうやら、自分達の楽曲ではない曲を弾いているようだ。

だがそのギターの音色は、かなり未佳がノッてしまう感じのものだ

老人が一人。

どうやらろっじんは随分前からそこに立っていたらしく、口をぽっかりと開けたまま、いきなり立ち止まった未佳を凝視していた。

そのことにハッと気が付いた未佳は、一気に顔を真っ赤に染め上げる。

まるで自分の心が、恥ずかしさの泥沼に引きずり込まれていくかのような、そんな気分だ。

「・・・ど・・・、どうぞ・・・」

声を出すのもやっとのまま、未佳は両手のジエスチャーと合わせながら、老人に通路を通るように勧めた。

実は未佳が通路で踊っていたことにより、他の住人達の通り道が塞がれてしまっていたのだ。

老人は小さく頷くと、未佳の横を通って、一番奥の三番目の部屋へと向かっていく。

どうやら、長谷川の二つ隣の住人だったようだ。

老人は未佳の横を通り過ぎた後も、しばし未佳を怪しむかのような視線を向けながら、部屋の中へと入っていった。

その後ろ姿が見えなくなるのと同時に、未佳はドツと溜息を吐く。

『穴があつたら入りたい』とは、まさにこのことだ。

（あっちゃ・・・）

「こんなところで踊るからだよ」

「恥ずかしいから言わないで・・・」

そう言ったかと思えば、未佳はくるりと身体の向きをドアの方に向け、インターホンを半分強めに押した。

『ピンポン』というお決まりのベルが鳴るのと同時に、ドアの隙間から聴こえてきていたギターの音色も途切れる。

それから数秒間が空いた後、インターホンの下にあるスピーカーから、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

『はい。どちら様・・・、ですか？』

「・・・ねえ。なんで部屋からギターの音色が聞こえてくるわけ？」

「そ、それを聞くの!？」

未佳が開口一番に発した一言は、リオも驚くようなこんな言葉だった。

16 ギター&タンバリン

「・・・ねえ。なんで部屋からギターの音色が聞こえてくるわけ？」
『ッ?! あっ、ちよっ・・・! い、今開けます! ちよっと待って!』

半分有り得ない者の声を聞いて驚いたかのように、スピーカーで話していた相手はバタバタと激しい物音を立てながら、インターホンでの通信を切った。

その後も、何やらドアの向こうの室内から『ガシャンッ』や『ガタッ』といった物音が、ハッキリとドアの隙間から聞こえてくる。

(一体何やってんの・・・)

少ばかりその物音に呆れていると、ようやくドアがゆっくりと開いた。

そのドアの奥からは、やはり驚いた様子の長谷川が、こちらをじっと見つめていた。

「さ、坂井さん・・・」

「・・・なんか心配して損したかも・・・」

「ハハ・・・すみません」

「謝るくらいなら中に入れてほしいなあ・・・。まだかなり寒いんだけど?」

「あっ・・・! どっ・・・、どうぞ!」

半分『図々しいなあ』と自分で思いつつ、未佳は長谷川の自宅へと足を踏み入れた。

ふっと玄関で靴を脱ぐついでに、チラリと長谷川の顔色を確認して

みる。

長谷川は昨日とは打って変わって、かなり体調は良さ気だった。顔も昨日みたいに赤くはないし、会話だって普通に話せる。

歩行はまだ怠さが残っているせいなのか、多少体勢がフラついてはいたものの、一応しっかりと歩けている。

元々治すのが早いのは知っていたが、よくたった一日でここまで回復したものだ、ただただ末佳は驚いた。

「さとつち、風邪は？ もう何ともないの？」

「えっ？ ええ、まあ……。朝計ったら、7度4分だったんで」

それを聞いて一瞬『へえー』とは思ったのだが、考えてみればまだ安心は出来ない。

そもそも人間は、朝起きた時の体温が一番低いものだ。つまり、今は逆に体温が上がっている可能性が高い。

「……って、まだ安心できる体温じゃないじゃない」

「そ、そうですね……。ハハハ……。お茶入れてきます」

「あつ、いいよ。少し様子見に來ただけだし、飲みたくなったら自分で入れるから。それより……」

ふっと末佳が気になったのは、長谷川が先程まで弾いていたギターだ。

先程の曲を聞く限りでは、あれは末佳が作曲した曲ではない。ということ、長谷川が作曲した曲なのだろうか。

どうしてもそれが気になり、末佳は長谷川に尋ねた。

「さっきの曲、提供か何かにするやつなの？ 聞いたことない曲だったけど……」

「えっ？・・・音、聞こえました？」

「うん、ドアの隙間から・・・。『ジャジャジャーン！』って」

「なんで『運命』？」

「ああ・・・。まあ・・・、似たようなもんですけどね」

「ふん」

ふっと軽く頷いたまま視線を変えた末佳は、長谷川のギターケースの隣りに、半分懐かしいものが置いてあることに気が付いた。

それはやや大きめの赤い輪っか型で、その周りには沢山の小さなシンバルが取り付けられている楽器。

そして何より、それは末佳がライブのあるコーナーで毎回使用していた、末佳にとって大事なものだだった。

「あつ！ タンバリン」

「ああ。この前返そうと思ってたんですよ。一応留め具を直したんで・・・」

「そうそう。ここ外れちゃったんだよねえ・・・」

そう言いながら、末佳はタンバリンの持ち手近くに付いているシンバルのところを指で撫でた。

このタンバリンが壊れたのは、去年の真冬に行われたライブの練習中でのこと。

いつものように楽曲に合わせてタンバリンを叩いていたところ、シンバルを留めていた金具が一か所だけ外れ、その部分のシンバルが落ちてしまったのだ。

一応ライブの方は、別のタンバリンを使用することによって補いはしたのだが、何せ普段使っているものではなかったというのもあり、

少々扱いに手間取ったライブになってしまった。

そしてそのライブ後、このお気に入りタンバリンは長谷川が家に持ち帰り修理。

その結果直りはしたのだが、二人とも去年の忙しさのあまり、そのことをすっかり忘れてしまっていたというわけである。

「なんかこれ見ると叩きたくなるのよねえ」

そう思い叩いてみれば、懐かしい『パンツ』という音が聞こえてきた。

その音を聞いて再びノリだした末佳は、そのまま『パンツパンツ』と連続的に叩く。

するといつの間にか、長谷川もギターを弾き始めていた。

「なんかやります？ 久々に……。ライブやないけど」

「うーん……。『愛の行方』とか？」

「『愛の行方』……。うーん……。」

二人の言う『愛の行方』とは、去年出したアルバムのアルバム曲で、ファンにはそこそこの人気のあったやつだ。

曲の内容は、大切な人と少しだけ離れ掛ける女性が、必死にこの関係が崩れ離れぬよう祈る姿が歌われている。

『CARNELIAN・eyes』にしては、珍しくラブソングだった曲だ。

「やります？」

「やつちゃう？」

「アコースティックで。出来ないことはないけれど、初めて……。」「フツ」

そんな会話が一旦途絶えた次の瞬間には、長谷川はギターで前奏を奏でていた。

それに合わせて、末佳もタンバリンを叩きながら、歌が入るタイミングを見計らう。

アコースティックで行うのは初めてだったが、意外にも何処で入ればいいのかは一発で分かった。

（よし！ 1・2・3・・・GO！）

いゝつものみゝちをおー・・・ すうこしだけ とおまわりー・・・
そおすることであゝ・・・ あの人に会えるとおー しりいゝながー
らー・・・

二つ肩を 並べえてー・・・ よゝり添うよゝに い 歩いていく・
・

その手を握りいー しーめながらあー・・・
他愛もないことをおゝ 言いああってえゝ・・・

いまゝが おわあゝらぬこーとおゝ・・・
たえゝ まなゝく願う おさあない自分

もう少しいー 隣りにいー いさあーせてえゝ・・・
口では言い出せぬ 想いをむっねゝに だまあってその手をおー
にーぎりいー かえーしたあー・・・

あーいのゆくえー・・・

それは誰もしーらなーい

知りたいようなあー・・・ 気もしたあーけえゝれえゝど・・・
とめどなあーく それっがあー・・・ こわーく感じたゝ
私はまーだ ここでいい・・・

数で表せぬ時間の中・・・ 私はきーみとおゝ・・・ 過すしてく
ゝ・・・

あーいかわらあゝず と・・・ 口にする せけんゝのめえ・・・
でもその傍ら・・・ 君へのおー・・・ 愛はすこーし遠とほ巻きいー・
・

まるで 弱いあーめにい はーばーまれえーたよう
もう 君のここおーろがあ・・・
靄ものせいでえ 見えないよ・・・

おもいーのまーまーに 伸ばすうー この手えですら
あのひゝのように つかゝめつなーい・・・

わたしゝはゝ かわらゝずに ここにいゝるよあゝ・・・
このこっえをあー 君は いつ・・・ 聞いてえーくれるだつろ
おー・・・

あーいのゆくえー・・・
それはとてもみっがあゝて・・・

てばなあーせば きいつとぅ・・・
何処かあ遠くへぅ 飛んでーいく・・・
この手がすーこしだけえ 傷だらけになあってもおぅ かまわーな
ーいー・・・

少しだけおとなあに なあった私をおー・・・ 見つめ返してえー・
・

あの時躊躇ったこーとにぅ・・・
もうー・・・ にいーげださなあーい

あーいのゆくえぅ
行く先は何処なーの？

ちいつさなぅ とおーいに・・・
想いいー はせるぅ
わたしいゝは きいつとおぅ しーあわせものねえぅ・・・

君と同じ とつこおで・・・ いきてるんだかゝらあぅ・・・

かたちなんてえ なーくていい・・・
ただ心のかーたすみに 残ればいいー・・・

自由すつぎるぅ もつのに
すみかーなーんて いらーないのお・・・

明日は何処をー．．． 彷徨おうか
何もかもがー．．． わーからないかつらゝ

いつまあー このときつはー．．．
キレイにいー．．． ひーかり かがあー．．． やあー．．．
くー．．． うつよあー．．．

最後は長谷川がギターを『ジャツジャツジャ』と鳴らし、曲はフィニッシュを迎えた。

「イエーイ！」

「たまにはライブで二人だけでやるのもいいですね」

「『ミニカーネリアン』的な？」

「うゝん．．． 『ミニアイズ』？」

「『ミニアイズ』？ えっ？ 作っちゃう？」

「リーダーが許可下せば」

「ハハッ」

なんて言っただけで笑ってれば、いつの間にか時刻は午後7時になっていた。

外もほとんど真っ暗である。

「あつ．．． 私、そろそろ帰らないと．．．」

「えっ？ ．．． ホンマや。もう7時？！ 送ってく？」

「いいよ。バスで帰れるから。電車もあるし．．．」

「いや、電車は止めとき」

そう普通に言う長谷川に、未佳はただただ苦笑した。
いくら一昨日のことが原因でも、これはダメだろうと思う。

「・・・完全に電車への信頼関係なくなっただって感じね・・・。あつ！　そういえば明日仕事なんだけど、さとうち来られそう？」

「・・・熱次第！」

「だよねえ・・・。じゃあ、来られそうだったらよろしくね」

「あ、ああ。はい。・・・今日はありがとう」

「うっん、こちらこそ・・・。また明日ね」

帰りはあまりにも在り来たりな言葉を交わした後、未佳は長谷川の家を後にした。

その帰り道。

バス停で一人バスを待つ未佳が、ふっと隣りで同じようにバスを待っているリオに、唐突にこう口を開いてきた。

「ねえ・・・。私・・・、あと何日？」

「？　・・・あと4時間37分で、7日目になるよ・・・」

「だいぶ減ったね・・・」

「・・・どうしたの？　急に・・・」

最初の頃までそんなことを一切聞かなかった未佳に、リオは半分不安げな表情を浮かべた。

一方の未佳は、半分思いつめたような表情を浮かべている。

その顔は、未佳と初めて会った時に見たものと、全く同じものだった。

「私、今……。『あと少しで死ぬんだよね』って、久々に気が付いたんだ……。さとうちに『また明日ね』って言った時に……。私いつか……。そうみんなに言って、みんなを裏切る日が来るんだよね……。いつも当たり前と言ってた言葉が、自分にもメンバーにも、きつと一生分の後悔をつくるんだって……。私、今頃になって気が付いたよ」

「……。死んだこと……。後悔してる？」

リオが躊躇いつつそう尋ねてみると、未佳は一瞬にして思いつめたような表情を消し去らせた。

一気に見え隠れする怒りのような表情。

しかしその中に、それと同じくらいの深い悲しみのような表情も存在していた。

きつとこれは、未佳が事務所から飛び降りた理由なのだろう。

でもそれを、リオは直接未佳に聞くことはできなかった。

なんだか知ってはいけないような気もしたし、まだ全てを知っても自分は未佳に何も言えないような気がしたのだ。

「馬鹿なこと言わないで……。！ 私は間違ったことをしたなんて思っ
てない。周りが私のことを『逃げた』と言えば、たぶんその通りになるかもしれないけど……。でも私は……。！ 普通にしていることが精一杯だったの……。みんなと……。普通に接し続けるのが……。」

でも最後に出てきたその単語だけは、リオは聞き逃すことが出来なかった。

「……。まさか……。メンバーが原因なの？」

「っ！……」

そう聞き返した途端、未佳はまるで電気が走ったかのように、ビクンツと身体を一瞬だけ震わせた。
そんな未佳に、リオは再び聞き返す。

「そうなの!？」

「・・・・・・・・」

未佳は返事を返さない。

でもその表情がほんの少しだけ硬いものに変わったのは、それが『真実』であるという、何よりの証拠だった。

「未佳さん?・・・・」

「探してみたら? あなた・・・、私とずっと一緒にいるんでしょ?」

戸惑いながらも、リオは小さく頷く。

「なら分かるわよ。私が直接言わなくても・・・・。いつか・・・・、リオにも・・・・」

「・・・・えっ? それ、どういう」

「ほら。バス来たよ?」

まるでリオの問い掛けから逃げるように、未佳はバスの方に視線を向ける。

結局その出来事により、二人の会話はそこで途切れてしまった。

だが最後に未佳がリオに向けた笑みは、どこからどう見ても『偽り』だと分かるような、そんな作り笑顔で・・・・。

今にも跡形もなく壊れてしまいそうな、泣き出してしまいそうな、

そんな表情・・・。

そしてその笑みの奥に潜んでいたものは、怒りの感情でも、悲しみの感情でもない。

そこにいたのは、ただ深い寂寥の渦に吞まれている、一人の女性の姿だった。

その後、リオはまるで存在していないかの如く、未佳とは一切として、会話を交わそうとはしなかった。

予約死亡期限切れまで あと 174日

17・キジも鳴かずに撃たれまい

翌朝。

未佳はいつもと同じように、栗野の車で事務所に向かっていた。

ただいつもと違ったことは、未佳の隣りに絶えずいたはずのリオが、今日は何処にもいないということ。

昨日は一緒にバスに乗って帰ったのだが、その後からリオが何処にもいなくなってしまったのだ。

あの日から今日で丁度一週間。

リオの存在を認めた未佳にとって、それは一種の不安材料に他ならない。

そもそもリオの存在というのは、未佳にとって『自分が予約死亡になっている』という、一種の証明の形でもあった。

その為今は、少々『予約死亡』を信じてきたこの一週間が、未佳にとって“夢”のように感じる。

『本当はまだ死んではないのではないか』という不安に駆られてしまっしょうがない。

（でもまあ……。私が原因よね……）

リオが姿を消した理由は多かれ少なかれ、昨日バス停で話していた会話のせいだろう。

きっと未佳やメンバーと一緒にいる日が浅いリオにとって、昨日のあの話は衝撃的過ぎたに違いない。

リオは自分のことをほとんど話そうとはしないが、未佳が自殺した理由はきつと知らない。

だから余計に、昨日の話には驚いたのだろう。

現に未佳はこの一週間、メンバーとは笑顔を絶やさずに接していた。それが全て『作りモノ』だったなんて、一体誰が気付くだろう。

きつと、それに気付く者は誰一人としていない。

昨日のように、未佳が自らの口を割らない限り……。

(……私も、リオみたいに消えられたら……)

「未佳さん。着きましたよ」

「あ、はい」

事務所の中へ入ってみると、やはり手神が一番最初に到着していた。今日は『かごめ歌』のレコーディングを行う予定なので、今頃は一人勝手にキーボードを弾いているに違いない。

レコーディング室は3階と4階に設けられており、今日は4階で行う予定だ。

ちなみに3階は、あの小屋木がライブの発声練習を行っている。

エレベーターで上へと上がり、そこからレコーディング室へと向かった。

レコーディング室は、エレベーターの目の前にある。

入り口の引き戸ドアを開けてみると、やはりキーボードのノリのあまるメロディーが流れていた。

「おはようございます。手神さん」

「あつ！ おはようございます。今日は……、ちょっと空がどんより気味ですね」

「えっ？ ああ……。そう言えば昼前から雨が降るって、さっ

きテレビで・・・」

ふっと今日の朝にやっていた天気予報を思い出した末佳は、レコーディング室にある窓の方に寄ってみる。

窓から空を見てみれば、空全体が雨雲によって灰色に染まっていた。確かに手神が言うとおり、今日はかなりのどんより空である。これではいつ雨が降ってきてもおかしくない。

「一昨日とかみたいに強く降らないだろうけど・・・」

「少しテンションは下がる？」

「まあ・・・、ちよつとね」

そう苦笑しながら頷くと、それと同時に入り口の扉がゆっくりと開いた。

そこには、いつも遅刻がちでもある厘が、片手に缶コーヒーを保持たまま立っている。

「・・・あれ？ まだ二人だけ？」

「小歩路さんがやってきたってことは・・・、今は30分前くらい？」

「うん。10時28分・・・。お決まりの時間ですね」

手紙は自分の腕時計を見ながら言った。

ということは、遅れているのは長谷川だけということになる。

「さとつち、来るん？」

「一応、昨日『明日、仕事あるよ』って言っておいたんだけど・・・」

「やっぱり、熱が下がってないんじゃないかなあ・・・」

それを聞いた末佳は内心『まさか昨日歌ったせい？』などと余計なことを考えてしまった。
でも考えてみれば、それよりも前に長谷川はギターを弾いていたのだ。

本当にマズくなったのだとしたら、その時からもう既に起こっていたはず……。

今はとりあえず、そんな言い訳で逃げてみる。

『最低女』だと思った。

（何勝手に言い訳思い付いてんのよぉー！ 私はあるっ！）
「じゃあ……。小歩路さんの詞からやる？」

そう手神が二人に尋ねた。

その時だ。

「おはようございまーす！」

その声に末佳達は思わず、入り口の扉の方を振り返る。

そこには、肩にギターケースを背負った長谷川が笑顔で立っていた。その姿を見るや否や、メンバーの顔に安堵の笑みが浮かぶ。

「長谷川君、おはよう！」

「遅いよ、さとうち」

「うちより遅刻やけど、まあ今日はいつか……」

「そんな厳しいこと言わないでくださいよ！ こっちこれでも朝起きて、体温測って、ほんで急いでここに来たんですから！」

「ハハハッ！」「」

復活早々始まった長谷川弄りを、末佳は素の笑みを浮かべながら笑

った。

（でもまあ……。ちゃんと来るとは、思ってたけどね）

別に昨日の様子を、今日ここにやってくることの確信に繋がたわけではない。

現に先程まで、未佳は普通に『来るかなあ』と心配で気が気ではなかった。

だがそんな想いのまま振り返った窓の外の景色を見て、やっとホッとしたのだ。

何故なら、その窓の向こうにある景色が、少し儚げに降り注ぐ雨空になっていたのだから……。

その後未佳達は、この間から中々出来ずにいた『かごめ歌』のレコーディングを行った。

基本レコーディングは、最初に楽器やアレンジなどによって完成した曲を録音し、それにヴォーカルが歌を載せることによって出来る。

今回はこの最初の段階を録音する前に長谷川がダウンしたため、いくら未佳が歌える状態であっても、レコーディングを行うことは一切出来なかったというわけだ。

そしてその後。

中々出来ずにいたレコーディングは、前回にアレンジや歌い方を決めていたせいか、思いの外早めに終了した。

まだ時間は午後1時ちょうど前。

「空いた時間 doesn't it?」

「あつ！　ウチ、新曲の歌詞書いてきたから」

「おつ、早っ！」

厘が書いてきたという曲は、この間末佳がまとめて渡したサンプル曲の一つ。

渡した曲の中では、少々バラード調だったやつだ。

厘は基本、メモ用紙と鉛筆で、曲を聴きながら詞を書く。

その為にもメモ用紙には、同じように書き出して没になった歌詞などが大量に書かれている。

何ページかめくった後、厘はあるページだけを広げ、テーブルの上に置いた。

曲名は『声のない空』。

「小歩路さん、相変わらず早いなあ．．．」

「仕事出来なくて暇やったんやもん」

「すみません．．．」

「ところでこの歌詞．．．何か元ネタがあるの？」

目を通して読む限り、その曲は何かの物語に反られているかの如く、状況を表すような文章が並んでいた。

厘がこういう歌詞を書く時は基本、アンデルセンだとか、昔話だとか、そう言ったものをテーマにしたものが多い。

そう思いながら問い掛けてみれば、厘からは『やはり』と言った感じの返事が返ってきた。

「うん。日本の昔話・・・になるのかなあ？ そんな感じの話」
「ふん・・・」

「分かった！ これ『キジも鳴かずば』でしょ？！」

「あつ！ さとつち分かった？」

「最後のフレーズを読んだらピンツと」

「やっぱり？！ ここで分かっちゃうかなあゝって思ってたんやけど」

どうやらこれは、昔話の一つ『キジも鳴かずば』がモデルになっているようだが、それを知らない末佳と手神はただぼつんとするだけだ。

話が分かる人達同士で話されても、こちらは一切としていい気はない。

「ねえ！ 二人だけで盛り上がりながらも困るんだけど？」

「ん？ あつ・・・。もしかして知らん？」

「知らなくて悪い？」

まるで知らないといけないような感じに聞き返され、末佳はムツとしながら、長谷川を睨み返した。

そもそもそんなマイナーな昔話など、知っている人の方が少ないだろう。

そんな感じに今にも言い出しそうな末佳の顔を見て、長谷川は慌てて口を開いた。

「あつ、いや！・・・ほら。ことわざで『キジも鳴かずば撃たれ

まい』っていうのがあるでしょ？　その語源になった話ですよ。なんか実話だったみたいですけど」

「それって確か……。『余計なことを言わなければよかったのに』っていう意味のことわざよね？」

「うん。よくテレビとかでそう言ってますよね。『墓穴を掘る』と似た意味の」

「まあ、そんな感じですね……。」

そう言いながら頷くと、長谷川はその昔話の話をし出した。

「この話自体は、かなり古いものになるんですけど……。昔、よく大洪水が起こる村に『千代^{ちよ}』っていう名前の小さな女の子と、その子のお父さんが一緒に暮らしてて。その家はかなり貧乏だったらしいんですよ。それである時、その千代が病気になって『小豆まんまが食べたい』って言い始めて」

「『小豆まんま』？」

それは今で言うところの『赤飯』のことだ。

ただ赤飯といえば、今も多少値段が高めの飯物だったはず。

「それって……。かなり高いんじゃない？」

「そう。でもお父さんはその子に食べさせたいから、村の人のお米一すくいと、小豆一握りを盗んでしまうんよ。それで、そのおかげで千代は助かるんやけど……。治った後で千代はなあ、その赤飯のことを童歌で歌ってしまうんよ。『あーずきまんまさ　たべた』って……」

「それとほぼ同じ時に村が水不足になって、雨を降らせる為に、雨乞いの生き埋めをやるうっていう話になって……」

「えっ？　でもさっき『洪水が』って……」

何やら矛盾した話に、手神は長谷川に話を聞き返した。

その聞き返しに、長谷川は『ああ』と、まるで言い忘れていたかのように頷く。

「それは雨が降ったらの話ですよ。雨が降らなかったらただの平地の場所なんですから」

「ああ……。そういうこと……」

「でなあ。その生き埋めで埋める人間を選んだ時に、一人の村人が千代の歌を聞いて、父親が泥棒をしたことがバレてもたんや。それで親父は雨乞いのイケニエのために、生き埋めにされてしまうんねん」

「えっ……。？ それでその千代はどうなったの？」

「その後、しばらく千代はその埋められた場所に伏せたまま泣き続けるんやけど、ふつとある時いきなり泣き止んで、村から姿を消してしまふんよ」

それを聞いて『そういう話なんだ』とただ頷く未佳に、長谷川はちよいちよいと手をかざした。

「まだ話終わってない……」

「あつ、そうよね。まだ肝心のキジですら出てきてないし……」

「ハハ……。それで、その出来事から数年後に、ある獵師がキジを探して……。目の前から鳴きながら飛んでいったキジを、その獵師は撃ち落とすんですよ。そしてそのキジが落ちた場所に向かってみたら、その撃たれ死んだキジを、今でいう中学生か高校生くらいに成長した千代が、無表情で抱えて立っているんです。獵師は『千代』と声を掛けるんですけど、千代はその声には答えず、ただ死んだキジに一言……。」

《キジ…… お前も鳴かずば撃たれまいに……》

「そう言い残して姿を消す……っていうのが、昔話の『キジも鳴かずば』の話なんですよ」

「………なんかすごく悲しいね……」

「それ、本当に実話？」

「さあ？　そういう噂だけですけど……。一応モデルとなった場所が存在するみたいですよ？」

話を聞いてもう一度歌詞をみれば、確かに今回の歌詞の中には、その物語をテーマにしたかのような文章が並んでいた。それもかなり切なげに……。

「これ……。カップリングにする？　それともシングル？」

「うーん……。そのことなんだけど……」

「……？」

ふつと何か提案があるかのように、手神が口を開いた。

未佳達はとりあえず、リーダーの案を聞こうと静かに口を閉じる。

ややあつて、手神の口がゆっくりと開いた。

「アルバムにしない？　8枚目の……」

「あつ……。アルバム！？　でも……。この間のヤツ出してから、まだ1ヶ月くらいしか経ってないですよ?!」

「でも、ほら。あれはベストアルバムだったから、あんまり新曲は入れてなかったでしょう？　だから、今年のライブも兼ねてどうかなあ……って思ってたんだけど……。どう？」

実は今年の8月に『CARNELIAN・eyes』はデビュー1

0周年を記念したライブを行う予定になっていた。
さらに詳しく言ってしまうえば、この8月のライブは、未佳が自殺する期間を選んだ理由にも大きく関係している。

大体予測はできるだろうが、ライブ活動が完全に始動すれば、仕事は今まで以上に忙しくなるのは当然のこと。

となれば必然的に、自殺を行っている暇などなくなってしまう。
ましてや『事務所で飛び降りたい』などと条件を付けてしまっていれば尚更のこと……。

そう言った面なども考え、未佳はライブの練習期間に入る前に、その身を屋上から投げた。

だが実際は、わけも分からぬ『予約死亡』のせいで生かされてしまっている。

しかも死亡するのは、このまま予定通りにいってしまうえば、おそらくライブツアー終了後の3日後予定。

ならばもう別に、ライブどころは関係ない。

むしろ日付的に言ってしまうえば、坂井未佳の終幕が10周年ライブツアー終了後なのであれば、実にキリがいい。

周りもライブ後であれば『仕事』『新曲製作』などと騒がない頃でもある。

全部が終わってスッキリした後、みんなとはさよなら……。
それも悪くないような気がした。

（とりあえず一区切りしてから……。っていうのもありよね……。）

「ねえ？ ……どう？」

「私は賛成」

「うちもええよ。今は丁度暇やし・・・」

「僕も賛成です。やっぱりライブまでにはアルバムを出した方が・・・昔の曲だけを集中的に歌うのも・・・、ねえ」

「まあね・・・」

そんなメンバーの言葉を聞いて安心したのか、手神はサングラスの向こうに笑みを浮かべる。

そんな手神に、未佳は『一応リーダーなんだから、一々こつちの様子を伺わなくてもいいのに』と、やや苦笑混じりの笑みを浮かべた。

「じゃあ・・・。あとのこととかは別の日とか、昼食後とかにやりましょうか」

「そうですね。んで・・・。昼食は？」

「各自でええんちゃう？」

「流石に毎回『ザース』はねえ・・・」

「じゃあ・・・、そうしますか」

この後と言っても、おそらく今日はレコーディングの結果を再確認。それが終われば、新曲の楽譜を手神や長谷川に渡す程度だろう。流石にキーも分からない曲を、今日一日だけで歌うところにまで持つて行くのは到底無理な話だ。

ただそうになると、午後は少々未佳にとって暇な時間になるだろう。何せ、今は特にやることがないのだから。

（サンプルメロディーでも作っていようかなあ・・・）

8月のライブのことを考えれば、アルバムが発売されるのは7月の中旬頃。

ならばそれまでに、新曲のサンプルを作っておいた方がいいかもし

れない。

別に曲は多めに作っても損はないし、たとえ本筋のアルバムに使われなくとも、その後のシングルやカップリングなどとして再利用される。

そうなれば、しばらくは仕事も忙しくならずに済むはずだ。

（・・・一石二鳥ね・・・。やっとか・・・）

未佳はそんなことを思いながら、一旦事務所を後にした。

18・カフェのこと

昼食を食べようと末佳が向かった先は、よく駅の地下や駅ビルの中などにあるカフェだった。

店の名前は『マーメイド』。

看板が茶色と緑の2色だけで、大きく人魚が描かれているマークが特徴だ。

末佳はよく仕事の合間などに、このカフェに行くことが多い。

理由はいくつかあるが、強いて言うとしたら、この人気ドリンクの一つでもあるキャラメル・マキアートが大好きなのと、喫茶店やカフェなどが好きだからだろうか。

少し前まで『喫茶店で働きたい』と思っていた末佳にとって、ここは憩いの場に等しいのだ。

さて何を食べようかと、末佳が店の入り口付近で、レジカウンターの上に取り付けられているメニュー表を見ていた。
その時だ。

ふつと末佳の後ろで、微かに小さな気配が動いた。

基本、中学生以下の子供はやってこない北堀江のマーメイド店。

そんな場所で何かの気配が動くとするば、それはもはや彼以外にありえなかった。

「・・・いつ出てきたの？」

「今・・・」

「今日は1日出てこないと思ってたわよ」

「最初はそのつもりだったけど・・・。飽きたから・・・」

「何よ、その理由・・・」

『姿を消すことに飽きた』『飽きない』はないだろうと、未佳はジト目でリオに返した。

だがそんな視線を向けてみても、リオは何も言わずにただただ未佳を見つめ返すだけ……。

結局折れたのは未佳の方だった。

「……シヨックを受けたのなら、謝るわよ」

「謝る？ 自殺した理由と関係しているのに？」

「『あなたにそんなことまで教えなくてもよかったのにね』っていう話よ」

「……………」

そう言ってみても、リオはずっと黙ったままだ。

何も言うことがないのか。

それとも何を言ったらいいのか分からないのか。

そんなリオの反応を見た未佳は、その後は何も言わず、スタスタと店の奥へと進んでいった。

そしてそのまま、レジカウンターの前で立ち止まる。

「いらっしやませ」

「……キャラメル・マキアートのホットTallと……」

ふっとそう言いながら視線を隣りに向けてみれば、リオがレジの隣にあるガラスケースの中を見つめていた。

その中には、ケーキやパン、サンドウィッチなどが入れられている。リオからしてみたら、どれも見たことがない人間の食べ物だ。

「（うわー……）」

まるで美しいアンティークを見つめているかのように、リオは瞳を輝かせた。

特にサンドウィッチに関しては、白や赤、緑や茶色など、まるで絵の具のパレットを見ているかのようで、しばし視線が釘付けになったまま動かせなくなっていた。

『こんなものが、人間の世界では食べられるんだ』と、少し羨ましくも感じる。

ふつとそんなことを考えていると、頭上から再び未佳のオーダーが聞こえてきた。

「サラダ生ハムサンドを2つ。以上で」

「はい。店内でお召し上がりですか？」

「はい」

「かしこまりました。お会計が1190円になります」

未佳は財布から千円札と190円を取り出すと、それを店員に手渡した。

当然、返ってくるのはレシートだけ。

だがこの店では、このレシートがかなり重要なのだ。
何故なら……。

「あちらの黄色いランプがあるところで、こちらのレシートを見せて頂いて、お飲み物をお取りください」

「あ、はい」

「（へえー……。飲み物はレシートを見せないと受け取れないんだ）」

リオはそう呟きながら、店員に指示された通り、黄色いランプが付

いている受け取り口へと向かった。

よく見てみれば、未佳の方には三人ほど、前の客が並んでいる。

一応、受け取り口には店員が三人ほどいたが、何せドリンクのデザインやブレンドなどがかなり凝っている『マーメイド』だ。

未佳達の順番になるのには、まだ大分掛かるだろう。

リオは未佳の後ろい並ぶような位置に立つと、未佳と受け取り口を見比べるかのように目を動かし、口を開いた。

「なんでレシート見せないと受け取れないの？」

「ん？・・・さあ・・・？ ついでにレシートの回収もやってるから・・・、ゴミを出さないようにする為じゃない？」

「レシートをゴミにするんだ・・・」

「っ・・・。人は色々よ」

内心そうとしか言えぬまま、未佳は受け取り口で飲み物を受け取ると、一番奥の隅にある席に座った。

ここなら、4面のうち3面が壁に隠されていて、横から覗いて見たりしない限り、誰からも未佳の姿は見られない。

ただ未佳自身の本音を言ってしまうえば、別にファン達に見つかってしまっても、未佳としては全く構わなかった。

むしろ声を掛けてほしいくらいである。

ならば普通の席に座ってしまえばいいと思われるだろうが、そうしてしまうと、後々栗野にこっ酷く説教をされることになる。

理由は勿論、危険だから。

その為、未佳はいつも条件反射のように、この席に座ってしまうのである。

「でもこの席……。暗いんだよねえ……。」

「普通の方はダメなの？」

「栗野さんに見つかったら終わりよ。『殺されてもいいんですかあ

ー！？』って……。」

「誰が殺されるの？」

「私でしょ」

「誰が殺すの？」

「……。ファンのストーカー……。とか……」

実際芸能界やアーティスト達の実例で、ストーカーによる事件等の話は珍しくない。

むしろ当たり前に等しいくらいだろう。

現に未佳があの家につ越したのも、ストーカーによる盗撮や盗聴から逃れるためだ。

実際それらに遭ったことはないが、一応高層ビルでセキュリティが万全なのであれば、ある程度は防げると見込んで引越したのである。

「その前に……。ファンの人とかにサイン求められたことあるの？ 僕一回も遭遇してないけど……」

「っ！！ あるわよ！ 失礼ねえ……。」

まるで弾かれるかのように、未佳はすぐさまリオの言葉に反発した。どうやら、あんまり人気がないように言われたことが腹にキタらしい。

まあ一応、怒鳴り返したということは、実際に声を掛けられることはあるのだろう。

そう思い、少々リオがそっぽを向いた時だ。

「あつ……、あのおー……」

「えっ……？」

「ん？……」

ふつと未佳の席の近くから小さな女性の声が聞こえ、未佳はそつと声のする方へ視線を向けた。

そこには、まだ20代後半ほどの若い女性客が一人、未佳達の席の方に立っている。

一瞬自分のことを言っているのかどうか分からず、未佳は人差し指で自分の顔をゆつくりと指差してみた。

すると女性は、何度も首を『うんうん』と頷かせる。

「もしかして……。『CARNELIAN・eyes』の……。坂井未佳さんですか？！」

「あつ、はい。そうですよ」

「っっ！ うそ……。っ！ 私っ、みかっぺの大ファンなんです

！ いつもCDとか、アルバムとか……。毎日聴いてます！！」

「本当に？ ……ありがとうございます！」

どうやらこの女性はバンドの、それも未佳の大ファンだったらしい。その証拠に、女性は興奮のあまり、会話らしい会話が出来ておらず、もはや片言に等しいような喋り方になってしまっていた。

その光景を見て、リオが『声を掛ける側も大変だな』と思ったのは、内心の話である。

「あつ、あのお……。もしよかったら……。サインとかつて……」

「ああ。別にいいですよ。何に書いたらいいですか？」

「じゃ、じゃあ、これに……」

そう言つて手渡されたのは、手のひらサイズの蒼いメモ帳だった。
おそらく仕事用のものだろう。

未佳はそのメモ帳で何も書かれていないページを開き、油性ペンを
走らせた。

「お名前とかつて・・・」

「あっ・・・！ 『あやの』と言います」

「あやの・・・さんへ・・・っと。はい、どうぞ」

未佳が女性に返したメモ帳には、未佳の筆記体サインと、今日の日
付。

そしてそのサインの隣りには『あやのさんへ』と書かれていた。

「わあー！！ ありがとうございます！！」

「いいえ、どういたしまして」

女性は最後に未佳と握手をすると、そのまま店を後にした。
その後ろ姿を見つめた後、未佳はどや顔でリオを見返す。

「ほらね」

「はいはい。でもあの女性、会話がごちゃごちゃになってたね。途
中・・・」

「仕方ないわよ。大ファンのアーティストが目の前にいるなんて、
ライブ会場にでも行かない限り、早々ないから。それに・・・。彼
女とはかれこれ８年くらいの顔見知りだし・・・」

「！ 観客の顔覚えてるの？！」

「いつも来てる人とかは顔馴染みよ。ちょっと髪型変わってて、一
瞬分かんなかったけど・・・。会社の休み時間とかで、ここに来た
んじゃない？」

未佳が言うには、その彼女はいつもライブ会場のセンターにいて、一番古いファン集団と一緒にいることが多い人なのだという。当然、出待ちも常連グループの一人だ。

ただし、プライベートで会ったのは両者も初めてで、今回は顔馴染みであったことや『予約死亡』のことなども含め、特別名前&日付入りでサインを入れたのだという。

「でも彼女はまだいい方よ。ファンの中には感激のあまり、この場から全く離れない人もいるから……。彼女は仕事でだつたみたいだから、自分から離れてくれたみたいだね……。でも……。これじゃあしばらく、ここには来られないかなあ……。私が来るとこ見られちゃったし……」

「そんなことより……。こつちも戻った方がいいんじゃない？」
「ん？ ……ア、アッ！」

リオの言葉を聞いてふっと、腕時計に視線を落としてみれば、時刻は既に1時を回り、あと少しで半になるうとしていた。
明らかに昼休みが長すぎる。

未佳はまだサンドウィッチを一つしか食べていなかったが、今はそんなことを気にしている暇はないと言わんばかりに、大急ぎで荷物を鞆の中に仕舞った。

そして最後に、深緑色のトレーにコーヒーカップと使用済みお手拭を乗せ、その場を後にしようとした時だ。

「未佳さん！ 傘！ 傘！！ 外、炎天下だよ！！」
「えっ！？ あゝあゝっ……。！！ 傘！」

うつかり置いて行きそうになった傘を回収し『今度こそ』と、店を

後にした。

一度外に出てみれば、外はリオが言った通り、かなりの炎天下だ。
空は雲一つない快晴で、先程まで雨が降っていたのが嘘のよう。
気温に至っては、まるで6月を思わせるかのような暑さだ。

しばし事務所へ続く道を歩きながら、未佳はトレンチコートでここにやってきたことを深く後悔した。

「あゝあ……。こんなに晴れるんなら、このトレンチコート着ないで、別の服を着てくればよかったあ……。軽く損ね」

「でも午前中は寒かったよ？」

「ま……。まあね……。でもこんな厚地のを着たのは失敗よ。
ベージュだから色はまだよかったけど……」

そんなことをしばしブツブツと呟いたまま、未佳は事務所へと戻ると、そのまま控え室の方へと向かう。

というのも、レコーディングは午前中に終了し、午後は一切行わないということで、昼食後の集合場所が、事務所の2階にある控え室に変わったのだ。

だがその控え室は、楽譜などを置くためのテーブルや、座るための椅子、荷物を仕舞うためのロッカー型の棚以外、何一つとして物が置かれていない。

ようは質素すぎる部屋なのだ。

そんなことを思いながら控え室へ入ってみると、そこにあったものはやはり今言ったものと、メンバー二人分の鞆、そして小さなひな人形が置かれていた。

「あつ！ ひな人形、かわいいー」

「それにしても質素だなあー・・・」

「今日はひな祭りだもんねえー・・・。あれ？ 手神さんと小歩路さんの荷物がある・・・。じゃあ・・・、もう帰ってきてるの？」

未佳はそう独り言を呟きながら、隣りの部屋の様子を確認しに行くうとした。

その時だ。

「それっ！」

「ほいつ！」

「えっ？ 痛っ・・・！！」

ふつと突然、何か小さく白っぽいものが、未佳の後頭部を直撃した。慌ててその謎の物体が飛んできた方向を見れば、そこには四角い箱を持った厘と手神が、何やらゲラゲラと笑っている。

「アハハ！」

「イエーイ！ 当たった♪ 当たった♪」

「いつ・・・たあー！ もう！ 二人とも何を投げたのよ」

半分キレ気味に投げられたものを拾い上げた未佳は、それを見て「あっ・・・」と、小さく声を漏らした。

それは、小さなおうど色の豆だったのだ。

正確には、多くの人達が『大豆』と呼んでいるものである。

そして『豆をまく』といえば、日本人で知らない人はいない、日本の古い恒例行事の一つ。

「もしかして・・・。これ、節分のつもり？」

「大豆なんやからそうでしょ？」

「何で今日やってるのよ?! 今日はひな祭りでしょ?!」

「だってえゝゝゝ。2月忙しくて全然出来へんかったんやもん」

「一ヶ月くらい遅れてやってもいいですよねえ?」

「ねえ」

「いや、ダメでしょ?!」

確かに言われてみれば、今年の2月3日はライブやらイベントやらラジオやらでかなりバタバタしていて、よく恒例でやっていた豆撒きが出来なかった。

個人的にこの手のが大好きな厘にとって、これは時期外れでもやりたかったのだろう。

「ゝゝゝえっ? ところで二人とも何処にいたの!?!」

「ゝゝゝゝゝあそこ」

そう言つて二人が指差す先にあつたのは、掃除道具などが仕舞われている用具入れ。

確かに、人二人分は余裕で入るスペースはある。

「!! あんなところにゝゝゝっ!!」

「イエーイ!!」

「『イエーイ』ってゝゝゝ」

「じゃ、そういうわけで。えいっ」

「えっ!? 痛っ!」

一体何が『そういうわけで』なのか分からぬまま、厘と手神は再び箱の中に入っていた豆を未佳に投げ付けた。

未佳はその攻撃に、ただただ姿勢を低くして逃げ回る。

「ちよっゝゝゝ、ちよつと!! 私ゝゝゝ! 豆持つてないのにい

」！」

「そんなん関係ないも〜ん」

「小歩路さんっ！！ あっ・・・、そういえばさとつちは？」

未佳がそう尋ねた瞬間、二人の攻撃はそこでストップした。

この反応からすると、どうやら長谷川はまだ戻ってきていないらしい。

「それがまだなんよ・・・」

「長谷川君にもぶつきたいんだけどね」

「ふ〜ん・・・・・・・・・・！！ ねえ、ちょっと」

「「？」」

ふつと何かを思い付いたのか、未佳は棚の上に置いてあつた段ボールを取り出すと、一面にだけマジックで何かを書き始めた。スラスラと素早く何かを書く未佳を、しばし見つめる厘と手神とリオ。

そしてその書き終わった絵を見て、三人はほぼ同時に『ああー』と、声を合わせた。

「それやったらみかっぺ。ウチ、赤いマジック持ってるよ？」

「僕は緑と青のマジックを」

「あつ、ホント！？ じゃあ、三色とも貸して！ それから、誰かハサミと紙持ってる？」

「ウチ全部持つてるけど・・・」

「じゃあ、それも貸して！」

「未佳さん、何する気？」

全く以て目的が読めぬまま、とりあえず二人はマジックを、厘はそれ以外にハサミとメモ帳を手渡した。

未佳はそれらを受け取ると、そのマジックで先程描いた絵に色を付け、目の部分をハサミでくり抜く。
これでこちらの準備はOKだ。

「あとは……。小歩路さん。これから私が言うことを、このメモ帳に書いて」

「へっ？ ええけど……。何書くん？」

「まあまあ。それはこれから言うから……。それから手神さんは、豆全部拾って、先に隠れてて」

「は、はあ……。」

なんだか誰がリーダーなのか分からない感じにテキパキと指示され、二人はとりあえず言われた通りに行った。

19・鬼は外！！

長谷川がここにやってきたのは、それから約10分後のことだった。決められていた集合時間よりも大幅に遅刻してしまったことに、長谷川はかなり慌てていたのだろう。

帰ってきた長谷川は、まるで飛び込むかのように控え室の中へと入ってきた。

「アカン！！ 絶対にみかっぺとか小歩路さんとか怒って……
・る……あれ？」

控え室に戻ってきた長谷川は、とりあえず辺りをキョロキョロと見渡してみる。

しかしそこにメンバーの姿は一人もなく、代わりにテーブルや椅子やロッカー。

その他には紙で出来た小さなひな人形と、何故か部屋の中央に中型の段ボール箱が置かれているだけだった。

「……みんなの荷物は？ というかみんなは？ ……え
っ？ まさか部屋間違えた？」

なんて一人呟きつつ、長谷川は今言っていた言葉とは裏腹に、何故か部屋の中央に置かれた段ボール箱の方へと近づいてみる。

だがその段ボール箱の中にも、皆の荷物は入っていなかった。ただその代わり、何やら二つ折りにされた小さな白い紙が、その問題の段ボール箱の中に入れられている。

「なんや……？ 紙？」

とりあえず長谷川は、その白い紙を段ボール箱から取り出し、半分丁寧にならぬ中を開いてみる。
その紙の中には、何やら見覚えのある文字でこんな文章が書かれていた。

長谷川智志さん。

長谷川智志さんにとって、

・坂井未佳
・小歩路厘
・手神広人

は、どんな人ですか？

「フツ……。なんや、これ……」

半分苦笑に似たような笑い声が、広い控え室内に響いた。

長谷川はとりあえず、そこに書かれていた文章をもう一度読み返す。

「なんかいきなりフルネームで訊かれるとなあ……。それに『どんな人』って……。単純にメンバーでしょ？……。えっ？それを聞いてるわけじゃないの？」

長谷川はそんなことをブツブツと呟いた後、真剣にそこに書かれて

いる人がどんな人なのかを考え込んだ。

「うん……。みかっぺ？ みかっぺは……。まあ……。ライヴの時とかもだけど、結構楽曲に対しての指示とかがしつかりしてるし、ファン意識もあり強いかな。そこが取り柄だとは思うけど……。ただ……。口調が少しキツめのところがあつて、なんか逆らえないんだよね……。うん……」

続いて長谷川は、視線を『小歩路厘』と書かれている方に向けた。

「小歩路さんは……。いつも詞で驚かされてますよ？ 僕は。よく曲を聴いただけであそこまで書けるなあ。って思うし、CARN ELIANにしかない寂寥感とか、空虚感が出せてるって思いますもん。素直に……。まあ……。ちよつとフリーダム過ぎる部分がありますけど……。うん。すぐ一人でどっか行っちゃうし……。あと、トンチンカンな質問をしてくるから、アンサーを出すのがムズい！」

そして最後に目を向けたのは、我らがリーダー『手神広人』の名前。

「手神さんは……。アレンジは神ですよ。大先輩だから、何にも僕言えませんが……。でも編曲は神だと思います。んで……。それ以外は特に……。たまの親父ギャグが不発になること以外は何も……。そして僕ずっとこれら口に出して言ってますけど、盗聴とか録音機とかなんかあるんですか！？ この部屋！」

なんて最後に騒いではみたものの、結局誰もここにやってくる気配はない。

勿論、部屋の中も人の気配は一切なしだ。

「一体何がどうなって……ん？　なんか書いてある」

ふつと長谷川は、その紙が入れられていた段ボール箱の下の面に、何やら赤いマジックで文字が書かれていることに気が付いた。

文字を発見した長谷川は、とりあえずその段ボール箱を持ち上げ、中に書かれている赤い文字を確認してみる。

→この位置でかぶって」

「『この位置で』って……。こっ？」

一応、文字で書かれていた通りに、長谷川が段ボール箱を頭にかぶった。

その時だ。

「今だっ！！」

「えっ？」

「うりゃー！！　鬼はあー外！」

「福はあーうち！」

「ついでに雨男も外！！」

「えっ、うわっ……。！！　痛っ！　痛っ！　痛っ！　えっ、何っ！？」

何がなんだか分からぬまま、長谷川はいきなり用具入れから飛び出してきた三人に、まるで囲まれるかのように豆を投げ付けられた。これには長谷川も全く意味が分からず、しばし豆攻撃を喰らうばかり。

段ボール箱の中にある顔に至っては、まるで豆鉄砲を喰らわされた鳩のように固まっていた。

さらに最悪だったのは、未佳達が先程の長谷川の本音を聞いていたこと。

半分その発言に対しての仕返しのように、三人は豆を投げ付けながら叫んだ。

「悪かったっ！ わねえっ！！ 口調がキツめのっ！ 女でっ！！」
「フリーダムの何処がいけないんっ！？ 三十路過ぎ真近のっ！
女性がつ！ 自由求めたらアカンっ！？」

「長谷川君っ！ 酷いじゃないですかっ！！ 僕だけ『特に何もない』ってっ！！」

「そっ・・・、そこキレます？！ ちゃうでしよっ！？ 痛っ！」

「大体さとおちねえ！ 自分で思ったこと口に出し過ぎっ！！ 用具入れで笑い堪えてる私達のこともっ！ 少しは考えなさいよっ！
あの中」

「えっ！？ 痛った！！ えっ・・・、聞いてたの！？」

「『聞いてたの？』って！！ あれウチの字やて気付かんかったん？！ もう10年もあるんに！！」

「あっ！！ そ、そっか！ だからあの字見覚えが・・・痛いですって！！」

もうやられっ放しなのが耐え切れなくなり、長谷川は段ボール箱を頭から外した。

そしてその時初めて気が付いたのだ。

その段ボール箱の丁度目の穴が空いていた外側の面に、大きく鬼の顔の絵が描かれていたことに。

「！！！」

「ハハッ！！ 気付くの遅ーい」

「てつきり気付いてるかと思ってたんに。ねえ？」

「はい」

「『はい』って・・・！！ それになんで今日節分？！」

「だって、2月に出来なかったから」

「そういう理由？！」

「他に何があんのよ。ねえ？」

「「うん」」

「くっ！！ ああああーっ！！ もうっ！！ こうなったら僕も黙
つてないですよー！！」

長谷川はそういきなり言い出すや否や、勢いよく控え室を飛び出して行った。

そんな長谷川の後ろ姿を見て、三人は困惑するどころか大爆笑している。

しかも豆を持ったまま。

「ハハハッ！！」

「さとうち叫んで出ていった、ハハ」

「ハッハッハッ！ でも、追い出す形になっちゃいましたよ？」

「の前に・・・。あの人何しに行ったの？」

「「・・・さあ？」」

何故か出て行ったきり戻ってこない長谷川が気になり、未佳達は入り口の扉に近付いた。
その瞬間。

「おりゃー！！」

「ギャッ！！」

「きゃー！ 何？ 何？」

「なんだコレ?!」

出入り口扉から戻ってきた長谷川は、一体何処で拾ってきたのか、大きな麻袋を片手に抱え、その中に入っていた小さな紫色の粒を、豪快に末佳達の方に投げ付けてきた。

いきなりわけの分らないものを投げ付けられ、三人は一時大パニック。

だがその投げ付けられたものの正体が判明した途端、末佳は『あつ!』と声を漏らし、長谷川に怒鳴り口調で口を開いた。

「ちよつ・・・、ちよつと!!　これ小豆じゃない!!　節分に関係ないもの投げ込んでどうするのよ!!」

「あの・・・、末佳さん?　今日の時点で節分関係ないよ?」

「そんなんもう関係ないです!!　さっきの仕返しですから!」

「小豆じゃ投げ終わった後食べられないでしょ!!」

末佳はそう怒鳴りながらも、器用に長谷川からの小豆投げ攻撃をひよいつとかわす。

その後もしばらく投げ合い、逃げ合いを続けていた時、悲劇は起きた。

運悪く末佳の後ろに隠れていた厘が、末佳がその場を離れたことによつて、大量の小豆を頭にぶつけてしまったのだ。

その光景を見た三人の脳裏に『マズイ』という言葉が浮かぶ。そしてその予測は、モロに的中した。

「さあー・・・!!　とおーつ・・・!!　ちいー・・・!!」

「あ・・・、アカン・・・」

「わ・・・、私知ら」

「もうみんな許さへん!!」

そう大声で叫んだと思えば、厘はリオが今まで一度も見たとのな
いような形相を浮かべ、床に散らばっていた小豆を両手で掴み取り、
三人に向かつて思いっきり投げ付けた。

厘がこんな度を越した行動を起こす時は、本気でキレた時のみ。

さらにこちらの投げ方は、先程の長谷川の軽い感じのものはまる
で違い、当然手加減も一切無し。

万が一目や顔などに当たってしまったら、正直言ってかなり危険だ。

もはやこれはどうにもならないと悟り、三人はただただ厘からの攻
撃に逃げ出すばかり。

「な、なんで関係のない僕までっつ!!」

「泣きたくなる気持ちも分からなくはないですけど……!! も、
もうどうしようも……」

「もう! さとつち、どうしてくれるのよ!!」

「『どうしてくれるの』って……」

「あなたが小歩路さんを鬼にしたんでしょ!? 責任取りなさい!
!」

「んな無茶な……っ!!」

そんなことを言っている間にも、厘は小豆を三人に向かつて投げ付
けてくる。

そればかりか、未佳以外姿の見えないリオは、先程から長谷川達に
踏み付けられ、厘の小豆攻撃をモ口に喰らわされ、まさにてんでこ
舞い状態だ。

一応身体を透けさせているので痛みはないが、それにしても未佳達
に近付きようがない。

「ど．．．、どうしよう．．．」

「ああーっ！！ もう！ こうなったらみんなで投げ返そう！！」

「．．．．えっ？」

「ほら！ ．．．うりやつ！！」

「痛っ！ ．．．みかつぺえっ！！」

「んじゃあ．．．。僕は長谷川君に．．．。それっ！！」

「えっ！？ なんで？！ 痛っ！！ 手神さん．．．．．裏切らないと思つてたのに．．．」

「ハッハッハ！」

「っ．．．もういいですよ！！ だったらこつちだつてみかつぺに．．．おりやつ！」

「っ！ ．．．いったあーい！！ なんで私に投げるのよ！！」

「じゃあこつちも．．．、手神さんに、えいっ！！」

「．．．っ！！ なっ．．．、なんでそうなるんですか？！」

皆が敵仲間関係なしに小豆を投げた時点で、この後の結果は決まっていた。

「やったわねえーっ！！」

「うりやつ！！」

「喰らえっ！」

「それっ！！」

まるで真冬の雪合戦のように、未佳達は手当たり次第に周りのメンバーに小豆を投げ付けた。

ただし今度は、単なる『遊び』になっていたので、ある程度の力加減はした状態で。

しかし、それでも投げているものは硬い小豆と大豆。

痛くないはずがない。

「痛っ！ もう・・・っ！ うりゃっ！！・・・キャッ！」

「おりゃっ！！ おりゃっ！！・・・ぐはっ！」

「よし！ 当たった♪ 当たった♪ それっ！！」

「さつきから僕だけ一人狙い・・・酷いじゃないですかっ！！」

「痛っ！！」

「キャッ！！」

「・・・ハアー・・・。これじゃあまるで戦争だよ・・・」

しばしその投げ合いを、リオは半分呆れ顔で見つめた。

するとたまたまりオの近くで小豆を拾っていた未佳が、リオの方を見ずにやや興奮気味のまま口を開く。

「ほら！ リオも投げて！！」

「えっ・・・！？ 無理だよ！ 僕が投げたら、小豆が宙に浮いているみたいに見られちゃうよ！！」

「みんなの後ろから投げれば大丈夫よ！ これ楽しいけど、一人じや全員に投げられないから」

「・・・って、みんなそうだよ！！」

「みかっぺ隙アリ！！」

「えっ・・・、キャアアッ！！」

「当たった♪ 当たった♪」

「やったなあ！！ ほら、リオ！ 早く！！」

「・・・僕どうなっても知らないからね！？」

その後は謎の小豆一握り浮遊なそも加わり、未佳達の小豆合戦はヒートアップした。

もはや何のために事務所に来ているのか考えさせられる程メンバーは小豆を投げ続けている。

特に女性群に至っては、両手で一握りずつ小豆を掴んで投げ付けてくるので、中々男性群は投げられない。

「うわっ！ また両手や・・・ギヤアアアアッ！！」

「う・・・、わっ、わっ、ワアアアア！！」

「そっ・・・れっ！！」

「ほい！！ はい！！ うりゃっ！！」

「・・・っ・・・ぼ、僕やって、やられっ放しじゃないですよ？！
反撃だつてえー・・・っ！！」

長谷川がそう叫びながら、女性群同様、両手いっぱい小豆を握り締め、それを未佳と厘に投げ付けようとした。
その時だ。

「な・・・、何やってるんですか！！」

「「「あっ・・・」」」

「栗野・・・、さん・・・」

「ハ・・・、ハハハ・・・。。まずい・・・」

「一体皆さんで何をやっているのか・・・。じっくり聞かせて頂きましょうかあ？！」

その栗野の登場により、未佳達の節分小豆合戦は、約5分ほどで終了した。

その後、栗野からたつぷりと事情聴取&説教を受けた未佳達は、長谷川が勝手に何処から持ってきた小豆を、全て手洗い場で洗うという罰を受けることとなった。

とりあえずメンバー四人で小豆を洗っていると、全ての根源でもある長谷川からこんな言葉が漏れる。

「はあー……。滅多にないですよ。一応名が知られているアーティストが、手洗い場でザル使いながら小豆洗ってる絵なんて……。」「……。あのさあ！ 誰のせいでこんなことになったと思ってる？」「……。すみません」

「まあまあ。それにほら……。途中から僕達も投げちゃいましたし……。長谷川君ばかり責めるのは……。」「

「責めてる」んじゃなくて「訊いてる」のよ」

（それを「責めてる」って言うんじゃないですか。世間じゃ……。）
「あつ、大豆みつけ」

そう言うと、厘は長谷川のザルの中に紛れ込んでいた大豆を手に取り、元々大豆が入っていた箱の中に仕舞った。

先程からちよくちよく見つけては入れていたこともあり、大豆はほぼ二箱分全てを拾いきっているような数になっている。

厘はその箱の中を一旦覗くと、控え室に散らばっていた小豆を全て入れた袋の方に視線を向け、溜息を吐いた。

皆が控え室にバラ撒いた小豆の量は、麻袋の中の5分の1。

その内、洗い終わって乾かしている分は、まだその半分にもなっていない。

ましてや今はまだ3月。

外の寒さのせい、水道の水もかなりの冷水となっているため、とにかく手が悴んでしまっただけで仕方がない。

本気で最悪な気分だ。

「冷たい……。もう指が氷みたいよ」

「ウチ、霜焼けになっちゃったかも……」

「うん。キーボードやる人間には辛いわよ。これ……」

（ギターも十分辛いですけど……）

本音を声に出してしまうとまずい結果になると分かり切っていたので、長谷川はあえて胸中だけで呟いた。

その隣りでは、未佳が両手に『ハアーツ・・・』と息を吹きかけ、手を温めている。

「ところでさとうち・・・、熱またぶり返したりしてない？」

「ん？・・・ああ・・・。今日の朝が36度6分だったから『よし！』と思ったんですけど、まずかった・・・、ですか？」

「それくらいなら・・・、治ったってみていいんじゃない？ いやね。復帰して早々こんなことやり出したから、また熱上がっちゃったんじゃないかなあゝって・・・」

「いや、それに関しては大丈夫です。にしても・・・・・・シュールやなあゝ。小豆洗うの・・・」

「ホンマ・・・。これじゃ妖怪の『小豆洗い』やん」

「えっ？」

「はい？」

「なんです？ その『小豆洗い』って・・・」

「えっ？ 知らん？・・・『小豆洗い』って、いつも小豆だけ洗ってる変わった妖怪・・・」

「なんか知らんけどある意味悲しいわ！！」

（っと言うか、むしろ哀れ・・・）

そんな厘のわけの分からない話をする事約40分。

ようやく問題の小豆洗いが終了した。

やっときれいに洗い終えた小豆を見て、未佳は安堵の溜息を吐く。そしてそれと同時に、ずっと気になっていたことを長谷川に尋ねた。

「ところで、これ何の小豆？」

「えっ？ ああ、これ・・・。なんかよく分かりませんが、どうやら事務所のクッションの中に入れる小豆みたいよ」

「クッション？」

「ええ。元々そのクッションの中に入っていた小豆が、古くてボロボロになってきたんで、この小豆を入れて詰め直すつもりで持ってきたみたいです。僕が昼休み後に事務所に来てみたら、2階のスタッフルーム前に置いてあったで」

「・・・でもさあ・・・。『中の小豆がボロボロになるくらい』って・・・、一体何年前のクッションよ」

「明らかに新しいものを買った方がいいですよね？」

「ねえ。しかも中身が小豆って・・・、普通ビーズかもみ殻でしようよ」

「まあ、その人にはその人なりの理由があるんじゃない？」

「・・・まあね」

ふつと末佳は、厩が集めているこの大豆が気になった。

この大豆を撒いていた部屋は土足なのだが、まさか食べる気なのだろうか。

末佳は恐る恐る、厩に大豆のことを尋ねた。

「ところでその大豆・・・。どうするの？」

「えっ？ 食べるよ？」

「えっ！？ みんな土足で歩いてた床に落ちてたのに？！」

「洗って食べればええやん」

「・・・」

「みなさん！ あっ・・・、終わったみたいです」

ふつと皆の作業状態を確認しにやってきた栗野は、きれいに洗い終わった小豆を見て『うんうん』と頷いた。

とりあえず今乾かしている小豆は、明日にでも回収して仕舞えばいいだろう。

「はい！　じゃあ今日はこれでいいですよ。皆さんお帰りになったも」

「よし！」

「やっと終わった・・・」

「栗野さくん。もうウチ手え冷たくて痛い」

「えっ？」

いきなり聞こえてきた厘の発言に驚いている暇もなく、厘は栗野の右腕に両手でガシリと掴んできた。

その袖越しに伝わってくる手の温度に、栗野は思わずヒヤツとする。

「冷たい！　・・・えっ・・・、厘さん、手大丈夫ですか？　ほとんど固まってますけど・・・」

「小歩路さん、運転できる？　そもそも・・・、今日は車？」

「ううん。ガソリンあんまりなかったから、今日は乗ってこっへんかった・・・」

「じゃあ・・・、途中まで私の車で送りましょうか？」

「えっ？　・・・ええの？」

「はい。未佳さんもいいですよね？」

「まあ・・・。さとうちも手神さんも車だし・・・。今日くらいいいんじゃない？」

「そういうことですから・・・。送っていきますよ」

二人が笑みを浮かべながらそう言って頷いてみせると、厘は一気に表情を『ぱあっ』と輝かせた。

「ありがとう！」

「どういたしまして」

「じゃあ本日はこれにて解散です」

「「お疲れ様でした！」」

「あつ！ ちよつと待つて！！」
「「「「「？」「」「」」

突然厘はそう言い出すと、そのまま何故か控え室の方へと走り出してしまった。

それから待つこと約1分。

「はい。これみんなに」

そう言つて厘が持つてきたのは、個別に袋に入れられたひなあられだった。

袋の数を見ると、メンバーだけではなく栗野の分もある。

「わあーっ」

「懐かしい」

「ひなあられじゃないですか！」

「これ見ると本当に『3月』っていう感じですね」

「でしょ？」

「なんか今日一日だけで、行事を2つも体験した気分ね」

未佳達はそう口々に言いながら、それぞれ懐かしげにひなあられを受け取り見つめた。

袋の中のひなあられは、ポン菓子ほどの小さなものや、少々ビー玉よりも大きめのものなど、色や大きさも様々。

今しか売られていないお菓子と言つのもあつて、少々未佳の顔からも笑みがこぼれる。

「はい。これは栗野さん」

「私ももらつていいんですか？」

「うん。人数分買つてきたから。ちよつと事情があつて、大豆入っ

てへんけど・・・」

「「「「「え？・・・・・・・・」」

「「「「「ん？・・・・・・・・」」

「「「「「って・・・」」

「「「「「これの大豆だったんかいっ！！！！」」」」

そんなツツコミを最後に行ったところで、メンバー達はそれぞれ開きとなった。

予約死亡期限切れまで あと 173日

20 . そんなの聞いてない!!

この日未佳は、あの小屋木結衣のライブ練習のため、二日続きで事務所にやってきていた。

今日はあの長谷川もギター担当として、このライブ練習に参加する予定である。

ちなみに今日は、いつもの事務所にいることが多い手神や厘が代わりに休みだ。

(さてと・・・。コーラス。コーラス)

「またあの爆音の部屋に行くの？ 嫌だなあ・・・」

二人で6階のライブハウスに向かっていた時、リオが廊下でそう呟き、足を止めた。

そんなリオを見て、未佳はあのピンク色のウォークマンをリオに手渡す。

「じゃあまたあの隅にでもいれば？ これ聴きながら・・・。その代わり、多分ずっとライブのドラム爆音とか、そういうのに慣れないと思うけど」

「えっ・・・？ もしかして『慣れる』って言いたいのか？」

「私とずっと一緒にいるのなら、今のうちに慣れておかないと大変よ？ 忘れてはいないだろうけど、私はアーティストなんだから・・・。ライブや曲作りでドラムやギターは付きもの。そうじゃなかったて、8月にはツアーライブだってあるんだし・・・。まさかその期間中姿を消すつもりじゃないでしょうねえ？」

「そ・・・、そんなわけ・・・っ!! それにこっちは絶えず、未佳さんに付いていないといけないし・・・」

「だったら慣れておきなさいよ。今日は少し耳を押さえるのを止めたりしながら……。ほら、行くよ」

未佳はそう口にすると、すたこらとライブハウスの方に歩いていつてしまった。

そんな未佳の後姿を見つめながら、リオはふつと溜息を吐く。

「はぁー……。これじゃあまるで付き人だよ……。」

「ほら、早く!」

「はいはい……。」

内心『立場が逆転している』と思いつつ、リオは黙って未佳の後ろへ。

そして未佳が、中に入ろうとライブハウスの出入り口扉を開けた。その時だ。

ジャアアアアアーンツ!!

突然未佳が扉を開けた瞬間『大音量』と言うよりは『爆音』に等しいギターの音色が、激しくライブハウス内に響き渡った。

そのあまりの大音量に、未佳とリオは耳を押さえるのも忘れて、ただただその場に小さく縮こまる。

「うつ……。るさーい!!」

「……。んだよ! 今の!!」

「今のは……。ギター?」

未佳は半分ムツとした表情のまま、その爆音が聞こえてきた方向に

視線を向ける。

そこには、同じくあまりの爆音に耳を押さえている長谷川と、渋い表情を浮かべている湯盛の姿があった。

「さとつち！　今のなんですか！？」

「す．．．すみません！！　なんか．．．音量を高めに設定されてたみたいで．．．今直してきます！！」

長谷川はそう言ったかと思うと、問題のギターをステージ上に置き、ステージ裏にある機材置場の方へと走り出していった。

そんな長谷川を横目で見つつ、未佳はたまたま近くにいた小屋木や小河。湯盛に声を掛ける。

「小屋木さん、小河さん、まっちゃん．．．」

「えっ？　あつ、坂井さん」

「ああ！　みかっぺ」

「おっ、おはようございます。坂井さん」

「今の．．．何？」

「へっ？　あつ．．．もしかして聴いちゃいました？」

「あっちゃー．．．」

「坂井さん、タイミング悪かったですねえー．．．」

そう三人に言われ、未佳はただただ渋い顔のまま苦笑する。

ようは『自分は運が悪い』と言いたいのだろうか。

「で、さっきのは何？」

「ああー．．．。実はさとつちが練習しようとして、ギターを『ジヤーンツ！』ってやったら、いきなり『ズシャアアアーンツ！』って」

「まっちゃん！　擬音ばっかで全然分らないですよー！！」

「あつ……。つまり、ギターの設定音量が大きめになっていて、それに気付かずに、長谷川さんがギターを弾いちゃったんです」
「な、なるほどね……」

「なんだよ。末佳さんだって爆音慣れしてないじゃん……」

バンツ！！

「？ 末佳さん……。どうしました？」

「後ろの方に、何か……？」

「い、いいえ！ ちょっと虫が飛んでて……。後ろを『ドガッ！』と……」

そう笑みを浮かべて言う末佳を、リオは半分目を見開いたまま、やや末佳から5メートルほど離れたところで見つめた。

実はリオが爆音のことで呟いた瞬間、末佳が後ろにいるリオに向かって、いきなり強烈な後ろ蹴りをやってきたのだ。

幸い、その足蹴りに気付き後ろに下がったのと、即座に身を透けさせたので当たりはしなかったが、もし当たっていれば、おそらく腹部を蹴られて転がっていたことだろう。

今更になって、リオは末佳がやや怒らせるとおっかない人間なのだと気が付いた。

「（恐つ……。！　というか……。あつ……。ぶなっ！！）」
「そうだ、リオ……。私、言い忘れてたけど」
「……。？」

ふっと、いきなりリオの方に向き直ってしゃがみ込んだ末佳は、や

や不気味な笑みを浮かべて、リオにこう言った。

「足蹴り……。得意だから」

「〜っ?!」

「じゃ、また後でね」

そう言い残し、練習用のステージに向かった未佳を見て、リオはもう未佳を怒らせないようにしようと心に決めた。

「（でもあれを『慣れる』って? ……こつち全然自信ないんだけどなあ……）」

リオがそんなことを呟いた頃、ようやく音量調整を終えて戻ってきた長谷川も加わって、ライヴステージメンバーは早速練習へと取り掛かった。

身かは誰にも指示されぬうちに、いつものコーラスの立ち位置へと移動する。

そこに立ってみて気が付いたのは、大勢のスタッフや関係者達が、かなり真剣な面持ちで打ち合わせを行っていたこと。

もうライヴまで日が浅くなりつつあることもあるだろうが、ここま
で関係者が真剣にやっている向こうと、少々こちらも緊張する。

完全にミスは許さないと感じた。

この空気に全くリラックスすることが出来ず、未佳は自分の前の方に立ち位置でチューニングを行っている長谷川に声を掛けた。

「ねえ……。ねえ、さとつち」

「……。ん?」

「なんか……。ピリピリしてるね。周り……」

「えっ？ ああ……。まあ大事な10周年記念ライブですからねえ。どうにか成功させたいんでしょ？」

「ってことなんだろうけど……。私苦手よ。こんなピリピリした空気……。あゝあ、恐いっ」

そう言うと、未佳は両方の二の腕を摩りながら小さく震えた。そんな姿を見て、長谷川は普通に『ハハハ』と笑っている。

「笑うところじゃないでしょ?!」

「あ、はい……。まあ、その前に……。そんな好きな人なんてないんじゃないですか？ 女性にしろ、男性にしろ……。」

「それは……。まあ……。」

「はい！ じゃあ頭から練習始めます!!」

そのスタッフの声に気付いた未佳と長谷川は、そこで会話を中断させた。

自分達のライブならともかく、これは他人のライブなのだ。

今は出来る限り、自分達はこのライブに協力しなければならない。ましてや余計な行動のせいでこのライブに泥を塗ることなど、全く以て論外だ。

「1・2……。3・フォー！」

その掛け声と共に、先程までバラバラだった楽器のメロディーが一つ曲となって、見事にライブバージョンの1曲目を奏で始めた。

だが肝心の未佳は、若干無表情のままただテンポに合わせて腰を左右に揺らすだけ。

というものの、基本的に未佳を含むコーラス三人組は、曲一つひとつの出番がそれほど多くはない。

ほとんどが少しだけ歌って、下半身を左右にややゆっくり踊るだけなのだ。

中にはアーティスト側の都合やイメージ上、コーラスを一切取り入れない曲だってある。

ようは末佳にとって、コーラスは少々欲求不満な仕事なのだ。

（あゝ……。もっとちゃんと歌いたいなあ……。まあ……。これでもコーラスの出番はやや多めに作ってある方なんだし、私はサポメン役だから、あれやこれやとは言えないんだけど……。）

とりあえず今は立場を弁えながら、末佳はコーラスを出来る限り全力で演じた。

そうしてライブ練習を開始すること2時間。

ようやく一回目の休憩となり、周りは少々自信のない箇所の練習や水分補給、実際に演奏してみても気になった部分の打ち合わせなど、それぞれのやり方で一旦散る。

ちなみに末佳の場合は、やはりコーラスは『喉』が命なので、とりあえず水分補給。

その後は個々に発声練習を行おうと口を開けていた時だ。

「末佳さーん！ 長谷川さーん！」

「h a a . . . えっ？」

「ん？ 栗野さん……。？」

ふっと呼ばれた方に視線を向けてみれば、そこには末佳を迎えに行った後、2階のスタッフルームで待機していたはずの栗野が、何故かステージの下のところ立っていた。

しかもよく見てみれば、何やらこちらに向かって手招きしている。

「ちょっと今いいですか？ 休憩中みたいなんで……。」

「あつ・・・、はい。大丈夫ですけど」
「どうかしめました？」

二人はそう尋ねながら、ステージの裏を回るのではなく、そのままステージの上から降り、栗野の方へと向かった。そんな二人の様子を見て、少々気になったリオも二人の方へと向かう。

ようやくCARNELIANメンバー二人が揃ったところで、栗野は口を開いた。

「実は・・・。5日後、NEWシングルの発売日でしょう？　それは・・・、お二人ともご存知ですよ、ねえ？」

「はい」

「もちろん」

「その発売イベントで、大阪と東京で3曲ずつ歌って、ついでにポスターお渡し会をやることになっていたのは、分かっていましたよね？」

「・・・はい」

その栗野の言うNEWシングルとは、あの日未佳が飛び降りた日にPVを撮っていた新曲『“明日”と“明日”と“昨日”』のことだ。

実は随分前から、あの新曲は発売日とその3日後に、東京・大阪の二カ所でミニライブ&イベントを行う予定になっていた。

内容はメンバー4人のトークと、バンドのメジャー楽曲と新曲を合わせた計3曲の楽曲披露。

そして一番のビッグイベントが、メンバーからのポスターお渡し会。このポスターお渡し会は、新曲のCDに入っている『ポスターお渡し券』を持っている人のみ、イベントでメンバーから特製ポス

ターが渡されると言うもの。

ちなみにそのポスター券は、新曲のPVビデオが入っている初回限定盤の極限られたものにしか入っていないのだが、今回のイベントでは、初回・通常ともその券が同封されているCDを、両方のイベント会場で300枚ずつ販売する予定だ。

「それがどうかしました？」

「・・・実はそのポスターに、せめて日が近い大阪分だけでも、今日中にサインしてほしいんだって・・・」

「・・・はいっ!？」

「サインッ!? 私達ポスターを渡すのは知ってたけど、サインを書かないといけないなんて聞いてないよ?!」

「っと言うより・・・。まだ歌う曲の練習すらやってへんのに?!」

『サイン書いとけ』って・・・。えっ?!」

「今事務所の人との話し合いで急遽決まったんです。歌の練習は明日から・・・。それと手神さんと厘さんは、明日このことを伝える予定ですから、お二人はこの練習が終わった後、即控え室の方でサインお願いします」

「んなまさか・・・」

「はぁー・・・。えっ? それってまさか・・・、東京と大阪両方・・・、なんてこと・・・」

やや苦笑いを浮かべたままの未佳が、恐る恐る栗野にそう尋ねてみると、栗野はしばし間を置いた後『はい・・・』と、半分掠れているかのような声で答えた。

それも頷きながら。

それを聞いた途端、苦笑いだった未佳の表情が、一気に青褪めた表情へと変わった。

「えっ？！ それってつまり……。今日中に1000枚もサインしろってこと?!」

「せつ……。1000枚?!?」

「い、いえ！ だから今日はせめて、販売日に行う予定の大阪分を・・。」

「それでも500枚じゃない!!」

「とにかく！ お二人とも、午後の方はお願いしますね?! じゃあ、私は事務所の打ち合わせがありますので、また後で」

「えっ?! あつ、ちよつと・・!!」

「栗野さんつ!!」

そう言うが早いか、栗野は伝えることは伝えたと言わんばかりに、そくさとライブハウスから出て行ってしまった。

残された二人と一人は、ただただ啞然と立ち尽くすばかり。

「逃げた・・。」

「・・・サイン・・・。全部書くのおゝっ?!」

「まあ、でも・・・。サインなんて一つ書くのに2、3秒くらいですから、そんなんちゃっちゃか書いて終わらせればええやないですか」

その長谷川のあまりにもマイペースな発言に、未佳はあの『はあゝ!?!』を口にした。

「さとうち分かってるっ?! 東京と大阪合わせて1000枚分、私達はサインを書かないといけないの?!? それも大阪分は今日中に!!」

「で、でも・・・。どうしても今日中ってわけやないし。今日は500枚だけやし・・。」

「いい？ さとつち。大阪公演まではあと5日しかなくて、歌の練習はおそらく明日と明後日と明々後日。それに大阪分のサインを書くだけでヘトヘトなのに、その3日後は東京。しかも東京のリハーサルも兼ねて、出発は大阪公演のすぐ後。そしてそこでもサインを書かないといけない！ でもそんな時間は東京公演の日にはない！
ということとは今日か明日の内に、ポスターにサインを全て書き上げておかないといけないの！！ 分かてる！？ 余裕かましてる時間なんてないの！！」

「・・・・・・・・今ハッキリ分かりました・・・・・・・・」
「そう。それならいい・・・・」

しかし1000枚全てに書くとなると、かなり気が重い。
おそらくそれは、後から書かされるあの二人もそうなのだろうとは思うが。

「はあ・・・・・・・・。なんでこうもいきなり決めるのよー・・・・」

「まあ・・・・・・・・。仕方ないでしょう？ 決まっちゃったんですから・・・・」

「あゝあ・・・・。家で作曲作業やろうと思ってたのにいゝ！」

「僕やて、風邪引いて寝込んだ分の遅れ取り戻すために、自宅ギターやりましたですよ！」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

二人はあれやこれやと愚痴を言い合った後、二人でお互いの顔を見つめながら、最後に重い溜息を『はあ・・・・・・・・』と吐いた。

気が付けば、先程ようやく始まったばかりの休憩時間でさえ、あともう少して終わりになるうとしている。

「こんなの・・・・」

「本当に・・・」

「「worst（最悪）・・・」」

「はい！ 皆さん、練習再開しますよー！！ 全員ステージ前に戻ってくださいー！」

「坂井さん、お願いしまーす」

「・・・はい！」

「さとつち、早くー」

「今戻ってまーす！！」

その後二人は気持ちを切り替え、小屋木のライブ練習を夕方5時過ぎまで続けた。

そしてしばしのミーティングの後、二人がポスターが積まれている控え室に入ったのは、それから30分後のことである。

21・サイン記入の地獄

午後5時34分。

かなり微妙な時間帯に、未佳と長谷川は控え室の中へと入っていた。

中に入ってすぐ二人の目に飛び込んできたものは、言うまでもなく山積みになされた自分達のポスター。

このポスターには、例の新曲CDのジャケットを撮った場所で、全く別のポーズをとっているメンバーが写っている。

最近のアーティスト撮影は、CD用と取材用の他に、こうしたポスター用も一緒に撮るのが当たり前になってきているのだ。

ちなみに今回のこの写真は、奈良の方のやや山奥な場所で撮ったもので、この時はかなり気温が低かったのをよく覚えている。

「あの時の写真だ・・・」

「CDで使わへんと思ったたら、こういうことだったんですね・・・」

半分その写真を見た時は、二人とも『懐かしい』と思いはしたのだが、そのポスターの枚数を見ると、少々そんなことを思っていた気持ちも何処かへ飛んで行ってしまう。

とりあえず未佳は、実際に枚数が何枚あるのかを数えることにした。このポスターは基本ゴチャゴチャにならぬよう、100枚ごとに粘着力のないテープで一まとめにされている。

予定通り1000枚なら、この束が全部で10束あるはずだ。

「1・・・、2・・・、3、4、5・・・」

「6・・・、7・・・、8・・・。これで9」

「それで9の下にまだ一つあるから・・・」

「10束・・・。1000ですね？」

「やっぱり1000あったかあ・・・」

「予想枚数よりも少ないことを願いましたけど・・・、ダメでしたね」

「キィッッ!!」

未佳は思わずその場で奇声を発したが、その後は素早く油性のサインペンを取り出し、サイン記入を開始した。

どうやらあれやこれやと文句を言うよりも、1枚でも早く書いてしまった方が早いと気が付いたらしい。

二人のサイン記入は、まず最初に未佳がサインを記入。

その後はそのポスターを、隣りに座っている長谷川の方へ。

そして長谷川がサインを書き入れたら、そのポスターを用意されていた段ボール箱の中に入れる、という手動ベルトコンベア作業。

ちなみにサインを入れる場所は、ポスター写真の下の方にある縦10センチくらいの小さな余白。

元はメンバーのメッセージを入れるために空けていたのだが、本番ギリギリになって、それがサイン記入に変更になったらしい。

「まあ、実際・・・。まだこの下に入れる予定だったメッセージも、全然打ち合わせとかやってなかったですもんね」

「そうそう。いつやるんだろうなあゝって思ったまんま、完全にそれをやることすら忘れてたし・・・。やっと決まったと思ったら、サインに変更って・・・。ねえ？」

「うん！ 急すぎます！ しかも空は朝よりも余計にどんよりしてるし・・・。気持ち沈みますよ」

長谷川の言う通り、今日の空は朝からやや雲が多めで、全くもって

晴れる気配を見せない。

そればかりか、午後になった途端その曇りの度合いがピークに達し始め、今にも一雨降りそうな感じた。

そんな空をやや見つめながら、未佳はふっとこんなことを口にした。

「それに……。事務所もやり方が酷いわよね……」

「えっ？」

「だって……。っ！ オフィシャルサイトには『CDに数量限定でポスター券を同封』なんて言ってるくせに、実際には初回のやつにしか入れてないのよ？ それに、イベントには確実にその券が入ってるCDを、一つの会場で300枚ずつ販売。しかもその会場ではなく、最初の時点で券を購入できた人は、その会場で券入りCDを何枚購入しても良し。基本的に最初から持つてる人っていうのは、ようは私達のことを10年以上も応援してくれてるファンってことでしょう……。？ やり方が汚過ぎるわよ！」

どうやら未佳は、いくらでも懷から払ってしまう追っ掛けファンを対象に、ポスターお渡し券入りCDの購入条件を決めた事務所側のやり方が『かなりえげつない』と言いたいようだ。

だがこの事務所は、初めからこのようなやり方をやっていたわけではない。

『SAND』がこんな販売方法をやり始めたのは、わりかし最近のことだ。

理由はいくつかあるのだが、一番の大きな原因は、やはりCD自体を購入する人間が減っていることだろう。

最近では携帯の音楽サイトや未佳が持っている小さなフォークマンのように、直接CDがなくとも、音楽が手に入るようになってい

る。

勿論それらのダウンロードなどにも、料金等はちゃんと付く。しかしその金額は、CDの約半分以下くらいしかないものが多く、音楽会社からしてみれば赤字目前状態。

こんな今の時代を見てしまうと、それら流行りものが本当にいいものなのかどうか、かなり深く考えさせられてしまう。

さらにその他にも、CDを購入せずにレンタル屋で借りるだけ、と言う人間も増加する傾向にあり、今現在の音楽会社は、ほぼあちらこちらで火花を散らし合っている状態なのだ。

それら事務所側の変化には、流石の長谷川も少々気が付き始めている。た。

しかし自分達は、まだまだ微妙な位置にいるアーティスト。事務所側に口を出すことなど、到底無理な話だった。

「・・・前々から、みかっぺがこのやり方を嫌っていたのは知ってましたけど・・・、でも仕方ないじゃないですか」

「『仕方ない』って・・・!」

「いつかまたブームが去ったら、CDを購入する人が増えてきますよ。『人間は気持ちが移ろうもの・・・』なんですよ？ 小歩路さんからしてみれば・・・」

「それはそうだけど・・・」

「それに、今こんな目に遭っているのは僕達だけじゃないんですから・・・。色んな音楽会社のアーティスト達が、似たような目に遭っているんですよ？ それを言ったらみかっぺだって、あのウォークマン使ってるじゃないですか」

「しっ・・・、失礼ねえ！ 私はちゃんと買ってきたCDから入れているわよ!!!・・・自分の歌以外・・・」

「えっ……。自分の歌は？」

「……事務所でただで貰えるから……。それから入れざる負えない……」

「確かに……」

そんなことを口にしながらも、二人はいつの間にか20枚目のポスターにサインを書き込んでいた。

流石はデビュー10周年目のアーティストということもあり、二人は一文字も書き間違えず、しっかりとした筆記体サインを書いていく。

しかしそんな二人の様子を、二人の丁度間にあるスペースから黙って見つめていたり才は、ふっと未佳のサインを書く姿を見てこんなことを呟いた。

「未佳さん、早いなあ……」

「そお？」

「えっ？」

「あ、いや……。なんでも……。それよりさとつち。もう少し早くサイン書きなさいよ。さとつちのところに2枚もポスターがあるじゃない」

確かに未佳の言う通り、長谷川と未佳の間にあるテーブルスペースには、既に未佳のサインが書かれているポスターが2枚も置かれていた。

というのも、長谷川は一つのサインを書き終えるのに3秒程掛かるのに対し、未佳の場合は大体2秒程で書き終えてしまう。

さらに長谷川は、書き終えたポスターを段ボール箱に入れるという作業もあるため、どうしても2枚分ほどの差が出来てしまうのだ。

「そんなこと言われても……。僕サイン、ミスりたくないし……。それに段ボール箱の中にポスター仕舞わないといけへんから」

「長谷川さんは、サイン一つひとつを真心込めて書いてるみたいだよ？」

「何よ、それっ！？ それじゃあまるで、私が雑にサイン書いてるみたいじゃない！」

「あつ……。いや……。！ そんなつもりじゃ……。」

「まあ、確かに……。長谷川さんの方が読みやすいけどね……。」

「ほら！ 簡潔に言わないだけでそう言ってるじゃないのよ！！」

「えっ？！」

「まあね……。」

「もういいわよ！ あなたのことはしばらく空気同然に無視しておくから！！」

「そ、そんな……。っ！！」

「どうぞご自由に……。」

「ふんっ！！」

未佳はリオにそう怒鳴ると、お互いに顔を『プイツ！』と、相手の姿が見えない方向に反らした。

そんな未佳の態度を見て、長谷川はただただオロオロするばかり。

実際未佳が怒鳴っていた相手はリオだったのだが、生憎リオの声は長谷川には聞こえない。

さらに最悪なことに、リオの立っていた場所は、未佳と長谷川の丁度間にあるスペース。

そしてさらに最悪なことに、未佳とリオの会話に関する回答が、何故か長谷川の会話に対する回答と似通う形になってしまった。

そしてその結果、何気なく自分のサイン記入時間を口にした長谷川が、妙に未佳をキレさせたような感じになってしまったのである。

一体何が未佳の気に障ってしまったのか分からぬまま、長谷川はとりあえず『自分が怒らせたんだ』と我に言い聞かせ、未佳に言われた通り『空気』になりながら作業を続けた。
そうしてやり続けること1時間。

ここまでの時点でサインを書き終えたポスターの枚数は、少々最初に話しながらやっていたこともあり、予定枚数よりもやや少なめの233枚。

流石にここまでやっていると、少々指がけんしょうえん腱鞘炎のようになってくる。現に未佳も、先程からペンを置いては、指をグー&パーの形に動かして解していた。

「流石にこれだけの長時間はキツイわあゝ……。指が曲がる箇所
がかなりジンジンする・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「さとうちは？・・・指痛くないの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

（・・・あれ？）

（空気や。空気。・・・僕は空気！）

「もしもーし？」

何故か何も答えようとしないうちに長谷川に、未佳は理由も分からぬまま首を傾げる。

まさか長谷川が口を利かない理由が自分にあるなど、未佳は気付きもしない。

あまりにも無言のまま作業を続ける長谷川に、未佳は半分感心する
かのような目で口を開いた。

「相変わらず真面目ね、さとつちは……。よく何にも言わないで書けるわよ」

「……………いや！　あなたが言ったんでしょ！？」

「……………！！　ビックリしたあ……………いきなり大声出さないでよ！　それに『私が言った』ってどういうこと？！」

「だってさっき言ったやないですか！　『私はこれからあなたを空気として見る』って……………！　だから僕空気のつもりでやってたんですよ！！」

「はあ？　私そんなこと言って……………」

ここでようやく、未佳は何故長谷川がずっと黙っていたのかを理解した。

と同時に、未佳は思わず『あちゃ〜』と、顔を顰める。

（そつかあ……………。さつきりオに怒鳴ったのを、さとつち自分が怒鳴られてるのと勘違いしたんだ……………）

「いいですよ……………。僕は“空気”ですから……………」

「ちよつ、ちよつと……………。そんな自虐的にならないでよ」

そう未佳が言ってみても、長谷川はしよげ込むばかり。

実は長谷川には元々、何かあるとすぐ自虐的になってしまふ悪い性格があるのだ。

基本的にそこまで度の行き過ぎた自虐思考になることはあまりないのだが、一回こんな風になるとしばらくはどっぷり浸かったままになつてしまふのである。

「どうせ僕は空気ですよ……………。その辺にあるただの酸素ですよ……………。H2Oですよ……………」

「いや、それは水分……………」

「……………。そ、それにあれ、さとつちに怒鳴ったわけじゃない

し」

「・・・・・・？！ えっ？ じゃあ誰に怒鳴ったんですか？？」

「あっ・・・・、あれは単なる独り言よ」

「人の方を向いて？ それもあんなに怒鳴って？」

「ま、まあね・・・・」

「・・・・それって・・・・。かなりアブナイ人やないですか？」

「うるさいわよ！」

「ッ！！」

さらに時が過ぎ、大阪公演分のポスターは残り187枚となった。

この時の時刻は既に、夜の8時半真近。

この時間帯になると、職員側やアーティスト側に用事等がなければ、早い段階で事務所を閉め始める頃だろう。

ふつと末佳は、今日ここに来ていたアーティスト達のことを思い返してみたのだが『残業する』と言っていた人達に心当たりはない。ということとは、そろそろ事務所を閉める時間だろう。

「・・・・ねえ、残業する？」

「ん？」

「そろそろ事務所、早ければ閉まる時間だね？」

「・・・・そっか・・・・。今日残業する人いてへんかも・・・・」

「栗野さん、まだいるかな？ いれば『あと少しだから残業する』

って言えるんだけど・・・・。先に帰っちゃったかなあ・・・・」

「ハハ。んなまさか・・・・。マネージャーが先になんてことないでしょ？」

長谷川がそう笑いながら言った時だ。

突然誰かが二人のいる控え室のドアを『コンッコンッ』と、2回ほどノックした。

二人は一瞬『誰だろう』とお互いに顔を見合わせ、とりあえず『どうぞー』と、ドアの方に答えてみる。

するとドアの向こうから、栗野の『失礼しまーす』という声が聞こえてきた。

『噂をすれば』とは、まさにこのことだ。

「あれ？ お二人ともまだいらっしゃってたんですか?!」

「『いらっしゃってた』も何も・・・」

「終わらないですよ」

「ですよ、ねえ・・・。あの・・・、一応明日も仕事があるので、昨日残りをやられても構いませんよ?」

そう言われてもどうしようかと、二人は再び顔を見合わせた後、首を横に振った。

お互いに分かっているのだ。

ここで一旦作業を止めてしまったら、次の時にはさらに時間が掛かる結果になってしまうことを。

「いいです」

「一回止めると全く進まない気がするんで・・・」

「そう・・・、ですか・・・」

「・・・?」

ふつと未佳は、先程からチラチラと、栗野が自分の腕時計を気にしていることに気が付いた。

栗野がこんな仕草をする時は、大体別の予定がある時のみ。恐らくこの後に、自分達のこと以外の予定があるのだろう。未佳は栗野に尋ねた。

「もしかして栗野さん……。今日この後に何か」

「えっ？ ええ……。ちょっとZ、bさんのライブの件で、大阪グランディオホールに行かないといけなくなって……」

「あっ……。だったら行ってきた」

「えっ?!」

「私、バスでも帰れるから……。この時間じゃあ、もう誰もいないだろうし……。それに、あと数十分くらいで、この作業が終わると思えないんで」

確かにまだ軽く100枚近くも残っているこの状況で、到底早めに作業が終わるとは思えない。

少なくとも、あと2時間くらいは掛かるだろう。

未佳はそれを心配してそう伝えたのだが、栗野の方は中々『はい』とは言い出せないらしく、どうしようかと考え込んでいる。

「えっ……。でも……」

「大丈夫、大丈夫、誰も三十路の女性に手を出したりしないから」

「あ、あの……。それに何なら、僕の車で自宅まで送りますよ。……みかつぺを」

「えっ？ さとつち、今日車？」

「うん。もうね、あれから電車は僕の中で極力避けたいものになりましたから」

「あ、そう……。ほら、そういうことから。帰りの手なんていくらかもあるし」

「だから行ってきたても大丈夫ですよ」

今度は長谷川にもそう言われ、栗野はようやく二人に『分かりました』と答えた。

「じゃあ……。すみません、長谷川さん。お任せしていいですか？」

「はい、もちろん」

「じゃあ……。事務所の人にお二人が残業すること、伝えておきますね？」

「「お願いしまーす」」

「あつ！ 末佳さん明日、またいつもの時間に迎えに行きます」

「あ、はい。バイバーイ」

「それじゃあ」

栗野は最後に2回ほど頭を下げると、そのまま事務所を後にした。この時の事務所内は、やはり自分達以外に誰もいなかったようで、普段ではありえないくらいの静けさに包まれていた。

「僕達だけ……。ですかねえ？」

「面倒なんだよねえ」。最後に残ると……。事務所閉めないといけないでしょ？」

「……。そうだった……」

「まっ、いいや。残り135枚！ 早く終わらせちゃお」

「……。ですね」

こうしてシャシャシャとペンを走らせること1時間50分弱。予定よりも少し早めに、大阪公演分のサイン記入は終了した。終わったと同時に、二人はその場にペンを放り投げ、椅子の背凭れに凭れ掛かる。

「終了ー！」

「疲れた……」

「ハハハ。そりゃそうだよ。だって今……。9時過ぎだもん」

「はあゝ？　・・・・・・・・ホンマや・・・・」
「ハハハ！　ヘンに脱力し過ぎ」

そんなことを長谷川に言っただけで笑っていた末佳は、ふっと残り500枚のポスターの束を見て、しばし考え込んだ。

今ここでサイン記入を一時中断してしまったら、東京公演の分はいづれ書けるだろう。

本番まではもうほとんど時間がない。

そんな日程だと言うのに、別の日にサインを書き終えることが出来るのだろうか。

むしろそのことが心配なら、この一日を丸々犠牲にして、全部を終わらせてしまった方がいいような気がする。

（今日はもう家に帰るだけ・・・・。それなら・・・・）

「う・・・・・・・・指がもうアカン」

「さとうち」

「ん？」

「ちよつと酷いこと言っただけ？」

「・・・・ダメです」

「いや、ちよつとだけ・・・・」

「展開読めます」

「じゃあ話が早いじゃない」

「早くない！　明日でいいでしょ？！」

「今日中に終わらせれば、大変なのは今日だけよ？　あとは普通に夜になったら休めるんだから」

「そういう問題・・・・・・・・！」

「はい、決定！　東京分もやるよぉー？！」

「・・・・・・・・鬼！！！」

「鬼ですが何か？」

一方その頃。

二人の作業の邪魔にならぬよう控え室の外に出ていたリオは、とりあえず未佳から借りたウオークマンで音楽を聴きながら、控え室のドアに寄り掛かっていた。

外の通路は既に、明かりの大半が消されていて、やや薄暗い感じだ。そんな通路の真ん中で、中々控え室から出てこない二人に、リオは欠伸をしながら『まだかよ・・・』と呟く。

するとそれからしばらくして、誰かが控え室に向かってきていることに気が付いた。

どうやら、事務所内の見張り警備員らしい。

警備員は片手に懐中電灯を持ちながら、ゆっくりとこちらに向かってくる。

そしてその警備員は、何やらドア元でいくつかのチェックをする、腰に付けていた大量の鍵の一つで、控え室の扉を閉めてしまった。別に鍵を閉められてしまっても、未佳達は中から開けられるので問題は無いのだが、リオからしてみればかなり驚くことだ。

さらにはほんの少しだけ点いていた通路の明かりでさえも、警備員は『カチャリ』と消してしまった。

完全に未佳と長谷川がまだここにいることに気付いていない。仕事を終えた警備員は、そのままこの場を後にしてしまった。

「おーい！！ まだ二人いるよー！！ CARNELIAN・eyesの二人が残ってるよおーっ！！」

そのリオの叫び声は、鍵を閉めた警備員どころか、リオの声が聞こえる未佳でさえも、届くことはなかった。

翌朝。

いつものように車で事務所にやってきた厘は、待ち合わせ場所でもあったライブハウスの中へと入ってみて『あれ?』と首を傾けた。何故ならそのライブハウスの中には、リーダーの手神の姿しかなかったのだ。

手神はしばしキーボードを触っていたが、途中で厘の気配に気が付いたのか、厘の方に視線を向けた。

「ああ、小歩路さん・・・」

「あれ? みかっぺとさとっちは? ...まだ来てへんの?」

「うん・・・。いつもなら坂井さんがとくにやってきてるはずなんだけど・・・。今日はまだ長谷川君も来てなくて」

「遅いやん・・・。何してんの? あの二人・・・」

厘はそれを聞いて腰に手を当てながら、ふっと辺りを見渡す。

すると今度は何故か、いつも未佳の送り迎えを行っている栗野が、たった一人でライブハウスにやってきたのだ。

それもやってきた早々、未佳の名前を呼びながら。

「失礼しまーす! 未佳さーん!! いますかー?!」

「あれ? 栗野さん?」

「ああ、手神さんに厘さん・・・。あの、未佳さんは?」

「えっ・・・、まだ来てへんよ」

「「えっ?!」」

「そもそも・・・。なんでここにおるの?」

一人でここにやってきたことを不思議に思った厘は、何故栗野が一

人でここにきているのかを尋ねる。

すると栗野は、朝早くに未佳の自宅を訪ねた時のことを話し出した。

「実は……。未佳さんの自宅に迎えに行っただけですけど、いつまで経っても出てこなくて……。携帯も繋がらないし……。それで先に来てるんじゃないかって」

「でも……。ここには来てへんよ？」

「それに、長谷川君も……」

「えっ！？ 長谷川さんもなんですか！？」

これは流石におかしいと感じた栗野は、とりあえず事務所にいた職員全員に事情を説明。

その後スタッフ5人と警備員1人、そして厘達を含めた計9人掛かりで、事務所内や二人の自宅などを手分けで搜索し始めた。

しかしいくら辺りを探し回ってみても、二人の姿や痕跡は何処にもないまま。

結局探し始めて20分後くらいには、搜索メンバー全員がお手上げ状態になってしまっていた。

「栗野さん。最後に二人を見たのはいつ？」

「えっ？ えゝ……。つと。昨日は小屋木さんのライブ練習の後、二人にポスターサインを……」

そう手神に説明したその瞬間、栗野の脳裏に『ハッ！』と、何かが過ぎった。

「……。！！ まさかあの二人！！」

栗野は『もしかして』と思い、大急ぎで控え室の方へと走り出した。ところがいざ着いてみると、控え室のドアには鍵が掛かっていて、いくらドアノブを回してもびくともしない。

「あの・・・！　ここの鍵は！？」

「わ、私が持ってますけど・・・。でも誰もいませんでしたよ？」

そう口にする警備員に、栗野は半分怒鳴る感じの声で尋ねた。

「『誰もいない』って、開けて確認しました？！　電気は？！　話し声は？！」

「えっ、あ・・・。いや・・・」

「とにかく今すぐ開けてください！！！」

そう栗野に怒鳴られ、警備員は半分慌てながら鍵を開けた。

その光景を隣りで見ていた栗野は、一気に鍵の開いたドアを引き開ける。

「未佳さん！！」

「さとうち！！」

「二人・・・と、も・・・。あっ・・・」

「・・・えっ」

「うそ・・・」

そこで皆が見たのは、ペンを握り締めたまま机に突っ伏すして眠っている、未佳と長谷川の姿だった。

その隣りには、積み上げられたサイン入りのポスターの束もある。そんな二人の寝顔を見た栗野達は、半分苦笑いを浮かべながら二人の元に近付いた。

「未佳さん……。長谷川君まで……」

「昨日帰らなかったのね……」

「おい！ このポスター……。サイン全部書いてあるぞ?!」

男性スタッフのその言葉に、栗野達は『まさか』とポスターの方に視線を向けてみる。

すると確かに、そのスタッフ達の言う通り、1000枚全てのポスターに二人のサインがしっかりと書き込まれていた。

「この二人……。寝るギリギリまでやってたみたいね」

「ああ。見るよ、このサインペン……。キャップ嵌められてないぞ」

「……。ホンマや」

「ちよつと無理させちゃったかなあ……。」

栗野はそう言いながら、スタッフ達の方を少々睨みつけた。その恐ろしい視線に、スタッフ達は思わず身を強張らせる。

「でえ……。どうします?」

「もう少し寝かしといたら? ねえ?」

「そうね。手神さん達悪いけど、隣の部屋から毛布持ってきてもらえますか?」

「ああ、はい」

「あつ……。それとあとで二人も、ポスターのサイン記入、お願いしますね?」

「……。ええっ!?」

「シー……。ッ！ 起きちゃいますよ!!」

しかし心配していた二人は全く起きる気配を見せず、本来の事務所での仕事が始まったのは、それから約3時間後のことだった。

予約死亡期限切れまで

あと

172日

22・大阪公演練習

午後1時28分。

やや雲があるものの、久々に空が晴れてきたこの日。

何となく自然に目が覚めた末佳は、瞼を開けた先に写る視界に、思わずガバツと飛び起きた。

あの時と同様、自分の身に一体何が起こったのか全く分からない。ただ言えることは、ここが自分の自宅ではなく、事務所の何処かの部屋だと言うこと。

そして何やらそこで、一夜を明かしてしまったということだった。

「何処……？　ここ……」

とりあえず辺りを確かめようと視界を後ろの方に動かしてみると、何故か自分の足元に毛布が落ちていた。

拾ってよく見てみると、洗濯表示のタグには太めのマジックで『S AND』と書かれている。

「事務所のだ……。もう……。何があつたのよ」

末佳が半分お手上げ状態で混乱していると、ドアが開いていないにも関わらず、自分の近くから小さな足音が聞こえてきた。

もうこの足音には慣れていたし、その主も分かり切っていたが。

「リオ？」

「やつと起きた……」

「？　『やつと』……？」

「さっき末佳さん達が行方不明だって、事務所内大変だったよ。厘

さんとか手神さんとか栗野さんとか・・・みんな心配して探してたんだから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ごめん。もう少し事情を分かりやすく教えてくれない？」

そう頼んだだけなのに、リオは一体何処でこんな行動を覚えたのか、未佳のその言葉に合わせるかのように、その場に膝をガクリツと折らしてコケて見せた。

その反応に、未佳は半分怪しむかのような視線を向けて尋ねる。

「あれ？・・・リオ、関西スベリ出来たっけ？」

「いや、単に脱力しただけ・・・じゃなくて！！ 昨日長谷川さんと二人でポスターサインやったの覚えてないの！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あゝっ！！」

リオにそう聞かれて、未佳はようやく全てを思い出した。

実は昨日、長谷川を無理やり説得させてサイン記入を再開させた後、最後の1枚を書き終えた後で、その場に倒れるように寝てしまったのだ。

正確にはその約30分くらい前から、ややハッキリとした意識はなくなりかけていたのだが、とりあえずあそこまでやっていたのは何となく覚えている。

「まさか私・・・・あのまま寝ちゃったの？！」

「まあ・・・・。時間も夜中の3時回ってたしね・・・・。予約死亡期限がここで一回分切れただけのことだよ」

「あ・・・・つちゃゝ！！ もう！！ 予定狂いつ放しじゃない！！
ましてや昨日の服のまんまで、お風呂にも入り損なうなんてえ・・・・！！！」

「シーーーー！！ 未佳さん！ 静かに！！！」

「はっ？」

「と・な・り！！」

一体何のことを言っているのだろうと、未佳はリオが指差している方に視線を向けて、ようやくその意味を理解した。

未佳の隣りの席には、一緒に作業を行っていた長谷川が、未だに寝息を立てて眠っていたのだ。

そんな長谷川の背中には、先程未佳が拾った事務所の毛布が掛けられている。

「さとうちまで・・・」

「さっき二人を見つけた事務所の人と厘さん達が、未佳さんと長谷川さんに毛布を掛けたんだよ」

「じゃあ・・・、私達を見つけても起こさなかったのは・・・」

「うん。『かわいそうだからもう少し寝させてあげよう』って、厘さん達が言ったから・・・」

「あゝあ・・・」

「そう言えば未佳さん。警備員の人控え室に二人がいることに気付かなくて、そのまま鍵を掛けちゃったのが付いた？」

「えっ?!・・・ううん」

「やつぱり・・・。僕大声で『まだいるよー!!』って叫んだんだけど、未佳さんにしか僕の声聞こえないから・・・。気付かなかつたんじゃ、開けようがないね」

「そ、そうね・・・。で？　あなたは何処にいたの？」

「ドアの前で寝てた・・・」

そう答えながら、リオは何故か自分の背中 of 辺りを右手で摩り始める。

その行動に『おや?』と思いながら、未佳はまさかと尋ねた。

「もしかしてリオ……。あなた寝違えるの？」

「違うよ！！ 硬いところで寝てたから、背中が痛くなっただけ……」

「じゃあなんで身体を透けさせなかったのよ」

「そんなことしたら、背中から部屋の方に倒れるに決まってるじゃん！！」

「……。ま、いいや……。手神さん達は？」

「6階のライブハウス。今はサイン書きやってるけど、末佳さん達が起きてきたら、イベント練習やるってさ」

「ちよつと待つて……。今が12時過ぎでしょ？ それでこれからじゃあ……。ほとんど時間がないじゃない！！ さとつち寝かしてる場合じゃないわよ！！」

末佳はすぐさま椅子から立ち上がると、隣りで眠っている長谷川をどうにか起こそうとしてみたのだが、かなり爆睡しているのか中々起きない。

いくら体を揺すってみても、大声を掛けてみても効果なし。

それだけ疲労困憊だったということもあるのだろうが、もう自分達には無駄にしている時間などない。

末佳は焦りながらも、大声で名前を呼びながら体を左右に揺する。

「さとつち！！ 起きて……。！！ 長谷川ツ！！」

「(……。ツ！？)」

「……。ん？……。」

「あつ……。起きた？！」

「……。もう……。書きたくないです……。……」
僕のサインなんて……」

「んなの分かつてるわよ！ つというか……。昨日全部書き切ったでしょ？ 何を寝ぼけてって……。二度寝しないでよっ！！」

これはどうしようかと考え込んだ末佳は、半分申し訳ないとは思いつつ、長谷川の耳元でこう叫んだ。

「あっ！！ さとつちの背中に蛾がが・・・っ！！」

「？・・・うわっ！！ おわっ・・・！」

バタンッ！！

「「あっ・・・」」

末佳のその叫び声で、長谷川は無意識に自分の両肩を払いながら飛び起きた。

ここまでは末佳の予想通りだったのだが、その勢いで長谷川が椅子ごと後ろに倒れてしまったのは計算外。

末佳はすぐさま、椅子ごと倒れた長谷川の元へと駆け寄った。

「だ・・・大丈夫？」

「イタタ・・・。もう少しマシな起こし方にしてください・・・」

「ご、ごめん・・・」

「でもなんで後ろに？」

その後二人と一人は、リオから聞いた情報を頼りに、6階のライブハウスへと向かった。

ライブハウスに到着してみると、聞こえてきたのは楽器の音色ではなく『シャシャシャ』という何かを擦る音。

しばらくその音を聞いていて、それがサインペンで何かを書いている音だと気が付いた。

「サイン書き、やってるみたいですね・・・」

「昨日の地獄を、今度はあっちがやってるのね・・・」

「まあ、入りましょう・・・。失礼しまーす」

「寝ててすみませーん」

二人はそんなことを言いながら、とりあえず出入り口のドアを開けて中へと進んでみる。

そしてその先に見えた光景に、二人は『えっ！？』という声を漏らした。

何故なら、その問題のサイン記入を行っていたのだが、リーダーである手神一人だけだったからである。

もう一人のメンバーでもある厘はというと、手神がサインを書いている場所からやや離れたところで、一人大好きな読書を楽しんでいた。

『楽しんでいた』と言っても、特にあれやこれやとその本について喋っていたり、本の内容に爆笑しているわけではない。

ただ厘の場合、本を読みながら笑みを浮かべ、さらにその本の文章のどれかにペンで線を引いている時は、楽しみにながら読んでいる証拠なのだ。

しかしてつきり二人で書いていると思っていた未佳と長谷川は、その二人の行動の違いにただただ顔を見合わせるばかり。

すると二人の到着によりやく気が付いた厘は、未佳達の顔を見るなり『おはよう』と口にした。

「もう『こんにちわ』でしょ・・・？」

「ところで・・・。小歩路さんはサイン書かないんですか？」

「えっ？ 終わったよ？」

「「おっ・・・、終わった？！」」

そうあまりにも澄ました顔で答える厘に、二人は一体何処から突っ込めばいいのか分からず、ただただ目を泳がすばかり。

結局お互いに二言目が終わってこないでいると『終わった』と口に
した厘が、二人にその理由を説明し出した。

「だって手神さん、サイン書くのウチより遅いんやもん。一つ書く
んに5秒くらい掛かるから・・・」

「僕が書き終わった時には、小歩路さんは3枚ほど書き終わって
います」

「だからウチが早めに終わったから、今ここで読書してんの」

そんな単純な怪盗を平然と口に出されても、昨夜に地獄を体験して
いる二人は何にも言い返せない。

「え・・・と」

「全部って、大阪分のみですか？」

「そんなん！ 全部なんやから東京分もに決まってるやろ！？」

「「・・・お見逸れ致しやした・・・」」

「それより・・・手神さんもその後にして、イベント練習やっ
たら？ 二人とも起きたんやし・・・時間ないんやろ？」

「あ、はい」

厘のその一声で、手紙はサイン記入を一時中断。その後メンバーは、
4日後に控えた大阪・東京イベントの練習へと取り掛かり始めた。

会場でのトークやポスター手渡し会は、司会者と未佳達が適当に行
う予定なので、練習等は本番前のリハーサルだけで十分だろう。

だが新曲を含めた楽曲披露コーナーは、本番前のリハーサルだけに
するわけにはいかない。

アーティスト上、これだけは出来るだけ完璧にやっておかなければ
ならないだろう。

ちなみに今日披露する予定の曲は、新曲の『明日』と『昨日』と
『昨日』。

デビューシングル2枚目で、ライブではやや終盤に盛り上がる『f
lying ship』。

そしてライブでは欠かさず歌っている三大名曲の一つ『Endle
ss Requiem』の計3曲。

その中で、本番までに必ずマスターしておかなければならない曲を、
末佳達は順番に並べてみる。

その結果『やはり』というよりは『予想通り』で、一番に上がった
のは新曲の『明日』と『昨日』と『昨日』だった。

「やっぱり・・・、新曲は第一よねえ・・・」

「ですね。んでその次は、ライブではどっちも定番曲ですけど・・・
。やり方がみんな違うやつって言うたら・・・」

「『Endless』が次ちゃう？ 最後に練習するのが『flying
ing』で・・・」

「ですか・・・ねえ？ 妥当なところで言つと・・・」

「じゃあ久しぶりに、新曲の練習から始めますか」

こうして流れるに、本日最初の一曲目でもある新曲『明日』と
『昨日』と『昨日』の練習が始まった。

最後にPV撮影の為に弾いてから、かれこれ9日間ぶりの演奏であ
る。

「でも新曲って、結構作ってからの時間が短いから、まだ歌詞覚えてるのよね」

「確かにせやね。ウチもまだ自分のパート、普通に弾けそうやもん」

「予め覚えておいてると、いざ弾く時に譜面見ないもんですから、結構他の曲よりもスムーズに出来ますもんね？」

「ちよつとアレンジ入れたりしてね」

「そうそう」 『ちよつとここ変えたるおー！』 みたいな」

「うんうん」

「ほら、二人ともやるよ」

その末佳の一声で、一先ず雑談は中断。

メンバーは早速新曲の披露練習へと取り掛かり始めた。

最初は今まで通り、とりあえず終わりまで歌い通す。

そしてその後は、皆で手神が持っている譜面やアレンジメモ、曲のスピードや時間などが細かく書かれているプリントを見つめながら、真剣な打ち合わせを始めた。

何を話しているのかと言うと、そのイベントの為のアレンジ変更についてだ。

今回のイベントは、本格的なライブスタイルとはまるで異なり、サポメン無しで演奏を行う予定になっている。

つまり、メンバー4人のみでこった演奏やアレンジを行わなくてはならないのだ。

さらに本番の会場は、その会場内での原則音量やイベントの演奏時間。

さらにはその日の天候や湿度の関係などによって引き起こされる、音の微妙な変化などにも対応しなければならない。

要は元となっているメロディーや時間通りに、曲は演奏できないというわけだ。

そんな末佳達の大事な打ち合わせは、それぞれ一人ひとりが意見を出し合いながら行われた。

まず最初に話し合われたのは、曲の演奏時間短縮についての内容。

「時間が・・・、トータルで本編4分32秒・・・」

「長い」

「・・・最後の部分が・・・、伸びるんですよ。メロディーが」

「そう。『たぁー・・・ん』ってね」

「そこでとりあえずカットして、手神さんにドラム音出してもらって」

「一発切り」

「うん。一発切り。・・・で、間奏短縮」

「えっ？ そこも？」

「うん。上からは『short ver. にしないで』としか言われてないから・・・。新曲でもあるし、ラジオで試しに流してる頭以外は、みんなメロディー知らないから・・・。そこだけはしよれば、時間はある程度削られると思う」

その末佳の提案により、時間は大体4分32秒から4分17秒くらいにまで縮まった。

ちなみに本番では、毎回曲自体の演奏スピードなどかなり速くなるので、おそらく当日の演奏時間はさらに短くなるだろう。

ここまでざっと決めたところで、末佳達は再び、今度は会場用に短く設定したバージョンで歌ってみる。

こうして実際に歌ってみて、歌にくい箇所がないかどうか、メロディーや曲においてのバランスがいかどうかをチェックするのだ。

それが済んだら、今度は手神の得意分野でもあるアレンジ変更の打

ち合わせ。

このアレンジ変更は、曲を短くしてしまったことによって起こる『物足りなさ』を解消するために行う、かなり重要な打ち合わせ項目だ。

またそれとは別に、会場にやってきてくれた多くのファン達に『ライヴ会場限定ver.』と題して、本編とは少し掛け離れた別の楽しみ方を味わってもらう為の試みである。

だが今回は少々、そのアレンジ等においての大きな問題が2つほどあった。

まず今回のライヴ会場では、メロディーやアレンジに必要な機材があまり使えず、本番はキーボード2台のみで、原曲のあのしっとりとした感じを演出しなければならない。

さらにこちらにも原曲で重要だったドラムが、今回はドラマーが参加しない関係で、ライヴ会場で演出することが一切出来ない。

これをどうアレンジを変えて表現し補うかが、今回のイベントの大きな課題だった。

「ドラムがいなんだよねえ……」

「前にこんなイベントやった時は……、どうしましたっけ？」

「あの時はバックで、Inst^{カラオケ}rumental流したんだよ。その上から、僕達が演奏。歌を歌って」

「あつ……、そつか……」

「ドラムって、手神さん出せへんの？」

「……？ 『キーボードで』ってこと？」

「うん。……無理？」

「無理ではないけど……。うん……。難しい、かな？」

手神が言うには、もしドラムの音をキーボードで出すとすれば、当日はキーボード3台。

それも絶えず1台を片手で弾きながら、もう片方の手で演奏しなければならぬとのことだった。

勿論、いくら『ゴッドハンド』という名を持つ手神であっても、そんな芸当をこんな日付が迫っている時期でマスターするのは無理だ。

ましてやこの曲一つで、手神はキーボードを2台も使わなくてはならないのだから、3台もなどというのは酷過ぎる。

かと言ってドラム音がなければ、曲のサビは盛り上がらない。

「ましてや他の曲も、ドラムは必需品だしねえ……。スタッフ達に頼んで、ドラム引つ張ってもらえるかどうか話してみる?」

「いや……。多分予定空いてないっすよ。あの人、小屋木さんのライヴ練習にも引つ張られてますから……」

「あ、そうだ……。じゃあ……。どうする?」

「バックでドラム流したら?」

「……。あるいはアレンジキーボードの1台を、ドラムに変更して演奏する……。だよね? 手としては……」

一応候補として二つの案が上がりはしたが、どちらもややデメリツトがあるものばかりだ。

まず最初に厘が言った『バックでドラムを流す』という案は、演出での違うアレンジ等はいける。

だが、曲の長さや早さは録音しているものを流すので、本番は一切変えることができない。

さらにそのドラムの速度にも合わせて歌わなくてはならないのだから、タイミングを測っての演奏となるのだ。

逆に未佳の案の方は、曲の速度などを本番中に変えたり、歌う側でのアドリブも出来る。

しかしそれと引き換えに、曲のアレンジはキーボード一つで行わなければならないので、少々ファンの人達に物寂しさを感じさせてしまう可能性がある。

「一応演奏方法としては『ドラム音を一切入れない』という手もあったのだが、ドラム無しでは物寂しさが大き過ぎると分かり切っている上で、とてもそんな案は言い出せない。

その後しばし意見を出し合った結果、今回のイベントでは『バックでドラム音を流す』という厘の案に決定。

先程問題として上がっていた演奏時間・速度に関しては、アドリブなどを含めた場合の時間でドラム音を録音し、それを本番までにマスターしておくという話でまとまった。

「じゃあ・・・、後はアレンジだけど・・・。そうやる予定？」

「これ？・・・うん。一応原曲はしっとりでソフトな感じだから、それは大事にしたいと思ってるけど・・・。」

「私的には・・・。なんか『これ！』っていう感じのアレンジを入れてほしいんだけど・・・。」

「ああ・・・。なんか印象付けられそうな感じの？」

「そう。ほら、原曲は結構メロディーが切ない感じのメロディーだから、その中にちよつと違うのが入っていると・・・。お客さんの脳裏にしばらく曲のイメージが残るんじゃない？」

「ああ・・・。」

だがその取り入れるもののいいアイデアが、中々浮かんでこない。

確かに未佳が言うように、切なげなメロディーだけではインパクトが無さ過ぎる。

ましてやCARNELAN・eyesは、元々この手のメロディー

を使う楽曲が多い。

つまり、ライブで原曲のアレンジのまま曲を披露してしまうと、観客は他の楽曲のイメージと新曲の印象が重なり過ぎてしまい、すぐに記憶から曲のイメージが薄れてしまう危険性があるのだ。

「ねえ？ 何入れんの？」

「うん．．．。楽器の音だとワンパターンだしなあ」

「デジタル風な音やってみたら？ 少し高めの方」

「ああーっ！ それいいかも．．．。ちょっとサビの後とかに入れてみると、それだけでだいぶお客さん『おっ！』って思ってくれるだろうし」

「せやね。そうしてみたら？」

「うん。まあ．．．。練習はドラムの音入れてもらってからだね」

まだドラムのメロディー無しの状態では、アレンジを入れる場所や相性などが確認できない。

一応今この曲で出来るのは、このアレンジメロディーの候補と、曲のアドリブを入れる箇所くらいだろう。

「あつ！ そういえばアドリブ！！ 入れてほしいところ皆言わないと．．．」

「僕、ラストのソロギ」

「ちょっと！ 略さないでよー！」

「すみませんっ．．．！ ラストのソロギターパート．．．」

「はいはい。ラストのソロパートね．．．」

「せやったらウチは．．．」

その後も1時間ほど、未佳達の楽曲アレンジ打ち合わせは続いた。

23・好き嫌い

午後2時33分。

打ち合わせを始めて約1時間後。

ギュルルル〜・・・

ようやく打ち合わせが一段落ついた辺りで、突然誰かの腹時計がベルを鳴らした。

そのやたらと大きな音に、メンバーは無言のまま、そつと音の主の方に視線を向ける。

「・・・・・・・・すみません、僕です・・・・・・・・」

「もう、さとうちつたら・・・・・・・・」

「でも私もお腹空いたあ〜〜。。。考えてみたら、昨日の夜から何も食べてないし・・・・・・・・」

そう長谷川の腹事情に同情しながら、未佳もまた残りの二人に空腹を訴えた。

そもそも昨日の夜だって、正直なところちゃんとした夕食を食べていない。

唯一口に入れたものと言ったら、通称『ホットケーキボール』という、タコ焼きプレートでホットケーキの生地をタコ焼き風に焼き、それにメイプルシロップなどをかけただけの軽いおやつのみである。しかもそんな小さなものを、昨日は二人で軽く摘まんだ程度だ。

ちなみに何故、事務所にタコ焼きプレートやホットケーキの粉など

があつたのかというと、実は少し前に、事務所では『ホットケーキパーティー』と題したアーティスト同士の交流会があり、そこで大量のホットケーキを調理したためだ。

言うまでもなく、昨日未佳達がつつたホットケーキボールの材料は、全てそのホットケーキパーティーのあまりものである。

ちなみにその他の調理器具などに関しては、元々事務所の5階に置かれていたものを無断で使用させてもらった。

というのもこの事務所では、こうした交流パーティー等を開く回数がかなり多いこともあり、調理器具等に関しては品揃えがかなり充実している。

そのため長年そこで勤めているアーティスト達は、そくその調理器具と材料を勝手に引つ張り出し、勝手に軽食を作ったりしているのだ。

現に未佳や長谷川も、無断で調理器具や材料を使用したのは今回が初めてではない。

過去にも数回ほど、事務所の器具を無断で使い、コーヒーやらケーキやらを作ったことがある。

「ところで二人は？ もう何か食べたの？」

「ううん。でもウチと手神さんは、朝ごはんちゃんと食べてきたから・・・」

「・・・はあ・・・」

「あの・・・。いったん休憩にして、どっかで昼食食べに行きませんか？」

「それもそうですね。時間もとつくに昼過ぎだし・・・」

「さんせい！」

こうして未佳達は数日前と同様、何処か近場の店屋で昼食を取ることにした。

ただし今回はいつもの『ザース』ではなく『ザース』と同じようにビュッフェを取り扱っている別の店だ。

その店は少々大きめのイタリアンレストランで、建ったのはつい最近。

元はレンタルDVDなどを扱っていた小さなビデオ屋だったのだが、ほんの4ヶ月ほど前に店が閉店。

その後そのビデオ屋の周りの土地なども全て使って、あの大型イタリアンレストランを建てたのだ。

ちなみに何故そこに決まったのかと言うと、厘が『あそこのお店に入りたい』と言い出したからである。

『建ったのはつい最近』と言っても、もうあれからかなり日は経っているし、イタリアン系がそこそこ大好きな厘からしてみれば、下見も兼ねて見に行きたいのだろう。

ましてやメンバーの中で一番の小食でもある厘一人では、中々ビュッフェやバイキング中心のレストランには少々行けない部分もある。

「じゃあ、栗野さんと呼んで行こう」

「店の名前なんでしたっけ？」

「確か・・・『BUNO^{ボノ}』やったと思うけど・・・」

「日本訳で『おいしい』っていう意味ね」

「まあ・・・、それは実際に行ってみないと分からないけどね・・・」

「（シーっ!!）」

その後はスタッフルームにいた栗野も引き連れて、5人はそのイタリアンレストランへと向かった。

ちなみにその『BUNO^{ボノ}』がある場所は、事務所の出入り口から

しばらく真っ直ぐに進み、三つ目の左曲がり角を曲がった先にある。その通りは車もかなり頻繁に通るので、少々信号のない横断歩道を渡るのが面倒な場所だ。

毎回末佳はあの通りを見る度『信号はいつ出来るのだろっ』と思っている。

（あの通り・・・、少し苦手なんだよなあ・・・）

「でも厘さん。前から行きたかったのなら、どうしてこの間メンバーが揃った時に言わなかったんですか？」

「だって・・・。人混んでそうやったんやもん・・・。人混みウチ嫌いやから、なるべくなくなつてそんな時に行こう思て・・・」

「や・・・、やっぱりそういうことなんですね・・・」

（まあ・・・。小歩路さんはかなりの人混み嫌いだもんねえ・・・。）

「あ、あれでしょ？ そのイタリアンレストラン」

長谷川がそう言うって指差す先には、何やら大きな赤い屋根の建物が建っている。

そして看板には、大きく『B U O N O^{ボノ}』と書かれた文字。紛れも無くあのイタリアンレストランだった。

「駐車場は少し空いてるみたいね・・・」

「たぶん・・・、お昼がだいぶ過ぎてるからじゃないですか？ みんな食べ終わって帰る時間帯ですし・・・」

「丁度いいタイミングかもしれないっすよ。中に入るには」

「ラッキー」

半分寝坊していてよかったと思いながら、5人は一般人のように店内へと入ってみる。

中に入ってみると、どうやら女性客をターゲットにしている店らし

く、店内はかなりオシャレな感じだ。

そして女性陣3人が中に入って思った通り、店内の客は半分以上が女性客。

一方の男性客は、どの人もカップルや家族連れと言った感じだった。

「なんかここ……。小歩路さん一人よりも、僕たちの方が行き難い感じですよ」

「確かに……」

「そお？」

「『女性客がターゲット』っていう感じはするけど……。でも『男性客拒絶』っていう感じもしないわよ？」

「結論言ったら、ウチらで中に入ったら問題ないんちゃう？」

「……まあね」「」

そんな店の印象について皆が話している間、栗野は一人店のウェイターに、未佳達の事情を手短に説明していた。

その内容は、未佳達がソコソコ知名度のあるアーティストなので、なるべく人目には付かないような席にして欲しいということ。

そしてもし、お客さんに未佳達のことを気付かれた場合、サイン等を求めてこないようにしてほしい、ということの二つ。

勿論、店の人間がそれらを求めるのもNGだ。

ちなみにメンバーの行き着けともなっている『ザース』は、最初の段階で全ての事情を説明し、現在では何にも話さなくとも対応してくれている。

しかしこの店は、今回がメンバー全員初来店。

その為少し面倒ながらも、栗野はメンバーの事情を一から説明しなくてはならない。

半分面倒がりながら説明をしていると、ウェイターは未佳達の顔を

見て誰なのか分かったらしく『少々お待ちください』と栗野に告げ、厨房の方へと入っていつてしまった。

テーブルへと案内されたのは、それから約1分後。

末佳達が案内されたのは、窓枠の一番過度の席。

窓には白いカーテンが掛けられているので、残念ながら外を確認することは出来ない。

しかし今までの人目に付かない席の中では、一番いい場所のように感じた。

というのも今までの人目に付かない席というのは、明かりも微妙に当たらず、両サイドは壁しかないと言った、完全に隙間のような場所のみ。

おまけに窓なんてものは、外の人間に見られる可能性などを配慮して、一切案内されることはなかった。

そんな店屋に比べれば、今日の席はカーテン越しに日差しが入って暖かいし、かなりの明るさもある。

さらに『角』の席ではあるものの、他のテーブルや壁からはかなり離れているので、今までの圧迫感がまるで感じられない。

末佳としてはこの席だけで満足だ。

「スゴイ解放感……。天井も高いし、周りのアンティーク小物は可愛いし」

「おまけにお店イタリアンなのに、店の中の色が黄緑と黄色と白っていうのも、随分変わってますね」

「うん。すごいキレイだね。外装は赤と茶色中心だったけど、内装はそれと色が完全に真逆っていうのが……」

「みかっぺの家もこんな感じやよね？」

「えっ？ 違うよ、小歩路さん！ 私の家は、ちょっと茶色が多い

もん……。ライトの関係で……」

正確に言ってしまうと、未佳の家の蛍光灯は茶色中心だが、小物などのアンティーク系は、赤やピンクなどのものが多い。

特に赤に近いピンクは大好きな色で、気付けば自宅の小物はその系統の色ばかり。

洋服に至っては、約半分以上のものがピンク色、もしくはピンクの柄などが入っているほどだ。

「でも、こういう色の小物とかもいいと思う」

「というより……。坂井さんは、カラフルなのにピンクとかが入ってるやつが好きなんでしょ？」

「……。そう言われてみればそうかも……」

「ほら、皆さん。あんまり今日は練習する時間も少ないんですから、早めに昼食済ませてください」

「……あつ、はい」

その栗野が発した鶴の一声で、皆は料理を取りに、ビュッフェで並んでいる列へと向かった。

その際未佳はチラリと、奥に並べられた料理を確認してみる。

当然、並べられている料理のほとんどはイタリアン。

しかも、ざっと30以上あるであろう料理の半分以上がパスタ料理だ。

おそらくこの店一番の自慢料理なのだろう。

その他に確認できたのは、パスタ同様イタリアン代表料理でもあるピザ4種類と、自分で好きな野菜を取って作るサラダやスープ類。そして一番奥にあるドリンクバイキングの隣には、子供や女性に大人気のデザートコーナーが設けられていた。

甘いものの好きの未佳にとって、デザートコーナーは今すぐにも見に行きたいところ。
だが昼食もなしに、いきなりデザートに手を伸ばすわけにはいかない。

今はとりあえず、昼食となる料理を取るのが先だ。

（サラダ類は……。適当に取るか）

「なんか見たことない料理が沢山あるなあ……。」

「リオとしては全部食べたいんでしょ？」

「別に全部っていうわけじゃ……。見た目とかが気になるのは沢山あるけど……。」

「例えば？」

「例えば……。」

そう未佳に尋ねられたリオは、その気になるものの中でズバ抜けているものを探した。

リオにとっては、どの料理もかなり気になるものではあるが、その中でも断トツだったのは、やや未佳の左手前に置かれていたパスタ料理。

「これ。……。殻ごと入れるなんておかしいよ」

そう理由も付け足してリオが指差したのは、パスタ料理の種類ではよく目にする、アサリを殻ごと入れて炒めたボンゴレだった。

大体何処のイタリアンにも必ずあるメニューではあるが、人間同様殻を食べることが出来ないリオからしてみれば、これはただの異様な食べ物にしか見えないのかもしれない。

「……。でも普通イタリアンって、アサリでもムール貝でも、パス

夕料理とかにする時は殻ごと入れるものなのよ。飾りとか風味付けとかに・・・」

「えっ？！・・・面倒くさ・・・」

「あなたねえ・・・」

「じゃあ未佳さん、これ食べる時いちいち殻から身を取って食べるの？」

「・・・面倒臭くて食べないかなあー・

・」

「やっぱり食べないんじゃない！」

「みかつペーっ！」

「・・・ッ！！」

突然後ろの方から聞こえてきたその声に、未佳は『ハッ！』と、声のした方を振り返る。

後ろを振り返ってみると、そこには片手にビュッフェ用のトレーを持った厘が、こちらにやや小走りで向かってきていた。幸いにも、リオとの会話は一切聞かれていないようだ。

「な・・・、何？」

「みかつペ何取った？」

「えっ？ ああ・・・。まだ考え中で、サラダしか取ってない」

「あ、そうなん？」

「うん・・・」

そう軽く厘の問い掛けに答えていた未佳は、ふっと厘が持っているトレーを見て、思わず目を見開いた。

何故ならそのトレーの上には『これでもか！』と言っほどの料理が盛られていたのである。

トレーの上の料理は、5/4がパスタとサラダで、残りの5/1が、

カルパッチョやパンなどと言った感じだろうか。

しかしいくらサラダ類が多いとは言え、少食の厘がそんなに沢山の料理を食べられるとは到底思えない。

バンドメンバーの未佳としては、色んな意味でかなり心配な量だ。

「小歩路さん……。そんなに食べられるの？」

「ん？ ああ、平気♪ 平気♪ それにこれ、ウチ一人の分やないもん。みんなが食べられるように取っただけやから」

「あっ……。なんだ、そうだったんだ……」

「そういえば、さつき手神さんが言うてたんやけど……。あそこのマルゲリータ、めっちゃおいしいうて」

「えっ！？ ホント？ じゃあ取っちゃおう」

「ウチはカルボナーラ♪」

そんな会話を軽くかわして、未佳は早速ピザコーナーへ。

目的のピザをとりあえず一切れトレーに乗せた未佳は、その隣りに並べられたパスタ料理に『あっ！』と声を漏らした。

「今度は何？」

「ナポリタン！！ 私大好きなのよねえー。ケチャラーだし……」

あっっ！！」

「ん？ ……どうしたの？」

「ついでに一番大っ嫌いなのも見つけた……」

「はっ？」

だがそう言う未佳の目の前にあったのは、極々普通のナポリタン。一体何が未佳の気に食わないのか、リオにはさっぱり分からない。

しばらくすると、何故か未佳はトングでナポリタンを一回持ち上げてみては、またナポリタンの器に戻すを繰り返し始めた。

ずっとその様子を黙って観察していると、どうも未佳は、材料の中に入っている何かを避け、皿に盛らぬようにしているようだ。

「もしかして……。材料のどれか嫌いなのか？」

「……。うん。この緑の物体……」

「……。コレ何？」

「ピーマン……！」

ここでリオは初めて、未佳にも嫌いな食べ物が存在していることを知った。

いつもバラエティー豊富なものをパクパクと食べていただけに、まさか嫌いな食材があるなど考えもしなかったのだ。

しばらくそんなピーマンを皿に盛らぬよう格闘していると、未佳の後ろから半分呆れた感じの声が聞こえてきた。

「あの、坂井さん……。後ろに並んでるのが僕一人だからええですけど、他の人並んでたら迷惑行為ですよ？」

「分かってるけど……。っ！！」

「それやったら取らへんかったらええのに……」

その長谷川の発言を聞いた瞬間、未佳の脳裏にとんでもない作戦が閃いた。

少々長谷川には申し訳ないが、閃いてしまったら最後、もはや別の方法は考えられない。

未佳は作戦実行のため、こともあろうに先程まで皿に乗つけられずにいたナポリタンを、普通に食べられる量だけ皿に盛り始めた。
しかも、あれほど嫌っていたピーマンが紛れることも関係なしに……。

「じゃあ、お先に♪」

「？」

「……？」

一体何がどうなったのか分からぬリオと長谷川は、ただただ未佳の行動に小首を傾げるのみ。

その後未佳は、料理を乗せたトレイを両手で持ちながら、厘だけが座っているあの窓側のテーブルへと向かった。

「あれ？ みんなは？」

「手神さんはドリンク。栗野さんとさとつちは料理」

「あつ、そう……。みんな席決まってる？」

「うん。みかつぺから時計回りで、さとつち、ウチ、手神さん、栗野さん」

「ああ……。OK！」

「？」

その未佳の意味深な言葉に、厘もまたあの2人同様小首を傾げる。しかしそれ以上は特に何も訊かず、厘は『変なの』とは思いつつも、その後は普通に先程取っていたサラダを口に頬張っていた。そんな厘を見つめながら、未佳は静かに様子を伺う。

（何か食べてる内は気付かれないわよねえ……。それにみんなの席も分かったことだし……。じゃあ早速）

その後未佳が取った作戦内容は、あまりにも信じられないものだった。

24・ピーマン盛りつけ大作戦

続いて未佳が取った行動は、なんと先程皿に盛ったナポリタンから、問題のピーマンだけを皿の端に寄せ始めたのだ。
まるで好き嫌いをする子供がやるかのような行動である。

勿論、リオがそんな未佳の行動を黙って見逃すはずがない。

「未佳さん！ それダメだよ！！」

「うるさい・・・」

「今時小学生だってそんなことしないよ！！」

「知ってる・・・」

「しかもどうすんの？！ そのピーマン！！」

「まあ見ててよ・・・。よし、分け終わった」

「・・・いや！ ダメだよ！！」

「ん？ みかつぺなんか言うた？」

「・・・うつん！ 聞き間違えじゃない？」

「そうか・・・なあ・・・？」

そこでまたしても厘は小首を傾げつつ、再びサラダ類を口に頬張り始めた。

その様子を黙って見つめながら、未佳は作戦続行の機会を伺う。

やがて厘が一切こちらに意識を向けていないのを確認すると、未佳は自分の隣りに置かれていたフォークをサッと盗み、自分の右もと椅子のシートの上に挟み込んだ。

ようは隠したのだ。

それも長谷川が持ってきてきていたフォークを。

「それ・・・！ 長谷川さんのだよ！？」

「いいの。これで準備OK・・・。あとは・・・」

「いや！ 『OK』 つじやなくて・・・！！」

二人がそうこう言い合っていると、問題の長谷川がトレーを持ったまま、ついでに手神も一緒に連れて戻ってきた。

この光景に、未佳は『あちゃー』と、顔に手を当てる。

（ま・・・、マズイ・・・。誰もいなくなると困るのに！！）

「あつ、二人ともお帰り」

「どうもー」

「あつ。ねえ、長谷川君。お手拭きとかって何処にあった？」

「お手拭き？ お手拭きは入り口近くに・・・」

「あつ、そつちか。じゃあ取ってきまーす」

「はい」

「あゝあ・・・。中々みんな集まらへんねえ・・・」

（小歩路さん！ 今なったら困るのよ！！ 今なったらツ！！）

そんな未佳の想いが通じたのか、テーブルの上にトレーと皿を置いた長谷川は、小さな異変に気が付いた。

「・・・あれ？ フォークは？ ・・・僕が持ってきたフォーク知りません？」

「えっ？ ウチ知らへんよ」

「じゃあ・・・」

そう呟きながらこちらを見つめる長谷川に、未佳は少しムツとする。確かに勝手にフォークを盗み隠したのは未佳だが、自分の席にないだけで即座に疑いの目を向けられるのは、犯人側でもかなり癪だ。

「何よ……。私は自分で持ってきたからねえ?!」

半分苛立ちながら、未佳は長谷川にそう言い返した。

すると長谷川は、一瞬未佳の怒鳴り声に圧倒されたのか、しばしその場に固まった後『取って来なかったのかなあ』と呟きながら、再びフォークを取りに席を離れた。

これで残る問題は、一人食事をしている厘だけ。

未佳の考えている作戦を実行するためには、テーブルに誰も人がいなくならなければならない。

つまり、あとは厘だけが席を離れてくれればいいのだ。

だが既に食事を始めていて、おまけに前もってドリンクやらデザー
トやらを持ってきた厘を、一旦テーブルから立たせるのはかなり困難だ。

素直に『一回席から離れて』などとは言えないし、かと言って作戦の一部始終を目撃されたら、おそらく黙ってなどいない。

『さてどうしよう』かと頭を抱え始めたその時、天からの救いの声が、未佳の耳にはっきりと飛び込んできた。

「厘さん!」

そう厘の名前を呼んでいたのは、一番最後に料理を取りに行っていたあの栗野だ。

しかも何やら、サラダバーの近くでウロウロしている。

「へっ? 何?」

「サラダのドレッシング! 何処にありました?」

「……えっ? ああ!。それやったら」

（大チャンスー！！）

「レタスが入ってるやつ隣の隣」

「ああー！！ ああ、あの、小歩路さん！ 直接行って教えた方がいいんじゃない！？」

「へっ？」

「く・・・、栗野さんちよつと方向音痴だし・・・！ 結構サラダのドレッシングの場所！ 分かり難かったし・・・！！」

もはや未佳自身も意地だ。

こんな絶好のチャンス逃したら、おそらくこの作戦を行える機会二度とやってこない。

未佳の直感がそう告げていた。

そしてそんな未佳の積極的過ぎる姿勢にこちらも圧倒され、厘は数回頷いた後、席を離れた。

こうしてテーブルに残されたのは、一部のメンバーが持ってきた料理と、未佳ただ一人。

そう。

未佳はテーブルがこの状態になるのを待っていたのだ。

誰もテーブルからいなくなったその瞬間、未佳は先ほど分け終えたナポリタンのピーマンを、ある程度の量をスプーンの上に乗せ、それを長谷川のナポリタンの上に乗せ始めた。それもスプーンを二往復させて・・・。

その光景には、流石のリオも我が目を疑った。

「未佳さん！！・・・何やってんの？！」

「見て分からない？ ピーマン盛りつけ・・・」

「『ピーマン盛りつけ』って、そんなことしちゃダメだよ！！　それも長谷川さんのナポリタンに……！！」

「いい作戦でしょ？　名付けて『ピーマン盛りつけ大作戦』！」

「しかもネーミングセンス悪っ！」

「悪かったわねえ！！」

だがこの作戦には、一つ大きな問題が残る。

それは、未佳があとから盛りつけたピーマンが、異様に目立ってしまっていることだ。

長谷川がよそったパスタの量の関係もあり、明らかにピーマンの数が浮いてしまっているのである。

これでは『ナポリタンの刻みピーマンがけ』だ。

「絶対にバレるよ……。これ……」

「じゃあ……」

その対策として未佳が取った行動は、先程のスプーンと自分のフォークで、軽く長谷川のナポリタンを混ぜることだった。

確かにこうすることによって、先程のピーマンは目立たなくなる。

だがこれは誤魔化せばいいという問題ではない。

「よし！　こうすればバレない」

「……いやっ！！　さっきから言ってるけどそういうことじゃ……」

「あっ、きた！」

「『きた！』じゃなくて！！」

ふっとそう怒鳴りながら顔を前の方に向けてみると、確かに今未佳が言った通り、メンバー全員がこちらに戻ってこようとしているの

が目飛び込んできた。

手神と長谷川は、お手拭きやフォークなどが置いてある入り口付近から。

厘と栗野は、サラダコーナーの方からこちらに向かってくる。

それを見たりオは、即座に口を開くのを止め、逆に未佳の顔をジッと睨むかのように見つめた。

その視線に、未佳は口パクで『何よ!?!』と堪らず聞き返す。

しかしリオはその問い掛けに何も答えず、視線を未佳から皆が戻ってこようとしている方へと向けてしまった。

メンバー全員が椅子に腰を下ろしたのは、それから約数秒後のことである。

「みかつぺ、一人やったね」

「べ、別に……。バイキングとかじゃ毎日じゃない」

「にしても僕のフォーク。一体何処に行ったんだろ……。」

その長谷川の発言に、未佳とリオは一瞬ドキリとする。

特に隣りに立っていたリオに至っては、この作戦では一切悪くないというのに、身体を一瞬ビクツと震わせ、硬くなるほどだ。

一方何の事情も知らない厘や栗野達はと言うと、その長谷川の発言に対し『またそれか』と言いたげな表情を浮かべていた。

あの様子からすると、どうもフォークを取りに行ってる間中ずっと呟いていたらしい。

「まだ言ってるし……。」

「長谷川さん。フォークが勝手に歩くわけないでしょ?」

「そうそう。単に長谷川君が取り忘れたんですよ」

「そうですか……。ねえ? 誰か間違えて使ってません?」

（・・・ッ！！）

「止めてよ、犯人探しなんて……。ただもう一回フォーク取りに行ったらええだけの話やん」

「そうそう。全く……。この年からボケないでください」

「別に僕ボケてなんて……。」

いくら言っても誰も信じてくれないこの状況に、長谷川は半分しよげ込みながらも、とりあえずはナポリタンを食べようとフォークを手にした。

まさにその時だ。

「ん……。？」

「？ どないしたん？ さとつち……。」

「……。いや……。ちよつと……。」

長谷川がそう答えながら見つめていたものは、先程自分でよそってきたあのナポリタン。

どうやらほんの少しだけ見た目が変わっているナポリタンに、少々違和感を感じたらしい。

明らかに『いや』と答える程度の反応ではなかった。

（まさか……。！！）

「長谷川さん、気が付いてるんじゃない？！ 未佳さん！！」

（でも……。！ ちゃんと混ぜたはずなのに！！）

「さとつち？」

「もしかして……。今度は自分の料理に何かあったとか？」

（「ギクッ！！」）

「そんなぁー、長谷川さん。料理なんてどんな風に盛りつけたかなんて、一々覚えてないでしょう？」

「それにみかっぺ。ウチらが席立った後、ずっどこにいたんや

し……。誰かが触ったんやったらきつと氣い付いてるよ」

（うっ……！！）

もはや緊張し過ぎて指一本ですら動かせない。

手や頭から冷や汗と共に、自分の心臓の音が『バクッバクッ』と激しく聞こえてくる。

さらに未佳の方は、緊張し過ぎたあまり、思わず生唾を一気にゴクリツと飲み込み、完全に沈黙してしまうほどだった。

そしてそれから数十秒後。

ようやく疑いの眼差しを向けていたままだった長谷川が、ゆっくりと口を開いた。

「……ですね……。いや、なんでもないです」

その言葉で一気に解放されたかのように、二人は大きな安堵の溜息と共に、その場にズブッと倒れ込む。

ちなみに何故、長谷川が自分のナポリタンに疑問を抱いたのかと言うと、不覚にもあの未佳の誤魔化しが原因だった。

「いやね。一瞬なんか量が増えたように見えたんで……」

「えっ？ ……ナポリタンが？ そう？」

「うん……。見えません？」

「うん……」

「そっか！！ 混ぜた時に持ち上げるみたいな混ぜ方したからだよ！ それでパスタに余計に空気が入ったから……」

「一々言われなくても分かっているわよ！！」

「……えっ？」「」

「えっ……。あつ、そのお……。なんでもない」

「……。そ、そう……。」「」

「な、なんか最近坂井さん……。独り言多くありません？」
「えっ?! そ……。そお? 気のせいじゃない?」

少々レストラン内での不思議な出来事や独り言などは多々あったが、その後は特に何も起こらず、ランチタイムは午後3時過ぎ頃に終了。

そして店を出ようと、皆が自分の荷物に手を掛け始めた時、手神はふつと自分達のテーブルに貼られていたメニュー表に、思わず目が釘付けとなった。

そこに貼られていたメニュー表は、主にビールやワインなどのお酒を中心に載せていたのだが、目が止まった理由はその値段。

「見てよ、長谷川君……。ここのオニオンビール! ボトル一杯640円だよ!」

「高ッ!! しかもこのメーカー……。めっちゃモノがいいってことじゃないですか!」

「どれどれ……。あつ、ホントだ! ジョッキなんて一杯860円もするじゃない!!」

「でさ……。あの壁のポスター見てくださいよ」

「へっ?」

そう言つて手神が指差す方向に視線を向けた長谷川と未佳は、そこに書かれていた内容に思わず口をパカツと開いた。

壁に貼られていたポスターには、大きく「今だけ!! 大人気 オニオンビール!! ランチバイキング(12時00分〜15時00分)の時のみ640円↓430円」と書かれていた。

ちなみにジョッキの場合も、通常860円のもの、この時間帯の時のみ640円と、通常ボトルで飲むのと同じ値段になっている。

さらに注目すべきはその時間。

なんと帰ろうとしていたギリギリの時間まで、このオニオンビール割り引きは実施されていたのだ。
全くつくづくツイていない。

「「「飲みたかったなあ」」」

「あつ……。でも私ライブ前だから飲めないよ」

「ああ、そういえば……」

「でもなんかツイてない……」

「まあまあ……。イベントから帰ってから。またここに来ればいいじゃない。一応3月の20日までやってるみたいだし……」

「何が？」

ふつと末佳達は何の会話をしているのか気になった厘も、男性二人の間から顔を覗かせた。

「実はね。ここの高いビールが、お昼の時だけ割り引きになったの。だから今度来た時に飲もうって話してて……」

「うち……。ビールよりワインがいい」

「「「え……。？」」」

その発言に、3人は一瞬だけ固まった。

というのも、このレストランがイチ押しで勧めているお酒は、実はオニオンビールではなくワインの方なのだ。
ついでにその金額も馬鹿にならない。

「坂井さん、長谷川君……。ワインの金額は？」

「「え……。つと……。！！」」

ちなみにその金額だが、赤ワインはボトルで2500円。

一方の白ワインの方は、それに500円プラスの3000円という

値段。

明らかにその辺のレストランなどで扱っているレベルのワインではない。

「高ッ!!」

「しかも白の方が高いって……。普通赤の方でしょ?!」

「イタリアンだと白の方がお似合いって感じじゃないんじゃない?」

「赤はフランス料理とかってこと?」

「まあ……。たぶん。小歩路さん、ワインはお給料貰った日にみんなで飲も。ねっ?」

だが大のワイン好きでもある厘は、少々納得がいかない様子だ。そしてしばらく経った後、厘はとんでもない爆弾発言を口にした。

「……。これ……。別売りしてへんのかなあ」

「!! まさか今日買う気なの?! コレ一本で3000円近いのよ!？」

「うん。買う」

「あゝがぁー……」

「あの……。『買う』って……。どっちを?」

「うゝん……。迷うの嫌やから……。両方」

ドテッ!!

「えっ? なんでみんな倒れるの?」

「いや……」

「だって……」

「小歩路さん、大胆過ぎ……」

「みなさん！ 会計終わりましたよー？ ……皆さん……、
どうしました……？」

そう問い掛けながら、先に会計を済ませた栗野が戻ってきた。
栗野のこの時の顔は、完全に『何があったの？』と言いたげな表情
を浮かべている。

そんな栗野に、未佳はゆっくり起き上がりながら伝えた。

「栗野さん……。小歩路さんと一緒にまたレジ行ってきた……」

それから約5時間半後の午後8時36分。

春に近づく夜空を見つめることもなく、未佳に自宅に帰宅した早々、
ベッドに倒れ込んだ。

「はあ……。疲れた……」

「まあ……。昼食後に即歌の練習だったしね」

「本番までに体力持つかなあ……。…」

「……。えっ？」

「冗談よ、リオ」

そう言っただけで笑みを浮かべる未佳に、リオは少々ムツとした表情を未
佳に向ける。

「そんな怒った顔しないでよ」

「それより……。あの長谷川さんのアレはなかったんじゃないの
？ 未佳さん……」

未だにムツとした表情のままのリオにそう言われ、未佳は何も言い返せぬまま、静かにベッドから上半身だけ持ち上げた。

確かに未佳のあのやり方は度を越えていたが、普段はあそこまでやることはない。

そもそも未佳は、あまり自宅以外でナポリタンを食べることがないのだ。

元々人見知りが激しく、あまり自宅から出ないこともあるのだが、一番の大きな理由としては、自宅でピーマン無しナポリタンを作って食べることも多いからである。

それに外食のものととなると、やはり何処にも必ずピーマンが入っているものがほとんど。

にも関わらず、今回そんな外食のナポリタンに手を伸ばした理由は『久しぶりに見て、とてもおいしそうに見えたから』という、何とも単純な理由からだった。

（それに・・・、今度はいつ食べられるか分からないし・・・。人生最後の期間中に、せめて一回は食べておきたかったのよねえ・・・）

「未佳さん？ 聞いている？」

「ん？ 何？」

「だからなんで食べたの？」

「だって・・・。ピーマンは嫌いだけど、ケチャップ料理は大好きなんだもん・・・。ケチャラーだし・・・」

「（そういう理由か・・・）」

「別に今回くらいは許してよ、リオ・・・」

未佳は赤い丸型のクッションを抱き締めながらそう言うと、そのままそのクッションに顔を埋めた。

そんな未佳に、リオはやや溜息を吐く。

「はあゝ……。このままじゃ時間が流れちゃうだけだし、早めにお風呂入って寝よ……」

未佳はそう呟くと、そそくさとベッドから起き上がり、下着を箆笥から取り出そうとした。
その時だ。

ウイイン……
ウイイン……

「……えっ？ 携帯？」

「でもバイブ2回だけだよ？」

「じゃあメールだ……。でも誰？」

未佳はやや小首を傾げつつ、とりあえず鞆の中から携帯電話を取り出し、画面を開いた。

そこにはハッキリと『長谷川智志』という名前が書かれたメールが一件。

「あつ……。さとつちからだ」

「タイミング悪……」

「うるさい……。それで用件はあゝ？」

早速届いたばかりのメールを開いてみると、このような文章が書き込まれていた。

Time 2010/3/5 20:37
From 長谷川智志

S u b j e c t 明日の予定

明日の練習ですが、手神さんとの話し合いにより、事務所集合を午前9時40分に変更（＾Ｏ＾）

録音したドラム音含めて、練習やります♪

また明後日は、実際にイベント会場にての練習です。

（栗野さんから聞いてますよね？（。。））

そっちは事務所集合が午前8時50分なので、お間違えいとお遅刻しませんように・・・。

（僕あんまり人のこと言えませんけど（汗））

以上連絡でした！

P・S・

「一々人に送るんじゃなくて、一斉送信しなさいよ」
「ねえ。下に『P・S・』が・・・」
「へっ？」

「ほら」

確かにリオの指差すところには、全角英語で『P・S・』と書かれている。

さらに携帯の一番下の表示を見ると、どうやらまだ下に続きがあるようだ。

「なんだろう？」

未佳はそう呟きながら、携帯の真ん中にある大きなボタンの下の方を長押ししてみる。

するとそこから一気に、全3行の追伸コメントが表示された。

そしてそこに書かれていた追伸文章を見て、未佳は思わず見開く。追伸にはこんな内容が書かれていた。

P・S・

今度はピーマン、僕の皿に
混ぜないでくださいよ!?

(分かっていましたけど、
あえて黙っていました)

(本音)

by 怒りっち(・へ・)

「あっちゃー……!!」

「あーあ……。やっぱりバレちゃってたんだ」

「うそ……」

メールの内容を読んだ早々、未佳はまたしても、ボスツとクツションに顔を埋め、沈黙してしまった。

というのも未佳の予想では、料理を弄ったことはバレたとしても、ピーマンを中に混ぜたことは決してバレないと思っていたからである。

一体何処にそんな自信があったのかはよく分からないが、とりあえず未佳の予想が外れたのは確かだ。

「一斉送信しなかったのはこれが理由だったんだね」

「でもなんで？ 私ちゃんと誤魔化したはずなのに……」

「未佳さんっ！ー」

「はい、ごめんなさい……」

本当に反省しているのかどうかは分からないが、未佳はとりあえず、一回だけ携帯とリオに頭を下げた。

しかしそれが終わると、即『もういいでしょ』と言わんばかりに、未佳は再び下着類を手にとって、風呂場の方へと向かっていくことをする。

『なんだかなりサバサバしてる人だなあ』と、リオが呆れ返りながら思っていると、ふっと未佳が一瞬だけ笑っているように見えた。

本当にほんの一瞬だけ、微かに『クスリッ』と笑ったのだ。

そんな未佳の表情が気になり、リオは思わず未佳に尋ねた。

「未佳さん……。何笑ってるの？」

「えっ？」

「なんか嬉しそうじゃない？」

「！・・・そお？ 別に何ともないけど・・・」

「・・・ふん・・・」

今のはこちらの見間違えだったのだろうか。

多少気にはなりつつも、リオはそう考えることにした。

「じゃあこれからお風呂入ってくるから、今からこっちに来ないでね」

「あ、はいはい・・・」

「何よ、リオ！ その返事っ！！」

「ツ・・・！ じゃあどうして欲しいわけ！？」

「もつと違う形の返事返してよ！」

「知らないよっ！！」

その後も未佳とリオとの言い争いは、約3分間も続いた。

予約死亡期限切れまで

あと 171日

25・寒冷の日

午後9時17分。

この日は朝から空が曇っていたこともあり、かなり気温が低い日となった。

天気予報での最高気温は、一番陽が高い時間帯とされる午後12時から1時の間で、それでもわずか17度。

明らかに『春』というよりは『冬』に近い。

この気温には、流石の未佳も堪らずストーブを点け、肩にモコモコのベストを羽織りながら、入れたての熱々のコーヒーに口を付ける。一口そのコーヒーを口にしてみれば、飲んだコーヒーが喉を通って胃の方に流れていくのがよく伝わってきた。

それとほぼ同時に、自分の冷えた身体も暖まっていく。自分の好きなものを飲んで身体を暖められるなんて、まさに幸せなことこの上ない。

未佳は二口ほどコーヒーを口にすると、ホッと息を吐いた。

「ふうー……。あつたまるう」

「今日の朝は、未佳さんのくしゃみと『寒っ!!』だったもんね」

そう。

実は今日の朝、未佳は目覚まし時計が鳴るよりも前に、室内の冷氣によって引き起こされた自分のくしゃみで飛び起こされたのだ。

さらにそのまま寝室のベッドから出てみれば、まるでパジャマの上から扇風機を当てられているかのような肌寒さに襲われ、思わず『

寒っ!!』と一言。

それらの一部始終を全て、不運にも未佳はリオに見られてしまっていたのだ。

そんなリオに自分の恥ずかしい朝のことを言われ、未佳は本気で嫌そうな表情を浮かべる。

「やめてよ。恥ずかしいから・・・」

「だって事実じゃん・・・。朝そうだったでしょ？」

「そうだけど・・・。まさか明日のリハもこんな気温じゃないわよね？」

「分かんないけど・・・。可能性は・・・」

「無くはない・・・、か・・・。よし！ さつさと着替えちゃお」

そう言うとき未佳は、一気に箆笥を引き開け、中に仕舞っていた赤・白・オレンジ・ピンク・黄色の柄付きセーターを取り出した。

もうこの時期になったら着る日など来ないと思って仕舞っていたというのに、かえってその判断が仇となった感じた。

未佳はそのセーターを着込むと、部屋の隅にある鏡で格好を確かめる。

そしてほんの少しだけ締め付け感がある自分の身体に、未佳は顔をサーッと青くした。

「ゲッ・・・！ もしかして私・・・、冬の間也太った？」

「違うよ。下に色々着てるからでしょ？」

「へっ？ あ・・・。そうだ、3枚着てたんだった・・・」

「焦った？」

「ハ、ハハハ・・・。ちよつとね・・・」

セーターがややキツイ理由が判明したところで、未佳は下に着ていた長袖のTシャツを1枚だけ脱ぐと、その上から再び先程のセーターを着込んだ。

これで後ろ髪をいつもの髪止めで止めてしまえば、皆がよく知る『坂井未佳』の出来上がりである。

「よし。これで準備OK！・・・そういえばリオは？　寒くないの？　そんな格好で・・・」

「僕、暑さ寒さ感じないから」

正確には、リオは半分空気のような存在なので、寒さ暑さ以前に触角の機能がないのである。

あるのはそれ以外の四感のみ。

おそらくリオのような生物は、その触覚と呼ばれる機能を使うことがなかったのだろう。

そんなリオの身体に、未佳は半分意外そうな表情を浮かべつつ、ポツリと呟いた。

「ある意味羨ましい身体ね・・・」

「よく言うよ。本当は長谷川さんの肌の白さが一番羨ましくせに・・・」

実はメンバーの長谷川智志は、事務所やファン達の間でもかなり肌が白いということでも有名なのである。

いや。

正確に言ってしまうとただの『白』ではなく、どちらかと言えば『青白い』と言った方が正しいだろうか。

とにかく元々色白の未佳や厘よりも肌が白いのである。

そのあまりにも白過ぎる肌に、大半の女性人はかなり羨ましがるのが、肝心の長谷川自身は全くと言っていいほど喜んだことはない。

そればかりか、長谷川はその肌の色を、自分のコンプレックスランキングで堂々の第一位に上げているほどなのだ。

理由は『男子なのに白すぎて堂々と半袖で出られない』というのと『海に行ったら絶対に青白過ぎて、周りから気持ち悪がられる』という、かなり世間の目を気にしたものばかり。

さらに去年に至っては、とうとうその肌の色が我慢出来なくなり、大金を払って日焼けサロンにまで出向いてしまったほどである。

しかしその結末はかなり悲惨なもので、その人口紫外線を浴びたことにより、長谷川は全身に大火傷を負ったかのような真っ赤な姿で、いきなり事務所に帰ってきたのだ。

原因は、元々かなり肌が弱かったにも関わらず、無理に日焼けを行おうとしたため。

特に肌が青白い人には珍しくないことだそうで、事務所側の見解としては、長谷川が自分の身体のことを知らな過ぎたのが最大の原因であると指摘。

その後長谷川は、事務所の人間にこつ酷く説教をされる羽目となった。

またさらに哀れだったのは、その全身の赤みが完全に引いた頃には、またいつもの青白い長谷川智志の身体に戻ってしまっていたこと。

あの時の長谷川の落ち込み様には、流石の末佳も思わず同情してしまったほどだ。

だが、実際の末佳の本音はというと・・・。

「ホントよね?! あの人一体何食べたらああなるのかしら・・・。まさか白いものしか食べてないの?」

「さあ・・・?」

そんな過去のことを思い出しながら雑談をしていた、その時だ。

ピリリリ・・・
ピリリリ・・・

「あつ・・・、栗野さんだ。もしもし？」

『もしもし、未佳さん？ あと5分ほどで自宅前に着きます』
「あ、はい。じゃあもう下りてきまーす・・・」

電話での会話は、わずか30秒ほど。

未佳は携帯を鞆の中に放り込むと、ややお気に入りでもあるブラックブラウンの牛革ブーツを履き、玄関のドアを開けた。

「リオ、下に行くよ！」

「うん」

「ううゝっ！！ 寒っ・・・」

こうして、時間以外はいつもと何も変わらない一日が始まった。

栗野の車に乗り込んだ未佳は、その車内の温度に思わずホツとする。暖房が点いている車内は、今の未佳にとってまさに天国だ。家の中にいた時とはわけが違う。

「暖かい・・・」

「今日はかなり冷え込んでますよねえ。体調とか大丈夫でした？」

「うん。時々お腹痛くなる時はあるけど、今日は何ともない。大丈夫♪」

「よかった。女性は急な気温の変化に体調崩しやすいから・・・、

ちょっと心配してたんですよ」

正確には、それは未佳の方ではなく厘の方だ。

何せ彼女は寒いのがかなり苦手で、真夏になっても『機械的な寒さはイヤ!』と言って、エアコンは絶対と言っていいほど点けない。

同じように機械的な寒さがある扇風機に至っては、なんと未だに持つてもないほど。

それほど厘は寒さに弱いのだ。

一方の未佳は、体調を崩すことは稀にあるが、基本的にそこまで酷く寒がりではない。

そればかりか、真夏にはいつも決まってこんなことをしてしまっているほど。

「そんな……。私、夏には夜にエアコン点けたまま眠る人ですよ?」

「えっ!? ……未佳さん、まだそれやってるんですか?!」

「あッ……。!! ヤバッ!!」

「それ『声帯に影響出るかもしれないからやらないように』って、私言っただけですよねぇ?!? 未佳さん?!」

「あ……。いや、そのお……」

「(ハハ……。自分で墓穴掘ってるし……)」

これをあの諺で『キジも鳴かずば撃たれまい』と言うのだろう。

そんな未佳自身の発言で一気に体温が下がったところで、栗野の車は事務所へと到着。

着いたと同時に車から下りてみれば、一気に肌に突き刺さるかのような寒い風に吹かれた。

これには流石の二人も、声を揃えて『寒いーっ!!』を連発。

一度暖房の点いていた室内の温度に慣れてしまうと、本当にこの外との温度差は悲鳴ものだ。

「早く中に入りましょう！ 未佳さん！！」
「あつ、はい！」

まるで栗野に引つ張られるかのように、未佳はやや駆け足で、事務所の入入り口がある方へと向かう。
そして出入り口のドアの前まで走っていった時、未佳の目に、見覚えのある二つの背中が飛び込んできたのだ。

一人は未佳と同じくらいの身長で、もう一人は未佳よりも少しだけ背が高く、かなりの細身。

おまけに履いているブーツのヒールの高さを見れば、誰なのかは一発で分かる。

「あれ・・・？ さとつち！ 小歩路さん！」

「えっ？」

「あつ！ みかつぺ、おはよう！」

「おはよう、小歩路さん。それから・・・」

ふっと、いつもと同じように『おはよう』と、長谷川に言い掛けた未佳だったが、考えてみればかなり言いづらい状況であったことを今頃になって思い出した。

きっと昨日の出来事のことを、まだ長谷川は怒っているに違いない。

しかし長谷川は、そんな未佳の予想とは全く真逆の反応を返してきたのだ。

「おはようございます。坂井さん」

「あつ・・・、おはよう・・・。え〜つと」

「?・・・どうかしました?」

「その・・・。昨日のメール・・・」

「あつ・・・」

「? メールがどないしたん?」

おそらく昨日の出来事を知らない厘からしてみれば、この二人の会話はかなり気になるのだろう。

厘は頭に『?』マークを浮かべながら、未佳と長谷川の顔を交互に見比べて尋ねる。

そんな厘の問い掛けに、長谷川は咄嗟に思い付いた回答を慌てて返した。

「・・・いや。実は昨日坂井さんが、なんか色んな弦が混ざってる束みたいなのを、ちよつとご自宅で見つけたみたいで・・・。それを『いる?』って訊かれたんだけど、こっちは沢山持つてるから『もういいです』って・・・」

「はあ・・・」

「そういう話」

「なるほどね」

その一見意味不明な発言を、どうやら厘は一つの事情として受け止めてしまったらしく、何一つ疑わずに納得してしまった。

一方の未佳は、今の長谷川の発言で気になったキーワードを、一つひとつ脳裏に浮かべてみる。

(混ざってる・・・? ギターの弦・・・? 『もういいです』・・・?・・・!!!)

しばし考えること約20秒。

ようやく長谷川が自分に何を伝えたかったのか理解した末佳は、どうやったらそんな即興でこんなコメント暗号が出来るのだろうかと思ひ、無意識ながら笑みを浮かべて笑ってしまった。

そんな末佳を見て、リオは昨日に引き続き、また末佳に問い掛ける。

「なんで笑ってるの？」

「ん？ さあ……。これはある意味、頭のいい人にしか分からない暗号ね」

「……………はっ？」

「だからそのまんまの意味よ」

そんなことをリオに対して話していた末佳は、ふっと何故長谷川と厘が、同じ時間帯に事務所の出入り口に立っているのだろうかと思つた。

確かに二人は、事務所にやってくる方向が逆方向だったはず。

さらに気になったのは、長谷川の事務所到着時間。

どうやら今回はバスでの出勤だったようだが、事務所の方へ向かうバスの走っている時間を考えると、車を使っていたにしろやや到着時間が早過ぎるのである。

「ところで……。なんで二人とも一緒にここにいるの？ ……」

確か、家から事務所にやってくる方向……。逆だったよね？」

恐る恐る末佳がそう尋ねてみると、長谷川はそれを聞いて『えっ？』と聞き返した後『ああ……。』と言いながら数回頷いた。

「ちよつとね……」

「？・・・『ちよつと』って？」

「いやね。たまたま僕が事務所に向かつて歩いてるところに、丁度小歩路さんが車で通り掛かったんですよ。それで乗せてもらって」

長谷川が言うには、途中までバスに乗って事務所に向かつていたところ、たまたま用事で通り掛かった厘と偶然遭遇し、一緒に車に乗せてもらったのだという。

ちなみに、遅刻が多いこの二人がこんなに早く事務所に到着していた理由は、昨日のメールの内容通りに遅刻しなくなかったかららしい。

しかし後々二人の会話を聞いてみると、どうもそれは長谷川のみの理由だったようだ。

その証拠に、長谷川と厘はこんなやり取りをしていた。

「ほら。流石にメールの送り主が遅刻って言うのは・・・。ねえ？
小歩路さん」

「『ねえ？』って、ウチは郵便ポストに手紙出そう思おて、起きて・・・。そしたらさとつちの背中が見えたから、丁度ええって車に・・・。せやからウチは遅刻したかったからちやうよ？」

「えっ？・・・つまり・・・、僕の勘違い？」

「はい！ はい！ 立ち話は事務所に入ってからしましょう！！
ここにいたら全員目立つし、何より寒いから！！」

そう言いながら、栗野は3人の背中を事務所の方へグイグイと押し入れる。

一方の押されている側は、ちよつとしたスロープやら段差やらが危なくてしょうがない。

下手をすれば頭から地面に『バタンツ！！』だ。

「栗野さん！ 分かつたらもう押さないでっ！！」

「段差！ 段差っ！！ スロープ！ スロープっ！！」

「危ないっ！ 危ないッ！！」

「だつたらちゃんと中に入ってください！！ 手神さん待ちくたびれてるから！」

「あつ・・・。 やっぱり手神さん、もう一番のりで着いてるんだ・・」

「ほら！ 早く！！」

その後は栗野に背中を押されるよう、3人はやや急ぎ足で事務所の中へと入っていった。

中に入ってみると、予想を遥かに下回るほどの事務所内の温度に、4人はしばし沈黙。

事務所内は寒くない程度の暖房しか点いておらず、そのおかげで室内が微妙な温度になっていた。

おまけに『寒くはない程度』とは言っている、これだけ建物が大きいと中々室内は暖まらないし、しばし別の部屋の方へ動いてしまえば、やはり腕や足などに冷えた空気が触れる感覚がある。

全体的に見ても、全くもって暖かくないのだ。

「暖房微妙・・・」

「あつたかくなーい」

「むしろ寒い・・・」

「期待して大損やん」

正直な話、先程の栗野の車内よりも寒い。

それは長谷川も同意見だったらしく、長谷川は自分の両二の腕を何度も摩りながら、チラチラと厘の車が停めてある方に視線を向ける。さらにその車の持ち主でもある厘に至っては、わざとらしく車のキ

ーを『チャラチャラ』とズボンのポケット内で鳴らす始末。皆、言いたいことは同じだった。

「私、今日栗野さんの車の中で歌おうかなあゝ・・・」

「ちよつと、未佳さん!？」

「さとつち。今日ウチの車の中でギターやってええよ・・・」

「! 本当ですか?！」

「コラコラそつちも・・・」

ちなみに何故こんなに事務所内の温度が低いのかと言うと、今年は去年に引き続きエコ&節電の年だからである。

日本では大きな建物を持つ会社や高層ビルなどを、こうしたエコ活動の対象として取り扱うことが多い。

無論、未佳達の事務所でもある『SAND』もその一つ。

つまり事務所側は、まだ時間帯も早く人も少ないので、エコの一環として、全フロアの暖房の設定温度を下げて点けていたというわけだ。

「それにしてもエコにし過ぎよ・・・。私達が事務所に来てることなんて考えてもいないってことよね？」

「というより・・・。聞いてないんちゃう?」

「一応は伝えたんですけど・・・」

「さとつち。今からスタッフルームに行つて『設定温度上げて』って言つてきて」

「・・・ツ?! んなつ、無理ですよ!! 僕らの立場下なんですから・・・!!」

「冗談」 冗談」 そんなの私だつて出来ないもん」

「・・・」

「はあ・・・。じゃあ・・・、私がスタッフルームに入るついでに伝えておきます。皆さんは一旦、3階のレコーディング室に行つ

てきてください。手神さんそちらにいますから」
「「「はい」」」

一人重い溜息を吐く栗野を知ってか知らずか、3人は普通に返事を返して2階へと向かう。

階段を一段一段上っていくにつれ、少しばかり周りの温度が暖かくなつたように感じた。

「少しだけ……。空気が暖かいね」
「そお？」

「うん。多分コレ、6階が一番暖かいと思うよ」

「熱い空気は上にいく……。皆さん学校の理科で習ったでしょ？」
「習った」

「……。……」

「小歩路さんは？」

「……。どっちにしても寒いつ！！」

「「……。ッ！！」」

そうこう言っている間に、3人はいつものレコーディング室の真ん前に到着。

しかし今回は珍しく、手神のキーボードを弾く音が聞こえてこない。

「あれ？ 手神さんいるのかなあ……。……」

「「えっ？」」

「……。えっ？」

ふつと呟いた一言を突然二人に聞き返され、未佳は思わず「えっ？」と声を漏らした。

別に変なことを言った覚えはないのだが、長谷川と厘の顔にはハッキリと『？』のマークが浮かんでいる。

『一体自分の発言の何が気になるのだろう』と、未佳はそんな二人の様子を見つめながら、しばし記憶を辿った。
そしてようやく『ハッ』としたのだ。

（そっか・・・！！ 二人ともいつも事務所にやってくるのが遅いから、手神さんが朝にキーボード弾いてるの知らないんだ！！）

「えっ？・・・いつも手神さんのキーボードの音するん？」

「う、うん・・・。ただ私が入った後は、色々喋ってたりして弾いてないんだけど・・・。いつもだったらキーボードの音がハッキリ聞こえてくるの」

「じゃあ・・・。居てへんのかなあゝ。暖房点いてへんかったら最悪なんやけど・・・。」

「ま、まあ。いくらあの手神さんでも、暖房ぐらいは点けたままにしていますよ。きっと・・・。」

やや半信半疑にそう言つと、長谷川は勢いよくレコーディング室の扉を引き開けた。

26・ネズミ襲来

「『寒っ!!』」

3人がレコーディング室へと入ってまず発した一言は、まさかのコレだった。

というのもレコーディング室内の温度は、皆の予想に反して事務所内よりは寒く、外よりはややマシ程度の温度だったからである。正直言つて、期待を大きく裏切られた気分に等しい。

「全っ然暖かくないやん!!」

「いや……。僕にキレられても……」

「それよりも手神さんは？」

「……ここです……」

「えっ……？ えっ？！」

「へっ？！」

「あっ!!」

ふつと何ともか細い声が聞こえてきた方向に視線を向けてみれば、そこには黒いコートに身を包み、床にしゃがみ込んだまま震えている手神がいた。

そんないつもとは違う手神の姿に、未佳と長谷川は思わず手神の元へと慌てて駆け寄る。

「手神さん!!」

「手神さん！ どうしたの?!」

「『どうしたの』って……、寒いんですよ。暖房もう30分前くらいに点けたはずなのに、全然部屋は暖かくないし……。栗野さんは坂井さん呼びに出掛けちゃったし……。お二人はなかなか

か来ないし・・・!!」

「す、すみません・・・」

「すみません、手神さん……。でも僕達これでも、めっちゃ早く着いた方なんですよ?」

「しかも『30分も前に』って……。早く来過ぎ・・・」

「シッ!!」

「とにかく! 早く暖房をどうにかしてください!!」

会話の最後辺りでそう叫ばれ、未佳はとりあえずクーラーの真下へと向かってみた。

このクーラーは、天井の右端に設置されている排気口から、暖房・冷房が出るという仕掛け。

さらにその排気口の機体の後ろからは、壁伝いに黒く長いケーブルが伸びていて、丁度壁の高さの真ん中辺りに、空調や室内などの設定温度を表示、または設定操作を行うための電報掲示板。

そしてその掲示板の下辺りから再び伸びているケーブルの先に、ほぼ部屋の右角にフィットさせるような形で、巨大なクーラーの本体部分が置かれているのだ。

この特徴から言っても、クーラー自体はかなり古い機種の物なのだが、事務所側としてはまだ現役並みに使えるということで、未だに使用しているしだいである。

もともと事務所内のアーティスト達からは、極一部で『巨大で邪魔』という意見もあるが、未佳達は別に差ほど思っていない。

ちなみにこの本体の中はというと、かなり入り組んだ配線などが大量に収納されている。

つまり、もしクーラーの調子がおかしくなったとすれば、それはこの本体の中にある配線の不具合によるものの可能性が極めて高いの

だ。

しかしいくら長谷川がその本体を確認しても、特に変な音や臭いもなく、見た目的にも異常がある風には到底見えない。

一方の末佳も、そんなクーラーの構造を脳裏に挟みつつ、天井に取り付けられている排気口の様子を窺った。

するとどうやら、クーラー自体は微かに動いているようだ。

しかし真下に居ても熱を感じないのは、どう考えてもおかしい。かと言って、代わりに冷気が出ている感じもしない。

（なんか変………）

「どうです？ 坂井さん」

「………ねえ。コレちゃんと出てると思う？」

「ん……？」

末佳が半信半疑な面持ちで尋ねてみると、どうやら長谷川自身も、この動きが妙なクーラーに不審感を抱いたらしい。

『考えてから行動を取る』タイプの長谷川は、まず最初に排気口の真下辺りに椅子を置くと、その上に靴を脱いだ状態で立ち上がり、両手をその排気口の前でかざしてみた。

本来ちゃんとクーラーが点いていれば、やや手を引つ込めなくなるほどの温風が出ていてもおかしくないはずだったのだが、長谷川の表情は全く変わらない。

そればかりか、かざしている両手を引つ込める気配ですらない。

「さとつち、どう？」

「うん……。なんて言ったらいいんだろ……」

そう呟く長谷川の顔には、もはや苦笑しか浮かんでいなかった。
この様子からも、全くもってクーラーの暖房機能が機能していないことは、もはや容易に想像がつくことである。

「もしかして………。本当に点いてないの？」

「いえ、あの……。なんか……。人の吐息レベル？　ほぼ出てないに等しいです」

「じゃあ、設定温度上げてみたら？」

「そ、そうね……」

とりあえず厘に言われた通り、クーラーの設定温度を最大の30度にまで上げてみたのだが、温風のレベルはほとんど変わらなかった。ただ吐息レベルだったものが、少しばかりまとまった風になっただけ……。

「ビミョー……」

「えっ？　ほとんど変わらないの？」

「……。うん。たぶんこれ……。下が暖まる前に、温風が完全に冷え切るパターンです……。はい……」

「『はい』って……。ウチらどうやって暖まったらええの？」

「暖房がダメなんじゃ、どうしようも……」

「そんなあー！！」

そう嘆く厘達を尻目に、未佳は壁に取り付けられているクーラーの温度表示に視線を向けた。

温度表示にはハッキリと『室内温度18度・設定温度30度』と表示されている。

（動いてはいるのに……。何なのよ！　この身を切るような寒さは……！）

その表示されている温度差と言い、朝から寒さに見舞われていることと言い、少々未佳も我慢の限界だった。そして次の瞬間。

「なんで点かないのよッ!!」

長谷川とは真逆の『考えるよりもまず行動』タイプの未佳は、そう叫んだと同時に勢いよく、右足を一番重要でもある本体部分に蹴りつけた。

『バンッ!!』というあまりにもド派手な音に、3人の口から思わず『ひッ!!』という悲鳴が上がる。

さらに未佳が蹴りつけてからわずか10秒後。

なんとクーラーは『ピー・・・』という細かい電子音を発した後、パタッと完全に停止してしまった。

勿論設定温度などを表示していた表示画面も、先程まで微かに点いていた暖房もぱったり。

このあまりにも意外な暖房器具の最後に、4人は啞然とするばかり。ようやく出てきた言葉は、蹴った本人を除いてそれぞれ一言ずつ・・・。

「え？」

「えっ？」

「え・・・？」

「えっ・・・？」

「・・・こ・・・、壊れちゃった」

ドテッ！！

「『壊しちゃった』の間違いでしょ？！ 今のは……！！」

「しかも最後の『』は何！？」

「だ、だって……。頭にキタから……。つい……」

「『つい』って……。僕いくつも壊してるから知ってるんですけど、電化製品ってかなり弱いんですよ！？ 坂井さん！」

「それは知ってるけど……」

「……。あれ？」

そんな末佳と長谷川があれやこれやと言い合っていると、ふっと厘は何かに気が付いたらしく、突然本体の後ろの方へと回り込み、あるものをゆつくりとつまみ出した。

厘がゆつくりと持ち上げたのは、本体の後ろに伸びていた白いコンセツト。

「これ……」

「もしかして……。差し込みが甘くなってたってこと？」

「確かに僕……。後ろのコンセツトまでは確認しなかったなあ」

「じゃあ後はこれを差し込んで、坂井さんが蹴った影響が出てないかどうか確認するだけですね？」

「一々私の『蹴った』言わないでよ……！」

「……！」

「いや、そつやなくて……。ここ……」

「……ん？」「」

ふっと厘が指差したコードの1か所に、皆はジーツと視線を向けてみる。

そして思わず3人は『あっ！』と声を漏らした。

よく見てみると、そこにはあと少しで中の配線が切れてしまうほどの、大きな掠り傷が付いていたのである。

いや。
正確には『掠り傷』というよりも、何か人工的なもので齧られた感じの傷だ。

そのコードを持ち上げ、長谷川は小さく声を漏らす。

「一体なんでこんな・・・」

「これ・・・。床と大体の間で擦れた感じじゃないよねえ？」

「うん。何かに齧られた感じに見えますね・・・」

「『齧る』って・・・、虫？」

「や・・・！ 止めてくださいよ、小歩路さん！！ 僕、虫ダメなんですから・・・！！」

「いや・・・。『虫』というよりもこれって・・・」

末佳がふつとそう言い掛けた、その時。

突然末佳達の真後ろから『カタカタカタツ・・・』と、まるで小さな玩具が転がるかのような物音が聞こえてきたのだ。

その音に、思わず4人は顔を見合わせ、一気に表情を曇らせる。

『まさか・・・』という悪い予感だけが、皆の脳裏を一気に駆け巡った。

「今・・・」

「後ろから物音・・・」

「しました・・・」

「よねえ・・・？」

半分パニック映画のワンシーンの如く、4人はそれぞれ一言ずつ言

葉を発すると、無言でゆつくりと、自分達の真後ろを振り向いた。
そこで皆の目に飛び込んできたのは、自分達のすぐ足元でモソモソ
と動き回っている、小さな茶色い物体・・・。

そしてその小さな物体は、まるでぜんまいの玩具のように小刻みに
動くと、突然未佳達の方を『キツ!』と見上げた。

その黒く大きな両目が、不覚にもメンバー全員の瞳とぶつかる。
もはや叫ばずにはいられなかった。

「「キヤアアアアアーツ!!」」

「「うわああああアーツ!!」」

「ネズミっ!! ネズミいっ!!」

「ワッアッアアアーツ!!」

突然のネズミ登場に、未佳達は狭いレコーディング室内を、それこ
そ四方八方に走り抜ける。

結果最終的に、未佳とリオは出口のドア付近。

厘はそのドアに近い方の左角。

逆にその右角には、手神が一時避難。

そして靴を脱いでいたせいであまり走れなかった長谷川は、一人排
気口の真下に置かれていた椅子の上に、ほぼ直立した感じで立ち上
がっていた。

こうしてそれぞれの避難場所に身を置きながら、皆はネズミがこの
場からいなくなるのをひたすら祈る。

だが本当の恐怖は、まさにこれからだった。

しばし近くを歩き回っていたネズミは、ふっと置きっ放しになっ
ていた長谷川のスニーカーの元へと向かうと、いきなりそのスニーカ
ーの足を入れる箇所の縁を齧り始めた。

その突然の出来事に、長谷川は何としてもネズミからスニーカーを取り上げようと、右手をビクビクしながら伸ばす。

「あゝあゝああゝっ！！ 僕のスニ・・・！！ コ、コラッ！
どっか行け！」

「チュウ！」
「ひいッ！！！」

このネズミが鳴く度にビビる長谷川の姿に、メンバー3人は腹を抱えて大爆笑。

その姿からは、先程のネズミに対する恐怖心は一切感じられない。

しかし、スニーカーを齧られている長谷川は必死だ。

何故なら、このスニーカーはやや最近に購入したものであり、長谷川の一番のお気に入りでもあったからである。

このスニーカーは、黒地に赤・黄色・緑・青・紫など、色取り取りの小さなドット柄が付いているデザインで、男女共々も人気が高い。ただ今はまだ新作の枠から外れていないので、値段的に言えば決して安くはなかったが、長谷川はこれを一目で気に入って購入。

ようは衝動買いした代物なのだ。

それをたかがこんなネズミ如きに、ボロボロの不良品なんかにされるわけにはいかない。

長谷川はようやく意を決して、スニーカーをネズミから取り上げた。

「よ・・・よし！ 取ったっ！！ ほら！ あっち行け！！！」

長谷川はそう叫びながら、器用にスニーカーを両足に履き『しッ！しッ！』と、ネズミを右手で掃うかのような仕草を取った。

その時だ。

ネズミはしばらく長谷川の方を見上げていたかと思うと、突然長谷川の方に向かって飛び跳ねたのだ。

その高さは、軽々と椅子の上で立っている長谷川の脛すねの位置まで。

一応長谷川の身体に飛び乗ることはなかったが、予想だにしないネズミのハイジャンプに、長谷川と未佳達はただただ驚愕。

「!!」

「「「・・・っ!？」」「」」

「今飛んだよね?! そのネズミ!!」

「うん! ぴよんって・・・、あっ!!」

ふつと未佳と厘が顔を見合わせて話している間に、ネズミは例のクーラーのケーブルを上って、そのまま天井に空いていた小さな隙間の中に逃げ込んでしまった。

おそらく4階の通路下だろう。

未佳はその穴を下から見上げていたが、既にネズミの姿はなくなっていた。

「・・・ダメ。もういないみたい・・・」

「にしても驚きましたねえ・・・。まさか事務所にネズミが現れるだなんて・・・」

「そんなに事務所、生ゴミ溜まってへんのに・・・」

「そんなことはもういいですから!! 早く事務所のスタッフ達に伝えましょう!!」『ネズミにクーラー壊された』って・・・! おまけに僕の靴までえっっ!!」

よっぽどスニーカーを齧られたことがショックだったのか、長谷川はまるで感情が爆発したかのようにそう叫ぶと、今度はさらに狂ったように『アアアアアアッ!!』と大絶叫。

そんな感情のボルトが緩んだ長谷川を、未佳はとりあえず両肩を叩いて慰めた。

「さとうち分かった、分かったから！　お願いだから一番の常識人が錯乱しないで」

「（ハハ・・・。これじゃあどっちが年上なのか分かんないよ・・・）」

「とにかく・・・。皆と一緒にスタッフルームに行こ。ねっ？」

「・・・・・・・・・・・はい」

「長谷川君・・・。もしかして本当に泣きそうになってるの？」

「しーっ！！　手神さん！　シーッ！！　今はソコ訊かないで！！」

「あ、はい・・・」

その後未佳達は、突然のネズミ襲来による被害報告をすべく、2階にあるスタッフルームへと向かった。

27・ネズミの末路・・・

「それ、たぶん『クマネズミ』ですよ」

やや顔馴染みでもあるスタッフルームの男性職員が口にしたのは、あまり耳にしたことのないネズミの種類だった。

「くま・・・、ネズミ・・・？」

「えっ？ ドブやないんですか？ 僕達が今見たのって・・・」

長谷川が言う『ドブ』とは、よく関東でも目撃される『ドブネズミ』のこと。

一般的に人々がよく目にする、耳にするネズミと言ったら、この『ドブネズミ』が代表格だろう。

だがここ最近『ドブネズミ』よりも遥かに知能が優れている小型のネズミ『クマネズミ』が、各地で問題となっているのである。

原因は、ペットとして飼われていたものが大量に捨てられ、勝手に繁殖してしまったため。

つまり、クマネズミは元々日本には生息していない『外来種』なのだ。

そしてこのクマネズミは、ドブネズミが決して真似することの出来ないことを、意図も簡単に行うことでも知られる。

例えば、未佳達が目撃したあの行動も、その中の一つ。

「ドブはケーブルを登ることも出来へんし、足もそこまで丈夫やないから、高くジャンプすることも出来ないし、足もそこまで丈夫ではあらへんから、高くジャンプすることも出来ん・・・。そやけど

クマネズミにとっては、その二つは楽勝なんですよ」

「えっ！？ ドブはそれ出来ないんですか？！」

「図体デカイし、足は歩く分ぐらいしか力無いから……」

「……初めて知った……」

「そういえば……、この間ニュースでやってましたよ？ 『関東

で大繁殖してるクマネズミが、最近関西でも増えてる』って……」

栗野はふっと、先週の土曜日辺りに見たというニュースの内容を、手短かに未佳達に説明した。

そのニュースでは、人家の天井などで大繁殖してるクマネズミを、業者の人間が罠を仕掛けて捕獲、駆除を行っている姿が、鮮明に映されていたのだという。

そして、クマネズミがかなり罠に掛かり難いということも。

「かなり知能があるから、あのよくあるベタベタシートを、ピョんって飛び越えちゃうんですよ。それだけじゃなくて、昔はよく使われたはずのネズミ取りの罠も、あえて罠が作動しない方向からエサを食べちゃったり……」

「えっ、でも……。テレビでは捕獲出来たんでしょ？」

「捕獲は出来たんですけど、ほとんど足の踏み場もない感じに罠を広げて、それでやっと2匹だけでしたから……」

「2匹だけ！？ 僕達が見たの1匹でしたよ？！」

「しかも……。あんなに事務所内が広いんじゃ、捕まえるのは容易じゃないし……」

「どないしよう、栗野さん……」

だがそうは言っても、このままでは楽器のコンセントやチューブ。さらには事務所にやってきている人達の荷物にも、ネズミによる齧られ被害が起こってしまうかもしれない。

その上繁殖までされてしまった、被害は1匹分の数倍にも裕に達す

る。

「早めに手を打たないと・・・」

「で、でも・・・。何処にどのくらい罫を仕掛けたいのか・・・。確実に捕まえられる方法じゃないと、罫なんて・・・」

「アイツ、今頃3階の天井か4階の通路下にいますよ!」

「だからそれじゃあ範囲が広過ぎるでしょ!! 通路だけでもかなりの長さで横幅があるのに、そこ全体に罫を張るだなんて無理よ! 何なら、今から皆で通路と天井のタイルひつぺ返す!？」

「イエ・・・、ケツコウデス・・・」

「とにかく! ネズミの問題はこちらがどうにかしますから・・・。皆さん4階の方のレコーディング室に行ってきたください!! ドラムの音確認しないといけないんでしょう?」

「えっ、ええ・・・」

「まあ・・・」

そうは答えたものの、やはりネズミのことが気になって仕方がない。おまけに現在ネズミがいるとされる場所は、3階か4階の近く。少なくとも、再度出くわさないという保証は何処にもない。

しかし『ネズミに会いたくない』という簡単な理由で、事務所以外の人間が引き下がってくれるはずもなく、末佳達は渋々4階のレコーディング室へと向かうことに。

しばし2階から3階へと続く階段を上っていると、ここにきて手神がこんな本音を零した。

「なんだかんだで、早く来た意味なくなっしまいましたね・・・」

「そう・・・、ねえ・・・」

「ネズミがいきなり出てきたせいやもん。仕方ないよ」

「はあ・・・。僕のスニーカー・・・。少し生地がゴワゴワにな

ってしまつた・・・」

「長谷川君・・・。慌ててた割には、ちゃんとそういうところチエツクしてたんだね」

手神にそう言われた通り、行動面においては全く抜け目がない長谷川だったのだが、正直スニーカーの話題はもうどうでもいい。いや、その前に。

ネズミに靴を齧られたこと自体どうでもいい。

「さとつち・・・。靴の話はもうどうでもいいでしょう・・・」

「良かないですよ！！ このスニーカー、6098円もしたんですからっ！！」

「高ッ！！」

「何よ、その無駄遣い！ 普通はネイルにしか使わないでしょ！？」

「「えっ・・・？」」「」

「ちよつと・・・！ どっちもどっちじゃないですか！！」

その二人の言い争いに、手神は口をは挟みつつ呆れ返るばかり。

それからようやく無駄遣いに関しての会話が消えかけた頃、4人は4階へと続けていた階段を上り終え、レコーディング室へと向かい始めた。

それもあり警戒しながら。

「おらへんよなあ？」

「嫌なこと言わないで・・・。見つからないように歩いてるんだから・・・」

「でもあのネズミ、結構可愛かったよね？」

「「「えっ?!」」「」」

「えっ・・・？」

予想だにしない厘の発言に、皆は目をパチクリさせる。

一方の厘は、一体何故皆がそんな顔をしているのかさっぱり分からないらしく、全員の顔を一人ずつ見渡しては、小首を傾げていた。

「えっ……。みんななどないしたん？」

「小歩路さん、何処かに頭でも打ったの？」

「えっ？」

「だ、だって……。ネズミだよ？　……。あれってそんなに可愛かった？」

「……。うん。ウチ的には別に……」

「うそ……。っ！」

半分厘のその発言の意味が分からず、未佳はただただ首を傾げるばかり。

だが厘がネズミのことを『可愛い』と言うのには、もう一つある理由があった。

「そういえば小歩路さん……。昔ハムスター飼ってましたよね？」

「でっかいゴールデンの……」

「うん。アズキのことやる？」

厘の言う『アズキ』とは、昔飼っていたゴールデンハムスターの名前。

実は今から7年前に、厘はメスのゴールデンハムスターを一匹、学生時代の友人から渡され、飼育していたことがあったのだ。

飼育することになったきっかけは、その友人が飼っていたハムスターが子供を産み、その内の一匹だけが貰い手が見つからず、止むことなく厘が引き取るようになったため。

ハムスター、もとい基ネズミ類を飼育したのはこれが初だったのだが、元々生き物好きだったのが功をそうしてか、厘はその『アズキ』と名付けたハムスターを、かれこれ4年ほど飼育していたのである。

ところが今から3年前の夏。

寿命による老衰のため、アズキはたったの4年でその生涯を閉じてしまった。

「確か……。元々ハムスターって、短命なんですよね？」

「うん。ウチのもかなり長生きした方みたいやったから……。ネズミ類って、大体はその程度なんとちゃう？」

「うーん……。でも小歩路さんのアズキちゃんは可愛かったけど……。クマネズミあっちは見方による……。」

「そ……。そう？ ふーん……。あつ……あつ……！」

ふつといきなり厘が大きな声を上げるので、未佳達はまたネズミが現れたのかと、再び身を強張らせた。

しかし辺りを見渡してみても、何処にもネズミらしき姿は見られない。

やや間を置いた後、未佳は恐る恐る厘に尋ねた。

「小歩路さん……。どうしたの？」

「ウチ……。！ 3階のレコーディング室に昼食置いてきてしもたっ……！」

「昼食って……。まさかあの白い柄入りの袋？！」

「うん！ 中にサンドウィッチと紅茶入ってんの……。もうアカンっ！ どないしょ……！」

そう言いながら頭を抱え込む厘に、未佳はややオロオロしながら、とりあえず厘を落ち着かせる。

こちらもなんだかんだで本日二度目だ。

「小歩路さん、ちょっと落ち着いて……!」

「もう落ち着いてる……」

ズベツ

「そ、そう……。とりあえず、みんなで3階のレコーディング室に戻る? きつとまだそこに」

「嫌です……」

「へっ?」

ふつと後ろの方から聞こえてきたその声に振り返ってみれば、そこにはムツとした表情を浮かべている長谷川の姿。

その長谷川の発言に、未佳も思わず『はっ?』と聞き返す。

「さとつち今、何て言った?」

「だから『嫌です』って言ったんです。……だって3階のあそこって、ネズミアイツがまだいるかもしれないでしょう?! だったら僕は行きませんよ!」

「それを言ったら、4階のレコーディング室にだっているかもしれないじゃない! どっちに行ったって、その内また出くわしちゃうわよ!」

「でも一回現れた場所は倍に怪しいじゃないですか!! だから僕は行きません!!」

「……さとつちの弱虫!! 虫が嫌いなクセに弱虫なんだからっ!」

「いやそれ、関係ないし……」

しかし今の未佳には、そのリオのツツコミは一切聞こえていないらしく、その後も未佳は長谷川のことを『弱虫！！ 弱虫！！』と言いつづけていた。

そしてその結果、未佳のその連続発言に、長谷川は『弱虫で結構です！！』と開き直つてしまい、何とも空気がマズイ状態へと発展。

『これはどうにかしなければ』と、率先して二人の和解に動き出したのは、他でもないリーダーの手神だった。

「長谷川君。ちょっと取りに戻るだけだから……。下に行かない？」

「でも……。全員が行かなくてもええやないですか……」

「まあ、それもそうなんだけど……。やっぱり女性二人だけに戻らせるのもあれでしょ？ それとも……。長谷川君、一人でここに残る？」

「……。ネズミ^{アレ}……。ここにも来ますかね？」

「うん。下手したら一人で鉢合わせね！！」

「未佳さんっ！！」

「……。わっ……。分かりましたっ！ 一緒に行きますっ

！！」

「そ……。そう……」

あまりにも単純な和解方法ではあったが、こうして未佳達は、3階のレコーディング室に4人で向かうことに。

ただし、あまりにも長谷川がネズミとの遭遇を嫌っていたので、未佳や厘達との相談の結果、長谷川は厘立が袋を取りに行っている間、レコーディング室の入り口付近で待機していることになった。

「なんだかんだで3階には戻ってきたけど……」

「ここから先が本当に恐怖ですね・・・」

「さとつち、大丈夫？」

「だ、だ、大丈夫・・・！ 周りも涼しくて丁度いいし・・・」

「えっ？・・・今、暖房効き過ぎて暑過ぎるくらいよ？」

「さとつち・・・。恐怖で体温下がってるんとちゃう？」

「そっ・・・、そんなことないですよ・・・っ！！」

「嘘ね・・・」

「嘘やな・・・」

「嘘ですね・・・」

「違いますっちゃて！！」

そうこう言ってる間に、未佳達はレコーディング室の真ん前へ。

一瞬ではあるが、長谷川はここで一旦待機だ。

「じゃあ・・・。中に入ってくるね？」

「なるべく早くお願いします・・・」

「『なるべく』って・・・。たぶん10秒くらいだと思うけど？」

「とにかく早めをお願いします」

「・・・はいはい」

「ほな、さとつち。留守番よろしくね」

（・・・いや、何の留守番ですか・・・）

そんな長谷川の呟きなどは露知らず、未佳達はレコーディング室の中に足を踏み入れる。

中に入っすぐ、棚の上に置かれていた白い袋が目にとまった。

「あれじゃない？」

「あつ、あつたー！！」

「よかったですね、小歩路さん」

「うん、中のもちやんと・・・。あれ？」

ふつと袋の中に入っていた紅茶のペットボトルとサンドウィッチを見た厘は、そこで小さな異変に気が付いた。

すぐさま紅茶とサンドウィッチを袋から出してみると、なんとサンドウィッチを包んでいたラップの端が、本の少しだけ破けている。しかもよくよくサンドウィッチの周りを確かめてみれば、その破けていた個所の一部が、何者かに齧り取られていたのである。

紛れも無く、あのネズミの仕業に違いなかった。

「・・・やられた!」

「僕達がスタッフルームに行ってる間に・・・」

「凄い観察力・・・。まさか今もどつかで・・・!」

「と・・・、とにかく! 早めに出よう!! また出てきたら大変だから・・・」

未佳はややビクビクしながら言うと、二人の腕を引っ張りながら、出入り口の方へと向おうとした。
その時。

「うゝわゝ あゝ ああああーっ!!」

「「えっ?」「」」

「さとつち・・・? ・・・まさか・・・っ!!」

いきなり辺りに響き渡った長谷川の叫び声に、未佳達は慌てて出入り口の扉を引き開けてみる。

するとその瞬間、半分泣きそうな顔をした長谷川が室内に飛び込み、入るや否や手神に抱き付いた。

突然の出来事で戸惑う手神に構わず、長谷川は手神の体に抱き着い

たまま、通路の方を指差し叫んだ。

「だから僕下に行きたくなかったんですよーっ！！ アレエーッ！！」

「・・・チュウ！」

「ギヤアアアアアアッ！！」

「〔出タアアアアアッ！！〕」

「えっ・・・！？ ちよっ・・・、ちよっと！」

「イヤアアアアアアッ！！ こっち来る！！」

再びドアの真ん前に現れたあのネズミに、厘を除く3人はまたしても、四方八方に駆け出した。

しかも最悪なことに、ネズミは未佳達の悲鳴でかなり驚いたのか、一瞬逃走の判断を間違え、こともあるうに未佳の方へと走り出してしまったのだ。

いきなり自分の足元にやってきたネズミに、未佳は『ひいッ！！』と悲鳴を上げながら逃げ惑うばかり。

一方のネズミも、早くこの人間達の傍から離れたくて駆け出そうとするのだが、肝心の逃げようとする方向の先々で、ややパニックを起こし掛けていた未佳の足が立ちはだかるので、中々その場から離れられない。

こうして両者の逃げず、逃げられずの状態がしばし続いた後、とうとう悲劇は起こった。

「もうイヤ・・・ッ！！」

未佳がそう叫んだと同時に振り上げた右足が、不運にもネズミの胴体に当たってしまったのだ。

ネズミは『チュッ・・・！』という小さな鳴き声と共に蹴り飛ばさ

れ、未佳の立っていた場所から1メートルほど離れていたところに落下。

この出来事でようやく目が覚めた未佳は、床に横たわったまま動かないネズミにハツとした。

「あつ・・・！」

慌てて今さっき蹴り飛ばしてしまったネズミの元へと向かってみると、ネズミは『スー・・・ハー・・・スー・・・ハー・・・』と荒い息を吐きながら、腹の辺りを上下に動かしていた。

しかもその両目は、完全にしっかりと閉じ切ってしまっている。その様子は未佳にとっても、そして他の人達からしてみても、かなり危険な状態のように思えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「坂井さん・・・・・・・・・・・・・大丈夫？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「坂井・・・・・・・・さん？」

ふつとネズミの真ん前で座り込んだまま動こうとしない未佳に、長谷川はやや様子を伺いながら、そつと後ろまでやってきて声を掛けしてみる。

その呼び掛けでゆっくりと振り向いた未佳の顔に、長谷川は動揺した。

何故なら、未佳は先程の長谷川のような『泣きそうな顔』ではなく、既に『泣き出しそうな顔』をしていたからだ。

『こんな状況の時はどうすればいいのか』と、長谷川が今の未佳の対応にしどろもどろしていると、未佳は瞳に溜まっている涙を今にも零しそうな目を向け、小さく口を開いた。

「さとつちどうしよう・・・」

「・・・え？」

「私・・・、私っ・・・・・・・・、ネズミ殺しちゃった・・・・・・・・!!」

「えっ!？」

「そんなつもり・・・、全然私・・・・・・・・。どうしよう?!・・・
・私殺しちゃった・・・。ネ・・・、ネズミ殺しちゃった・・・!
!」

正確には、ネズミはまだこの時生きてはいたのだが、既に虫の息状態。

そんなネズミの姿を見る度、未佳は『殺しちゃった! 殺しちゃった!』と口にしながら、普段は滅多に見せない涙を目一杯に浮かべる。

そんな未佳の様子を見て、何故か長谷川は『泣かれたらアカン!』と咄嗟に思い、慌てて未佳を慰めた。

「落ち着いてください! 坂井さん!!」

「私・・・! ネズミ殺しちゃったっ!! 殺しちゃったよぉーっ!!」

「大丈夫です!まだ生きてますからっ・・・・。ほら、ちゃんと息もしてるし」

「でも虫の息じゃない!! 私・・・・・・・・、蚊より大きな生き物なんて殺ったことないのに・・・・・・・・っ!!・・・・どうしよう・・・・。どうしよう・・・・・・・・」

「だから落ち着いてくださいっ・・・・・・・・!!」

「さとつち。スタッフルームから虫かご持ってきて」

「・・・えっ？」

いやに冷静な指示を出してきたのは、一人ネズミが現れても逃げな

かったあの厘だ。

厘はゆつくりとネズミの傍までやってくると、未佳に『大丈夫』と口にして、再度長谷川に注文を言い付ける。

「ネズミ一旦入れるから、早よ持ってきて！」

「あ、はい・・・！」

「手神さん、ティッシュかなんか持ってる？」

「ティッシュならありますけど・・・」

「ほな、一枚ちょうだい。『ネズミ素手で持ったらアカン』って、栗野さん言いそうやから・・・。これで掴むわ」
(そりゃそうですよ・・・)

内心『素手で持つてはいけない理由』は分かっているところか厘らしいと思いつつ、手神は厘にポケットティッシュを一枚手渡した。それを受け取った厘は、ふっと隣りで泣きそうになったままの未佳に視線を向ける。

「ほら、みかっぺも泣かへんの。まだ生きとるから・・・」

「えっ・・・、でも・・・」

「たぶん大丈夫やから。ねっ？」

「・・・うん」

「持つてきましたよー?! 言われてた虫かごー!!」

そう言うてこちらにやってきた長谷川の手には、確かにフタが黒い、横幅15×高さ10センチほどの虫かごが握られていた。

ちなみにこの虫かごは、前に厘が事務所前でカブトムシを捕まえた際、一時的にそのカブトを入れる為、スタッフに買いに行かせて買ってきてもらったものだ。

厘はその虫かごの中に、先程のネズミをティッシュで包んだままの

状態でそつと入れ、フタをしっかりと閉めた。

その後その虫がごは、再びメンバー4人でスタッフルームへと持ち運ばれ、そこで栗野に大まかなネズミの事情を説明。

こうしてようやく、未佳達は本来の自分達の仕事を再開し始めたのだ。

そしてそれから8時間後。

再びスタッフルームにやってきた未佳達は、窓口の棚の上に置かれていた虫がこの中を見て、思わず『あつ！』と、声を上げた。

そこには、つい8時間前に死に掛けていたあのネズミが、元気に虫かこの中を走り回っていたのだ。

しかもそれだけではなく、人が近くにやってくる気配を察すると、ネズミはピョンピョンと元気に飛び跳ねながら、未佳達の方をジーッと見つめている。

この驚くべき回復力に、未佳達は目を丸くした。

「さっきまであんなに死に掛けてたのに・・・」

「こんなに元気になっちゃった・・・」

「さっきのは死んだフリ？　だったら思いっきり騙されましたけど・・・。僕達・・・」

「でもよかったね、坂井さん。ネズミ殺しにならなくて・・・」

「ハ、ハハハ・・・。さっきはパニックになってすみません・・・」

「あつ！　皆さん終わりました？」

ふつとメンバーの仕事が終わったことに気が付いた栗野が、未佳達の元へとやってきた。

栗野は笑顔を浮かべながらメンバーの元へと駆け寄ると、例の虫がこの方を見ながら口を開く。

「あなた達がレコーディング室に行った後、いきなり元気になって走り出したんですよ？ このネズミ・・・」

「つまり・・・。脳震盪なんか起こして、気を失ってたってことですか？」

「ええ、どうやら・・・」

「やっぱり気絶してたんやねえ・・・」

「・・・『やっぱり』・・・？」「・・・」

その厘の意味深な発言に未佳達が聞き返すと、厘は『うん』と頷きながら、ふっとこんなアズキとの思い出話を口にした。

「アズキなあ。すっかりケージのフタ開けた時に、棚の下に落ちてしもたことがあって、その時もこんな感じになってたんやけど、しばらくしたら普通に歩き回ったんや。せやからこのネズミも、気を失ってるだけやと思って・・・。ネズミって、案外しぶといんやで？」

「あつ・・・！ それであんな冷静な判断を・・・！！」

「でもごめんね。本気で蹴り飛ばしちゃって・・・」

未佳がそう謝りながら、入れ物越しでネズミの頭を撫でみると、ネズミはまるで未佳のその問い掛けに答えるかのように『チュウ』と鳴き返した。

そしてそんなネズミの様子を見ていた時に、あることが未佳の脳裏をさっと過ぎる。

「そういえば・・・。このネズミ、この後どうなっちゃうんですか？」

「ああ。なんか業者の方に連絡してみたら、ネズミ自体を捕獲しているのであれば、タダで駆除してくれるそうですよ？」

「・・・『駆除』って・・・」

「殺してしまうん？！ このネズミ・・・！」

「え、ええ・・・。もうクレーも一台壊されていますし、今後の影響とかもありますから・・・。どうしたんですか？ 皆さんさっきまであんなに恐がってたのに・・・」

「いや・・・」

「だって・・・」

知らず知らずのうちに、未佳達はネズミに対する恐怖心がなくなっていた。

勿論、かと言って触れられるのかどうかは別の話だが『駆除』という言葉には少々抵抗がある。

出来れば殺すことだけは止めてほしいと思ったのだが『外来種』となつてはその辺に放すことすら許されない。

未佳達の中で、何ともモヤモヤとした気持ちが湧き上がってきた。

「駆除は・・・、ちよつと・・・」

「・・・栗野さん」

「駄目ですよ、厘さん！ 事務所では飼えませんか？ 前のカブトムシだって、苦手の職員大勢いたんですから・・・。それにこの辺にいるネズミとなつたら、何を持つてるのかも分からないですし・・・。飼育は無理です！！」

「・・・」

栗野にモロ飼育を反対され、厘はただただ顔を下に伏せる。

ふつとそんな厘を見ていた未佳は、こんなとんでもない提案を口にした。

「だったら、小歩路さんが自宅で飼えばいいじゃない！！」

「えっ？」

「『えっ！？』」

「だって小歩路さん。アズキちゃんを一回も飼ってた時に触らなかつたんでしょ？ 掃除とかも軍手嵌めて徹底してたみたいだし・・・。それなら病気とかもらわないでしょ？」

「で、でも・・・！！ もしそれで厘さんに何かあったら・・・！！」

「でも小歩路さん。昔っから色々飼ってましたし・・・。大丈夫なんじゃないですか？」

「何かあったら、とつくに過去のことで大騒ぎになってるだろうし・・・。」

「そんな長谷川さんや手神さんまで・・・！！」

「栗野さん・・・、アカンの？」

厘がモノを訴えるかのような視線を向けること約1分。
とうとう栗野が未佳の提案に折れた。

「・・・・・・・・分かりました。その代わり！ 絶対に素手では触らないように！ 掃除はマスクと軍手とゴム手袋！ 必ず空気清浄機の傍で飼育してくださいよ！？ いいですね？！」

「・・・うん！ 栗野さんありがとう！！」

「はぁー・・・。甘いかなあゝ・・・。私・・・。」

「そんなことないですよ、栗野さん」

「今の未佳さんに言われても何にもならないんですけど・・・？」

未佳さんもこの案の提出者ですからね？ 私と同じように責任取ってくださいよ？！ もしもの時は！」

「ゲッ・・・！！・・・殺されなければいいと思ってたのに・・・。それじゃ駄目なの？！」

「ハハハ・・・」

ふつと栗野と未佳がそんなことを言い合っている間、厘達はネズミ

を見つめながらこんなことを話していた。

「名前……。どうする？」

「うーん……。名前は……。そうや、サンド！
サンドにする！」

「サンド？・・・なんで？」

「分かった！！ 事務所におったから『SAND^{サンド}』でしょ？！」
「ううん。ウチのサンドウィッチ齧ってたから」

ドテッ！！

「「「「そつちかい！！」」」」

その後厘は上機嫌のまま、サンドを連れて自宅へと帰っていった。

予約死亡期限切れまで あと 170日

28・大阪公演リハーサル

午前7時20分。

普段よりも2時間早めに起床した未佳達は、やや余裕を持って着替え始めた。

今日は大事な大阪公演でのリハーサル日。

場所は大阪市の中心部にある野外ライブステージ『大阪スター フォーラム』。

そこでのライブは今回が初めてではあったが、未佳は過去に何度か目の前を横切ったことがあり、大体の構造は把握し切っている。

そして何より心配なのが、過去にそこでライブを行ったバンドの人達から聞いた話に出てきた風の問題。

実はこのスター フォーラムのステージは、少しでも強めの風が吹いてしまうと、一気にステージ内が強風に晒されているのと同じ状況になってしまう、という問題点がある場所なのだ。

原因は、ステージの周りが高層ビルで囲まれていること。

そのおかげで少しでも強めの風が吹いた場合、ステージの周りは一気にその元の風の数十倍もの威力を持った『ビル風』が吹き付ける形となってしまうのだ。

さらにステージ自体が2階にあるので、吹き込んでくるビル風の威力は計り知れない。

ちなみに設計当時はどうだったのかというと、ビルの本数自体はそんなに多くはなかったのだ、これは割かし最近発覚したことだ。

「どうか風が吹かないように・・・」

「なんで？」

「ビル風。明後日のライブステージ、かなりビル風が吹き付けてアブナイんだって」

「へえー・・・」

「さてと。栗野さんが迎えに来るまでまだだいぶあるから・・・。朝食なんかしつかりしたの食べよ」

「出来ればいつもしつかりしたのを食べてほしいけどね・・・」
「・・・今の何にも言い返せないわ・・・」

未佳はそうジト目で返すと、冷蔵庫の中からトマト一個とレタス半分、そして生ハム1パックを取り出した。

取り出した食材の内、生ハムは2枚、レタスは4枚だけを残し、残りは冷蔵庫へ。

一つだけ取り残されたトマトは、手で軽くヘタを取ったあと、慣れた手つきで2枚の輪切りと二つの半円に切り分けた。

「で、この半円の部分は要らないから・・・。はい、リオ」

「トマトの端だけでも・・・」

「だって残したらもったいないでしょ？」

そう言いながら未佳も、そのトマトの端である半円の一つを口に入れる。

『端』と言ってもかなりの大きさだったが、未佳自身はそれを余裕で口に頬張った。

今更ながらかなりの大口である。

さらに未佳はトマトを口に頬張ったと同時に、食パンを4枚ほどオリーブトースターの中に放り込んだ。

そしてその間に、今度はボウルに少量のオリーブオイルとレモン汁、そして大量のマヨネーズとパセリを入れ、軽にかき混ぜる。

ある程度まで材料を混ぜ終わると、未佳はそれを人差し指に付けて

舐めてみた。

「・・・よし！ いい感じ〜」

「もしかしてソース作ってた？」

「うん。何作ろうとしてるみたいに見える？」

「・・・ちょっとボリュームのあるサンドウィッチ」

「正解！！ だけど・・・、これリオの分も作ってるんだけど？」

「あつ・・・？ ああ、それで量がこんなに」

「ちよつと・・・。私こんなに食べたら苦しくて歌えないわよ」

未佳とリオがそんなことを言っている間に、部屋中に何とも言えないパンの焼きたい匂いが広がり始めた。

どうやら、先程オーブントースターに放り込んだパンが焼けてきたらしい。

未佳はトースターから『チーン』という音が鳴り響くと、パンを暑がりながらも取り出し、その内の2枚の上にレタス、トマト、生ハム、ソース、レタスの順番に材料を盛り付け、残りのパン2枚でフタをした。

そして最後に、その四角いパンを包丁で斜めに切れば、坂井未佳特製のサンドウィッチの完成だ。

「出来たー！！ さてと、断面は・・・？ おっ！ 思ってたよりもキレイじゃない〜?!」

「まだ〜？」

「はいはい、今そつちに持っていくわよ」

リオからの催促に軽く返事を返しながら、未佳はサンドウィッチをリオの元へと運んでいく。

サンドウィッチに関しては一度『マーメイド』のを食したことはあったが、こんなモツサリとしたものは初めてだ。

「『マーメイド』のとはだいぶ違うね」

「ああ……。一括りに『サンドウィッチ』って言っても、二つあるのよ。ちゃんと材料を乗せてってボリューム感があるみたいに見せるのと、かなりギュウギュウに押し潰した感じのと……」

「『マーメイド』のは押し潰した感じのだよね？」

「『マーメイド』だけじゃなくて、コンビ二とかのも大体こんな感じよ？」

「ふん……」

リオはその説明に軽く頷くと、そのやや大きめなサンドウィッチに齧りついた。

ほとんど小学生くらいの身体なので、一回で口の中に入れられる量は限られているのだが、それでもリオは入り切るくらいの量を口に入れてみる。

「どう？」

「こんなに上手く作れるんなら、いつも作ればいいのに……」

「私の仕事風景見てたら、そんな暇がないことくらいよく分かるでしょ？ というより……私の問い掛けにちゃんと答えてよ！」

「だから『いつも作ればいいのに』って言うのが答え……」

「……つまり『食べられる』って受け取っていいのね？」

「えっ？ そこまで自己評価下げるの？」

「だってハッキリ言わないから……!!」

未佳がそう言う気持ちも分からなくはないのだが、自分の気持ちをあまり大体的に口にすることが苦手なりオからしてみれば、味の感

想はかなり言い難い。

とりあえず高評価ではあったことを遠回しに言ってみたのだが、未佳としてはあまり納得がなかったようだ。

「まあいいや……。大体は分かるし……」

「あと僕自身の感想だけど……。潰れてるのよりモツサリ系の方が、食べ応えあっていいんだけど……」

「やっぱりリオもそう思う？ 実は私も、本当はこっちの形の方が好きなんだよねえ。でも人間っておいしいものはケチる生き物だから、モツサリ系のはコレが掛かるのよ」

と口にしながら、未佳は自分の右手で『お金』を表すジェスチャーをリオに見せた。

「ちょっと未佳さん？」

「さてと。食べ終わったら出掛ける支度」

「早っ！」

それから約50分後。

いつものように栗野が車で迎えにやってきた。

未佳は少し大きめの靴の持ち手を右手で握りながら、やや早足で栗野の車へと向かう。

「栗野さん、おはよう」

「おはようございます。未佳さん」

「なんか今日すごい晴れたね。『カラッ』みたいな」

未佳がそう口にした通り、今日は単なる『晴れ』ではなく、雲一つない『快晴』だった。

ついでに言ってしまうえば、朝から未佳のテンションが異様に高かつ

たのは、これが原因である。

そんな未佳に釣られて、運転中何度もこの天気が目に入っていたはずの栗野も、車窓から空を見つめた。

「確かにスゴイいい天気ですねえ。少しCARNELIANとは不釣り合いな感じもしますけど・・・」

「ああ・・・。私達の場合は・・・、湿った空？」

「せめて『湿気がある』って言うってください・・・。まるで雨雲天氣に聞こえてくるじゃないですか・・・」

「あつ・・・、そう？」

「（僕的には変わらないと思うんだけど・・・）」

「よし、写真撮つとこおー」

「あつ、それなら未佳さん。坂井さんの隣りあたりにカメラがあるんで、それでもついでに撮ってください。スタッフブログの方に載せますから」

「えっ？ ああ、はいはい」

栗野の言う『スタッフブログ』とは、パソコンの『CARNELIAN・eyesオフィシャル公式サイト』に設けられている、マネージャー＆スタッフ達のコメント、写真などを載せているブログのことだ。

内容は主に、メンバーの活動報告や、私生活上の出来事など。

基本的にそれらの文章を書くのは栗野の役目なのだが、写真に関しては未佳や厘に任せることもある。

未佳は栗野に言われた通り、自分のやや隣りに置かれていたデジタルカメラを取り、車窓越しに『パシャッ！パシャッ！』とシャッターを切った。

「撮ったよ？ 5枚くらい・・・」

「5枚っ！？ 写真は1枚でいいんですよ?!」

「じゃあ栗野さんが選んで。どれも力作だから」

「・・・これがホントの自画自賛・・・」

「んっ!？」

「あつ、いや・・・! 未佳さん、私は何にも言っていないですよ! ? 言っていないですからね?!」

「いや、そうじゃなくて・・・。なんか1枚へんなの入った!」

ドテッ!

ピーッ!!

(あつ・・・、いつけなーい!! 倒れた拍子にクラクション鳴らしちゃった・・・!!)

「あゝあゝっ!! これ風で飛ばされたビニール袋じゃない!! なんてこんなところに写ってるのよおっ!!」

(それよりもカメラで撮れたことの方が不思議なんだけど・・・)

そんなビニール袋の乱入写真にギャーギャー騒いでいる間に、未佳達は事務所に到着。

今回は時間帯がいつもより早めだったことと、車の交通量が予想以上に少なかったこともあって、いつも事務所まで20分ほど掛かる交通時間が、ほんの10分ほどで済んでしまった。

「早いね」

「車が全然走ってなかったもの・・・。そりゃあいつもよりは早いですよ。あつ・・・!」

ふっと車のエンジンを切り、シートベルトを外していた栗野は、事

務所の正面玄関前に人が沢山集まっていることに気が付いた。しかもよくよく目を凝らしてみれば、その人だかりの大半が事務所のスタッフ達。

そしてそのスタッフ達に囲まれるかのような形で、微妙に長谷川と手神の姿も見える。

どうやら、当初に決めていた予定時間よりも早めに、ロケバスで現地に出発することになったようだ。

「えっ・・・？ 早くない？！」

栗野に続いて人だかりに気が付いた未佳から、ふっとこんな言葉が漏れる。

そんな人だかりの状況を見ていた栗野は、慌てて後部座席に座っていた未佳に声を掛けた。

「未佳さん！！ みんなもうロケバスの準備してますから、早めにバスの方へ！」

「へっ？ あっ・・・、はいっ」

栗野にそう言われて車から降りてみると、すぐさま数名のスタッフ達から『こっち！ こっち！』と、自分のことを呼ぶ声が聞こえてきた。

さらにその声で気が付いたのか、ずっとスタッフ達と一緒に喋っていた長谷川や手神も、未佳の方に視線を向けながら手招きをしている。

未佳はそんな周りの反応を見ながら、やや急ぎ足でメンバーの元へと駆け出した。

「お待ちせー」

「おはよう」

「おはようございます、坂井さん」

「ねえ……。出発早まったの？ 私達何にもその辺聞いてないんだけど……」

「ああ……。実はさっき、栗野さんから『これから坂井さんを迎えに行く』っていう連絡が入った時にあらかじめ人数が集まってるで……」

「それで全員が到着し次第、事務所を出発することになっていたんですけど……」

だがそう言う手神の周りを見ても、スタッフ達は中々ロケバスに乗り込む気配を見せない。

いやその前に、大事な人間がまだ一人、この場にやってきていないのだ。

「なるほど……。つまり約1名がまだやってこないことを考えずに、みんなこの場に集まっちゃったってわけね？」

「イエース……」

だがいくらスタッフとて、厘が毎回遅れてこの場にやってくることは知り尽くしているはず。

ならば何故、こんな早くに下へ降りてしまったのだろう。

未佳はスタッフ達の行動に小首を傾げる。

「ねえ。なんで小歩路さんを待たずに、こんなに早く外に出たわけ？」

「さあ？ 僕が手神さんとはぼ一緒くらいにやってきたから、一緒に付いてくるとでも思ったんじゃないですか？」

「大体長谷川君が早い時は、一緒に小歩路さんもやってくるもんね。たぶんそういう単純計算だったんだと思いますよ？」

「そ、そう・・・」

「・・・・・・・・・・？ 坂井さん、どうかしました？」

「えっ？・・・ううん、なんでも・・・・・・・・・・。『ちよっと遅いなー』って・・・」

そんなことを未佳が口にしていた時だ。

ピッピッ！！

ふつと後ろから聞こえてきたクラクションの音に、未佳はその音が聞こえてきた方に視線を向けてみる。

そこには、あの藤色の厘の愛車が停まっていた。

当然、クラクションを鳴らした張本人は厘である。

「えっ？」

「あつ、小歩路さん！」

「小歩路さん、こつち！こつちです！」

皆が厘の方を見ながら手招きをすると、厘はとりあえず駐車場の空きスペースに車を止め、未佳達の元へと走り出す。

だがその厘の顔は、かなり困惑しているかのような表情が浮かんでいる。

案の定、厘は未佳達の元に辿り着くや否や、挨拶よりも先に疑問をぶつけてきた。

「あれ？ 集合時間早まったん？」

「いいえ。僕が早めに事務所にやってきたから、スタッフさん達が勝手に『小歩路さんも早めにやってくる』って・・・」

「えっ？！　ウチ『早めに行く』なんて言った？」

「おっしやる通りです、小歩路さん！　誰もそんなことは言ってません！！」

「ただ単にスタッフさん達の早とちりです・・・」

「ほらほら、皆さん！！　ロケバスはとっくに入り口に停まってるんですから・・・！　早めに乗ってください！！　メンバーの方は真ん中の4席に座ってくださいーい！！　ほら、急いで！　急いで！！」

栗野のその指導にやや押される感じで、未佳達はグレーのロケバスへと乗り込んだ。

ロケバス1台の収容人数は約32人。

バスは全部で2台あるが、1台は毎回バンドの楽器が大半を占めている。

未佳達はとりあえず、栗野に言われた通り、真ん中の窓側の席へと腰掛けた。

座席順としては、4列目の窓側の席に未佳。その隣りに厘。

そして未佳の後ろに長谷川と、その隣りに手神が座る形となった。ちなみに栗野はというと、もしもの時のことなどを考えて、なるべくメンバーに近い未佳の前の席に座ることに。

（この席お決まりなのよねえ・・・）

未佳がそう口にしたのにはわけがある。

実はロケバスに乗る際、メンバーは毎回右側の窓側の席に座ることになっているのだ。

理由は、もしも車の接触による交通事故に遭った場合、歩道側の方に座っていれば、多少車にぶつかっても安全だからである。

だが毎回同じ席だと、少々窓から見える外の景色も全く変わり映えがなく、正直飽きる。

ましてや今回の会場は、途中までは未佳達が知り尽くしている道だ。今更窓の外を見たところで、特に変わり映えなどはない。

そのため未佳達はいつも、現地に着くまでの間はそれぞれ時間を潰すことに没頭する。

ちなみに時間を潰す方法は全部で三つ。

まず一つ目は、既に未佳の隣りに座っている厘がやっているように、ひたすら読書をする。

二つ目は、手神とスタッフ数名が今まさに行っている世間話などの会話。

だがこれらの話す系は、声帯への影響などもあるので、正直ライブの練習前は出来ない。

そして最後の三つ目は、未佳の後ろに座っている長谷川の後ろに座っている長谷川が既になっていること。

「よし……。私も寝よ……」

ちなみに会場に着くまでの時間は、片道40分程度である。

29・リハーサル時のハプニング

「未佳さん！ 未佳さん！！」

「・・・・・・・・えっ？」

ふつと声に起こされるかのように、未佳は目を開けてみる。

そこには、先程まで自分の前の席に座っていたはずの栗野が、やや呆れた顔をしてこちらを見つめていた。

「どうした・・・？」

「着きましたよ？ 大阪スター フォーラム・・・」

「・・・・・・・・へっ？ もう？」

「『もう？』って・・・、元々そんなに事務所から離れてる場所じゃないんですから、早めに着くに決まってるでしょ！？」

「あっ・・・・・・・・、ですよね・・・」

その栗野の発言に苦笑いを浮かべながら、未佳はふつとバスの運転席の天井に取り付けられている時計に目を向ける。

現在時刻は午前9時18分。

事務所を出たのがおそらく午前8時35分頃だったはずなので、大體移動時間は40分くらいだっただろうか。

もともとバスが動き出す前に眠っていた未佳には、既に40分もの時間が過ぎているという自覚は全くない。

いやむしろ、まだ出発すらしていないようにも感じる。

「そっいえば皆は？」

「とつくにリハーサルの準備に入ってます。長谷川さんなんて、バスが現地に到着したと同時に起きましたからね？」

「すごつ・・・！」

「ほら、早く始めますよ！」

栗野はそう口にするや否や、素早く未佳の右腕をガシツと強引に掴み、ロケバスから引つ張り下した。

そのまま早足で大阪スター フォーラムの内部へと連れ込まれたのだが、腕を引つ張られている未佳はほぼされるがままだ。

「ちよつ・・・、ちよつと、栗野さん！ そんなに強く引つ張らないでよ！」

「だったら早めに歩いてください！ もう皆さん大体調整終えてるんですから・・・！」

「あつ、はい・・・」

こうして栗野に引つ張られること約1分。

ようやく未佳達は、ライブステージのある2階へと到着した。

ステージにやってきてまず第一に感じたのは、開け放たれた天井の開放感。

スター フォーラムの売りとも言えるこの天井は、丁度ステージの真上が丸く開け放たれて下り、今現在の空模様がハッキリと確認できる仕掛けになっている。

そしてもう一つの売りが、その天井から臨める空の七変化。

朝は青空。

昼は太陽。

夕方は夕焼け、もしくは藍色に変化している夕空。

そして夜は、満点の星空や月などを拝むことが出来る。

特にナイトライブ時の夜空はまさに絶景で、この『スター』という名前も、実はこの満点の星空や夜空の景色から付けられた。

ちなみに今回の未佳達のライブはと言うと、残念ながら昼過ぎから夕方までの2時間程度しか枠が設けられていないので、一番人気の星空の真下でライブを行うことはできない。

その代わりライブの後のポスターお渡し会の時には、ステージ上からは下りてはしまうものの、会場の端に設けられたお渡しコーナーから、この夜空を拝むことは出来そうだ。

未佳は『一体どんな風景になるんだろう』と胸を躍らせながら、ステージの上へと向かってみる。

ステージ上には、既に5人ほどのスタッフとメンバー3人が、それぞれの楽器や機材などの調整を行っていた。

ちなみに未佳がステージで歌のリハーサルを行うためには、メンバー全員がこれらの調整を終わらせていなければならない。

全くもってチューニングやらキーやらが合っていない状態で歌ってしまつては、リハーサルの意味がないのだ。

そしてそれらが全て終わるまで、未佳にはほぼ発声練習以外にやることがない。

（なーんだ……。みんなまだ調整やつてるじゃない。これならもうあと少しだけ寝させてほしかったんだけどなあ……。）

「ん？ ああ、坂井さん。起きたんですか？」

最初に未佳の到着に口を開いたのは、未佳よりも先にバスで寝ていたあの長谷川だ。

この発言からすると、どうやらまだロケバスの中で寝ていると思われていたらしい。

「うん。栗野さんに起こされた……」

「あつ、なるほどね……」

「さとつちはすぐ起きたんだって？」

「ま、まあ……。正確には、バスが停まったと同時に窓に頭打って起きたんですけど……」

「……えっ？」

「聞き返さなくて結構です！ 自分で『アホ』やて分かってますから！」

「あっ……。そう？」

「さとつちー！ チューニング終わったーっ？」

ふつと末佳の右隣りから聞こえてきたその声に振り返ってみれば、そこにはラッパの口のようにした両手を口元に当てながら、厘が声を張り上げていた。

しかし肝心の長谷川は、どうやらその問い掛けを少々聞き損ねていたらしく『ん？』と聞き返ししながら耳を傾ける。

「？ なんですか？」

「チューニング！ 終わったんって訊いたんよー！！」

「あ……。ああーっ！ 終わってます！ 終わってます！！ あとは手神さんと小歩路さんしだいです！」

「ウチらはもう終わってるよーっ！！」

「あっ……。さいですか……」

「じゃあ、私はスタンバイしてよおーっと……」

自然にフラフラとそう呟きながら、末佳はステージのセンターに設けられたマイクの方へと向かった。

幸運なことに、今日は前々から心配していたビル風が一切吹いていない。

いや、そればかりか、まだ冬の気配が若干残っている時期だというのに、今日は少々上から照らされている直射日光が『暑い』と感じ

てしまうほどである。

未佳はとりあえずマイクスタンドの真ん前へと立って見たのだが、そこで早くもちよつとしたトラブルが生じた。

（だから毎回思っただけど……。このマイクスタンドの高さ……。これじゃ低い！！）

毎回未佳の頭を悩ませているのは、このマイクスタンドの高さだ。極稀に丁度いい高さになっていることもあるのだが、大半は未佳の口元よりも6〜8センチほど低い場合の方が多い。

その原因は、スタンドが未佳の本来の身長に合わせて設定されているからだ。

基本的に未佳は、ヒールのない靴やスニーカーなどはあまり履かない。

現に今日も未佳が自宅から選んで履いてきたのは、4〜5センチほどのヒールのある黒長ブーツ。

そのため結果的に、未佳本来の慎重に合わせて設定されたスタンドの高さでは、ヒール靴を履いている未佳の方が高いので、マイク的位置が低くなってしまうのである。

ちなみに過去で未佳の身長とマイクの高さが合っていた時は、偶然にも未佳がライブステージで動きやすいように、自宅からスニーカーを履いてきていた時だけ。

おまけに最近ではめつきり履かなくなってきたので、おそらく今後はマイクスタンドの高さが合うことはないだろう。

「とりあえずこれは言っておかないと……。栗野さん！」

「えっ？ あっ・・・、はい！ 未佳さん、どうしましたー？」
「マイク！ マイクの高さ！！ また低いっ！」
「あ、あぁー！ 今ちよつと・・・、調整しますー！」

栗野はそう返事を返すと、素早くステージの上へと上がり、マイクの高さを調節し始めた。

毎回未佳のこの注文に対応していることもあつてか、調整作業は手慣れたものである。

しかし毎回スタンドの高さを調節しなければならないというのは、少たりハーサルを行う上では問題だ。

いい加減このマイクスタンドの高さを、ヒール靴を履いている時の未佳の身長に合わせてしまった方がいいような気がする。

いや、そうしてもらいたい。

マイクの調整が終わったのを見計らい、未佳は思い切つて栗野に掛け合つた。

「ねえ、・・・栗野さん。もうマイクスタンドの高さ、私の身長に合わせるの止めない？ もうほぼ毎回直しちゃってるから、そろそろ私のヒールの高さに合わせた方が・・・」

「でも未佳さん・・・、時々マイクの高さにあつた靴を履くこともあるじゃないですか」

「でもあれ、もう5年も前のことだし・・・。それに私あれ以来、スニーカー一回も履いてないのよ？ そりゃあさとつちは毎回履いてきてるけど・・・」

「へつくしょんっ！！・・・へっ？」

「だ、だから・・・。私のマイクスタンドの高さは、普段の設定よりも4～5センチくらい高めにしてほしいの・・・。ダメ？」

恐る恐る未佳がそう尋ねてみると、栗野は口元に右手を当て『うー

ん・・・』と考え込みながら、未佳とマイクを何度も見比べる。それから考え込むこと約20秒。

「4〜5センチかぁ・・・。分かりました・・・。じゃあ私あとでスタッフさん達と少し掛け合ってみます」

「はい、お願いします」

最後に未佳が念を押すように頭を下げると、栗野は足早にステージから下り、近くに固まっていた現地スタッフ達の中へと入っていった。

どうやら、明後日のライブについての打ち合わせを行っている途中だったらしい。

未佳はそんな栗野の様子を見つめながら、ふっとマイクの音量を調節しようと、スタンドから一旦マイクを取り外した。その時だ。

キーン！！

「うっ・・・！！」

突然マイクから流れた高音に、未佳は表情を歪ませながら、慌てて両手で両耳を押さえ込んだ。

しかし高音が鳴ったあとで耳を押さえ込んでしまっても、正直言つて全く意味がない。

未佳自身もそれは重々把握しきっていたので、おそらくこれは『条件反射』と呼ばれる反応なのだろう。

そんな未佳に気が付いたのか、長谷川は半分笑いながら、未佳に声を掛けた。

「大丈夫ですか？」

「だ・・・、大丈夫・・・。慣れてるから・・・って・・・！わ、笑わないでよ！」

「いや、だって・・・。いきなり顔歪ませたかと思ったら、女性らしからぬ声を出すから・・・。はははっ」

「っっ！！ これでも列記とした女性ですうー！ 女の子ですうっ！！・・・もう！ なんかバツ当たればいいのに・・・」

「僕、結構悪運は強い方ですよ？　・・・たぶん・・・」

「何、その半信半疑な発言・・・」

未佳は最後にそう口にして長谷川を睨み付けると、再び音量調整をしようとマイクを持ち上げた。
その瞬間。

キィーンッ！！

「ア、ウッ・・・！！」

「ん・・・？」

なんと今度は、たまたま未佳の持っていたマイクの方角にいた長谷川が、マイクから発せられた高音の被害に遭ってしまった。
しかもかなり未佳の時よりも長く、大きな高音のだ。

そんな長谷川の姿に、未佳は思わず長谷川を指差しながら、大声を上げて大爆笑。

「ハハハッ！！ ほーら！ そんなこと言うから同じ目に遭ったー
♪ ハッハッハッ！」

「・・・ッ！！ 今わざとでしょ？！ 坂井さん！！ 絶対今僕
狙ったでしょ？！」

「まさか・・・。狙えたら苦労しないわよ」

「っ・・・！ いきなり真顔に戻った・・・」

「坂井さん！ もう歌えますー？」

「あつ、はい！ いつでも出来まーす！」

「長谷川君はー？」

「だ、大丈夫でーす！」

「小歩路さん！ いいですかー？」

「いつでも・・・」

メンバー全員の準備が整うと、手神は早速出だしのキーボードの上
に手を置き、音響スタッフ達の方に視線を向けた。

というのも、この新曲でもある『“明日”と“明日”と“昨日”』
を含むイベント3曲は、全てデモテープをバックで流し、それに合
わせてメンバーが演奏、歌うことになっていたからである。

つまり、音響系のスタッフが音楽を流さなければ、演奏は安島らな
いのだ。

「じゃあ・・・。第一曲目の『“明日”と“明日”と“昨日”』か
ら始めまーす。音響さん、デモお願いしまーす」

手神がその声を掛けると、音響係でもあるスタッフ2名が、ステー
ジの前と後ろにあるスピーカーから音楽を流し始めた。
そのデモテープに合わせて、メンバーは楽器演奏を。

未佳は足元に映し出された歌詞をほんの少しだけ視界に入れながら、

新曲を歌い出す。
はずだったのだが。

「いゝつもと変わらな〜い．．． あさひいー のっぽ〜るそら〜
また変わりばえのな〜い 今日が．．． 始まるう〜．．．
．．．．？ ．．． あれ？ ちよっ、ちよっ、ちよっと待って！」
「「「？」」」

リハーサル開始早々いきなり演奏を止めるように指示する未佳に、
3人はほぼ同時に『？』マークを浮かべる。
一方の未佳は、自分の周りをしきりに見渡ししながら、演奏中に感じ
た違和感の根源を探していた。

「？ どうかしましたー？」

「．．． 手神さん、なんかヘン．．．．．。 楽器が少し寂しくな
い？ それにメロディー取りづらい．．．」

「ってか．．．。 誰かの楽器だけ、音鳴ってなくなかったですか．
．？」

「そうそう！ 誰かの楽器、音出てなかった！」

「えっ？ でも僕のは．．．。 うん、ちゃんと出てますよ？」

「僕のギターも．．．、OKです．．．」

「ということは．．．．．」

ふつと残された演奏組の最後の一人に、未佳達はゆっくりと視線を
向ける。

その視線を向けられた人物は、自分の楽器のキーボードを何度も指
で押しながら、真顔で答えた。

「ごめん．．．。 音出てへんのウチのや．．．」

「えっ？ ．．．壊れたの？」

「分かん。ただ音鳴ってへんから・・・」

確かに厘のキーボードは、厘がいくら指で弾いても何も鳴らない。

ただ鍵盤が元の位置に戻る時の『カタンツ』という音が鳴るだけだ。そんなキーボードを見て、長谷川は厘に尋ねてみる。

「練習中は？」

「それも・・・結構周りうるさかったから・・・」

「確かに小歩路さんのキーボード、結構音小さめだもんねえ。手神さんとかさつつちみたいにな、デジタル音じゃないから・・・」

「それにこのキーボード自体、もうかなりの年代物だし・・・、潮時と言えば潮時かもしれないですね」

「えっ・・・？ やっぱ壊れてしもたん？！」

「うーん・・・じゃないかなあ・・・」

「ちよつと私もそう思う・・・」

「・・・そつ・・・か・・・」

少しばかり寂しげにそう呟くと、厘はキーボードを軽く撫でた。

ふつと、そんな厘の手を目で追っていた長谷川は、ここにきてあることにハッと気付く。

「ちよつと待ってください、小歩路さん・・・。このランプ、点いてないですよ？」

長谷川はそう言いながら、キーボードの一番端っこに付いている赤い小さな丸い部分を指差す。

ちなみにそこは、電源が入っていれば赤く光るはずのライトなのだが、厘はそのライトが点かない理由を当たり前のようにな答えた。

「そんな当たり前やん。壊れてしもてるんやから……。ほら。いくら電源のスイッチ入れても、ランプ点かへんし……」
「いや……。ここのランプが点いていないってことは、ひょっとすると……」

そう言い掛けて、長谷川は何やらキーボードと機材の丁度間の下辺りで、何やらゴソゴソとやり始めた。
そして機材の近くでゴソゴソすること約10秒。

突然『ブチッ』という何かの電源が入る音と共に、厘のキーボードのランプが赤く点灯したのだ。
このキーボードの復活に、思わずメンバー3人の口から『おおーっ！！』という声上がる。

「凄いよ！ さとつち！！」

「長谷川君、ナイス！！」

「一体どうやったん？！」

「『どう？』って……」

「もう、なんて顔してるのよ、さとつち。さとつちが修理したんだから、もう少し自慢げな表情見せたら？」

「いや、僕修理してない……。というかですけど、小歩路さん……」

「ん？ ……何？」

ふつと長谷川に呼ばれてきよとした表情を浮かべる厘に、長谷川はキーボードの下に伸びていた黒いコードを持ち上げ、それを皆に見せながら口を開いた。

「コレ、あと機材に差し込まないと、電源なんて点きませんよ？
「……………へっ？」

「長谷川君、もしかしてそれ・・・」

「機材に差し込まないといけない・・・、電源ケーブル？」

「YES！ キレイに差し込まれてなかった・・・」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

ドテッ！！

「あつ！ そうや！ ウチ差し込んだつもりで差してなかったんや！！」

「ハ・・・、ハハ・・・、ハ・・・。差し込んでください・・・」

もはや呆れ過ぎて笑うことしか出来ず、長谷川は渴いた笑い声を発しながら、その場に脱力した感じに肩をカクンツと落とした。

一方の厘は、一体何故長谷川が笑っているのだろうか、釣られて一緒になって笑っている。

一応言つてはおくが、厘の『笑い』は『脱力』ではなく『爆笑』の方の笑いだ。

「ハハハ。ところでそんなにおかしかったん？ ウチのこの失敗」

「小歩路さん・・・。これは同じ『笑い』でも『苦笑』の笑いだからね？ 分かる？？ Are you OK?!（大丈夫?!）」

「何故英語!？」

そんな厘のまさかの失敗に脱力していた末佳達だったが、厘のさらに驚くべきは、その気持ちの切り替えの早さ。

流石は『自由人』というあだ名が付いているだけのこともあり、厘は軽くキーボードを弾いて指を慣らすと、すぐさま椅子に座り直し、いつものようにニコニコとした表情を浮かべながら口を開いた。

「よし！ 解決♪ 解決♪ ほら。早くリハーサル始めよ？ こうして
る時間が勿体ないやん♪」

「ハ、ハハ……。はいはい……。みんな、小歩路さんの苦笑
タイムはそこまでー！ 気分変えて練習再開しよー！！ って・
・」

「「「出来るかあっ！！」」」

「ってかどないするんですか！ この空気！！ みんなまだリハ
サルちゃんとやってへんのに、もうヘトヘトですよ？！」

「えっ？ なんで？ みんな全然動いてへんのに？」

「「「だからっ！！」」」

勿論、リオがそんなメンバーの姿に頭痛を感じたのは、言うまでも
ない話だ。

30・スタッフブログ

とよ午後6時57分。

長時間のリハーサルを終えた末佳達は、半分ヘトヘトのまま用意されていた椅子に座り込んだ。

「疲れた・・・」

「ざつと活動時間・・・。8時間くらい？ 昼休み抜くと・・・」

ふつと腕時計の時間を確認しながら、長谷川が力無くそう呟く。
一方そんな長谷川の隣りでは、同じくくたびれた様子の厘と手神が、椅子に座ったまま同じく用意されていたテーブルに伸びていた。

「もう嫌やあ・・・」

「ま、まあ・・・。みんなもうあとはスタッフさん達の判定待つだけだから・・・」

「どうせまた辛口な判定出すに決まってますよぉっ！！ みんな僕達よりも動いてないくせに、あれやこれやと指示出してくるんですからっっ！」

「ま、まあね・・・」

「末佳さん！ ちょっとこっちに来てくださーい」

「何だか分からないけどお呼ばれだわ・・・。ちょっと行ってくるね」

「はいはい・・・」

「いつてらっしゃーい」

長谷川と厘に見送られながら、末佳はやや気の進まない足取りで、とりあえず栗野に呼ばれた方へと向かってみる。

するとそこには、小型の白いノートパソコンをテーブルの上に置き、

何やらマウスで画面の操作を行っている栗野がいた。

ちなみにそのパソコンは、本来であれば事務所のスタッフルームにのみ置かれているべきはずの、列記とした業務用ノートパソコン。そんな大事なものがここに持ち込まれている時点で、未佳には粗方の予想が付いていた。

「まさか……。今ここでオフィシャルサイトのDiaryを書けなんて言うんじゃない。」

「その『まさか』ですよ。未佳さん。はい！　コレがそのDiaryで書いてほしい内容ですっ！」

そう言つて手渡された用紙には、明後日に発売される新曲の詳細。そしてそのCD発売記念イベントを開催する場所などが、事細かに記されていた。

「じゃあ……。あとはよろしくお願いしますね？　私はこれで」

「……………えっ！？　あつ……。ちよつと！！　栗野さん……。っ！！」

まるで未佳の意見は一切聞かないとばかりに、栗野は自分の要件を言い終わると、そそくさとその場をあとにしてしまった。

そんな栗野に、未佳は『ハァ……。』と溜息を吐く。

「まさかりハーサルの場合に来て、これを書かされるとは……」

「『Diary』って何？」

「うん……。？」

ふつとその声の聞こえてきた方向に視線を向けてみれば、そこには先程まで姿を消していたはずのリオが、目の前のノートパソコンの

画面を見つめていた。

「・・・あら。出てきてたの？」

「うん、今さっき・・・。それで『Diary』って？」

「うん・・・。ようは活動報告詳細、みたいな・・・。まあ、仕事上の日記みたいなものよ」

「でも書くことは決まってるんだね」

「ああ・・・。まあ書く内容はね。それをどういう風に文章にするのかは、私次第だけど」

「・・・これって他の人も書いたりするの？」

「うん、極稀に・・・。基本的には私しか書かないかな。そんなに事務所にやってきたら、書いてる時間もないし・・・。完全に今は不定期制になってる感じね」

未佳はそう口にすると、たった今栗野に手渡されたばかりの書類に目を通し、再び内容の確認を行う。

どうやら、どういう風にDiaryの文章としてまとめようか考え込んでいるらしい。

それから約30秒ほど経った頃。

その書類の内容を把握しきった未佳は、読み終えた書類をサッとテーブルの上に置き、手慣れた手つきでパソコンのキーボードを打ち始めた。

流石はDiary歴10年と、名門校出身というだけのことであつてか、頭の回転に関してはかなり早い。

やがて全ての文章を書き終えると、未佳はその書き終えた文章を読み返し、誤字や脱字、文面などがおかしい箇所がないかどうかを念入りに確認。

（えっ・・・と・・・）

☐

“ どうも〜！ 作曲係部部長のみかつぺで〜す♪（笑）

いよいよ明後日の3月9日（水）に、私達の10周年目初のシングル

☐ “明日”^{あした}と“明日”^{あす}と“昨日”^{きのう}”☐

がリリースされまーす！！

（毎度曲名がやや長くてすみません・・・（^ー^；））

今回のこの曲は、KAKOTOテレビの毎週土曜午後1時から放送
中のニュース番組

☐ ウワサの日本テレビ ミ☐

のエンディング曲にもなっていますので、是非是非そちらの方も観
てくださいね♪

またシングルの発売日3月9日（水）と、その3日後の3月12日
（土）には、大阪と東京の二カ所で、リリース記念のスペシャルイ
ベントも開催されます！

・ 3月9日（水） 大阪スター フォーラム

2階 野外ライブステージ 午後4時00分〜午後6時30分（雨
天・ポスター手渡し会上的変更アリ）

住所 大阪府大阪市○○○ | x | x x | x x

公式ホームページはこちら↓ ☐ ○ x : * # . / x ○ / /
* * # 0 0 0 0 0

・ 3月12日（土） フェアリーホールTOYOSU

2階 オープンライブステージ 午後5時00〜午後7時30分（
ポスター手渡し会上的変更アリ）

住所 東京都江東区豊洲 □ □ □ — ○ ○ ○ — × × — × — ×
公式ホームページはこちら ↓ ○ ○ × × : # . / * # * / /
##0000

そちらのイベントでは、私達CARNELIAN・eyesのメンバーによるミニライブやMCトーク。

さらにメンバー全員のサイン入りポスター手渡し会など、楽しい企画が盛りだくさんですので、こちらの方も是非いらしてくださいね！
くれぐれも、ポスター手渡し会の引換券をお忘れにならないように。
..

それでは〜♪

□

「.....よし。これでいいかな。転送！」

何も問題ないと判断すると、未佳は最後に『転送』と書かれた箇所
にカーソルを持っていき、まるで楽器のキーボードを弾くかのよう
に、軽くエンターキーを右人差し指で押す。

それから2秒ほどの間が空いたあとで、大きく『転送されました。』
という横文字が画面に映し出され、未佳はそのまま椅子の背凭れに
寄り掛かった。

「ハァー.....あんまりこんな疲れた時に書かせないでよー..
..」

「以上！ 坂井未佳の本音コーナーでしたーっ！！」
「チャンツチャンツ♪ ?' ll be ^{アイル} ^{ビート} back!! ...じ
やないッ！！ もう、何やってるのよお。男性二人も揃って...」

そう未佳が口にした通り、未佳の丁度真後ろには、先程まで椅子に座っていたはずのあの長谷川と手神が、まるでパソコンの画面を覗くかのような体勢で立ちつくしていた。

それもまるでラジオのコーナー司会のようなコメントまで付けて。

そんな二人に何をしていたのかと問い掛けてみれば、二人は『特に・・』と言った感じの表情を浮かべた。

「いや、一体何を書いているのかなあゝって・・」

「ちよつと覗いてたんですよ」

「あつ、そう・・。なんか書く？」

「いえ、いいです・・」

「何ですよー！ 二人で見てたんなら、なんか書けばいいじゃない」

やや笑いながらそう言ってみても、二人は首を横に振るばかり。どうやら他人の文章を覗きにはやってきたものの、自分達の力でそれらを書くほどの気力はないらしい。

その証拠に、二人の顔にはハッキリと『疲労』という文字が書かれていた。

「そつえば坂井さん・・。栗野さんから聞いてます？」

「・・？ 何を？」

「事務所に戻ったあとで、イベント用の宣伝PRを撮影するって話・・」

それを聞いた途端、未佳は驚いた表情を浮かべたまま、その場に力チリツと身体を硬直させた。

長谷川の言う『宣伝PR』とは、先程のDiary同様、オフィシャル公式サイト内で回覧することのできる宣伝用の動画のことだ。

基本的には、よくイベントやCD、アルバム等の発売がされる少し前などに、オフィシャル公式サイトにて、期間限定でUPされる動画である。

ちなみにこの宣伝動画は、期間限定のものであるだけでなく、実際にメンバー全員。

もしくは未佳一人が宣伝等を行っているので、ファンからの動画注目度は毎回高いものがほとんどだ。

だがその動画の撮影場所は基本、未佳一人であればレコーディング室。

メンバー全員であった場合は控え室と、粗方のことは決められている。

そしてその両者も共通していることは、撮影を行う場所はいずれも『SAND』の事務所内であるということ。

つまり、未佳達は一旦事務所に戻ったとしても、その場ですぐ現地解散とはいかないというわけだ。

その長谷川の要らない。

いや、むしろ聞きたくなかった情報に、未佳はまた『疲労』の波が自分に戻ってくるかのような錯覚に襲われた。

「……………うそ」

「いや、ホント……………」

「今回は坂井さん一人じゃなくて、メンバー全員だそうですね？」

「じゃあ……………毎度のパターンで控え室ですかねえ」

「じゃないですか？」

「……………ハア……………。私このままテーブルに倒れてていいかなあ……………」

そんな未佳の訴えも虚しく、リハーサルが終了してすぐ、未佳達はまるで急かされるかのように、スタッフ数名にロケバスの方へと連行、いや。

乗車させられた。

勿論こちらも、事務所に着くまでの時間はわずか40分程度。

それを行きの時の経験から覚えていたのかどうかは分からないが、未佳達はバスの椅子に座るや否や、素早く体を寝るための体勢へと変え、瞼を閉じた。

そこから完全に熟睡するまでには時間が掛かるので、未佳はとりあえず瞼だけを閉じ、周りの音や会話などに耳を澄ませてみる。すると早くも、未佳の後ろの席と隣りの席から、ハッキリとした寝息が聞こえてきた。

さらにその斜め後ろにある席からは、何かの紙をめくるかのような『ペラ』という音も聞こえてくる。

（早っ……。もうさとつちと手神さん寝てるし……。そこでこの紙をめくる音は……。、たぶん小歩路さんが本のページめくってる音ね）

それからやや経った頃、ふっとバス内が急に騒がしくなった。

どうやら、ステージの後片付けを行っていた栗野やスタッフ達が、バスの方に戻ってきたらしい。

大勢の人がバスに乗り込む足音。

そしてそれとほぼ同時くらいに、スタッフ達のガヤガヤとした会話が、今度は小さなものへと変わっていった。

自分達が寝ていることに気が付いたからだろうか。

さらによくよく耳を澄ましてみれば、その会話の中にはあの厘や栗

野の声も交じっていた。

おまけに二人が話している内容は、どうやらバス内で寝ようとしている自分達のことを言っているらしい。

「みんなもう寝てるの？」

「うん……。みかつぺは見た感じ寝とるし、手神さんはほぼ熟睡。さとつちは……。爆睡やね」

「まあ長谷川さんはあー……。行きの時もそうでしたんで……。それに末佳さんはほぼ半日歌い通しだったし、手神さんは『flying ship』のキーボードをずっとやってましたから……。無理もないですね」

「そやね」

「それで？ 自由人でもある厘さんは、仮眠取らなくていいんですか？ 事務所に帰ったら、宣伝PRの撮影がありますけど……」

「うん、ウチは別に……。本読んでる方がええもん」

まるつきり声しか聞こえない現状ではあったものの、末佳の脳裏にはハッキリと、笑みを浮かべながら本を『ひよい』と末佳の方に持ち上げている厘の姿が浮かんだ。

末佳が空を見つめるのが好きなのに対し、厘はかなりの読書好きだ。彼女が週に読む本の冊数は、大体7〜8冊ほど。

単純計算で考えれば、1日で軽く1冊、もしくは2冊半も読んでいるということになるだろう。

そしてこの驚くべき読書数が、今のCARNELIAN・eyesの楽曲歌詞として生かされているのである。

だがいくら読書が好きであったとしても、バスが走行している時の読書はかなり危険だ。

両手が本で塞がれてしまっている状態では、咄嗟の急ブレーキに対

しての対応はかなり遅れてしまっし、乗り物酔いにもなりやすくなる。

栗野は行きの時から、少々それを気にしていたのだ。

「でも厘さん。これからバス走り出しますけど、読書したままで大丈夫ですか？　・・・私はあんまり勧められないんですけど」

「えっ？　・・・大丈夫やて。ウチ行きも読んでたけど、全然酔わへんかったもん」　まあ・・・、元々何乗っても酔ったことなかったんやけど・・・。それに、ウチずっと背凭れに寄り掛かと思ったら、何ともなかったし」

「・・・分かりました。でも、もし気分が悪くなってきたと感じたら、すぐに読むの止めてくださいね？　それとちよつとマズイと思ったら、誰かにすぐに伝えてください。いいですね？」

「はい」

（小歩路さん、スゴイ・・・。私は絶対に無理・・・。。読む気力ないし・・・。酔いそうだし・・・。。）

粗方周りの会話を盗み聞きしたところで、とうとう末佳の意識は、完全に暗闇へとシャットダウンした。

そんな末佳が眠りから覚めたのは、それからだいぶ経った頃のことである。

しかも起きた理由は自然に目が覚めたのではなく、一緒にバスに乗っていた者に起こされてのことだった。

「末佳さん。末佳さん、起きて！」

「・・・ん・・・。リオ・・・？」

「末佳さん、起きた？」

「どうしたのよ、急に・・・。」

『まさかもう事務所に着いたのか』と窓の外を確認してみるが、バスは未だに道路を走ったままだ。

おまけにバス内にある時計を確認してみれば、まだバスが走り出してから20分ほどしか経っていなかった。

「ちよつとお・・・！ 少し外が暗くなっただけで、まだ着いてもないじゃない！」

「それよりも未佳さん。窓の外！」

「・・・へっ？ ・・・あつ・・・」

リオに言われて窓の方に視線を向けた未佳は、その景色に思わず目を奪われた。

「キレイ・・・」

未佳の視線の先には、もうじき夕方から夜に変わろうとしている中間の空が、これでもかと言うほどに広がっていた。

ほぼ深い紺色に近い夕空に、たった今沈んだばかりの太陽で真っ赤に照らされた雲が、大小様々な筋となって、くつきりと空に浮かび上がっている。

その光景は、まるで紺色の色水に、真っ赤な赤い水をそつと流したかのような、何とも幻想的な夕空だった。

『これは中々見れるものではない』と判断した未佳は、すぐさま足元の鞆の中から携帯電話を取り出し、無我夢中でカメラのシャッターを切る。

1枚、2枚、3枚と撮っていく写真は、全て撮る位置や向きなどを変え、それぞれ味のあるものに収めていく。

ふつと未佳が携帯で『パシャッ パシャッ』と撮っていると、後ろ

の席で読書をしていた厘と、通路を挟んで隣りの座席に座っていた栗野が、未佳の方に視線を向けた。

「あれ？　．．．みかつぺ起きたん？」

「んー。たった今」

「なんか．．．。未佳さん忙しそうね」

「そりやそうよ。空はたったの数分で姿とか．．．。色とか．．．。みんな変わっちゃうんだもの．．．．．．。こんだけ撮れればいいか」

「みかつぺ、見せて♪　見せて♪」

「私にも♪」

「えっ？　．．．ああ、はい」

とりあえず撮り終えた画像を厘達に見せると、二人は『キレイ』と口にしながら、1枚1枚その画像をじっくりと見つめた。

やはり車内での撮影には撮り慣れているせいだろうか。

未佳が撮影した画像は見事なまでに、どれもピンボケ一つないものに仕上がっていた。

「凄い．．．。やっぱりみかつぺは空撮つとる写真が一番ええねえ．．．。」

「そんなあゝ。普段から趣味で一眼撮ってる人に言われても．．．」
「いや、ホンマに．．．。ウチ、車の窓越しに撮影なんて無理やもん。それにいつもウチ、ピンボケになったら『わざとです』って言うてはるし．．．」

「ハハハ！　それじゃあ詐欺ですよ、厘さーん」

「あつ、ホンマに？　ハハハ」

「ハハハッ」

厘のそんな発言に、未佳と栗野は面白おかしく笑っていた。

その時だ。

「うっ……」

「……ん……？」

突然厘の隣りの席から聞こえてきた低い声に、3人は『なんだ？』
と思い振り返ってみる。

すると何やら、厘の隣りの席に座っていた長谷川が、完全に体を窓
の方に向けて突っ伏していた。

しかもよくよく見てみれば、顔色は元々青白い感じなのだが、それ
とはまた別に口元を抑え込んでいる。

しばしその様子が気になった末佳と厘は、恐る恐る長谷川に声を掛
けた。

「さとつち……？」

「『起きとったんか？』ちゅうより……、どないした……？」

「ちょ……、ちよつと……、気持ち悪い……」

「『気持ち悪い』って……」

「！！もしかして酔ったんっ？！」

「ミタイ……、デス……。うっえっ」

「ちょ……、ちよつと！大丈夫？！」

「ん……。あれ？」

ふつとそんな斜め後ろの騒ぎで起こされた手神は『一体何事か』と
自分の後ろの席に首を向ける。

サングラス越しに飛び込んできた光景は、一人気分が悪そうにして
いる長谷川と、その長谷川を取り囲んでアタフタしているメンバー
とスタッフ達の姿。

何となく事の事情は掴めたような気もしたが、一応念のため、手神
は隣りの座席に座っていた末佳に尋ねた。

「どうしたの、長谷川君……」

「あっ！ 手神さん……。実はさとつちが酔っちゃったみたいで……」

「えっ！？ 普段飲むときしか全然酔わないのに！？ だ、大丈夫？」

「だ……。ダイジョウ……。ぶ……。デス……。胃の中何にも入ってないんで……。うう……」

（「いや、そういう問題じゃなくて……」）

「とりあえず、バスを一旦停めた方が……」

「すみませーん！ バス停めてくださーい！」

「何故出前風！？」

そんなこんなでバスは停まったものの、未佳達が疑問だったのは酔った原因だ。

何せ長谷川は普段、乗り物などに乗って酔うことはほとんどない。

CARNELIANの仕事上では初めてのことだ。

「読書をしていた厘さんが酔うんなら分かりますけど、なんで普通に寝ていた長谷川さんが酔っちゃったんですかぁ？」

「さ、さあ……。起きたら吐き気がしたんで……。ぐえっ」

「そういえば長谷川君……。顔を下に向けて寝ていたような……。……」

「「それだー！！」」

「そ……。それですか……。？ 原因……」

「ハア……。せやけどなんで窓枠とか椅子とか、寄り掛かったんに、顔下にして寝てたん？！ そんなことしたら酔うの当たり前やろ！？」

「スミマセン……」

「ええ？ さとつち……。今度は酔いそうな体勢とか、酔いそう

なことしとつたらアカンからね?! 分かった!？」

「は……、はい……」

同じく酔いそうな行動を取っていた厘に説教をされ、長谷川はただただその説教に頭を下げていた。

その後は酔い自体の症状も軽かったこともあり、5分後には何事もなくバスが発進。

そして予定通り事務所でP R撮影を行った後、未佳達は事務所を後にした。

予約死亡期限切れまで あと 169日

31・何かを招くドア

「おはよ。手神さん」

「あつ、おはようございます。坂井さん」

大阪公演を翌日に控えたこの日。

未佳を含むCARNELIAN・eyesメンバーは普段同様、事務所出勤となっていた。

だが本来であれば、今日は昨日と同様に、現地でのリハーサルを行う予定になっていたのだ。
先客さえいなければ。

「はあー……。本当は明日のためにも、今日現地リハーサルやりたかったのに……」

「仕方ないですよ、坂井さん……。たまたま爆笑お笑い……。なんでしたっけ？」

「『爆笑！ お笑い玉手箱ライブ2010』……」

「の本番が、今日のリハーサル日と重なってしまったんですから」

これが今日の現地でのリハーサルが潰れた原因だった。

実は関西で毎年行われているお笑いライブの当日が、偶然にもイベント前日のリハーサルと重なってしまったのだ。

さらに最悪だったのは、そのお笑いライブの予定で、夕方からライブを参戦していた人達全員での握手会があったこと。

そのため未佳達は、夕方から夜にかけてのリハーサル練習の時間ですら取れず、結局事務所内でのリハーサルを行うことになってしまったのだ。

「ハア……。それにしてもなんで、お笑いライブを火曜日にやるかなあ……。来週とか月曜日とかだったらよかったのに」

「でもお笑い^{向う}ライブも、本当だったら昨日は直前のリハーサルとかやりたかったはずだし、まあ……。どっちもどっちじゃないですかねえ」

「ま……。まあね」

ただ実のことを言ってしまうえば、昨日現地でのリハーサルを行うことが出来たのは、そのお笑いライブの関係者やスタッフ達が、前日リハーサルの時間をこちらに譲ってくれたからあのである。

事務所のスタッフ達が、こちらのリハーサル日とお笑いライブ当日の日付が重なっていることに気が付いたのは、今から本の2週間ほど前。

当初そのあまりにも急過ぎるスケジュールに、皆は『発売日自体をズラそうか』とバタバタしていたのだが、その僅か3日後に『こちらのリハーサル日をそちらに譲ります』と、向こうの関係者から電話が掛かってきていたのだ。

日にちを譲ってくれた理由に関しては、会場予約の先着順やイベント内容、そしてアーティスト側の知名度などの関係もあり、こちらを優先させた方がいいと判断したからだという。

「でもさあ……。毎回事務所側そういう情報が不十分じゃない？随分前に私の友達とか、ファンからのクレームで『特典に関しての情報の回り方が酷い』って話を聞いたんだけど……」

「あゝあ……。よくホームページで『ここに載ってるCDショットで購入すると、こんな特典が付く』って書いてあるのに、店側は何にも聞かされてなかったっていうやつでしょ？」

「そうそう！ ほら、公式サイトって、発売2〜3週間くらい前に、

そういう情報載せるじゃない？ それでその情報がサイトにアップされた直後に、ファンの人達は予約の電話を入れるでしょ？ でもその時に、事務所は店の人達には何の報告もしてないから、毎回あんなイザコザになるのよ！」

「なんだか早いんだか遅いんだか・・・、イマイチよく分かりませんね」

「でしょ？！ しかも発売直前に事務所側が店に特典のこととかを知らせても、正直もう遅すぎるのよねえ。中には予約した枚数分しか、特典を扱っていない店もあるみたいだし・・・。発売初日に何も知らずに買いに来た人達にはあんまりな話よ」

「しかもそれを当の自分達は何も聞かされていないというね・・・」

「うん。私も友達に言われて初めて知った・・・って、これは皆で飲みに行った時に話した方がいいね」

「・・・そうですね」

「はい！ 終了！」

ふつと愚痴話が一段落したところで、未佳は壁に掛けられていた時計に視線を向けてみる。

時刻はもうすぐ午前10時24分。

既に集合時間を4分ほど過ぎていているというのに、残りの二人は中々やって来る気配を見せない。

いや正確には、もうじき厘がやって来る時間帯だというのに、真面目な長谷川が未だにやってこないのだ。

「これだとまた『小歩路さんが先に』っていうパターンになりそうですね」

「またか・・・」

「おはよー」

その軽い感じの声に『ハッ』と顔を上に上げた末佳と手神は、お互いに『ハアー』と溜息を吐いた。

「あゝあ．．．。やっぱり長谷川君が遅刻になっちゃった．．．」

「おはよう、小歩路さん」

「おはよう、みかつぺ。手神さん」

ふつと厘が二人に挨拶をしながら、出入り口の外押しドアを右手で閉めようとした。
その時だ。

「あゝ．．．！！ 小歩路さん！ ダメ！！」

「へっ？」

ガコンッ！！

「痛っ．．．！！」

「っ「あっ．．．」」

その音に驚いた厘がドアの外の方を見てみれば、そこにはあの長谷川が頭を押さえたまま、その場に立ち尽くしていた。

実は厘がドアを閉めようとした際、そのままドアが開けっ放しになっていると勘違いしてやってきていた長谷川を、そのままドアで閉め出してしまったのだ。

思いつきりドアに額をぶつけてしまった長谷川は、少々痛がりながらも控え室の中へと入っていく。

そんな長谷川を心配した末佳と厘は、代わる代わるに長谷川に声を

掛けた。

「さとつち・・・、大丈夫？」

「今思いつきりぶつかったんと・・・！」

「ん？・・・ええ、まあ・・・。一応大丈夫です。ちょっと寝不足でボーツとしてたんで、丁度よかった・・・かな？」

「そ、そう・・・」

「大丈夫ならええんやけど・・・。こつち全然後ろにおること気付かへんかったから」

その厘の口から出てきた言葉に、ふつと未佳は『あれ？』と首を傾げる。

「・・・えっ？ 二人とも、一緒に事務所に来たんじゃないの？」

「ううん。ウチ一人で階段上がってきたよ。まさかさとつちが後ろ歩いてるなんて思わへんかったもん」

「長谷川君、小歩路さんとは別々でやってきたんですか？」

「えっ？ ええ・・・。というか僕、朝イチに事務所に着いてたんですよ」

「えっ！？ 朝に？」

「あつ、はい」

その後の長谷川の話によると、今日は朝から別のギター仕事の予定が入っており、朝の9時頃から事務所にやってきていたのだという。そしてその用事が済み、大急ぎで控え室へと向かっていたところ、厘の後ろ姿を階段横の曲がり通路から見かけたとのことだった。

ちなみにCARNELIANとはあまり関係のない仕事や用事。例えば未佳が受け持っている小屋木結衣のコーラスや作曲提供などだが、この手のものは事務所内ではもはや日常茶飯事。

特に長谷川と手神は、色々この手のことで周りから声を掛けられる側の人材なので、本家の仕事と時間が被るのはいつものことだった。

「じゃあもしかして……。そっちの方の仕事が長引いたから遅れた？」

「はい。後片付けとかでだいぶ手間取ったんで……。機材とかも無駄に多かつたし」

「じゃあ必然的に、長谷川君は遅刻じゃないね」

「うん。別件の方が長引いちゃったんなら……。それは仕方ないもの。ところで何やってたの？」

「えっ？ あっ、いや……。もう、簡単なギター弾き？……。簡単でもないか。んで、エレキを久々にやってみたんですけど、それが運動不足の積み重ねのせいで、少し腰辺りがアカン感覺到……」

「そう言いながら腰の近くを摩る長谷川に、未佳はやや渋い感じの表情を浮かべた。

いくら仕事熱心とはいえ、少しは明日の当日と4日後のイベントのこと配慮してほしいものである。

もしもギックリ腰や何かで体が思うように動かなくなったら、それだけでもかなりの大騒ぎネタであるというのに。

「ありやうやあ……。そんなんで明日大丈夫なの？」

「それに関しては大丈夫です！　そこまで派手なことしませんから」

「そ、そう……」

「さとつちー！　入ったんやったら、入り口閉めてえー」

「あっ、はいはい……」

ふっと厘にそう命令され、長谷川は『自分が最後に開けたんでね』

などと呟きながら、腰の辺りを摩りつつ、出入り口のドアの方へと向かう。

そして開けっ放しになっていたドアの前へとやってくると、そのドアを軽く右手で『ひょいっ』と閉めた。
その瞬間。

「キャ・・・ッ!!」

「えっ？」

いきなり聞こえてきた女性の悲鳴に、長谷川はそぉーっとドアの外を確認してみる。

するとそこには、今度はやや分厚い書類を抱えた栗野が、半分驚いた表情で立ち尽くしていた。

実は栗野も先程の長谷川同様、長谷川が閉めたドアに頭をぶつけ掛けたのだ。

「あっ・・・! 栗野さん!!」

「ちよつと長谷川さん! 危ないじゃないですか!! ドアを閉める前に、部屋に入ろうとする人がいないかどうか確認してください!!」

「あつ、はい・・・。すみません」

「・・・あれ・・・? どうしたんですか? その額・・・。少し赤くなってますけど」

「いやゝ、そのお・・・。『どうした?』というか・・・」

「また腕を枕にして居眠りですか?」

「それはない!!」

そう長谷川は栗野の問い掛けに全否定を返すと、素早く開けっ放しのドアの方へと向かい、誰もいないのを確認した後『バタンッ』と閉めた。

そんな長谷川にしばし『?』マークを浮かべつつ、栗野は左手で抱き抱えるかのように持っていたクリアファイルから、何やら数枚の書類をサツと取り出す。

どうやらその取り出された書類には、メンバーの衣装や飾りなどの写真が数枚貼り付けられているらしい。

ふつとそんなことを未佳と厘が思っていると、栗野はその散り出した書類の方に視線を落としながら、二人に対して口を開いた。

「未佳さん、厘さん。ちょっと来てくださーい」

「あつ、はい」

「なにー?」

「当日の衣装のことでちょっと話があるので、一旦4階の女性用更衣室に……」

（（ゲッ……））

それを聞いた途端、未佳は本日二度目の、厘は本日初の渋い表情をお互いに浮かべ、顔を合わせた。

別にイベントやライブ限定の衣装を着るのは嫌いではない。

むしろ、普段着ることの出来ない服をタダで着ることが出来るので、そうした点では好きな方だ。

だがそれは衣装が決まっていけない時点での話で、衣装が決まったあとに何故か突然行われる再試着などは、何かとワケありなことが多いのだ。

例えば、あまり着たくもない衣装を参考で着させられたり、装飾品との相性を確認するためだけに、ライブやイベント用の衣装を試着させられたりなど、かなり面倒なことをやらされたりするのである。特に衣装がこっているもの場合は、一々着る際に人手を必要とし

たり、コルセットを身に付けなければならないなど、さらに面倒なことになるのだ。

『どうかフォーマルチックなドレスなどには当たっていませんように』と祈りつつ、未佳と厘は栗野の話に耳を傾ける。

「い、衣装がどうかしたんですか？」

「はい。実は・・・、さっき天気予報を確認してみたら、どうも明日の当日がかなり寒くなりそうですねですよ。それで防寒対策のためにも、当日の衣装に合ったカーディガンとか、ベストとか・・・、そういうのを選んでおこうという話になって・・・。ですから、いきなり申しわけないんですけど、これから更衣室の方に」

「えっ！？ わざわざ着替えて決めるの？！」

「勿論！ 襟ぐりのネックレスとか、胸元の位置とか、ちゃんと寒くはないかどうか・・・。それを全部確認しないといけないんで」

『当たり前でしょ？』と栗野が最後にそう言ってしめると、未佳は『あちゃ・・・』と言いながら、自分の顔を右手で覆った。

おそらくイベント当日で着用する衣装は、新曲のPV撮影の際で使っていたあの黒いヒラヒラレースドレスだろう。

確かによく思いだしてみれば、あのドレスは長袖ではあったものの、着た感じとしてはレースのようで、そんなに厚みもない。

縫い目の隙間も、かなり地肌が見える感じだった。

そして何より、下のスカート部分は少し上に浮いている感じなので、野外の場合はかなり腿ももから下が冷える。

一応撮影の時は、膝よりもやや長い靴下の上に、丁度膝までのビールブーツを履いてはいたが、それでもどこまで寒さに耐えられるかは分からない。

「・・・・・・・・・・確かにあのまま着るとなあ・・・・・・・・・・。当日の衣装って、あのPVの時の？」

「はい。未佳さんも厘さんも、自分達が着た服覚えてますよね？」

「あのブラックしかないレースドレスと・・・・・・・・」

「ウチの、腿ももの上ら辺まである長いカーディガンと、胸元に大きなバラの絵のプリントがある長Tシャツのやつやろ？ 腰辺りにちよつと太いベルトも巻いとったあの・・・・」

「はい、その衣装です。まあとりあえず、詳しい話は更衣室の方に行ってから・・・・・・・・。ここだとちよつと余計な人達にも聞こえてしまうんで」

「「よ・・・・『余計』って・・・・・・・・!!」」

「じゃあ移動しますよー！ 長谷川さん、手神さん。少しだけお二人をお借りしますねえー？」

「「・・・・・・・・はいはい」」

たぶんこれ以上言い返しても無駄だと分かったのか、長谷川と手神は軽く返事を返すと、二人揃って窓辺の方へと移動してしまった。そんな二人を見て、未佳と厘はただただ苦笑いを浮かべる。

「じゃあ行ってくるねー？」

「先にライヴハウスに行つてー！ 出来たら衣装着たまま練習やりに行くからー！」

「あつ・・・・・・・・、OKー！」

「分かりましたー！」

そんな会話を最後に交わして控え室の外に出て行ってみれば、あのリオが廊下側の出入り口前に立ち尽くしていた。

どうやらこれからどうすべきなのか、未佳に訊こうとしたらしい。

勿論、未佳の口パクで返された返事は『男性陣と一緒にいて』だっ

た。

リオが『男の子』ではなく『女の子』であれば、事情は少々変わっていただろうが、とにかく今はいつもの着替え、トイレ、入浴中の時同様、リオが未佳の傍に付いて行くことは厳禁行為である。仮にも未佳だつて一人の女性でもあるし、プライバシーというものもある。

おまけに今回は厘も同伴しているのだから、尚更だ。

未佳がそう答えてみると、リオは『分かった』と言って、ドアを擦り抜けて控え室の中へと入って行ってしまった。

毎度毎度あの光景を見る度に思うことだが、リオが起こす行動や動作の中で、一番不気味なものはアレだと思う。

上手くは表現できないが、何となくあの光景を見ると、リオがこの世のものではないことを思い知らされるような気がしたのだ。

（やっぱりリオは、人間なんかじゃないのよね・・・）

「長谷川くん、ドア・・・」

「えっ？」

「あつ！　ゴメン！！　開けっ放しにしてた！」

ふつと廊下をだいぶ歩いたあたりでドアに気付いた未佳は『なんだろう？』と部屋から顔を覗かせた長谷川に大声で詫びる。

一方の長谷川の方は、その未佳の一言と開けっ放しのドアを見て全てを理解したらしく『ああ・・・』と言いながら数回頷いた。

「『ドアを閉めて』っていう話ね・・・大丈夫です。僕がドア閉めときますから、3人は更衣室に行つていてくださーい！」

「あつ、うん・・・」

（あゝあ・・・。にしてもまたドア閉めかいな）

本日3回目のドア閉めにやや重めの溜息を吐きながら、長谷川は部屋に入ろうとしている人間の存在を一切確認せず、ドアノブを部屋の方へと引いた。
その瞬間、通路にいた女性3人から慌てた声上がる。

「あつ・・・！！ さとつち！！」

「アカンツ！！」

「閉めないでー！！」

「・・・えっ？」

急いで叫んだつもりであつた3人だったが、時既に遅し。

バンツ！！

「痛てっ！」

「えっ？ あつ・・・？」

ふつとドアノブを握っていた長谷川が感じたのは、誰かがドアに思いつきりぶつかった振動と、ぶつかったと思われる男性の声。

恐る恐るドアを開けた長谷川は、そのぶつかった相手を見て表情を一変させた。

「ア アアアーツ！！ まっちゃん！！」

「さ、さとつち・・・！ 殺す気かよ！」

「い、いや、その・・・。というか、普通この程度じゃ人間死なないですから」

「分かんないだろ！？ うっかりぶつかった拍子に首が折れたらどうすんだよ？！」

「あるかぁッ!！」

「・・・・・・・・・・厘さん、未佳さん、行きましょう・・・・・・・・。このままだとラチ開きそうにないんで・・・」

「うん・・・・・・・・」

「せやね・・・・・・・・」

去り際に長谷川と湯盛の言い合いを耳に挟みつつ、未佳と厘と栗野の3人は、2階を後にした。

32・イベント衣装

「じゃあ、着替え終わったら教えてください」

「はい」

そんな会話を栗野と軽く交わして、未佳と厘は『女性用更衣室』と書かれた部屋へと入っていく。

更衣室の中に入ってみると、そこにはご丁寧に二人の衣装がハンガーに掛けられていた。

さらにその下の机には、それぞれの衣装に合わせた装飾品などが置かれている。

「大体は揃ってるわね」

「そういえばみかっぺ。衣装は全部自分で出来るん？ 無理やつたらウチ手伝うけど・・・」

「あ、ううん。大丈夫。今回は後ろファスナーで締めれば、ほとんどコルセットと同じ感じになるやつだから」

未佳はそう口にしながら、ふっと自分の衣装の後ろの部分を厘に見せる。

確かに未佳のブラックドレスには、黒くてメの小さい頑丈そうなファスナーが、腰から首の後ろまで取り付けられていた。

しかもそのファスナーは、基本的に黒レースで隠れて見えないようなデザインになっている。

「ほら、こんなだから。ただ基本的に私、背中を皆に見せることないし、このカモフラージュ用のレースは要らないと思うんだけどね」

「ところでそれ・・・。ファスナーがそのエースを囓むことないん

？」

「えっ・・・？」

「いや、こんなにファスナーの近くがレースでごちゃごちゃしてたら、きつと噛むやるなあゝって思ったから・・・。。そういえば撮影やった日の衣装着替え、このファスナー噛んだんやなかったっけ？」

「・・・。。小歩路さんお願い。その時は手伝って・・・。」

「ああ・・・、はいはい・・・。」

一応念のために頼んではいたものの、結局は未佳はその衣装を一人で着ることが出来たため、厘の手を借りるなどと言ったことはなかった。

その後はそれぞれの装飾品などを衣装や身体などに身を付け、最終チェックを行う。

「コサージュの位置、ここでいいわよね？」

「うん。ウチのネックレスどうなってる？ 曲がったり捻れたり・・・。」

「・・・ううん。なってない。大丈夫」

「じゃあ・・・。」

「部屋から出よっか」

お互いに確認を終えて外に出ていってみると、こちらに背を向けたまま腕を組んでいる栗野がいた。

だがその姿を見たのはほんの一瞬で、二人が更衣室のドアを開ける音に気付いた途端、栗野は組んでいた腕を解き、二人の元へと早足で向かう。

「終わりました？」

「これでいいんだよね？ 二人とも・・・」

「・・・そう・・・です。はい、OKです。じゃあ・・・、上に羽織るもの、試しますか」

「はい」

「・・・はあー」

「ほら、厘さん！ 溜息吐かない！」

栗野に注意を受けながら、二人は隣りにあるメイク室へと移動する。中に入ってみれば、今まで着た覚えのあるものやそうではないものまで、全20着ほどの白や黒の上着やらカーディガンやらがハンガーに掛けられていた。

しかもその掛けられているものをよく見てみると、どうやら冬の黒か白のものを全てひっくるめて持ってきたらしい。

その証拠に、中には今回の衣装に全くに使わないものや、フォーマル衣装にのみ合わせる感じのボレロまである。

「・・・これ、全部選んで持ってきた？」

「ええ。色と季節は」

「じゃあ、似合うかどうかは見てへんてことやね？」

「だってどれが似合うのか分からなかったんで・・・」

「ま・・・、まあ・・・。そこは自分達で見極めるわよ・・・」

そう口にした末佳がまず最初に手に取ったのは、先程から気になっていた黒と白のボレロ2着。

勿論『イベント当日に着る』という意味ではなく、衣装的に『合わない』という意味で。

「まずこのふわふわモコモコのボレロ2着はNG！ 私の衣装はほとんど『フォーマル』と言うより『ゴスロリ風』だし、小歩路さんのは『エレガント』だから合わない！」

「「どうか〜ん」」

「そもそも黒が1着しかあらへんし」

「はいっ！ 没！」

その未佳の発言の通り、最初の段階で候補から外されたボレロ2着は、ハンガーの一番端っこの目立たぬところに掛けられた。

さらにそのボレロと候補として残っている服との間には、大体10センチほどの何も掛けられていないスペースを作り、一目で外された服が分かるように整理。

こうして見栄えをよくした後、未佳と厘は再び例外の上着がないかどうかを確認する。

「う〜ん……。あとは……」

「あの少し真ん中から左寄りのは？ 見た感じ薄そうに見えるんやけど……」

確かに厘が指差す先にあったカーディガンは、見た目的にもかなり薄い素材で出来ているらしく、冬用でもあるにも関わらずハッキリと服の下にあるハンガーが透けて見えていた。

実際にそれを手に取ってみると、やはり生地が予想以上に薄い。

「薄っ！ ……何コレ？！ これ本当に冬用なの？！」

「……ひよつとしてこれ……、ヒートカーディガンみたいなやつなんとちやう？」

「あゝあ。MINIQLLOの出してる『着るだけで暖くなるカーディガン』みたいなね」

「そうそう」

ちなみに栗野の言う『MINIQLLO』とは、国内や海外でも有名なブランド衣服店のことで、その店特有の洋服デザインや色、品の

安さなどから、幅広い年齢層にも人気がある。
勿論、未佳達も時々はその衣服を手取ることはある。

だがこの黒地の薄いカーディガンは、どう考えてもヒートカーディガンには見えなかった。
その前に、触った感じがまるつきり違う。

「……いや……。むしろこれは室内ライブ用でしょうよ。全然『ヒート』っていう感じがしないもの」

「逆に熱がどんどん逃げてくみたいなの？」

「そうそうそう！」

なんて立ち話をしながら笑いつつも、とりあえず防寒対策には一切有り得ていなかったのだ、このカーディガンもボレロの隣りに掛けられた。

さらにその後、毛糸素材で動きにくく、糸と糸との感覚がかなり空いているなどの理由から、ウールのベスト2着。

デザインはいいが、肩の辺りから伸びている紐の先にあるボンボンが邪魔という理由から、カーディガン1着。

胸元が開き過ぎ、イマイチ着ていても暖かさが変わらないベスト4着などが候補から落選。

そして気付けば、上着の候補着衣は計4着のみとなっていた。

「えー……つと……。結局何が残ったの？」

「羽根だらけのおー……。上着やね。それが黒と白で2着。とっ、完全な紳士服みたいな上着の黒と白2着。全部で4着」

ちなみに残った2種類をピックアップすると、最初に厘が言っていた1着は、その説明の通り、全体に真っ黒の鳥の羽根が付けられて

いる上着だ。

その他の特徴としては、上着の開け閉めはファスナータイプで、生地は動きやすい程度のしつかりとした厚さになっており、冷気が中に入ってくることはない。

また、上着の袖は有難いことに長袖で、袖からは指だけが出るような感じに仕上がっている。

勿論、両者の衣装とも相性が良く、デザイン性に関しても申し分ない。

一方のもう一つの方の上着は、一見紳士服の上着をイメージするようなデザインではある。

だがその上着の素材の中には微妙に銀色のラメ系が混ぜられており、少し動いただけでも儚くキラッと光る仕掛けだ。

またこちらは前がボタン式で、同じ長袖の袖口からは、手のひらが全て露わになるようなデザインになっている。

そして当然、こちらも両者の衣装との相性は抜群だ。

「・・・色違いを抜かすと、丁度2着かあ・・・」

「白よりは黒がええなあ・・・」

「確かにここまで黒に統一してるとねえ・・・」

そんな会話を途中で呟きつつ、両方の衣服を見比べていた未佳は、ふつとあの紳士服のような方の上着を手を取った。

「・・・この紳士服みたいなのは、胸元にちよつと大きめなブローチ付けて飾る感じよね？」

「ああ、確かに」

「これだと・・・ちよつとラインストーンとか、ビーズとか・・・キラキラがかなり強めのを一つ付けるだけで、だいぶ印象変わるかも」

「うん。……逆にそっちはブローチ付けられへんもんね」
「っ!! ……小歩路さーん。こっちの羽根のにブローチなんて
付けたら大変よぉ?」

「とりあえずブローチは羽根で隠れて見えなくなりますよね?」

「その前にブローチで周りの羽根がポキポキ取れるわよ?! いき
なりライブ中に私か小歩路さんの上着から羽根吹雪が起こったらど
うよ?!」

「ハハハ!」

「『flying ship』の『ごぉー いーんざあーすかああ
ーい』のところとかで、皆の口の中とかに入ったら嫌でしょ?!」

「ハハハツ! それ最悪ですね!」

「……完全に羽毛アレルギーの人は泣くしかないみたいな。って。
……。そっという話じゃなくて!!」

ふつと話が本題と外れていることに気付き、未佳は改めて話を元に
戻す。

ふつとここにきて大事なことを伝え損なっていることに気付いた栗
野が、未佳達にこんな忠告を口にした。

「そっついえば言い忘れていましたけど、お二人で色違いのものを着
るのはNGですからね?」

「エツ!?」

「『エツ!?』って、当たり前でしょ? ファンの方から見た絵的
な問題もありますからね」

「そんな服が色違いなことくらい……」

「別に誰も何とも思わへんよ」

「お二人がそう思っても、そういうものなんです! 丁度色違いを
省けば残ってるのは2着だけなんですから、この2着で上手いこと
決めてくださいね!」

「……そうは言われても……」

決められたら苦労しないのが未佳の本音だ。

何せ未佳からしてみれば、この二つはどちらもデザインがよく、両方とも機会があれば着てみたい。

どちらか一つに絞るのは、現段階では無理な話である。

となれば、決める方法は一つしかない。

（小歩路さんに着たい方を選んでもらうしかないわね・・・）

『自分は選ばなかった方を着よう』と決め、未佳は厘にさり気なく尋ねる。

「ねえ、小歩路さん」

「うん？」

「小歩路さんはどっちの上着着たい？ 羽根の方のと紳士服風の方のと・・・」

「うん・・・・・・・・・・。ウチどっちでも・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

（それじゃあいつまで経っても決まんじゃないじゃない！！）

勿論そんな本音、未佳が直接厘に言えるはずなどない。

とりあえず絶叫するのは心の中だけにしておき、未佳は両手を腰に当てながら、再び考え込んだ。

正直こうなってしまうたら、取るべき行動はたったの一つのみ。

「よし、決めた！　じゃあジャンケン！」

「えっ・・・？　別にみかっぺが着たい方でええよ？」

「それがお互い決まらないからジャンケンなの。いい？　勝ったら紳士服上着。負けたら羽根付き上着だからね？」

「・・・うん。分かった」

「はい！　じゃあ・・・」

『ジャン！　ケン！　ポンッ！』と、普通であればこう言った掛け声の流れになるはずだろう。

しかしこのCARNELIAN・eyesのメンバーが行うジャンケンは、その当たり前の掛け声が少々特殊だった。

「せーの！」

「カーネリアンッ！！」

そう。

こともあるうちに自分達のバンド名の頭が、このジャンケンを行う際の掛け声になっているのである。

理由は特に大きなものは何もなく、ただ単に未佳がノリでメンバーとのジャンケンで口にした際、そのまま定着してしまったと言った感じだ。

ちなみに今のジャンケンの結果は、未佳がグーを。

厘がパーを出し、ジャンケンは一発で決まった。

「・・・厘さんの勝ちですね」

「じゃあウチが紳士服で」

「私が羽根付きのやつね。はい！　決定！」

どうにかお互いの上着が決まり、ホッとしたのも束の間。
まだ決めなければならないものは終わっていないかった。

「じゃあ次は、アクセサリとかの装飾品決めやりますよー」

「えっ……?!」

「あとは適当にスタッフさんとか、栗野さんが決めるんじゃないんですか……?」

「あのね、末佳さん。ファンの方に見られないラジオの収録とかじゃないんですから！ 私達がテキトーに決められるはずがないでしょう?! むしろ私達がテキトーに決めて、あなた達のコーディネートが悪いとファンの人達に思われたら、一体どうするんですか?! 皆さんの人気下げることにもなるんですよ?!」
「でもウチ、基本あつたものを着る派の人間やけど?」

ドテッ!

「ああ〜っ！ 分かる！ 1週間コーディネートが完璧な組み合わせのを着て洗濯物したら、それをまた畳まれたもの順に着るんですよ?」

「そうそう。ほんで結局『毎回洗うものは同じやつ!』みたいな」

「ハハハ!」

「はいはい……。内容は充分分かりましたから、笑ってないで早く決めましょ」

このままではいつもの飲み会の時の会話と変わりそうにないので、栗野は半ば強制的に話を切り上げさせる。

その後、装飾品や靴などを含めた衣装チェックは、こともあろうに11時40分過ぎくらいにまで続けられた。

未佳はやや勢いのある溜息を吐いたと同時に、体の向きをくるりと変え、通路の先にあつた階段を上り始めた。

そんな未佳に、リオは『？』マークを浮かべながら付いていく。

「未佳さん、どこ行くの？」

「屋上……」

「……屋上？」

「うん。なんか今はそういう気分……。きっとこの服着てるせいね」

と、半分寂しげな笑みを浮かべながらそう口にする未佳に、リオは小さく『あつ……』と、声を漏らした。

未佳が着ていたP.V衣装用のブラックドレス。

あれは忘れもしない、未佳が屋上から飛び降りた時に着ていたあの衣装だったのだ。

上着やアクセサリー類などの変更は多少あるが、見た感じの印象としてはあまり変わらないその姿に、未佳もリオも一瞬だけ口を閉ざす。

再びリオが口を開いたのは、屋上へと繋がるドアの位置まで、階段を上った辺りからだった。

「……分かつてるだろうけど、今あそこから飛び降りても死な」

「分かつてるわよ。死なないんでしょ？ ……もう随分前から知ってるし、覚えたわよ」

「ならいいけど……。屋上行って何する気？」

「空くらい……。見てもいいでしょ？ 久々に屋上に行くんだから」

「そっついえば好きなんだっけ。空見に屋上に行くの……」

その問いに軽く頷きながら、未佳は屋上のドアノブを回してみる。
やはりあの日同様、ドアには鍵が掛かっていた。

『そりやそうよね・・・』などと思いつつ、未佳は自分の財布の中に仕舞っていた合鍵を使って『ガチャリ』と開けてみる。

『ギー・・・』という音と共に開け放たれたドアからは、やや肌寒い程度の風が少しだけ強く吹き込んだ。

未佳はその風に一瞬ぶるりとしながらも、そのまま奥の方へと進んでいく。

屋上から見上げた空は、昨日のように『雲一つない』とは言えないものの、快晴に近い空模様となっていた。

その景色は、まるで未佳が飛び降りたあの日と同じ天気である。

未佳はそんな青空を眩しげに見つめながら、ゆっくりと前の方へと歩いていく。

『コツツ・・・コツツ・・・コツツ・・・』というヒールの靴音が、あの日と同じ光景を思い出させた。

「ふうー・・・」

天と地上ギリギリの位置まで移動して、未佳は深く深呼吸をする。

あの日のような少しだけ春の香りが混じっている風は吹かなかったが、そこから広がる景色は間違いなく、あの時と同じ町並みだ。

ふっと未佳は、そんなビルの真下に視線を向けてみる。

真下にあるのは、茶色と白のタイルが交互に並べられている遊歩道にも関わらず、そこを通る人はほとんどいない。

（・・・今更なことだけど、私ここから飛び降りてもしばらく見つからなかったかなあ・・・）。丁度事務所の出入り口の反対側だし・

・)

「どうしたの？　・・・また飛び降りる？」

「・・・えっ？」

あまりにも唐突過ぎるその発言に、未佳はキョトンとした表情のまま、自分の左隣りに立っていたリオの顔を見つめてみる。

その顔がこれまた冗談ではなく本気で問いている真剣な顔立ちだったので、未佳は思わずすりと吹き出し笑ってしまった。

「ばかね・・・。飛び降りたって変わんないでしょ？　どうせここにまた戻るんだから・・・。」

「そりゃ分ってるけど・・・。なんかまた飛び降りようとしてるみたいに見えたから・・・。」

「・・・そう？」

「・・・うん」

『そんなにも顔に出していただろうか』と小首を傾げつつ、未佳は再びビルの真下の方に視線を向けてみる。

そしてふっと自分の右隣りを見た瞬間、息が止まった。

未佳の右隣りに突然現れた女性の姿。

その女性は耳元以外の髪を一つにまとめ、黒いレースドレスを風に靡^{なび}かせている。

身体を立たせている足はしっかりしているというのに、その瞳には生気が一切として感じられない。

何処そとなく悲しげな表情を浮かべているその顔は、もはや誰の声も聞き入れようとはしないほど、頑ななものとなっていた。

そして何よりも未佳が驚いたのは、その女性の姿。

（あれは・・・っ！・・・・・・私？！）

そう。

そこに立っていた女性は紛れもなく、あの日の“坂井未佳”その人だった。

ビルから飛び降りる寸前の自分の姿を見ているようで、未佳はしやしその光景に言葉を無くす。

これは現実なのか、夢なのか、それすらも曖昧になっていた。

（どっ・・・、どうして私が・・・！！）

そんなことを思っている内に、隣りに立っていた“坂井未佳”がゆっくりと道のない前の方へと歩き出し、フッと視界から姿を消した。

（落ちた・・・っ！！）

そう思った瞬間、未佳の耳にあまりにもリアルな『ズシャンッ！！』という音が響き渡る。

まるで何か硬いものが砕けるかのような鈍い音に、未佳は恐る恐るビルの真下を覗き込む。

そしてその視界に写った光景に、未佳は一瞬悲鳴を上げかけた。

未佳の見つめる先。

そこには、先程まで自分の隣りに立っていたはずの“坂井未佳”が、あの茶色と白のタイルが並べられている遊歩道の上に横たわっていた。

体勢的には頭を右側に向け、右腕は自分の頭の近く、左腕はビルのある方向に向いている。

逆に両足の方は、まるで歩いている人を真横で見ているかのように、右足が前に、左足が後ろの方に投げ出されていた。

さらに、そんな彼女の頭部からはかなりの出血が見られ、みるみる内に頭の下にあるタイルが真っ赤に染まっていく。

『真っ赤』と言っても、実際は『赤』というより『赤に近い黒』と言った感じの色だ。

ここにはよく分からないが、おそらくあのタイルの上にある頭部には、かなりの傷があるのだろう。

そして当然のことながら、飛び降りた彼女の両目は完全に閉じ切っていて、身動き一つしない。

つまり彼女は飛び降りた一発目で、完全に絶命してしまったのだ。

「うっ……！」

「……えっ？ ……！！ 未佳さんッ！！」

いきなりビルの真下から視線を反らして蹲る未佳に、リオは慌てて駆け寄る。

どうやら今の未佳の身に起こった出来事が全く理解できていないらしく、口元を押さえたまま下を向いている未佳に、リオはオロオロと戸惑う。

それからしばらく経った後、未佳は一人慌てているリオに対して、ゆっくりと口を開いた。

「……リ……、リオ……」

「……！ 何っ？！」

「私……。私が飛び降りるところ……。見た」

「えっ……。？ 未佳さんが飛び降りるところ？」

「う……。うん……。まだビルの真下に、倒れてる……。血を流して……。倒れてる！」

「……。で、でも……。誰もいないよ……。？」

「・・・えっ？」

そう口にするリオに、今度は未佳の方が慌てた。
あんなにもハッキリと目に映っていた自分が、あそこから姿を消しているなんて有り得ない。

「・・・そ、そんなはず・・・ッ!!」

『ない!』と言い掛けながら、未佳は先程自分が倒れていたビルの真下を見下ろす。

しかしそこに、あの“坂井未佳”の姿は何処にもなかった。
さらになくなっていたのは、その“坂井未佳”の身体だけでなく、あんなにもタイル全体に広がっていたはずの血痕ですらなくなっていたのである。

未佳の目の前に広がっていた光景は、屋上に上がってすぐに見た人通りの少ない遊歩道と、茶色と白のものがチェック柄に並べられているタイルだけだった。

(・・・そっか・・・。きっと私が見たあれは・・・)

全ての状況を見た未佳の脳裏に浮かんできたのは『幻覚』という二つの文字。

こんなにもハッキリとしたものを見るとゾッとはするが、不思議と『幻覚だった』と思うと納得がいった。

丁度この屋上にやってきていてすぐ『あそこから飛び降りたら・・・』などと考えていたから、あんな幻覚を見てしまったのだらう。

だがそうは思っても、やはり今のはリアル過ぎる。

よく『自分を知るのは自分だけ』という言葉を目にするが、あの幻

飛び降りる前に、未佳が少しだけ予想していた死に方と、あの幻覚はかなり似通っていた。

ある意味、あれはあの日の自分がもっとも望んでいた死に姿だったのかもしれない。

「私、今……。死んだ自分を見ちゃった……。ここで」

「違うの、リオ。あれは単なる幻覚……私が見た、ただの幻覚だったの。……でも、すごくリアルだった……。私……『予約死亡』になつてなかったら、きっとあんな風に死んでたんじゃないかなあ」と感じていう感じの……。すごくハツキリした幻覚」

「……でもそんなの……、未佳さんは慣れてるんでしょ？
実際に飛び降りる前にも、そんな想像してたみたいだし……」

平然とリオにそう言われてしまった末佳だったが、不思議と末佳はその言葉に『うん』と頷くことができなかった。

一体どういうわけか、あの幻覚の自分が飛び降りて死ぬ瞬間を見た途端、未佳は自ら命を絶つことが『恐い』と思ってしまったのである。

確かにここから飛び降りたあの日は、死ぬことなど造作もないことだと思っていた。

現にあの日は、このビルの屋上でも自宅でも、色々なものを試して死のうとしていたほどだ。

そして中々死ねない自分に苛立っていたほど。

あの自分の本当の最後を見た瞬間、身体が心から凍り付いていくかのような感覚が広がって、あの現実から逃げ出したくなつた。

『まだ死にたくない』と、本気で一瞬だけ、そう思ってしまったのだ。

「未佳さん……？ どうしたの？」

$$\left[\begin{array}{c} \bar{e} \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ ? \end{array} \right]$$
















ふつと何故か無言でゆっくりとその場から立ち上がるリオに、未佳は声を掛けてみる。

そんなリオにムツとしながら、未佳はしゃがみ込んだまま声を張り上げる。

「時間が経って怖気づくくらいだったら……」

438

「・・・時間が経って怖気づくくらいの自殺願望だったら・・・、自分で死ぬ資格なんかないよ」

あまりにも唐突過ぎるその言動に、未佳は小さく口を開いたまま言葉もなくす。

一方のリオは、まるで『当然のことを言っただけ』と言いたげな表情を浮かべながら、未佳を半分冷めきった瞳で睨み付けていた。

未佳が初めて聞く、リオのあまりにも冷た過ぎる発言。

そのあまりにも突き放し過ぎる発言に、未佳も堪らずその場から立ち上がった。

「ちょっと・・・、待ってよ!!」

「・・・・・・?」

「少しくらい・・・」

「・・・・・・」

「少しくらい『死にたくない』っていう気持ちくらい、持つちゃってもいいじゃない! 『今じゃ無理だ』って思うことも・・・。『生きてこうしたい・あほしい』っていう希望も・・・、少しは望んでもいいでしょ?! ・・・今はまだ、ここで生きてるんだから・・・。。死なずにここで生きてたら、小さな夢くらい。希望くらい・・・。見たくなるときだってあるに決まってるじゃないっ!」

そう声を張り上げる未佳の瞳から、音もなく一筋の涙が零れ落ちる。しかしそれでも、リオの冷たい表情は何一つとして変わらなかった。そんな相変わらず冷たい表情を浮かべるリオに、未佳も少しだけ赤くなってしまった瞳で睨み返す。

勿論リオが口にした言葉も、別に間違っていたわけではない。

こんなに数日経ったくらいで変わってしまう感情なら、むしろ死んでしまう方が馬鹿だ。
それも分かっている。

しかしそれでも、何か楽しいことや嬉しいことが続いてしまうと、そのままその流れに乗りたくなってしまふのだ。
例えばその願いや希望が、いつかは最悪な結果を運んでくると分かり切っていたとしても・・・。

「私がどんな想いで死んだのかも知らないで・・・、言葉だけで押さえ付けようとしなくてよー!」

そう言い残して屋上を飛び出すと、未佳は階段を二段ほど下に降りた辺りで再び蹲る。

両膝を抱え込みながら一人泣き出す未佳に、少しだけ冷たい春の終わりの風だけが、そっと周りに吹き付けていた。

まるで、未佳の様子を時々、確かめるかのように・・・。

34・無言の訴え

屋上から飛び出して一人泣き続けていた未佳は、ふっといきなり小刻みに震えだしたスカートのポケットに視線を向けた。

そのポケットの中には、マナーモード状態にしたままの未佳の携帯電話が入っている。

勿論この震えも、誰かが未佳の携帯に電話を掛けてきたからだ。

(・・・・・・誰だろう・・・・)

気持的にはあまり電話に出たくはなかったのだが、いつまでも切れそうにない携帯を放っておくわけにもいかず、未佳はやや遅い動作で、ポケットから携帯を引っ張り出す。

携帯の表面にある液晶画面に映し出されていた名前は『栗野 奈緒美』。

電話の内容に関しては想像がついていたが、とりあえずボタンを一つだけ押して電話に出てみる。

「・・・・もしもし？」

『もしもし、未佳さん？ 未佳さん今何処にいるんですか？ もうお昼休みとづくに終わって、皆さん練習する準備して待ってるんですよ？』

やはり想像していた通り、電話の内容は『すぐにライブハウスの方に戻ってこい』という催促連絡だった。

おまけにある程度の練習はもう始めてしまっていたのか、電話の後ろの方からは、微かに長谷川の弾くギターや手神と厘が奏でるキーボードの音も聞こえてくる。

「あ……、はい……。分かりました。すぐそっちに行きます……」
「なるべく急いでくださいね？ それじゃあ」

栗野は用件だけを未佳に言い終えると、そそくさと電話を切ってしまった。

どうやら栗野は、未佳の声が少しだけきこちなくなっていたことに気付かなかったらしい。

(……。まあ……。いつか……)

そう心の中だけで呟いて、未佳はその場からゆっくりと立ち上がる。
『なるべく急いで』と言われても、こんな真っ赤になった目と顔のまま、ライヴハウスにいるメンバー達と会うわけにはいかない。

未佳はゆっくりと階段を下りながら、6階の方にあるメイク室の隣の洗面所へと向かった。

あの洗面所は基本、メイクの手直しやメイク落としなどで使用している場所なので、顔を洗うのには最適な場所だ。

おまけにライヴハウスがあるのと同じ階なので、距離的にもかなり近い。

『あそこなら効率がいい』と思いながら階段を下りていた未佳は、ふっと自分が空腹状態であることに気が付いた。

(あつ……。そうだ、お昼……。なんだかんだで食べ損なっちゃったんだ……)

『なんだか今日是最悪なことが続くな』と思いつつ、未佳は洗面所の前へと立ち、自分の顔を鏡で見つめてみる。

あまりにも真っ赤な自分の顔と目に、少々未佳はギョツとした。

（うわっ……流血した目に赤面の顔って……。これはちょっとマズいよ……）

とりあえず誤魔化しの意味も込めて顔を洗ってはみたものの、辛うじて誤魔化せるのは顔のみで、流血した両目だけはどうしようもなかった。

いくら洗ってみてもまるで変化はない。

むしろこのまま洗い続けてしまつては、今度は逆に洗い過ぎで顔が赤くなつてしまいそうである。

「……………どうしよう……？」

なんて一人で呟いてみても、答えは誰からも返つてこない。

解決策は全て自分一人で考えなければならぬのだ。

（……………とりあえず行っちゃお……。ぶつつけの方が、言い訳思い付きやすいし……。それにあの中じゃあ、誰も気付かないよね）

結局言い訳も考えぬまま、未佳は洗面所から背を向け、ライヴハウスの方へと向かう。

どうせライヴハウスはいつも通り薄暗いことから、周りは未佳の目には一切気付かないだろうと思つていたのだ。

「お待たせ」

なんて何事もなかったかのように軽く口にしながら中へと入つていった未佳だったが、メンバーは未佳が予想していたよりも遥かに鋭かった。

中に入っすぐ、メンバー数人は『やつと来たか』と言いたげな表情を浮かべた後、未佳の両目の異変に気付き、心配そうにその顔を覗き込み始めたのである。

『気付く人間は少ないだろう』と思っていた未佳にとって、この周りの反応は全く予期せぬ出来事だ。

（ゲツ……！ うそ……。みんな気付くの?!）

「坂井さん……。もしかして目元が……」

「みかつぺ、どないしたん?! その両目!!」

「白いところが真っ赤つかじゃないですか!!」

「何があったんですか!? 未佳さん!」

「ハ、ハハハ……。いや……。そのお……」

まさか『さっきまで階段で泣いてました』などと言えるはずもなく、未佳は慌てて言い訳を考える。

先に考えておけばよかったなどと思っても、もう遅い。

必死に色々な考えを巡らせた後、最終的に思い付いたのはあまりにもシンプルな言い訳だった。

「じ、実はさっき……。両目にきれいにゴミが入っちゃって……。それが全然取れなかったから、気が付いたらこんな感じに……」

「……」

「ご……、ゴミ……?」

「う、うん……。ちゃんと洗っただけど、逆に酷くしちゃったみたいで……」

こんな言い訳でどうにかなるか心配ではあったが、以外にもメンバーや栗野達はその話で納得してしまっただけで、それ以上は何も聞

いてこなかった。

てつきり下手な言い訳だと思っていた末佳にとって、この周りの反応はまたしても予期せぬ出来事だ。

（あ、あれ・・・？　・・・もしかして納得しちゃった？）

「末佳さーん。それならそうと先に言ってくださいよー」

「僕らてつきり、坂井さんが何かマズい目に遭って泣いていたのかと・・・」

（うゝ・・・っ！　さとっち鋭っ！！）

「濡れタオルが何か持つてきましようか？　末佳さん」

「それとも、ウチの目薬使う？」

「へっ？　あっ・・・、いい！　いい！　もうだいぶ治まってきてるから・・・。放っておけば治ってるわよ。それより練習やっちゃお？　私が来てるのにこんなので時間取っちゃったら、リハーサル的时间勿体ないし・・・」

そんな末佳の号令に釣られるかのように、4人はやっと本番のメンバー全員でリハーサルを開始し始めた。

まず最初に行ったのは、ステージに入場する際の順番と位置確認。一応予定としては、まず手神がステージから一番左手前の指定位置へ移動。

その次に、一番右手前の位置に厘。

その後に手神のやや左上辺りに長谷川が移動し、最後に末佳がステージ手前のセンターに立てば、入場は終了だ。

そしてその入場が終われば、末佳達は即演奏準備に取り掛かり、用意が出来次第、新曲の『“明日”と“明日”と“昨日”』をフル演奏。

ちなみにこの入場と新曲披露の間には、メンバー紹介や楽曲紹介な

どと言ったMCは一切なく、今回は新曲を披露した後に、最近の楽曲についてのトークなどを混ぜたMCを行うことになっている。

その後ある程度のトークを終えた後は、2曲目の楽曲『Endless Requiem』を披露。
それが終われば再びMCへと入るのだが、実はこの2回目のMCがかなり問題なのである。

というのもMC2の中では、次がラスト1曲であるという報告だけでなく、その後行われるポスター手渡し会の簡単な説明。
さらには3日後に行われる東京公演の方の宣伝もしなければならず、かなり内容が密集してしまっているのだ。

だがこのMC2の話す内容だけを押さえておけば、あとはステージでラスト1曲の『flying ship』を披露した後、出入り口に一番近いメンバーから順に退場するだけ。

そしてそのままポスター手渡し会を行う場所に移動して、ファン達にポスターを手渡しだけでいいのだ。

ちなみにこのポスター手渡し会の時間は、実際にリハーサルを行ってみて再検討された結果、イベント終了予定時刻の午後5時半から2時間半後の午後7時まで、ということに決定。

だがこれはあくまでも最終の予定であって、実際の本番時にはかなりズレ込むことがほとんど。

当然末佳達も、こんな予定の時刻など全く当てになどしていない。

（予定として決めた時間なんて、ほとんど当たった試しがないし・・・。今回も時間は見ずにやった方がよさそうね）

「はい！ 皆さん一旦休憩ー！ ドリンク取ったりしてくださいー

い！！」

「「「「はーい！」「」」」」

担当スタッフの一人がそう口にしたことにより、未佳達は丁度キリのいい辺りで休憩を取るようになった。

だが昼食を取っていない未佳にとって、この休憩時間は少々苦痛の時間だ。

何せ空腹を満たすようなものですら持ってきていなかったで、唯一腹を満たすのが『浄水器に掛けた水』という最悪な結果だったのである。

とりあえず歌も歌ったということで4口ほど飲んではみたのだが、腹に染みたのは最初の2口程度で、その後はそのまま腹に溜まらずに流れていくかのような感じだった。

当然、空腹を満たせてはいない。

（あゝ・・・、ダメだ。・・・お腹減った・・・無理も承知で栗野さんに何か買ってきてもらおうかなあゝ・・・でもそうすると、また怒られそうだしなあゝ・・・）

未佳はしばし色々と考え込んでみたのだが、結局出てきたのは『ハア』という溜息のみ。

（もう怒られても仕方ない！）

そう意を決して栗野の元へと向おうとしたその時。

ふっと自分の左側に視線を向けた未佳は、その視界に映った光景に思わず『あっ』と、声を漏らした。

その未佳の視線の先には、荷物が置いてある場所の壁に一人寄り掛

かりながら、長谷川がシュークリームを頬張っていたのだ。それもさぞ幸せそうに。

（しゅ……、シュークリーム！！ しかも私の大好きなカスタードのやつ……！！）

未佳はそんな本音を胸中で漏らしながら、さり気なく長谷川の方に足を向かわせた。

実は長谷川も、こう見えて大のスイーツ好きなのである。

そのレベルは、時々未佳や栗野達の出掛けるデザートバイキングなどに付いていってしまうほどだ。

そのため長谷川が食べているものが、よく未佳の好みと被っていることも少なくはない。

未佳が長谷川の目の前にまでやってくると、長谷川はさぞ嫌そう、いや。

迷惑そうな視線を未佳に向けた。

「な……、なんですか？ 坂井さん」

（じー……）

長谷川の問い掛けには何も言わず、ただただ無言の訴えをシュークリームに向ける未佳。

そんな未佳の様子に全てを悟ったのか、長谷川はくるりと体の向きを変え、一刻も早くその場から立ち去ろうとする。

しかし一歩足を踏み出した辺りで、未佳に『そうわさせるか！』と右袖を『ガシッ！』と掴まれ、長谷川はピタッとその場に立ち止まった。

と同時に、ずっと開かなかった未佳の口から、やや低めの声が発せられる。

「ちよつと？　なんで逃げるわけ？」

「あ、いや……。その……。ハァー……。口があるんですから、ちゃんとやってください」

そう言われ、未佳は何処そとなく可愛げな感じに笑みを浮かべながら、両手を長谷川の方に『はい』と差し出す。
勿論、内容はシュークリームの交渉。

「半分ちよーだい」

「ええ」

「お願い！　お願い！　私、今日お昼食べてないの！」

「へっ？　はっ？　……。なんで？」

「『なんで？』って……。目にゴミが入る事件とか……。あつたから……。それで食べ損なったの！　だからお願い！　半分ちよーだい！」

しかしそう頼んでみても、やはり未佳と同じくらいスイーツ好きでもある長谷川は渡すのが惜しいのか、中々『はい』とは言ってくれない。

そもそも長谷川の中で大好きなスイーツベスト5に入っているスイーツを『ちよーだい』と言うこと自体、かなり無理な話だ。

こうして中々シュークリームを分けてくれない長谷川に、未佳は次なる手段へと踏み込む。

「あゝ……。このまま空腹で倒れちゃったらどうしよう……。きつと明日のイベントにも響くことになるわよねえ」

「あの……。さり気なく脅すの止めてください……。どうせこれコンビ二のなんですから、急いで買ってくればいいじゃないですか」

「ハア？！ 休憩時間がたったの10分しかないのに、ここからちよつと離れたあのコンビ二にまで買いに行けって言っの？！」

「別に10分もあればあそこのコンビ二くらい……………」
「…無理か」

「無理でしょ？！ ねえ！。お願い」

「ええ……………」

「『半分で図々しい』って言うんだったら、3/4でもいいから！」

ズルッ！！

「も……。もしも？ 今『3/4』って聞こえた気がしたんですけど？ それってどこが半分以下？？」

「ねえ！ さとつち、お願い！！」

まるで最後のお願いとばかりに、未佳は両手を合わせて頭を下げる。それから待つこと約5秒。

「……………ハア、仕方ないなあ……………。じゃあこつち」

そつ口にすると、長谷川はカバンの中から未開封のシュークリームをもう一袋取り出し、それを未佳の両手にポンツと乗せた。その瞬間、未佳の顔に満面の笑みが『ぱあっ』と浮かぶ。

「さとつち、ありがとー！ ……でもなんで2個も？」

「ん？ ああ……。練習終わった後、家で一人で食べようと思って買ってきてたやつ。でもいいや。どうせコンビニのやからいつでも買えるし……。いくら『練習してたから』とは言え、一日2個は食べ過ぎだろうし」

「……。ゴメンね。楽しみ取っちゃって……。でもありがとうー」
「さとうち今日だけ、私には奈良の大仏様みたいに見えるよ？」
「……………」

ボーン……

「どういうたとえですか！！ しかもあの方そついうアレでしたっけ?!」

「私今度、お礼で120円分の何かおごるね？」

ゴンッ!!

（な、何気に坂井さん……。シュークリームコイツの値段知ってたんだ……。って、ちよい待ち！ 『120円でおくれるもの』って……。それってある意味数限られてるやんか!!）

「……。？ どうしたの？」

「あ、いや……。それなら東京の前辺りに同じの買ってきてください……」

「あ？ ……ああ！ 『シュークリームを』ってことね？ はいはい、OK！」

などと軽い返事を返してシュークリームを頼張る未佳だったが、内

心では譲ってくれた長谷川に言い尽くせないほど感謝していた。

やや午前中のことを引きずった気持ちになっていた未佳にとって、このシュークリームの存在は、いつの間にか慰めてくれるものになっていたのである。

“甘いものを食べている時は何となく幸せになれる。”
よく聞く言葉ではあるが、本当にそれを実感したのはこれが初めてだ。

未佳はやや離れた辺りで、ふつと長谷川の方を振り返る。

そしてスタッフ達と楽しげに話している長谷川に、未佳は小さく口を開き『ありがとう・・・』と呟いた。

その小さ過ぎる声と遠過ぎる距離では、確実に本人には気付かれな
いと分かっていて・・・。

その日の夜。

明日のイベントのために早めに就寝しようと、未佳はいつもよりも
1時間ほど早くに風呂を終え、やや分厚めのパジャマを着込む。

そして少々長めの髪を床に座りながら吹いていた時、ふつと未佳は
背後に、自分以外の気配があることに気が付いた。

どうもこの気配からすると、向こうは立ったままこちらを見つめて
るだけで、自ら口を割る気は全くもってないらしい。

一方の未佳も、自分が何かを言わなければ話にならないことくらい
分かってはいたのだが、一体何を離せばいいのかがよく分からず、
ただただ濡れた髪をタオルで拭いていた。

しかしこんなことで、いつまでもこの相手を誤魔化してられるは
ずがない。

何となく分かり切っていたことではあったが、おそらく彼はこちらが口を開くその時まで、ここで無言のまま立ち続けているつもりだ。未佳自身の本音が出てくる、その時まで。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ガツカリした？」

「・・・・・・・・・・えっ・・・・・・・・？」

「私が死んだ理由が・・・・・・・・、時間が経ったらある程度変わった感じがするので・・・・・・・・」

半分虚ろげな瞳を下に向けながらそう呟くと、リオはゆっくりと未佳の正面の方へと歩き出した。

そして未佳の目線とほぼ同じ高さになるように、リオは未佳と同じようにその場に座り込み、未佳の顔を見つめる。

しかし一方の未佳は、一切としてリオと視線w合わせようとせず、静かに髪から滴り落ちる水滴が床を濡らす様子を、どこか意思のない目で見つめていた。

そんな未佳に、リオは小さく口を開く。

「理由なんてまだ分かってないから・・・、今はあれやこれやなんて言えないよ・・・・・・・・。ただ僕は、自ら死ぬ人は『目の前には絶望しかない』っていう人だけで『まだ死にたくない』って思う人は、いないって思ってたんだ・・・・・・・・。もつともこれは、人間じゃない者の勝手な想像だけだね・・・・」

そのリオの話を聞いた未佳は、静かに下に向けていた顔を上に上げ、

ふつとこんなことを問い掛けた。

「リオは……『死にたい』って思ったことってある？」

「えっ？ ……僕？」

「うん……」

そんな未佳の問い掛けに、リオはふつと宙を仰ぐ。

きつと今の今まで、リオにこんな問い掛けをぶつけた人間はいなかったのだろう。

そもそも、リオに対し質問や問い掛けをぶつけた人間ですら、この世の中には未佳以外に存在しないのかもしれない。

しばしリオは宙を仰いで考えた末、こんなどっちつかずな結論を口にした。

「……僕は『死ぬ』っていう言い方じゃなくて『消える』

っていう言い方なんだけど……。僕らは自分達の意味だけでじゃ死ねない存在だから……。ちよつと立場が違うよ」

「……そつか……。なんだかつくづくリオは謎の存在ねえ。正体は一体何なの？」

「だから言えないんだってば」

「まあ、死神だっていうのは分かってるけど……」

「だから違うよ！」

そんなことをお互いに言い合っている内に、時刻は明日のイベントへと向かって、針をゆっくりと回していた。

予約死亡期限切れまで

あと 160日

35・出発前のアクシデント

朝8時。

未佳はいつも通り栗野の車に揺られながら、他のメンバーがいる事務所へと向かっていた。

今日は待ちに待ったニューシングル『“明日”と“明日”と“昨日”』のリリース日。

と同時に、大阪での発売イベント当日でもあった。

「未佳さん。一応皆さんと事務所出入り口で落ち合ったら、すぐにロケバスに乗り換えて『大阪スターフォーラム』に向かいますからね？ 私が言ったら、すぐに移動してくださいよ？」

「分かってるわよ。私もそう何年イベントやってると思ってるの？」

「はいはい……。今回で丁度35回目でしたね」

「34よ……」

ややブスツとした表情でそう答える未佳に、栗野は『あれ？』という声を漏らす。

実は数日前に、未佳は栗野の車の中で『今回のイベントを入れたら私発売記念イベント35回目よ？』と口に漏らしていたのである。

そのためてつきり栗野も『これで35回目なんだ』と思い込んでいたのだが、実際はまだ1回分足りていなかったらしい。

その理由は、実に単純なものだった。

「まだ東京公演の分は数に入っていないの……。それに、私『年』って言ったんだけど？ なんで『回』になってるの？」

「だって『回』の方が『年』よりも回数が多いじゃないですか」

「それはそうだけど・・・」

一方未佳と栗野がそんな他愛もない会話を交わしている間、リオは一人車窓から見える景色に目を向けていた。

今日は昨日と全く変わらないほどの青空が広がっていて、おまけに風も少ない。

ある意味イベントを行うには絶好の天気と言いたところではあったが、残念なことに気温は予報通り、かなり冷え込んだものとなっていた。

今は車の中なので寒くはないが、一步外に出てしまえば震え込んでしまうほどである。

「今日・・・、晴れてるのに寒いのが残念だね」

「うん・・・。もう少しくらい暖かかったら完璧だったんだけどね」

「えっ？」

「あつ、その・・・。『寒くなかったらなあー』って、呟いただけ・・・」

「ああ・・・。確かに昨日の夜全然曇ってなかったから、その翌日なんでかなり冷え込んでますよねえ・・・。あつ！本番、ポケットにカイロ入れるのOKですからね？寒かったら好きに使ってください」

そう言われてふつと視線を栗野の手提げカバンに向けてみれば、そこにはざっと60枚ほどのカイロが、ほぼ無理矢理と言った感じに押し込まれていた。

おまけによくよく目を凝らしてみれば、カイロは貼るタイプの大・中・小と、ポケットに入れるタイプの大・中・小、計6種類が詰め込まれていたのである。

普通一人の人間が60枚ほどのカイロを持っているというのはあまりないだろうが、こんな風に全タイプのカイロを持っているという

人も早々いないだろう。

（すごい量……。もうすぐ春が本番になってくるっていうのに……。こんな必要？）

そんな未佳が疑問を浮かべたのと、車が事務所に到着するのは同時だった。

出入り口付近には早くも、さほど大きくはないグレーのロケバスと、黒いワゴン車が1台だけ止まっている。

ちなみにこの黒いワゴン車は、長谷川や手神達の楽器を運ぶための専用車だ。

車が止まると、未佳はカバンの取っ手部分を『ガシッ』と掴み、急いで車から降りた。

見た限り何処にもメンバーの姿が見当たらないところからすると、どうやらメンバー達は一足先にバスに乗ってしまっているらしい。

その証拠に、機材用車の運転役として外に出ていた2〜3人のスタッフ達は、ロケバスの方にやや小走りで向かう未佳を見て、代わる代わるに『早く！ 早く！』と口にしていた。

（『早く！』って……。ちゃんと予定通りの時間にきたじゃない！！）

「なるべく早めに現地に着きたいんじゃない？」

（着いたところで何にもないくせに……）

「坂井さん、早くー！」

「はいー！」

半分『これのせいで喉が潰れたらどうする気なんだ』と思いつつ乗り込んでみると、読者をしていた厘やただ座っていた手神の二人が、こちらに向かって手を振っていた。

「みかつぺ、おはよう」

「坂井さん、おはようございます」

「おはよう。……………あれ？」

ふつと約1名だけ何の反応も示さなかった男の隣りに、未佳は恐る恐る状況確認も兼ねて向かってみる。

そしてその目に映った光景に、思わず未佳は口を開いた。

「さとつちー！」

「おおっ……………！ あー……………、ビックリしたあ……………」

「『ビックリしたあ』じゃないでしょ！？ 何バスの中でゲームやってるのよ！」

未佳が怒鳴り散らした通り、長谷川の両手には真っ白のPSPが握られていた。

実はこうしたゲーム類も長谷川は大好きな人間で、時々仕事場でギターの出番待ちなどを行っている間などに、よくこうしたゲームで遊んでいるのである。

ただしそれはあくまでも順番待ちをしている時の話であって、このようなイベント直前の時などにやっているのはかなり稀な話だ。

「いや……………。まだ坂井さん来そうになかったから、ええかなあ……………」

「ふーん……………。まあ、そんな風なゲームをやっててまたバスで酔っても、私は知らないから」

「いや、走ったらやらへんからね？」

「どうだか」。そもそもこんな大事な日にゲームをやっていること自体、非常識だし……………」

「言つときますけど、これ全然遊びなんかじゃ・・・あ、っ!!」

ふっと突然ゲーム画面に向かって声を上げる長谷川に、未佳は『今度は何事だろう』と、問題の画面を横から覗いてみる。

するとそこには、巨大な翼を広げ、口から大量の炎を放つ赤茶色のドラゴンが、かなりリアルな画質でゲーム画面に映し出されていた。さらにそのドラゴンの足元に目を向けてみれば、そこにはおそらく長谷川がプレイヤーとして動かしていたであろう人間が、その勝利の雄叫びを上げるドラゴンに成す統べなく踏みつけられている。

これだけでも長谷川が声を上げていた理由は十分想像がついていたのだが、ゲーム機の方はまるでそれを確信付けるかのように、ある英文を画面一杯に映し出していた。

ちなみにその映し出されていた英文は『GAME OVER』。
的確な日本語訳は『敗北』。

「あっ・・・ちゃー・・・」

「ほーら！ やっぱりゲームやってただけじゃない!!」

「だからちやいますって・・・!! ほら・・・。今日寒いでしょう？ 寒いと指動かし難くなるやないですか。だからそれを慣らすためにゲームを」

「うそつけー」

半分長谷川の発言を遮るかの如くそう口にしてみれば、長谷川はやや地団駄を踏みながらそれを否定して、厘の方に視線をチラチラと向けながら口を開いた。

「だから真っ向から否定せんといってください!! さっき小歩路さ

んにも似た感じで否定されたんですから！」

「だって事実やったやん」

「あつ……………」

そのあまりにもサラツとし過ぎている厘の発言に、未佳とリオはそつと長谷川の方に視線を向けてみる。

すると案の定予測的中と言った感じに、長谷川は車窓の方に両手を組ませ、そこに顔を埋めたまま蹲ってしまった。

そんな長谷川の姿を見て、先程まであれやこれやと言っていた未佳自身もやや心配になる。

さらにそんな不安を一層増させたのは、リオの口から飛び出てきたこの一言。

「未佳さん！ 未佳さん！ なんか今長谷川さんの方から『グサツ』

っていう感じの音がしたよ？！ 何か硬いものが刺さるみたいなの……

。気のせいかもしれないけど……」

（ああ…………。それたぶん、小歩路さんの言の葉が胸に突き刺さる音じゃない？ 私も感じたけど……！ 何イベント前にモメてるのよ……！）

『そういえばこの後にイベントだった！』と、一瞬忘れかけていた本日の予定を思い出し、未佳は慌てて厘の方に指でバツ印を作る。

しかし厘はその意味が分からないらしく、頭に『？』マークを浮かべながら首を傾けていた。

そんな厘の反応を見て、未佳は簡潔に理由を説明する。

「これ以上言ったらマズイから……、ね？」

「ああ」

「分かった？」

「でも…………。なんか雰囲気的に手遅れなんとちがう？」

「えっ……?」

そう言われて再び長谷川の方に視線を向けてみれば、長谷川はもはや誰が何処から見ても自虐オーラに包まれてしまっていた。
正直言つてこれはかなりマズイ。

「ああー！ ほら、さつつちも！ そんなに塞ぎ込まないでよ」
「いいですよ……。どうせ皆が言っただけに、僕遊んでただけなんですから……」

「あゝあ、認めちゃったよ……」
（……………ってことはあ……………。さっき言ってた『指慣らし』
ってというのは本当だったってことか……）

だがそんなことを今更思つても、ここまで拗ね込んでしまっている長谷川の機嫌は直るはずもない。
そんなこんなでどうしようかと未佳が右往左往していると、前の方でまた何かが起こっていることに気付いた手神が、様子を伺いにやってきた。

「どうしたの？ みんな……」

「ああああゝ！！ 手神さゝん！ 何とかしてよゝ！！ 小歩路さんの一言でまたさつつちがあゝ！！」

「自分でもしょ？」

「私一人じゃ無理だから、手神さん何とかしてえーっ！！」

そう口にして泣きつく振りをしてみれば、手神は厘と長谷川を交互に見渡しながら、とりあえず今のこの状況の確認を始めた。
まず位置に手神が行ったのは、長谷川を撃沈させた張本人であるという厘の事情聴取だ。

「小歩路さん……。また長谷川君に何か言っただけですか？」

「いやね。さとうちがゲームで遊んどったから、みかっぺと二人で注意したんよ。そしたら『これは指を慣らすためにやってるだけだ！』って、言い訳してきたから……」

「まあ……。実際は本当に指慣らしのためにやってたみたいなんだけどね」

「なるほどおっって……。長谷川君……。いつにも増して負のオーラが」

「『いつにも増して』ってどういう意味ですかっ！！ 僕普段から負のオーラむんむんの人間みたいなこと言わんといってください！！」
「だって！ 実際さとうちDM……。あっ」

ふつとそこまで口にした後で『これはマズイ！！』と、末佳は口元を両手で押さえ付ける。

だがそんな衝撃発言を、現在負のオーラむんむん状態の長谷川が聞き逃すはずがない。

長谷川はその末佳の発言を聞いた途端、まるでメンバー全員に見放されてしまったかのような表情を浮かべ、再び窓枠の方に塞ぎ込んでしまった。

それも今度は『本気で泣き出す寸前』のような声を上げながら。

「うう……。もうみんな知らん。僕は知らへんぞ。……。みんななんか知らん！」

「坂井さん！ 余計に落ち込ませてどうするんですか！」

「すみません……。つい内心で思ってた言葉が……」

「あーあ……」

「今のはウチやなくてみかっぺやからね？」

「まあ……。それは当ぜ」

「どっちでも誰でも変わないでしょー？！ みんなで僕を攻め込

36・さとつちのファン傾向

バスが走り出してから約40分。

もうそろそろ会場に到着するだろうという頃だと言うのに、未佳の前の席に座っていた長谷川は、相変わらずシヨゲ込んでいた。

座席の背凭れで全体は見えないが、その背凭れと車窓の間から、長谷川が車窓の方に頭部をコツンと傾けていることだけは確認できる。おまけに時々窓枠に置かれた右手の人差し指が上下に動いているところを見ると、どうやらバスに乗ってから一度も寝てもないようだ。

そんな長谷川の様子に、未佳は後ろから肩を指差し指で『ツンツン』と突っ突いてみる。

すると未佳の予想とは裏腹に、長谷川は無視などせず、未佳の方に首をゆっくりと向けた。

「・・・なに？」

「『なに？』って・・・。ねえ・・・。さっきのは謝るから、いい加減機嫌直してよ。普段なら別にいいけど、今日はイベントなんだから・・・。」

「・・・。。。。。。。。。。。」

「さとつちだって、今日のイベント楽しみにしてたじゃない？」
「久しぶりにファンに会える〜♪」って・・・。」

「それはそうやけど・・・。。。。。。。。。。。」

「それに・・・、ほら。私達が頑張って書いたサイン、無駄にしたくはないし」

「・・・？　もしかしてそれ本音？」

「ち、違うわよ！　だ・・・、だから・・・。今のさとつちの態度

で、ファンの人達を悲しませたくないってこと！！・・・分かる？！」

何故か一瞬末佳の本音らしき発言が飛び出してきたが、それも含め、末佳が口にした発言は全て正論だ。

特に『ファンを悲しませる』というのは、どこの世界でもご法度行為。

勿論、長谷川自身もそれは分かり切っている。

末佳の説得を聞いた長谷川は、しばらく頭を下に向けて考えた後、末佳の方を向きながら小さく頷いた。

どうやら、ようやく立ち直る気になったらしい。

「・・・それは『立ち直る』って取っていいのね？」

「はい・・・」

「はい！　じゃあこの件はこれで終了！　もうすぐ会場に着くから、そろそろ下りる準備を」

「あつ・・・、常連！！」

「・・・えっ？」

ふっと突然厘の口から出てきたその言葉に、末佳と長谷川は厘の視線の先を見つめてみる。

するとそこには、ざっと30人くらいはいるであろう大勢の人達が、会場へと続く道路脇の歩道から、こちらに向かって手を振っていた。それもよくよく目を凝らしてみれば、その人達の数名は『みかつぺ　ダイスキー』や『手神　is　GOD　HAND！！』などと書かれたパネルを大きく掲げながら、まるで末佳達の目についてもらおうとするかのように、その場でピョンピョンと飛び跳ねている。

「もしかしてこの人達全員・・・」

「そう。私達のフアンの人達。それも8年以上のお付き合いのね。いつも出迎えやってるのよ。ライブの時とか、イベントの時とか・・・」

「あのパネルは？　グッズであるの？」

「まさか・・・。全部フアンの前品よ。あれって簡単に作れるのよね。薄い透明なプラスチックを二枚合わせて、その中に文字を書き入れた紙を挟んで、周りを止めるだけだから・・・」

「ふーん。ひよつとして・・・、あれを見たら誰が誰のフアンなのか分かつちゃう・・・、とか？」

「もちろん。基本的にはみんな小歩路さんだけだね・・・。何せ『厘同盟』なんてものがあるくらいだから」

「あつ、あの手前の女の人・・・！！」

ふつとりオが指差す先にいたのは、つい最近マーメイドで声を掛けてきたあのフアン的女性だった。

しかも女性の持つ『みかつぺ　LOVE』と書かれたパネルの中には、ご丁寧にもこの間末佳が書き入れたあのサイン付きメモ用紙も入れている。

「あの人、末佳さんのフアンみたいだね」

「まあ、昔からそうだったしねえ・・・。あつ。さとつち！

ほら！！　さとつちのパネル上げてる人いるよ！！」

「へっ？」

「ほら！　厘同盟のちよつと後ろの方！！」

そう言われて視線をそちらに向けてみれば、そこには確かに『さとつち　サイコーッ！！』と書かれたパネルを、少数ではあったがバスの方に掲げている。

それもよくよく見てみれば、そのパネルを上げていたのは全員女性

ファンのみだ。

《さとつちー！！ さとつち、こつち見てー！！》

直接彼女達の声は聞こえずとも、この口の動きであれば大体言っている内容はこんなものだろう。

実はここ最近、長谷川のファンは以前よりも明らかに増え続けている傾向にあった。

理由は一昨年辺りから3年ぶりに、人気ラジオの司会やソロ活動を再開したためだろうが、最近ではその数が未佳のファンを上回る程にもなりつつある。

もつとも長谷川のファンの中には、別のメンバーとの『二股ファン』という場合が多いので、純粋な長谷川のみでファンで数えてしまえば、まだまだ人数は追いつかないだろうが。

「なんか前より増えてへん？ さとつちのファン・・・」

「うん。あの手前の3人、元々私のファンだったと思うんだけど・・・」

「それ言うたら、前の二人と左側の4人はウチのファン」

「ちよつとおー？ 斜め前のお二人さん？」

「さつきから一体何の話してるんですか？」

ふつと二人の会話の内容が気になったのか、未佳の斜め後ろの席に座っていた栗野と、厘の後ろの座席に座っていた手神の二人が、未佳達の方にさり気なく声を掛ける。

「えっ？」

「『えっ？』じゃないですよ！ さつきから『ファン』がどうか・

「・・・『人数』がどうか・・・」

「またファンが何かやったんですか？」

「「・・・へっ？」」

先程からこの二人の会話を聞いてみると、どうも栗野達は自分達が何か深刻な話をしているものと勘違いしているらしい。

その証拠に未佳達に話し掛ける二人の顔には、ハッキリと『真剣』という名の文字が浮かび上がっていた。

しかし実際の会話の内容はというと、別に深刻なものでも問題なものでもなんでもない。

ただ単に長谷川のファン傾向について、厘と二人で話していただけ。未佳はそんな二人の勘違いの差とあまりのおかしさに、思わずその場で口元を軽く押さえながら『くすり』と笑った。

「？・・・み、未佳さん？」

「何・・・、笑ってるんですか？」

「い、いや・・・。あまりにも真剣そうな顔してたから・・・。そんなんじゃないくて、さとうちのファンの話をしてたんです。ほら、さとうちのファンの人って、元々別の人のファンだった人とかが多いでしょ？」

「確かに・・・」

「そう言われてみれば・・・」

「さつきさとうちに手え振ってた3人。カウントダウンライブの時、手神さんのファンやった人やったよ？」

「えっ！？ ホントに?!」

「う、うん」

「まあ・・・。長谷川さんは後から人気が上がってきたメンバーですしねえ・・・。ファンが『二股』っていうのは、珍しくないんじゃないですか？」

「「「・・・・・・・・まあね・・・・・・・・」」」

そんな栗野の発言に皆が納得していると、未佳はふつとあるお笑い芸人によってブームになっていた言葉遊びを口にした。

「はい！『さとつちのファン』と掛けまして『ファーストフード店のドリンク』と説きます」

「い・・・いきなり謎掛けですか？ 坂井さん・・・」

「じゃあ、今の未佳さんの空気を読んで・・・」

「「そのココロは?!」」

「はい！ いつもセットで付いてきます」

パチパチパチパチ・・・

「うまい!!」

「「確かに・・・・・・・・」」

「ハハ。半分内容理解してないと意味いみ不な謎掛けだけど・・・」

「でも実際・・・、さとつちのファンって、みんな誰かと二股やもんね」

「ついでにファーストフードのドリンクも、大概セットで頼めば付いてくるし・・・」

などと手神が苦笑混じりに口にとすると、栗野はふつと何かを思い出しながら、謎掛けを言い終えた未佳にこの訂正を話し出した。

「そういえば未佳さん、知ってました？ 最近のファーストフード店って、ドリンクよりもポテトの方が付く率多いんですって」

「えっ?! 普段食べに行かないから全然知らなかったけど、そ

うなの?! 今ってポテラーの方が多いわけ?!」

「『ポテラー』って・・・」

「へえー……。みんな水分やなくて、胃に溜まる感じの求めるんやね」

「だねえ・・・」

「ヨッシャアア!」

「ア・・・ッ! ああ・・・、ビックリしたあー……。今度は何い?」

ふつといきなり勢いのある掛け声と共に立ち上がった長谷川に、未佳は思わず飛び退きながら、半分ムツとした表情で長谷川は見つめる。

しかし長谷川はそんな未佳の視線などには一切気付かず、むしろ自棄に嬉しそうな、気合い有り気な表情を浮かべ、未佳達の方に視線を向けた。

「僕、イベントやり切ります! なんかもつちや自信ついてきたわ!」

（（「えっ・・・? いきなり?」））

「そ、そう……。よかったね・・・」

「はい! ヨッシャー! イベントや! イベント!」

まるで先程の暗過ぎるオーラが嘘のように、長谷川はテンションをハイにしなが、椅子に座り直す。

そんな長谷川のあまりにも変わり過ぎるテンションに苦笑しつつ、未佳は小声でこんなギャグを口にした。

「はい……。さとうちのやる気メーター充電完了!・・・」

「ひょっとして・・・、ファンの女性達を見たからかしら……。やる気出してくれたの」

「はっ？ たったそれだけ？！ なんで『男』ってそんななんなん？
！ ウチ全っ然意味わからへんわ！！」

「さ、さりげなく僕も一緒にしないでください……。小歩路さん・
・」

「まあ、いいじゃない。ようやく機嫌直してくれたんだから。ついでに気合いも出てきたみたいだし……」

「はい！ じゃあここで再度、本日のイベントについての説明を行います。皆さん聞いてくださいねー？！」

栗野はそう口にする、早速本日の大阪イベントについての手順と注意事項の説明をし始めた。

「はい。じゃあまずこれからですが……。本バスはこれより、イベント会場でもある『大阪スター フォーラム』の、関係者用駐車場から入り口に入ります。バスから降りた後は、駐車場の近くにある裏口扉から、関係者用通路を通じて楽屋に入ってください。まあ、私やスタッフ数名付いていきますけど……」

「機材や楽器の持ち運びは？ 私達も手伝うの？」

「いいえ。今回はスタッフの皆さんが代わりに運びますので、未佳さん達は手伝わなくて大丈夫です。それから楽屋に着いた後は、絶対に部屋を出ないようお願いします。ああ、トイレも楽屋の中にありますから、そちらを使ってくださいね」

「……はい……」

「あの、すみませーん。ちょっと質問なんですけど……」

長谷川はそう言いながら、説明を行っている栗野にも見える位置で、右手をゆつくりと上に上げた。

「はい。……なんですか？ 長谷川さん」

「僕……、自分のギターは自分で運びたいんですけど……。そう

いう人はどうしたらええですか？」

(えっ………)

その長谷川の発言に、未佳は彼が持つ『ギターに対してのこだわり』の大きさを思い返した。

今長谷川が所有しているあのお気に入りのアコースティックギターは、長谷川が5年ほど前にやっとの思いで購入したものだ。

と同時に、バンド結成後にして初めて、長谷川が手にした唯一のギターでもある。

長谷川のあのギターに対する溺愛ぶりはかなりのもので、そのレベルは、長谷川以外の人間にはギターケース越しにしか触れさせず、雨や汗でギターが濡れればすぐ、タオルなどで念入りに拭き取るほどでもある。

また3年ほど前のライブリハーサル時では、あまりにも大事にし過ぎていた長谷川に『かなりの溺愛ぶりね』と未佳が口にしたところ、長谷川はほぼ即答で『命の次に大事やからね』と口にしたほどだ。だから今回の『自分で運びたい』という要望も、あの長谷川ならありえなくない話だと思っていた。

しかし普段機材運びの場にはいない栗野からしてみれば、その長谷川の発言はかなり以外だったのだろう。

栗野はやや戸惑いながら、機材運びを担当する男性スタッフの方に視線を向ける。

「どう……、します？」

「あぁ……。だったら長谷川さんのギターだけ、最初に車から下しちゃっていいんじゃないですか？ 当の持ち主がそう言ってるんだし……」

「はい。じゃあ、長谷川さんに渡しますね？」
「すみません。なんかワガママ言って・・・」

そつ口にして申し訳なさそうな表情を浮かべる長谷川に、栗野は笑顔で首を横に振った。

「いいえ。というより・・・、とても長谷川さんらしいですよ？」

自分のギターを大事にしてるところが・・・。「長谷川はCARNELIAN・eyesのギターリスト！」っていう感じで

「ハ、ハハハ・・・」

「あつ、長谷川さんの他に『自分の楽器は自分で持ちたい』っていう方、いますかー？」

「いいえ」

「ウチも別に・・・。手神さんとかは？」

「いや・・・、僕のは長谷川君のと違って、一人じゃとても持ち運べないから・・・」

「確かにキーボード1台もどうかと思うのに、3台はね・・・」

「じゃあ長谷川さんのアコギだけでいいですね？」

その栗野の最終確認で全員が『はい』と答えると、栗野は一時中断してしまった会場内での手順の説明を続行する。

「はい。では説明を引き続き行いますけど・・・、どこまで言ったっけ？」

「『控え室に入ったあとは外出禁止』のところまで」

「ああ、そうだ・・・。それでその後ですけど、午前11時半から最終リハーサルを行います。で、この時なんですけど・・・。ファンの方との会話はほどほどにしておいてください。向こうから話し掛けられてきたことがいくらあっても足りないので・・・。また最悪、リハーサル中に度を越した方とかも出てきてしまう可能性もあ

りますので……。まあ……。『完全に無視しろ！』とまでは言いませんけど……」

（つまりは『あんまり関わるな！』ってことね……）

「そしてリハーサル後の12時から、ランチタイムになります。この時の食事は、会場近くの売店の方が皆さんの分を作ってくれますので、それを私達が楽屋に運びます。あつ、勿論楽屋からは一步も出ないでくださいね？」

「……はい」

「それから、ランチタイムは基本1時半まで。その後は衣装着替えの3時半まで、個々に時間を潰してもらって構いませんが……。女性の皆さんはマイクを行うので、3時から別室に移動してきてください」

それを聞いた途端、未佳と厘はお互いに顔を見合わせながら溜息を吐いた。

「もう毎回のことやけど……」

「あのマイクやってる時間、キツいんだよねえ」

「うん。顔が下向いたらアカンからって、読書も仮眠も禁止やと……。ねえ」

「そうそう。それにずっと椅子に座りながら起きてるのが結構くるしさあ……」

『あれは堪えられない』と最後に口にして、未佳は自分の席の背凭れにコテツと倒れ『ふう……』と再び息を吐いた。

するとそんな二人の様子を見ていた長谷川と手神の二人は、何やらニヤニヤとした表情を浮かべながら、二人にこんなからかい口を吐く。

「女性の方達は色々大変ですねえ……」

「衣装着替えだけでかなり時間を取っちゃうからあー・・・」
（っ！！・・・このーのおー二人イゝ！！　まるで他人事ひとことみたい
に毎っ回！！　毎っ回！！）
「ええ、そうね・・・。」女』と違って『男』は、着飾る部分とくろがほ
とんどからねえ？」
「・・・。。。。。。」
「コラコラ・・・。恒例のからかい冗談はそこまで・・・。じゃあ・
・・、残りはその空いているランチタイム後に説明しますね？」
「。。。はい」

皆が内容の再確認も兼ねて返事を返したのと同時に、未佳達を乗せ
たロケバスはゆっくりと、関係者用駐車場の中へと入って行った。

37・お茶と茶菓子で一杯・・・

栗野の説明が終了してわずか2分後。

未佳達を乗せたバスはこの間のリハーサル時と同様『関係者専用駐車場』と書かれた策の中へ入った辺りで、ゆっくりと止まった。

まず最初にバスを降りたのは、機材やら楽器やらを運ぶ機材スタッフ達。

その次に、一応周りの様子確認を行うスタッフ2名と、マネージャーの栗野。

そして安全が確認されたあたりで、リーダーの手神。

キーボードの厘。

ギターの長谷川。

そしてヴォーカルの未佳と憑神のリオという順番で、皆はロケバスから下車した。

「・・・・・・ファンの人達いないね」

「当たり前でしょ？　こんなところにまでやってきたら、正直言って大変よ」

「あつ！　未佳さん！！」

「ああっ・・・・・・！　はい！」

「渡し忘れてました！　これ・・・」

そう言つて栗野が手渡してきたのは、よくコンビニなどで売られている市販の白いマスクだった。

一般的には風邪予防や咳防止などに使用されることの多いマスク。しかし未佳にとって、このマスクは全く別の理由において必需品だった。

「あつ、あつたの？ だったらバス降りる前に渡してよ」

「すみません、ゴタゴタしてて・・・」

「『寒い日は必需品』だって、前々から言ってたじゃない」

「本当にスミマセン・・・。とりあえず状態が悪化しないようにするために、早めに楽屋に向かいましょう」

「もう・・・」

未佳はいまひとつ気持ちが収まらぬまま、とりあえず口元にマスクを当てがる。

このマスクは、未佳の大事な喉を渴かせないようにするための大事な道具だ。

特に今日のような寒く乾燥している日は、こうしたマスクがなければすぐに喉元が渴いていつてしまう。

そうなつてしまったら、未佳にとってはまさに『命』とも言える歌声が出せなくなってしまうだろう。

また仮に出せたとしても、喉自体にはかなりの負担を掛けることになる。

そんな大事なマスクを、栗野は持つて行き忘れていたのだ。

結局のところは、栗野自身の早とちりではあつたが。

「半分お騒がせしました・・・。今度からは、カバンの中をもう少し確認します」

「全く・・・。カイロをあんなにカバンの中に詰め込むからよ」

「はい！ じゃあ移ど」

「栗野さん！ ちょっと待ってくださいー！ まだ長谷川君のギターが・・・っ！」

そう手神に言われて視線を向けてみれば、そこには機材用ワゴン車

の中でガサゴソと音をたてながら、スタッフ二人が必死に長谷川のギターを取り出そうとしていた。

そんなワゴン車の後ろの方では、長谷川が一人ぼつんと立ちながら『まだか。まだか』とギターが取り出されるのをひたすら待っている。

どうもかなりの数の機材と楽器を車に詰め込んでしまっていたらしく、取り出す作業が少々苦戦しているようだ。

とにかくあまり散り散りになるとまずいという部分もあり、栗野は未佳達を連れながら、一先ず長谷川の方へと向かう。

「さとうちー」

「ん？」

「ギター、取り出せないの？」

「ああ……。なんか奥の方に入れてしもたみたいで……」

実は長谷川のギターは、他の機材や楽器よりも先に車に仕舞われていた。

そのため普通に車の中から取り出そうにも、手神や厘のキーボードやら機材やらが邪魔をして、中々思うように取り出せない状況になっていたのだ。

「そういえば長谷川君のギター以外に、僕や小歩路さんの楽器も4台乗ってるんですね？」

「あ、はい」

「あと機材とかも」

「……そうになると、楽器1台をどうにかここから取り出すのは……」

「えっ……。？ 私のタンバリンは数に入らないの？」

「（（いや、あれはー……）（（

「ちょっと・・・！　いつまで手間取ってるんですか？！　メンバーの皆さんは時間厳守なんですから、早くしてください！！」

「いや・・・、そんな、栗野さん・・・。そこまで言わんでも・・・」

『それじゃあ完全に自分がワガママ言ったことになっちゃうじゃないですか！！』という叫びは心の中に置いていき、長谷川はスタッフ二人に対して怒鳴る栗野にやや慌てる。

そもそも争いごとなどが苦手な長谷川にとって、今のこの状況はかなり怖い。

下手をすれば、怒りの矛先が自分に向けられてしまう可能性だってある。

できることなら今すぐにでも逃げ出したい。

そんなことを長谷川が願った矢先だった。

「あつ・・・、あつた！！」

「ありましたよ！？　長谷川さんのギター！！」

ふつと車の中を必死に探していたスタッフ2名の口から、そんな興奮染みた声が零れる。

どうやら、ようやく探していた長谷川のギターが見つかったようだ。

その声を聞くや否や、長谷川は二歩ほど車の方に近付き、ケースに入れられたままのギターを両手で受け取る。

「あの・・・、すみません。なんか色々と・・・」

「あ、いえいえ・・・」

「これが僕らの仕事なんで・・・」

「・・・本当にすみません・・・」

「じゃあ長谷川さん。楽屋へ移動しますよー？」
「ああ・・・、はいっ」

ほぼ手伝ってくれたスタッフ達にお詫びを入れる暇すらないまま、長谷川は既に関係者用通路の入り口付近に集まっていたメンバーの元へと急いだ。

「すみませんっ！ ちょっと遅れました・・・！」

「いいから、いいから」

「あんなに楽器とかを詰め込んだ中から、すぐに『パツ！』って出してっっていうのが、そもそも無理な話だから・・・」

「まあ・・・。時間的に言うたら、許容範囲内なんとちゃう？」

「ハ、ハハハ・・・」

「ほら！ 立ち話してないで、行きますよ？！」

「・・・あつ、はい！」「・・・」

出入り口でもある扉を開けてみると、中は元々この会場で勤めているスタッフ達でこった返していた。

見た感じからすると、どうもその大半は機材係や整備係の人間らしい。

末佳達はそんなスタッフ達でこった返した通路を進みながら、途中『おはようございます』と声を掛けてくるスタッフ達に頭を下げつつ、楽屋を目指した。

ちなみに楽屋の場所は2階で、位置的には、今回のイベントを行う予定のステージの裏に通路があり、その左から二つ目の部屋という事になっている。

要はステージ裏の左二番目の部屋だ。

（にしても・・・。毎回毎回すごいスタッフの数・・・。一体私達

が楽屋に入っている間、この中は一体どうなってるの?)

そんな疑問を浮かべてから数秒も経たない内に、未佳達は目指していた楽屋前へと到着した。

「はい！　ここが皆さんの楽屋になります」

「毎っ回同じトコですけどね」

「っシッ!!」

「エッホンッ!　・・・よろしいですか?　え〜っと、さつきも言いましたけど・・・。スタッフの人達がやって来るまで、楽屋の外には出ないでください。今の時刻が丁度9時半なので、外に出るのは2時間後の午前11時半。リハーサルの時になります。・・・何か質問とかは?」

「あの・・・。栗野さんはどこにいるんですか?　私達が楽屋にいる間・・・」

「ああ・・・。私は少し機材とかの様子を見に、スタッフさん達とステージの方に行ってきます。それで一応、携帯は絶えず持ち歩いていますので、何かありましたら電話してください。あつ、皆さん携帯持ってますよね?」

「イエース!」

「はい」

「もっちらーん」

「スマートフォン」

「っっ・・・」

「すみません・・・」

「・・・はい。じゃあ、皆さん。よろしく願いしますよね?」

「っっっはい」

おふざけ的な会話もそこそこに、未佳・長谷川・厘・手神の4人は、ゾロゾロと楽屋の中へと入っていく。

中に入ってみると、楽屋内の広さは4畳ほどで、少々和風なデザインを意識したのか、床は楽屋にしては珍しく畳素材になっていた。

「わぁ〜っ！ 畳！」

「あつ、ホンマやぁ〜」

中に入っすぐ、未佳と厘は足場が畳になっていることにやや興奮しながら、まるで素材を確かめるかのように右手で畳を撫でた。

勿論、この部屋に敷かれている畳は偽物ではない。

正真正銘本物の畳だ。

「あれ？・・・でも前って、ここ畳でしたっけ？」

「ううん。前は普通のフローリングだったけど・・・、多分最近畳に変えたんじゃないかなぁ〜」

そう答えながら、手神は楽屋に敷かれていた畳を見つめる。

実はほんの3年くらい前まで、ここは普通の茶色いフローリングの床だったのだ。

だが今はどういうわけか、そのフローリングだった床は畳に張り替えられている。

さらによく辺りを見渡してみれば、壁紙も以前のようなグレーっぽい白いものではなく、やや温かみのある黄色がかった色合いのものに張り替えられていた。

「どうやら、部屋全体を少し模様替えしたみたいだね。壁の色も少し明るいし・・・」

「まあ・・・。あの時は周りも含めて、床めっちゃくっちゃ冷たかったですもんね〜・・・。座ると冷たさで『ビクッ！』みたい

な」

「そうそう！　しかもフローリングのせいで、暖房入れても全然暖まらなかつたし・・・」

「フローリングって、座るとめっちゃ骨当たって痛いし・・・」

未佳がそんなことを話していると、厘は一人右側にあつた流し台の方へとトコトコと歩いていった。

流し台のところには、飲み口を下にして並べられた湯呑みが5つ。

さらにその隣りには、餡子あんこ無しのニツキと抹茶の生八ッ橋。

そしてその湯呑みと同じ数の緑茶とほうじ茶のティーバックが、それぞれ小さな網がこの中に並べられていた。

「ああ〜っ！　ねえ！　ねえ！！　人数分のお茶と、餡子あんこ無しのおたべあるよー？」

「えっ？　ホント？！」

「欲しい〜っ！　おたべ久しぶり〜♪」

「何味？」

「え〜つと・・・。ニツキと抹茶」

「枚数は？」

ふつと長谷川に生八ッ橋の枚数を尋ねられ、厘は微妙に生八ッ橋の入れられた袋を傾けながら、その枚数を確認した。

袋の中に入れられている生八ッ橋は、全部で5枚。

大きさは1枚、縦約6センチ。

横約4センチほどの長方形で、真上から見ると、薄らと真ん中に一本の切れ込みが入れられていた。

「一袋5枚で切れ込み入ってるから・・・。一袋10枚。全部で20枚。あと、栗野さんの分も入ってるから、一人一味2枚ずつ！」

「OK！」

「あつ、小歩路さん。冷蔵庫つてある？」

「えっ？・・・あるよ？ 中くらいのが・・・」

「じゃあ水入れてこよ。腐っちゃったらマズいし・・・」

未佳はそう言うのと、カバンの中から水の入られた200ミリリットルのペットボトルを2本取り出し、それを流し台の横にあった冷蔵庫の中へと放り込んだ。

このペットボトルの中に入っている水は、未佳が自宅の浄水器でキレイに浄水したもの。

実は未佳は、ライブなどで歌う前には必ず、この水と湯煎した水しか口にしないようにしているのだ。

これは彼女の命でもある『喉』を守るため、未佳自身がバンドの結成前からやっている“こだわり”でもある。

「あつ、ろ過水？ 今日のは凍らせてないん？」

「うん。今回は地方だし、凍らせたなら飲むのに時間掛かるから・・・」

「あつ、そつか・・・ ああ、みかつぺお茶飲む？」

厘はそう尋ねながら、お湯を温めているポットの頭を『コンッコンッ』と叩く。

それを見た未佳は、笑みを浮かべながら数回頭を上下に小さく振った。

「飲む♪ 飲む♪ ところでお茶って普通の？」

「ううん。緑茶とほうじ茶」

「じゃあ、私ほうじ茶」

「手神さんとさとうちはー？ ほうじ茶？ 緑茶？ それともいらん？」

（「『いらーん？』って・・・」）

「ああ、ほうじ茶ー！」

「僕は緑茶の方を」

「・・・ウチは緑茶やから、ほうじ茶？。緑茶？やね」

「私も入れるの手伝うよ」

こうして二人がお茶を入れている間、長谷川は何やらモゾモゾと座りながら、自分や手神の周りをキョロキョロと見渡し始めた。

そんな長谷川の行動が妙に目に付いたのか、隣りに座っていた手神が恐る恐る長谷川に尋ねる。

「長谷川君、どうしたの？ そんなに周りを見渡して・・・」

「えっ？ あっ、いや・・・。『4畳』って、僕の中では結構ある方だと思ってたんですけど、こうして見るとかなり狭いですね」

「まあ・・・。荷物も多いし・・・、ちゃぶ台が中央取ってるし・・・。何より、この部屋に一人じゃなくて4人全員だから」

「めっちゃ狭く感じんですけど・・・。やっぱりこの人数と、真ん中に置いてあるこのちゃぶ台のせいですかねー？」

「じゃない？」

「はい。お茶と茶菓子入ったよー」

「みんな、自分の分自分で持ってたってー」

その後はしばしメンバー全員、笑いあり関心あり驚きありの『お茶休憩』と言った雰囲気を、思う存分堪能した。

38・放送禁止用語

メンバー全員でのお茶休憩が完全終了した頃。

皆の会話の話題は、再び長谷川が口に使っていた『楽屋の広さ』についての話となった。

「ところで……さっき使ってたちゃぶ台を入り口近くの角に片付けたんだけどさあ……」

「やっぱ狭いですよね？」

「ここ本当にメンバー全員の楽屋なの？ 女性だけとか、男性だけとかのじゃなくて？」

「でもそれやったら、入り口の紙はメンバー一人ひとりの名前になってるんっちゃう？」

確かに厘がそう言うように、もしもメンバーが二人ずつ、もしくは一人ずつで楽屋が分かれているようになっていたのであれば、外のドアに貼られている紙にはメンバー個人の名前が書かれているはずだ。

だが今回、外のドアに貼られていた紙に書かれていたのは、メンバー全員を一括りにした『CARNELIAN・eyes様』という文字のみ。

つまり、今回は個別で用意されていなかったということになる。

「そういえば……。前ってどうなってたんだっけ？」

「確か半年くらいは、楽屋がつかいホールだったんですよ。それ以外はみんなここでしたけど……」

「もしかして……、メンバー全員が揃って入ることなんてなかった？」

「…….のような気がします」

手神が記憶を手繰りながらそう答えた通り、前回この会場で楽屋を使用した時は、メンバーが絶えず入れ代わり立ち代わりだったため、楽屋に全員が揃うことはなかった。

またそれよりもずっと前の時は、末佳と長谷川だけでの公演だったので、楽屋をここまで『狭い』と感じたことは一度もない。

さらにその前の時は、メンバー全員での出演ではあったものの、楽屋はやや広めの屋内ホールだったので、こうした個室ではなかった。

つまり末佳達は10年目にして、この楽屋の本当の広さを知ったのである。

それも張り替えられた畳のおかげで。

「これ……、座りながら思うように足伸ばすこともできへんよ……」

「だよね……。私何回もさつつちの足、おたべ食べてる時に伸ばして蹴っちゃった……。あつ、ごめんね」

「いえ、大丈夫でしたけど……。手神さん、何回も座り直してましたよね？」

「だって……。胡坐あぐらがこの狭さじゃできないし……。正座は畳だとちよつと痛いし……。かと言って膝を立てながら座るわけにも……」

「行儀悪い！」

「でしょ？ 背が高いとその分、足が邪魔になるんですよ」

「……よし！ 決めた！！」

ふつとそう言いながら、末佳は自分の両腿ふとももを両手で『パンツ』と叩く。

その末佳の思い付いた“考え”もまた、かなりずば抜けたものだった。

「今こつて、4畳でしょ？」

「はい」

「うん」

「でもつて、ここにいる人数も4人」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まさか・・・、坂井さん」

「『個人の座る場所を1畳にしろ』って言う気じゃあ・・・」

『まさか』とは思いつつ恐る恐る長谷川と手神が聞き返してみると、即座に未佳の口から予測的中の返答が返ってきた。

「その通り！」

「「ええっ！？」」「」

「というわけで、今から陣地は一人1畳のみっ！！」

「異議ありー！！」

「はい！ 何、さとつち！」

「ギターが1畳きっかり陣取ってまーす！！」

ドテッ！！

その少し突っ込み場所がズレている長谷川の発言と、長谷川の荷物の傍で横に置かれているギターの存在に、未佳や他のメンバーは一斉に倒れる。

しかも倒れたままそのギターを見てみれば、確かに大きめのアコースティックギターということもあり、丸々1畳分、陣地を陣取っていた。

だが冷静に考えてみれば、ギターは壁などに寄り掛けてしまえばいいだけのことである。

「はあ？　ギターくらい立てかけておけばいいじゃない！　わざわざ横なんかにしないでさあー・・・」

「そんなこと出来ませんよ！　何かあったらどうするんですか！」

「『何か』って何よ？」

「だからたとえば・・・」

そこで長谷川の脳裏を過ぎったのは、立て掛けておいたギターが何らかの拍子に倒れ、その衝撃で弦を止めている部分と本体の部分が、キレイに真つ二つに折れてしまう、というもの。

当然その『何か』説は未佳だけでなく、メンバー全員に否定された。

「『『んなわけあるかあっ！』』」

「というか、そんなにギターが壊れたなんて話、私一回も聞いたことないよ！」

「その前にそれでギター壊れたら、完全にそのギター欠陥品やないの！」

「そもそもそのギター、元値はいくらよ？」

「えっ・・・？」

ある意味普通に『いくら？』と聞いてくる未佳に、長谷川は一瞬言葉詰まらせた。

果たしてこのギターの元値を、今この場で口にしてしまっているものなのだろうか。

ふっとそんなことが、長谷川の脳裏を何回も過ぎる。

何せかありの苦勞をして手に入れたギターなだけに、あの金額は早

々口に出して言える感じのものではなく。

かと言って言わずにいれば、また未佳に変なことを返されてしまう。

（大雑把に四捨五入した金額なら・・・、そこまであれこれ言わないかなあ・・・）

結局答えないわけにもいかず、長谷川は適当に四捨五入した金額を未佳に伝えることにした。

「『いくら？』って・・・、まあ・・・《バキューン》万くらい・・・」

・・・。。。。。。。。。

「『えええーッ?!』」

「・・・えっ・・・?」

と、何やら予想外なほどのリアクションを見せるメンバーに、長谷川は目をパチパチさせながら、恐る恐る未佳達に聞き返す。

「そんなに・・・、驚きました?」

「『驚くよ!!』」

「長谷川君がかなりの金額で買ったのは知ってましたけど、まさかそこまでなんて思わなかったし・・・」

「っていうか・・・。それだけするんなら、欠陥品でもない限りすぐに壊れるわけないでしょ?！」

「いや、でも・・・。『そうはならない』っていう保証なかったんで・・・」

「その前にそれホンマもん？ さとつちかなりお人好しやしー・・・
。偽物ツカマされたとちゃうよね？」

ズベツ！！

「違いますよっ！！ これは正真正銘のかなりいいアコースティック
ギターです！！ ちゃんと購入した時に書類も貰ったんですからね
！？ ・・・家の中で無くしましたけど・・・」

「ダメじゃんー！！」

「というか・・・、話の内容逸れてません・・・？」

ふつと手神がそう口にしたのをきに、未佳達は再び話の内容を元に
戻す。

「とにかく！ ギターは立て掛けておいて！」

「ええー・・・」

「『ええー・・・』はナシ！！ 子供じゃないんだから・・・。ほ
ら、早く！」

そう未佳に諭され、長谷川は渋々ギターを壁にそつと立て掛けた。

これにより室内は少しだけ広くなったもの、ギターを立て掛けた長
谷川はイマイチ納得がいかないらしく、何度も未佳の方を冷めた目
で見つめる。

すると流石に未佳の方も黙ってはいられなくなったようで、先程ま
で普通に下していた両手を組ませながら、長谷川の方をギロリと睨
み付けた。

「何？ その目・・・」

「・・・坂井さんやて、自分のタンバリンが立て掛けたせいで壊れたらどうですよ?!」

「『どうですよ?!』って・・・それって『タンバリンを壁に立て掛けておいたら、何かの拍子で倒れちゃった』っていう設定?」

「・・・はい」

「・・・例題間違えてない? そんなの、元々立て掛ける必要性がないじゃない。カバンの中に入っちゃうくらいのサイズなんだから・・・それに倒れてもー・・・『パンツ』っていう音が鳴るだけでしょ・・・」

「・・・ですよ・・・、ねえ・・・」

ズベツ!!

「「「反論弱っ!!」」」

「ああー・・・。そういえば『タンバリン』って言うたんですけど・

・・・長谷川君、ちよつと」

「ん?」

ふつと何かを思い出したようにこちらを手招きする手神に、長谷川は『?』マークを浮かべつつ、手招きしていた手神の方へと向かってみる。

すると手神は、今度は『ちよつとだけ片耳をこっちに向けて』と、耳の方を手招きし始めた。

どうやら、そんなに公おおやけの場で話せるような内容のものではないようだ。

「なんですか? 手神さん。・・・もしかして・・・、かなり話しづらいことですか?」

「まあ……、その類なんだけど……。実はスタッフさんから聞いた情報で、坂井さんのタンバリンが」

「あつ……。やっぱり坂井さん絡み？」

「……。ちよつと？ 二人とも何コソコソしてんの？！」

相変わらず両腕を組ませながらそう尋ねる未佳に、長谷川と手神は声を揃えながら『いいえ！ なんでも！』と、とりあえず返事を返してみる。

しかしそう返事を返すタイミングが悪かったのか、はたまた自分に關係することでコソコソと話していることが許せなかったのか、未佳は腕を組ませたまま、右手の人差し指を上下に動かし始めた。明らかに先程よりも苛立っている。

いや、むしろブチ切れる寸前と言ったところだろうか。

そんな未佳の態度をほぼオーラの的なもので感じ取った手神と長谷川は、一体何を思ったのか、早めに話を切り上げようと耳打ちの会話を再び続行させた。

「いや、実はね……。あの坂井さんのタンバリン、タンバリン自体の値段よりも、坂井さんが付けたラメとかラインストーンとか……。そういうののデコレーションの方が、金額がかなり痛いんだつて。何でも一番高くて《ピー》くらいしたとか……」

「えっ！？ マジっすか？！」

「……。ッ！！ みかつぺ、ダメーッ！！」

「えっ？ ……アッ！！」

ふつと厘のその悲鳴に視線を向けてみれば、そこにはブチ切れた形相を浮かべた未佳が、二人のやや目の前に立ちはだかっていた。しかもその両手には、まるで二人の頭部に振り下ろすかたちで握ら

れた長谷川のギターが1台。
明らかに『キレた』どころの話ではない。

そんな末佳の姿に腰を抜かす男性群とは裏腹に、厘は一人末佳の腰辺りに両腕を渡し、どうにか末佳を押さえ付けようとしていた。しかしその押さえ付けられている末佳の方も、もはや腹の虫が収まる気がしないらしく、ギターを振り上げたままズカズカと二人の方へと向おうと抵抗する。

明らかに今の末佳の目に宿っているものは『殺意』だ。

「ッ！！ 二人とも・・・、コレで殺されたいっ？！」

「ちょ・・・、ちょっ！ ちょっ！！ ちょつと！！ 坂井さんっ！！」

「タイム！ タイムウツ！！」

「みかつぺ！ 早まったらアカン！！」

「ちょ、ちょつと・・・、離してよッ！！ 厘さん！！ ただ単に二人を懲らしめたいだけじゃないッ！！」

「そ、そんなことしたら・・・、二人とも死んでしまうやん！！ 絶対ダメ！！」

「坂井さん！ ちょつ・・・、ちょつと・・・！！」

「と、とりあえず落ち着きましょう！ ねっ？！ そんな早まらないで！！」

流石の長谷川と手神も、厘一人の手では止められなくなったこの状況はかなり危険だと察したのだろう。

二人は両手の平を末佳の方に向けながら『待った！』という意味表示を必死に送った。

ちなみに末佳が厘のことを『小歩路さん』ではなく『厘さん』と呼ぶ時や、普段の言葉ではあまり使わない関西弁が出てきた時は、か

なり未佳の感情が高ぶっているか、興奮している時のみ。

ようは前後で話した言葉に、一々意識を向けることが出来なくなっている時のみなのだ。

そしてこんなにも大きく重いアコースティックギターを、女性である未佳が両手の力だけで軽々と持ち上げられているということは、前後の言葉のみならず、力加減ですらもセーブできなくなっているということになる。

（（リアルにこれはマズイ！！））

「ア、ア、ア、アアア……ッ！！ この《ドキーン》……何が『私のタンバリンは《ピー》』よ！！ さとつちがまるで《バキーン》みたいに大事にしてるギターとかと一緒にしないでくれるっ？！ ……もう！ だから厘さん、離してっば！！」

「ダメッッ！」

「だって今手神さんとさつつち……『私のタンバリンの飾りが《ピー》もした』とか言ってんのよ！？ さとつちのギターが《バキーン》万とか、手神さんのキーボードが1台《ドキーン》万とかしてるくせに……！！ 私のあの《ピー》をあれこれ言う権利ないやんっ！！ そう思わんッ！？ ねえッ？！」

「えっ！？ 手神さんのキーボード《ドキーン》万とかするんですか？！」

「長谷川君！ 今そこ訊くところじゃないでしょ？！」

全く場違いなところで反応する長谷川に、手神は慌てて突っ込む。その直後絶えず後ろで未佳を押さえ付けていた厘が、言葉任せにこんなことを口にした。

「みかっぺ！ ウチ、みかっぺが《ダダダーン》にしくなるまでキレるの、よく分かるよ？！ ウチも時々さつつちがのんびり

し過ぎてると『もう《ドカーン》にでもしてやりましょうか! ?』とか、手神さんがあんまりにも声小っさいから『その口《ズコーン》使つて、もう《ドカーン》になるくらいまで避けさせたる! !』
 っと思うことあるもん! ! 　でもホンマにやったらアカンから! !
 絶対にアカンからつ! !」

「えっ？」

ふつとこんなタイミングで厘の口から出てきたカミングアウトに、手神や長谷川やり才。

さらには暴走していた末佳までもが『ちよつと待った』とその場で一時停止する。

厘以外の皆の目が、動揺で左右に泳いだ。

『気のせい』だともう一度厘の口から出てきた言葉を一つ一つ確認してみるが、なんと記憶のテープを巻き戻してみても、厘の口から出てきた言葉は放送禁止用語と思われるものののみ。

『なら先程の発言は全て、厘がそう思っていることなのだろうか』と、未佳は厘の方にゆっくりと顔を向けながら、恐る恐る先程の厘の衝撃発言を聞き返した。

「……えっ？ さ、小歩路さん……？」

「何……？ みかつぺ」

「小歩路さん……。さとつちを『ドカーン』にして『バキューン』にしてやる!』とか……。手神さんの口を『ズコーン』を使得って『ドカーン』まで裂けさせたい!』って思うことがあるの……? っていうか……。そう思ったことが過去にあったの?」

「うん……ごく稀に……」

「 へ、へえー 」

「えっ？ みかっぺそこまで思うことない？」

「……わ、私は……そこまではないかなあ……。流石に……」

・・、みんなを《ダダダーン》にしたいとまで思ってたし・・。
うん・・。」
「そう・・。」

未佳がそう答えてみると、厘はさぞ残念そうな表情を浮かべながら『ふん・・』と何処を見るときもなく小さく頷く。

一方の未佳達というと、一体どうすればいいのかがまるで分からなくなり、その場に無言のまま20秒ほど立ち尽くしてしまった。その途中、すっかり暴走の治まった未佳は、ふつと自分の手にまだ長谷川のギターが握られていたことに気付き、ぎこちない動きながらも長谷川にギターを手渡す。

「・・・・・あつ・・・・・さとうちこれ・・・・・ギター・・。」

「あ、ああ・・・・・どうも・・。」

「ううん、別に・・。」

「あれ？　なんだかんだで解決したん？」

「とりあえず・・。」

「ま、まあ・・。」

「その・・・・・なんて言うか・・。」

丁度その直後、楽屋のドアから『コンッコンッ』というノック音が2回ほど鳴り、栗野の『失礼しまーす』という声が聞こえてきた。その声に気付いた反動で時計を見てみれば、時刻は既にリハーサル開始予定時刻の6分前。

今の状況も状況だったが『そんなことに成り振り構ってられない』と、未佳は栗野の呼び掛けに返事を返す。

「はい。ど・・・・・どうぞ・・。」

「はい、皆さん。もうじきリハーサルなんで、未佳さん以外は楽器の準備をして・・・・・どうしたんですか？　長谷川さんも手神

さんも・・・」

「「？・・・な、何が・・・？」」

「いえ・・・。お二人とも、顔が顔面蒼白ですよ？ 特に長谷川さんなんて、いつにも増して・・・」

「どれどれ」

そんな栗野の言葉を聞いて二人の顔を覗き込んでみれば、確かに二人の顔は血の気を失ったかのような表情になっていた。

特に元々肌が極端に青白い長谷川に至っては、もはや生きている人間のように到底見えないほど、顔が真っ青になってしまっている。

「ホントだあゝ！！ さとつち、顔真っ青・・・！」

「でしょ?!」

「これじゃあゾンビよ！ ゾンビ！」

「ぞっ・・・」

「流石に『ゾンビ』とまでは言いませんけど・・・」

「でも近いものがあるじゃない！」

ふつとそんな二人の会話に少々ムツとしながらも、長谷川は自分の顔を人差し指で指差しながら、小さく口を開いた。

「死人みたいな顔してます？ ・・・結構色々あったんですよ、今・

・・・」

「半分生きた心地がないような・・・。ね？」

「僕、このバンドの女性陣がかなり恐いこと・・・、なんだかんだで今日再確認しました・・・」

「・・・はっ？」

「いやいや・・・、こつちの話です。気にせんといってください」

「じゃあ・・・、僕らは楽器の調整に行きましょうか・・・」

「ほなみかっぺ、また後でなあー」

「あつ、うん……。行つてらっしゃーい……」

と、何やら一人だけテンションの変わらないメンバーに、未佳は何処そとなく苦笑染みた笑顔で手を振る。

その後ドアが『バタンッ!』と閉まると、未佳は振っていた手をパタリと下し、無言のまま洗面所の方へと一人で向かった。

そして洗面所の鏡の前に立つと、未佳は無表情の自分の顔をしばし見つめた後、鏡に向かって大声で叫んだ。

「小歩路さんの《バキューン》……ッ!! この空気で一体どうやって本番やるのよーッ!! アゝアゝアゝアゝアゝ……ッ!!」
「ハハ……。まさかの《バキューン》で発声練習をやるだなんて……」

勿論、一人発声練習のように咆哮している未佳の耳には、当然このリオの小さな声が届くことはなかった。

39・ステージへ上がる時・・・

午前11時27分。

関係者用通路の室内出入り口前にやってきた長谷川、厘、手神の3人は、ほぼドアの隙間から見える人の数に、毎度のことだというのに『おお・・・』と口を開いた。

ドアの小さな隙間から確認できる観客の数は、この時点で約50人以上。

しかもまだリハーサルの階段だというにこの数だ。

そしてその次に長谷川達が驚いたのは、ここからステージのある方にまで向かうための通路。

なんとこともあるうに、ファンの間を通らなければステージに上がれない通路になっていたのである。

いや、むしろその前に、通路自体が今のこの場所には存在していない。

ただファンがステージの周りを固いバリケードのように囲っていて、その中心にステージがあるような感じなのである。

「ここ・・・、どうやって通るんですか？」

「衣装ちゃんとやってても、ここ通ったら確実に揉みくちゃですよ?!」

「ええ、分かってます！ だから今回は、スタッフ10名ほどが手であなた達の通路を作り、そこを通ってもらうことになってますので・・・」

「それってつまり・・・。ステージの階段前の観客を、それこそモ―セが海を割ったみたいに、人の手で道開けて、そこをウチらに通らせるってこと？」

「その通りです。皆さんはその通路を、ほぼ全力疾走でお願いします。立ち止まると、ファンの人達がドカドカやってきますから・・・」

「なぐんか前よりも面倒になったなあ・・・」

長谷川はそう口にしながら、溜息と同時に髪の毛を掻き始めた。

実はほんの数か月前まで、ここにはちゃんとしたアーティスト用の専用通路が作られていたのだ。

その作りとしては、出入り口からステージ階段までの距離に、長さ1メートルほどの棒を2本ずつ、横幅2メートル、縦幅50センチ程度の間隔で並べ、その棒の上下から赤いロープを2本、次の棒の上まで渡しただけの単純なもので、決していいものとは言えなかった。

現に末佳達はその通路越しにファンの人達とハイタッチを行った際、数人のファンがその通路のロープなど関係無しに身を乗り出したところ、通路を作っていた棒が呆気なく倒れ掛けたことがある。

だがそれでも、ステージに上がる側の末佳や長谷川達からしてみれば、たとえ役に立たないような甘い作りであったとしても、無いよりは幾分もマシだったのだ。

ところが去年の8月、その通路は必要性を持っていたにも関わらず、業者の人間によって撤去されてしまった。

その原因は、ホールの真ん中にあるステージから一番端の関係者用通路の出入り口にまで通路が伸びていたことにより、その階で買い物などを行っていた歩行者達の邪魔になってしまったから。

実は前々からその苦情は届けられていたものの、ここのスタッフ達はあまり対処を行っていなかった。

しかし去年の7月にその苦情が50件を越し、止む無く撤去が決ま

ってしまったというわけなのである。

長谷川はそんななくなってしまった通路を見つめると、ふっとポケットの中に入れていた携帯電話を取り出し、そのまま未佳宛にメールを打ち始めた。

打った内容は勿論、今回の会場の通路について。

そのメールが未佳の元に届くまでは、ほんの数秒ほどだった。

ウイイイーン・・・
ウイイイーン・・・

「・・・あれ？ メール・・・って、さとうちからじゃない。一体数メートル離れたところで何メール打ってるのよぉ・・・」

そんなことを呟きながらメールを開いてみると、中には短い文章でこんなことが書かれていた。

T i m e 2 0 1 0 / 3 / 9 1 1 : 2 8
F r o m 長谷川智志
S u b j e c t 会場通路

アカン・・・。
通路ないから大量に流れ込んでくるパターンです

(- - -)

「………知ってるわよ」

「！まさかのツッコミ?!」

「返事一応書いとこ。……そんなの分かってるから……、早めに調整やって……。後ろが……。詰まってるの、っと」

TO さとつち

TO 《宛先参照／入力》

Subject 時間押してる！

そんなの分かってるから、
早めに調整やって！
後ろが詰まってるの!!

>、へ、<

「……これでよし！」

「いいのかなー……」

「送るよ？」

なんて尋ねておきながら、未佳はリオからの返事を待たずに、長谷川にメールを返信した。

勿論こちらも、メールが届いたのは数秒後。

（おっ！返ってきた……って……。なんだ、知らなかったのは僕だけか……）

「じゃあ皆さん！通路が出来たんで走りますよ?!」

「「あつ、はい」」

「嫌やなあ……。走らずに通ることだけへんの?」

そんな厘の最後の呟きなど完全無視に、出入り口付近に待機して二人のスタツフは『いつせいのーせつ！』と口にして、ドアを一気に開放する。

その瞬間、ホール一帯はまるで嵐でもやってきたかのように、甲高い歓声と黄色い声に包まれた。

《キャーッ！！ キャーッ！！》

《さとつちっ！！ さとつちっ！！》

《厘様アーッ！！》

《小歩路さーんっ！ 小歩路さーんっ！！》

《GOD！ HANDッ！！ GOD！ HANDッ！！》

《手神さーん！！ こつち向いてえーッ！ 手神さーん！！》

「皆さん！ メンバーに触れるのは禁止ですーっ！！ そこ！ 通路に乗り出さないでー！！」

「ここより先には入らないでござーい！ 押さないで下がってー！！」

もはや色々な声が混ざり過ぎて何だか分からなくなっていたが、長谷川達はめげずにスタツフ達を作ってくれた小さく狭い通路を、ほぼ全力疾走で駆け抜けた。

その途中、どうにかメンバーの目に止まろうと必死にハイタッチを求めてくるファンがいたが、当の本人達はそんなことなどに一々構ってなどいられない。

長谷川達はそんなファンの人達に軽く頭を下げながら、一気にステージへと続く階段を駆け上る。

たかが3段程度の階段。

たかが5メートルほどの道のり。

にも関わらず、ステージに上がった3人の顔は、ほんの少しだけや

つれていた。

「だ・・・、大丈夫でした・・・？」

マイク越しでなければファンに会話が聞こえないことを経験済みの上で、長谷川は手神と厘に尋ねてみる。

すると二人は、その問い掛けに言葉では返事を返さず、ただただ苦笑だけを長谷川に返してきた。

きつと、これがこの二人からの“答え”なのだろう。

「ライブの時は客席に座ってるからあれですけど・・・」

「イベントは完全にみんな解放状態だからねえ・・・」

「ウチ、3回くらい二の腕掴まれ掛けた・・・」

「えっ！？ それって連行され掛けたんと違いますか？！」

「あのー・・・、皆さん。もう時間も押しているので、早めに楽器の調整を行ってほしいんですけど・・・？」

「あつ、すみませんっ！」

「すぐに取り掛かります！」

確かに栗野がそう口にした通り、イベントのリハーサル時刻は既に5分ほど経過していた。

そもそも楽器自体の調整を半になる5分前に行っておかなければならなかったのだから、時間的に言ってしまうばかりのロスタイムだ。

栗野への挨拶もそこそこに、3人は早速それぞれの楽器の調整に取り掛かり始めた。

キーボードの音量やキーの音割れは勿論のこと、ちょっとした不具合一つ見逃さぬよう慎重に。

さらにはファンに対しての私語等も慎んだおかげか、長ければ10分以上も掛かってしまう楽器調整は、ほんの5分程度ほどで終了した。

「終わった？」

「はい」

「・・・こつちもええよ」

「じゃあ・・・。栗野さん、坂井さんを」

「あつ、はい。すぐ呼んできます」

栗野はそう手神達に返事を返すと、未佳のいる楽屋の方へと小走りで向かった。

ここから楽屋までの距離はかなり短かったが、リハーサルの時間が押してしまっていると、急がないわけにもいかない。

楽屋へ着くや否や、栗野は楽屋のドアをやや乱暴に2回ほどノックし、ドアの外で未佳を呼んだ。

「未佳さーん！ 用意が出来たんで、リハーサル始めます！ 早めに出てきてくださーい！」

「はっ、はい！ 今出まっ・・・キャッ！」

そう口にしながら未佳がドアを開けた途端、栗野は未佳の右腕を思いつきり『ガッ！』と捕まえると、そのままステージの方へと乱暴に引っ張り始めた。

いくら時間が押していたからとはいえ、流石の未佳もこの行動にはやや悲鳴を上げ、無駄なことだとは分かっていつつも抵抗する。

「ちよっ・・・、ちよつと栗野さんっ！ そんなに強く引っ張らないで！ ちよつと痛いー！」

「時間がだいぶ押してるんです！ 痛いのならもつと走ってくださいー！！ 遅いと余計に引つ張られて痛みますよ？！」

「そんなこと言っただって……。私、ヒール履いてるのよ？！ それも長めのブーツを！」

「私だってヒールがそこそこあるの履いてます！」

「捻っただろうするのよ？！ 湿布貼った状態でミニライブなんて洒落にゃないー！」

「あれこれ言わないで急いでください！！ 時間が10分ほど押してるんで……。！」

などと栗野はかなり慌ててはいたが、よくよく今日のスケジュールを思い返してみれば、今日はリハースル終了後にランチを取り、女性化は2時半からメイクを行う予定になっていた。

そのため時間的には、ランチタイム終了後予定時刻の1時間半から2時間半まで、フリータイムとして空いている時間があるのだ。ということとは、もしここでリハースルの時間がかなり伸びてしまったとしても、減るのはその1時間ほどあるフリータイムであって、イベントそのものには響かないのではないのだろうか。

そんな疑問が脳裏を過ぎり、未佳は腕を引つ張られながらも、栗野にそのことを尋ねた。

「でも遅れたらその分、食後のフリータイムが減るだけなんじゃないの？！」

「あつ……。、考えてみればそうだ」

ドテッ！！

「ちょ、ちよつと……！ 未佳さん！！ 今頭から倒れたけど……、大丈夫！？」

「……うん……。って！ それじゃあ私急ぐ必要なかったんじゃないー！！」

「すみません……。でも、ここの外に出る通路からステージまでは、必ず全力疾走で走ってくださいよ？ ファンの人達がほぼ解放状態なんで」

「あつ、はい……。」

とは答えたものの、しばし『なんだかなあー』という心境のまま、未佳はゆっくり倒れていた通路から立ち上がり、埃を叩きながら出入り口の方へと向かってみる。

すると信じられないことに、あのステージへと続く通路のドアが、何故か全開に開け放たれたままになっていた。

さらにそのスタッフ側のミスにより、未佳は出口へ出るほんの5メートルほどの辺りで、会場に集まっていた多くのファン集団達からまるで嵐のような歓喜の声を受け取るようになってしまったのである。

《キャーッ！！ みかつぺーッ！！》

《えっ！？ みかつぺ、やっと来た？！》

《みかつぺ、キレイー！！》

《私服のロングワンピ、カワイイよー》

「……。僕、初めて本来のファンの人達見たかも……」

「た、確かに……。あつ！ 栗野さん！ ドア開けたままだけど、ファンの人達……。こつちに雪崩れ込んだりしない？」

「すると思うんで、ちよつとここに……。すみませーん！！ スタッフの皆さん！ 一旦こつちに来てください！！ このままじゃ未佳さん通せないんで……。！！」

栗野のそんな大声の呼び掛けで、ステージの方に立っていたスタッフ達は、慌てて未佳と栗野の立つ通路の出入り口の方へと駆け寄る。

しかしその呼び掛けの時の声あまりにも大き過ぎたのか、若干『えっ・・・？』と言いたげな表情を浮かべているファンの姿が、あちらこちらからチラホラと見られた。

中には申し訳なさそうに項垂れている人の姿まである。

そんな少し離れたファンの人達に、未佳は苦笑い混じりに数回頭を下げると、キッと栗野を睨み付けた。

（もうっ・・・！！ 栗野さん、声が大き過ぎ！！ なんで私が頭下げなくちゃいけないのよ！）

「未佳さん・・・、未佳さんっ！！」

「ギャッ！・・・えっ？」

「『えっ？』じゃないです！ 行きますよ？！」

「あっ、はい！」

その後は未佳も湧き上がる歓声の中、持ち前の明るい笑顔で手を振りながら、皆の待つステージへと駆け上がったといった。

40・ボルテージ

《みかつぺーッ！！》

《みかつぺー！ こっち見てー！！》

《カワイイよ！！ みかつぺーッ！！》

「どうもー♪ こんにちはー」

いつまで経っても静まらない歓声の中、未佳はファン一人ひとりに手を振るような動作で、ゆつくりとステージへと続く階段部分を上っていった。

そんな未佳の姿に、他のメンバーはやや感心するかのような表情で微笑んでいる。

ステージに上がり終わってすぐ、長谷川の口からこんな言葉が飛び出してきた。

「凄い堂々としてますね。坂井さん・・・」

「えっ？ そう？」

「ウチらあんな群衆の中で手え振って話すなんて・・・、絶対無理っ」

「恐くて全く何もできませんよね？」

「そんな・・・、全然みんな恐くないよー。だってこっちの方が格上だし・・・。みんな私達のこと慕ってるだけでしょ？ どこも恐くないじゃない」

「それはそうですけど・・・」

「さあ！ 早くリハーサルやっちゃお！ これ終わんないと、お昼食べられないんだから」

未佳はそう言うや否や、スタンドに取り付けられていたマイクを手に取り、それに向かって声を発した。

「あつ！ あつ！ ……あー…。」

《……………》

「あー…………。アー！ アアー！！ ah…………。」

《……………（クスッ）》

ふつと数名のファンから聞こえてきた笑い声に、未佳はマイクからファンの方へと視線を移してみる。

するとそこには、約1000人ほどの群衆に混じりながら、顔馴染みのファンが数人だけ、口元に手を当てながらクスクスと笑っていた。

どうもこのファン達から見た様子だと、たった今行っていた未佳の発声練習風景はかなり笑える場面だったらしい。

中には必死に声を出さぬよう笑っているファンまで……。

そんな笑っている人達の姿に、未佳はこちらも同じくクスリと笑うと、発声練習を行っていたマイクに向かって口を開いた。

「今笑った人ー！ 私の声聞こえますかー？」

《ハハハハッ》

《はーい♪》

「笑ったり返事返したりしてるってことは、私の声ちゃんと聞こえますねー？！ *Voices volume* OK?！」

《OK!!》
オケ

「はい！ ……OKだつて」

未佳がそうメンバーに伝えると、手神達は早速、曲を弾く準備を始めた。

ここから先のマイク調整は、実際に歌を歌ってみなければ分からない

い。

まず最初に歌うことになったのは『最後の盛り上げ隊』とも言える楽曲『flying ship』。

基本的にこの曲は、アンコールに入る前の締め括りの場面や、アンコールラスト1曲前など、かなりノリ取りの場面で歌うことが多く、ライブでも欠かせない選抜曲の一つだ。

そしてそれは末佳達だけでなくファンも同じで、この歌の場合はまず前奏の時点でかなり周りがノリノリの状態となる。

現に今回もまだリハーサルだというのに、既にほとんどのファンの体と足が、突然スピーカーから流された前奏で揺れ始めている。

そんな早くもノリノリになろうとしているファンの姿に、末佳は笑顔を見せつつも、マイクを片手に持ちながら少々気遣い。

「えゝゝゝと、皆さーん。これリハなんで、ここであんまりノリ過ぎないように」

《ハハハハッ》

「ちよつとノリ過ぎると、本番でかなりヘトヘトになると思うのでゝゝ。ね？ ははっ。でも『どうしてもノリたい！』という人はゝゝ。そうだなゝ。ワイパー。分かります？ 腕を左右に振る動作なんですけど。これサビの英語でやるんで、その練習しててください」

《アッハハハハ》

「初めて私達のことを見る方とか、聴く方必ずいらっしやると思いますので、そんな方達に教えるつもりでゝ 伝授するつもりでゝ 練習程度にお願いしまーす」

《イエーイ！！》

《ハーイ！！》

それから間もなく『flying ship』の演奏が始まり、未佳の力強い歌声が、途中ボリューム調整などによって変化しつつ終了。

さらに冒頭1曲目予定の『Endless Requiem』もリハーサルを行い、万全の対策の中、大阪公演分のリハーサルは終了した。

「……………はい。皆さん、いいですか？　なんか不具合とか、気に掛かるトコとか……………」

「大丈夫」

「もうあとは微調整利かないとこしかないんで」

「こっちももうええよ」

「じゃあ……………もう引つ込む？」

「……………ましようかね」

「オッケー。栗野さん」

ふつと皆の返事を聞いた未佳が栗野を呼んでみると、栗野は『待つてました』と言わんばかりに、ステージ裏からこちらの方へとやってきた。

「はい」

「栗野さん。もうリハーサルはいいから、そろそろ中に……………」

「戻ります？」

「かなあ……………。えっ？　もう準備みんないいんでしょ？」

「はい」

「OKです」

「分かりました。じゃあ楽屋に戻る準備しておきますね？」

栗野はそう言うや否や、再び数名のスタッフ達を呼び集め、例の人

口通路作りに取り掛かる。

しかしこの時点で、ファンにはメンバーが楽屋へ戻ろうとしているのが丸分かりだったのだろう。

つい今さっきまでステージの周りを取り囲っていたファンの一部は、早くも一斉にスタッフが作り始めた通路の周りを取り囲み始めた。

そのあまりにも素早いファンの動きと行動に、未佳達はただただ笑うしかない。

「ハハハ・・・、すごい・・・」

「一瞬・・・。ホンマ一瞬・・・。よう見てますよねえ」

「ウチらまだ何にも言うてへんのに」

「これであの通路の周りに行って違ってたら面白いんですけどね・・・」

手神がそうボソツと呟いた途端、長谷川は大声で腹を抱えながら笑い出した。

「ハハハッ！」

「ウケた？」

「はい！ 言いたいこと分かります。わざわざ通路作っておいて『機材通りまーす』みたいな？ 期待させといて『僕らじゃないんかい！』っていう」

「そうそう」 『なら動かなければよかったじゃん！』 みたいな感じのね」

「『結構いいところに居たんだぞ！』って・・・。ブーイングの嵐決定っていう」

「ハッハハハ」

「あのー・・・」

「「えっ？」」

ふつと声のした方に視線を下してみれば、たった今通路作りに取り掛かっていたはずの栗野が、いつの間にかステージ下から顔を覗かせていた。

その姿に、一瞬長谷川と手神は『わっ！』という声を上げる。

「『わっ！』てなんですか！ 『わっ！』って！！」

「いや……。素直に驚いたんで……」

「いきなり足元に人の顔があるから……」

「どうも脅かしてすみませんでした！！ とりあえず通路が出来ましたんで、皆さん下りる準備してください」

そう言つて栗野が指差す先を見てみれば、既にステージ階段から関係者用通路へと続く人口通路が、大勢のスタッフ達によって作られていた。

その建設時間。

時間にしてわずか2分弱。

「「早っ！！」」

「まだカップラーメンも出来上がってない時間」

「ええ……。何そのレベルの低い比較発言……」

「……すみません」

「もっと他に比較するやつあらへんの？ 例えばまっちゃんがお風呂の話題を話し出す時間とか」

ドテッ！！

「そ．．．それはそれで『あれ？』ですよ！？　．．．．．
確かに時間は合ってますけど．．．」

「ハ．．．、ハハハ．．．。あつ．．．。では皆さん！　あとは本番で。よろしくお願いしますね♪」

《はい！！》

『じゃあ下りよう！』と末佳達が階段の方へと向かっていった途端、スタッフの作った通路周りを取り囲んでいたファン達の歓喜の声は、再びピークに達した。

とにかく通路の幅が大きく動いてしまうほど、両サイドから押し寄せてくるファンの勢いが尋常じゃない。

おまけにその押し寄せてくる人の数も、明らかに入場の時よりも500人近くは多くなっていたため、実際誰がスタッフなのか、どこからが通路なのかがかなり分かり難くなっていた。

さらに両サイドにいるファン達から一斉に黄色い声を掛けられていたので、肝心のスタッフの声は勿論、隣りにいるはずの他のメンバーの声ですらあまり聞き取れない。

「凄い声．．．。みんな、通路あっちだからね！？」

「？」

「えっ？　何？」

「手神さん、なんて言ったのー？！」

「通路！！　通路あっち！！　僕が今指差してるところー！！」

「？．．．、なんか手神さん指差して．．．．．。ああー！　そこかあ！　通路」

「だからなんて言ったのー？！」

「皆さーん！　こっち！　こっち！！　私の手を見てくださーい！！」

その後は栗野と3名ほどの男性スタッフを先頭に、未佳、長谷川、厘、手神の順番で、時々サイドの形を変形させる通路の中を疾走した。

《キヤーツ！！ キヤーツ！！》

「皆さん！ またあとでー」

《さーちー！ カッコイイ！！》

《カワイー！！》

《厘様あーっ！！ お美しいです！ 厘様あーっ！！》

《小歩路様アーッ！！ 愛してます！！ 小歩路様アー！！》



《手神さん！ ナイス！！ GOD HAND！！》

《手神さん！！ 手え振つてえーッ！！ 手神さん！！》

「……バイバイ！」

《キャアアアアーツ！！》

関係者用通路の出入り口へと入り、ドアを開けた途端、4人は『ハ
アー』と安堵の溜息を吐いた。

「凄かったですよねえ？」

「特に小歩路さん……」

「一気い何人から告られました？」

「ええー？　・・・・・・・・多分2〜30人くらい・・・」

そんな常識ではありえない数をサラッと口にする厘に、未佳は思わず口をあんぐりと開ける。

「凄ッ！」

「ちよつと・・・・・・・・！　半分、人生の3倍分ぐらい告られてるじゃないですかー！」

「えっ？　人生で10回も告られる人なんているん？」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・ないね」」」

「でしょ？　ウチ普通に『そんなにいるの？』って思ってちよつとビックリした・・・・・・・・」

どちらかと言えば『その告られた数の方がビックリよ』などとツツコミつつ、未佳達は栗野に連れられながら楽屋前へと向かった。

そして楽屋へと入ろうとした途端、未佳はその視界に写った光景に思わず足を止める。

なんとそこには、つい先ほどまでリハーサルと一緒にステージに上がっていたはずのリオが、いつの間にか未佳のカバンを枕にして、畳の上に寝そべっていたのだ。

しかもよくよくそのリオの耳元を見れば、そこにはあの未佳のウォークマンが、まるで自分の物のようにリオに使用されていたのである。

ただその半面、一応リオ自身もこのウォークマンを使用するにあたって、それなりのことは気を利かしていたようだ。

その証拠に、未佳以外の人間にはイヤホン部分が浮遊しているように見られてしまったため、リオはカバンの取っ手やらタンバリンの周

りやらにケーブルを絡ましたり、あえて物がガチャガチャしていて分かり難くなっている場所を選んで横になっていたり、それなりの配慮は行っていたらしい。

だが、それとこれとは話が別だ。

未佳はリオがイヤホンを耳に入れたまま寝ているのを確認すると、何の合図や手加減もなしに、いきなりリオの身体を『ドカツ!』と蹴り上げた。

その瞬間、リオはやや寝ていた場所の隣りへと蹴り飛ばされ、そのまま『ズブ』と頭から畳に落下。

さらにその瞬間、リオの耳に入っていたウォークマンのイヤホンが両方とも外れ、そのまま『パタリッ』という音を発しながら畳の上へと転がった。

おそらく何にもない空中を蹴り上げたにも関わらずイヤホンが宙を舞う光景は、未佳以外の人間にはかなり目を疑いたくなるような光景だっただろう。

そんなことを思いつつ未佳がリオに視線を向けてみると、リオは蹴られた箇所を痛そうに摩りながら、ゆっくりと上半身を起こした。

「痛っ……たあ……。未佳さん！ 何も蹴ることないじゃん！！」

「人のウォークマン無断で使っておいて何言うのよ！」

「で……でも僕、使うとき気をつけたよ？ わざとウォークマンが宙を浮いてないようにしたんだもん」

「そんなの当たり前でしょ？！ 元々は私のなんだから……。それにそんなに使ってたら、すぐに電池がなくなっちゃうじゃない！」

「だからって普通蹴らないよ……。それに、また一人で何か言ってるって怪しまれるよ？」

「ゲッ……!」

それを聞いて慌てて後ろを振り返った末佳だったが、幸い誰にも見られてはいなかったらしく、末佳は『ふゝ．．．』と安堵の溜息を漏らしながら胸を撫で下ろす。

「でも．．．。今度からはちゃんと断ってから使つてよ？　前に自分でそう言つてたんだからね？！」

「はい．．．」

やや末佳にしつこいほど念を押され、リオは『もう反省しています』と言いたげな表情を浮かべながら、渋々ウォークマンを末佳の手元へと手渡す。

一方のそれを受け取った末佳は、カバンの中にウォークマンを仕舞いながら、胸中で小さく呟く。

（もう。少しでも目を離すとすぐこれなんだから．．．）

「みかっぺー」

「んー？」

「ちやぶ台出すの手伝つて」

そう口にする厘の方に視線を向けてみれば、厘は一時的に片付けていたちやぶ台を一人で引つ張り出そうとしていた。

その光景を見て、末佳は『そういえばりハーサルのは昼食だったな』と、今頃になってハツと思い出す。

何故かりハーサルを行っていた時までは覚えていたというのに、終わった後は完全にその存在を忘れてしまっていたのだ。

おそらくりハーサルが終わった途端、無意識に緊張感が途切れて忘れてしまったのだろう。

未佳はウォークマンを仕舞い終えると、大急ぎで厘と共にちやぶ台を運ぼうとする。

が、これが意外とかなり重く、二人で持ち上げようにも重心が傾いてしまっているせいか、中々思うように持ち上げられない。

仮に持ち上げたとしても、二歩ほど前に進むのだけで精一杯だ。

「結構・・・、重いね」

「う、うん・・・。下手に落としたら・・・、マズイかもっ」

「あのー・・・。運ぶの手伝おうか？」

あまりにも女性だけで大変そうに見えたのか、長谷川が二人に声を掛ける。

その言葉に、未佳と厘は遠慮なく頷いた。

「うん、お願い」

「前の方の角持つて」

「はいはい、OK」

「言つとくけどかなり重いよ？」

「分かつてますよ・・・って、重っ！！」

「でしょ?!」

結局3人の力で『どうにか』ちやぶ台を楽屋の真ん中へと置き、3人は『ふう〜』と疲労の溜息を吐いた。

さらにふつと運んでいた両手を見てみれば、ちやぶ台に触れていた部分は白く、触れていなかった部分は真っ赤に変色してしまっている。

「うわ・・・。関節以外はみんな真っ赤っか」

「それよりなんでこんな重いん？これ・・・」

「さっきは引きずってたから全然気付かなかったよね？」

「僕の予想屋と多分これ………。板と板の間に鉄、入ってんだと思いますよ?」

「……はっ?」

「……鉄?」

ふつと何やら意味不明なことを口にする長谷川に未佳が聞き返すと、何故か長谷川はちゃぶ台の下を覗き込み始める。

そして下から何かを確認すると、長谷川はちゃぶ台の真ん中部分を指差しながら、こう答えた。

「これ……。こたつなんですよ」

「「……こたつ?」」

「そう。だから重いんですよ。多分随分昔の古いタイプだから、軽量とかの対策何もやってないやつ……」

「「ああ……」」

そんな長谷川の話を聞き、未佳は『そういえば実家のこたつがこんな感じのだったなあ』と、しみじみ思った。

実は今年の正月に実家に帰ったのだが、その時に出ていたこたつがこれと非常によく似ていたのだ。だがもしそうだとすれば、このこたつは少なくとも20年ほど前の物ということになる。

(……まさか誰かが自宅から持ってきたやつなんじゃあ……)

「あのー……、すみませーん!」

ふつと楽屋のドアの方から男性の呼び掛ける声が聞こえ、未佳は慌ててドアの方に向きながら返事を返す。

「あつ、はい。・・・どちら様ですかー？」

「こちら、ステージスタッフの岡本という者ですけど。栗野さんに頼まれて・・・。皆さんの昼食のお弁当を届けに来ましたー」

「「「キタアアアアアーツー!!」」」

「（つて・・・、みんな揃いも揃って・・・）」

「はいはい!! ・・・今開けます! 開けます!!」

と、やや『お弁当』と聞いてテンションが上がった3人に苦笑しながら、未佳は急ぎでドアを開けるのだった。

40・ポルテージ（後書き）

初めまして、赤鴉せきあと言います♪

（こちらの後書きにコメントを書くのはこれがお初で・・・（笑））

さて早速ではありますが、本日から毎週5～6回（場合によってはもっと長く？）に渡って、今年の年明けに行われた

GARNET CROW 2011～2012カウントダウンラ
イヴレポート

を書きたいと思います♪

注意

・結構言葉遣いなどが『素』になっていますが、ご了承ください。
・初回は少々ライブ以外の内容が多めに書かれていますが、あくまでも『初回のみ！』ですので、こちらもご了承をしていただければと思います・・・（謝罪）

・・・

私と同伴の父母が大阪に着いたのは、ざっと午前11時頃。

そんでもって、グッズを買おうと並び始めたのは5時ジャスト！

（その間は昼食と観光を行ったりしました（笑））

ちなみに散々言っていた『宝屋』のラーメン屋は、去年の11月に完全に閉業していたことが判明・・・orz！！

（どうも親会社が潰れたかららしいが、あの時のゆりっぺ達のサイ

ンは何処に行ったのやら・・・)

そして今回は会場から歩いて5分ほどのところのホテルにチェックインしたので、荷物を置いた後そのまま会場へ直行！

ところが！！

途中まで会場の周りを歩いていて、グッズ販売の場所の逆側を歩いていたことが発覚。

(実際グッズの列は建物を挟んだ中庭なのですが、こちらは建物の外側をスタスタ・・・(笑))

つてなわけで会場を突っ切って列のところへ出ようとした矢先、とんでもない運命の悪戯がありました・・・。

ようやく『ここを通ればグッズ列』と歩いていた私達の目の前に、1台のタクシーが曲がってきて道を塞ぐ形に・・・。

(要するに『通れませ〜ん！』状態(爆))

実は私達の歩いていた道の真ん中あたりに、丁度会場専用の地下駐車場があつて、そこに入ろうとタクシーが曲がってきたんです。

まあ・・・、普通であれば『仕方ない』というところなんですけど・・・。

何せ急いでたし・・・。

『もう！ 急いでるんに邪魔や！！(イラッ)』などと内心では怒鳴り散らしていたのですが・・・。

何故かタクシーの方に向かって手を振る車の誘導係。

その行動がどうにも気になってよくよくタクシーの後ろの席を見て

みたらー・・・・・・・・。。

おっ、お、お、おっ！！ おかつ・・・・・・・・！！！！＼（　○　）／

と名前を呼ぶ前に駐車場の中へ・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・。。

おかもっちだったアアアアアーっ！！！！！！（叫）

こともあるうちに最後部座席に乗っていたのはあのおかもっち！（驚
！！）

（時間が戻るのであれば『邪魔！！』と言ってしまった自分を巻き
戻したい・・・・（涙）

さらに最後によくよく確認してみたところ、助手席にはおかもっち
の女性マネージャー。

後ろにはおかもっちの他にベースのまっちゃんという、かなりタク
シー内ギユウギユウ詰め状態での入場。

もはやこの時点で、私の興奮状態はレベル4ぐらいになってました
（笑）

（でも悪いことと言ってごめんなさい！！（＜―＞）

ただここで一つ疑問・・・・。

あの二人、夕方の5時まで一体何してたん？（――・・）

（そして何故かこちらが外で目撃する率の高いおかもっち・・・。
もしかして結構外に出てたりする？（笑））

その後はグッズで、

- ・福袋（１）
- ・パンフレット（１）
- ・マフラー（１）
- ・MINI QLO（１）
- ・年賀はがき（１）
- ・Ｔシャツ（１）
- ・マフラータオル（１）

と、軽く２万越えほど買い込んで、一旦ホテルへ。

ちなみに福袋は

- ・ゆりっぺ　赤いブランケット（現在使用中）
- ・おかもっち　ギターの形のペンダント（一番気に入ってます♪）
- ・七さん　和風のアロマ電気スタンド？（提灯みたいな形の）
- ・古井さん　ガラス瓶のような入れ物（ドレッシングやワインを入れる感じの）

と、なんだか今年はかなり充実・・・。

そしていよいよ入場。

ちなみに私達は番号が１０番台だったので、見事一列目のゆりっぺ
の位置を陣取りましたーっ！！v（^^）v
（もうイッタモン勝ち！！（笑））

しかしこの場所少々問題があつて、撮影用のカメラが毎回毎回横切つて邪魔なんです・・・orz
案外前の方に行つてもいい眺めとまではいかないもんですね（ハァ
ー・・・）

それからあつという間に開演時間となり、激しい照明ライトの光と共に、オープニングのメロディーも鳴り響きました。
そしていよいよメンバーが布で隠されたステージの向こうで登場して・・・。

近ッ・・・！！（@_@；）

軽くメンバーまでの距離は2メートルない！！

個人的な体験から言つたら、音霊の時のおかもちよりも近い！！

そしてノリノリのサウンドへと切り替わり、布が落ちてメンバーが露わになつたわけなのですが・・・、やっぱり近いっ！！（笑）
やっぱり2メートルない！！（爆）

そして今回も衣装が派手！！！！

ゆりっぺは黒のワンピース（ミニスカの）にゴールドのキラキラジヤケットで、下は真っ赤な紐のロングブーツ。

そしていつものポニーテールの髪の毛には、今回はよくゴスロリの飾りで使われる羽根付きのミニ帽子の飾りを付けていました。

その代わりメイクはいつもより控えめ・・・。

おかもちちは上は茶色のジヤケットで、下はモノクロのヒョウ柄長ズボンでした。

帽子は黒い普通のやつで、一か所だけラメが使用されとりました。

古井さんは白っぽいようなジャケットで、下は黒いズボンを着ていたような・・・。

（悲しいくらい服装が地味だったんで、あんまり覚えとらん！！
（涙））

そして極め付けだったのが七様で・・・。

上は黒のレース&羽根のようなジャケット（やや透けてるやつ）
んでもって下は青いキラッキラとしたロングスカート（ラメだらけの・・・）

さらに靴は8センチくらいの黒いピンヒールブーツで、とにかく衣装の目立ち度が尋常じゃない。

（というか・・・、ゆりっぺよりも目立ってしまっていたという（苦笑））

そして記念すべき冒頭一曲目が

・『僕らだけの未来』

しかもフル～・・・って、今ーっ?!（驚）

まさかの普段アンコール前とかアンコールラスト1曲目前に歌うはずの曲を冒頭に持つてくるという・・・。

一瞬『まさかもう終盤?』なんて有りえない心配をしていたのですが、すぐにゆりっぺの『今日はどうもよろしくお願いしま～す』という言葉で現実に取り戻されました（ホッ・・・）

（さらに今回、歌声が今までの中で一番安定していたような? とにかくリラックスした感じで歌ってました）

続いて2曲目は『doubt（フルver.）』・・・って、こち

らお初じゃない!?

なんだかんだで『LOCKS』の曲、全部ライブで披露されたなあ。
」。

ちなみにゆりっぺ、この歌の時は間奏のところで『パンッパンッ』と口を動かしながらノっていました。

(絶対に前の方にいないと見られない光景ですね。これ)

そして3曲目は新曲の『一緒に暮らそう(フルver.)』という手順で始まり、MCに入りました。

本日は一旦ここまでで・・・。

(なんだかライブの方にはあんまり入れなかったような・・・orz)

でも来週はライブ内容のみ!

MCから入っていきますので、お楽しみに♪

では、? 11 be back!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0172t/>

180回目の朝明けに・・・

2012年1月13日19時59分発行